



TOHOKU
UNIVERSITY

文部科学省特別教育研究経費プロジェクト

国際連携を活かした高等教育システムの構築

中間報告書

—研修資料集—

2006年3月



東北大学高等教育開発推進センター

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト

目 次

◇2005年度 研修活動報告

2005	7月1日	参加教員の募集について……………	1
		プロジェクト企画メンバー名簿	
		平成17年度参加者名簿・抱負等（Aタイプ、Bタイプ）	
	8月2日	第1回事前研修（FD）……………	17
		講師 関内隆・岩崎信・中島平・渡利夏子・水原克敏 鈴木克明（岩手県立大学）	
		配布資料・アンケート集計	
	9月13日	第2回事前研修（FD）……………	59
		講師 関内隆・中島平・渡利夏子・杉浦謙介・國島広之	
		配布資料・アンケート集計	
	10月24日	第1回テーマ別研修会……………	95
		「大学教育におけるカリキュラム・デザイン」	
		講師 谷口和也	
		アンケート集計	
	12月21日	第1回授業相互参観研修……………	105
		相互研修内容メモ	
		授業コンテンツの自己点検・相互参観研修法－基本方針－	
		アンケート集計・研修風景	
2006	1月31日	第2回テーマ別研修会……………	115
		「eラーニングの新たな教育実践－WebOCMによるeラーニング－」	
		講師 杉浦謙介	
		ポスター・アンケート集計・研修風景	
	2月28日	第2回授業相互参観研修……………	121
		「I.C.R.P.自己点検・相互参観研修～前半を実施して～」	
		講師 三石大	
		自己点検・相互参観研修の成果に関する第1回アンケート調査結果	
		相互研修内容メモ・研修風景	
	3月5日～18日	海外特別研修……………	141
		スケジュール	
	3月23日	スタッフ・ディベロップメント報告会……………	145
		配布資料	
	3月30日	平成17年度研修成果報告会……………	171
		配布資料・研修風景	

◇プロジェクト通信	第1号～13号……………	179
	中島平・渡利夏子	

◇アメリカのキャリアデザイン支援調査報告……………	231
	渡利夏子

◇FD参加メンバー研修成果中間報告……………	253

◇ライフデザイングループ研修成果中間報告……………	301

は　じ　め　に

東北大学高等教育開発推進センター長

坂本　尚夫

本報告書は、平成17年度から3年計画の事業として文部科学省より採択された「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクトの初年度実施状況を取りまとめた中間報告書である。本プロジェクトは、スタンフォード大学アジア・米国技術経営研究センターと提携し、同センター所長で本学総長顧問のリチャード・ダッシャー教授の全面的な支援の下に、同大学教授学習センターならびにキャリア開発センターからの協力を得て実施された。

「ISTU活用による教育の改善・高度化」と「ライフデザイン支援システムの構築」を2つの柱とする本プロジェクトには、東北大学各部局からの支援協力に基づき、本学教職員30名がコアメンバーとして参加し、さらに東北地区の国公立大学教員から6名の参加協力を得た。

初年度の平成17年度にはプロジェクト事前研修、テーマ別研修、授業相互参観研修、海外特別研修を実施して、教育の改善・高度化に取り組むとともに、スタンフォードから毎週発信されたプロジェクト通信を基礎にネットワーク研修を実践した。ライフデザイン支援システムの構築では、学生アンケート、海外視察研修を実施し、平成18年度実施のライフデザイン授業科目の企画準備を行った。また、職員研修SDとして27名が参加する国内大学視察研修を実施し、職員の視点からの教育・学生支援改善提言の報告会を実施した。

本報告書は、本年度に実施したテーマ別研修等の講演資料、プロジェクト通信、SD報告資料、研修成果の中間報告等を掲載した文字通りの研修資料集である。本年度の実績を踏まえ、これら成果の確認と自己点検を行いつつ本プロジェクトの次年度事業遂行に向けた思いをここに新たに示す次第である。

平成17年7月1日

東北大学教員各位

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト

参加教員の募集について

教育・学生支援担当理事 菅井邦明
副学長・高等教育開発推進センター長 坂本尚夫

上記プロジェクト事業が平成17年度より3年計画の文部科学省特別教育研究経費として採択されました。高等教育開発推進センターは、教育学研究科、教育情報学研究部ISTU（東北大学インターネットスクール）支援室並びに各学部・研究科との連携により、本学における研究大学にふさわしい教育の改善と学生支援システム創出に向けた新たな高等教育システムの構築に取り組めます。

事業内容は「ISTU活用による教育の改善と高度化」と「ライフデザイン支援システムの構築」を2本柱として、米国スタンフォード大学からの支援協力を得ながら、本学における教授学習開発機能の充実化を図るものであります。また、本事業は東北地区の大学教員にも参加を呼びかけ、我が国全体の高等教育改善に資する目標を掲げております。

つきましては、別紙プロジェクト計画を遂行するにあたり、「ISTU活用による教育の改善・高度化」事業の参加教員を募集いたしますので、募集要項のとおり全学的なご支援ご協力をお願いいたします。

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト計画

(I) I S T U活用による教育の改善・高度化

教員が自らの授業科目を撮影することは、その授業内容・方法を改めて見直し、授業実践の自己点検と改善を行う出発点となります。これを踏まえ、I S T Uを活用した教育内容の電子コンテンツ化を基礎に、教育の改善・高度化を推進します。

(A) 授業科目の電子コンテンツ化と授業改善

授業科目の電子コンテンツ化を基盤に、スタンフォード大学の教授・学習センター (Center for Teaching and Learning) の協力を得て、授業内容・方法の改善に向けた新たな教員研修 (FD) システムを構築し、参加教員の教育能力向上を推進します。その成果については研修報告会等で公開します。

プロジェクト参加教員が選定した1授業科目について、講義室等で行われる授業風景をそのままビデオ収録し、電子コンテンツとして作成いたします。参加教員には授業開始前に本学で事前に行う教員研修 (FD) に参加していただくとともに、スタンフォード大学で実施される海外特別集中研修 (FD) に参加することも可能です (外国出張1週間程度)。授業改善の成果については、研修報告会等を通して全学の教員に還元していただきます。

また、作成された電子コンテンツはI S T Uによって、学生あるいは教員向けに配信することも可能です。

(B) 国際交流を活かした先端的教育の開発

研究大学としての本学の特性を活かし、先端的研究分野における教員の国際交流を図り、大学院授業科目等の電子コンテンツを通して、研究の進展に連動する教育内容の更新・高度化を推進します。これらの成果についてはシンポジウム等を開催して公開します。

プロジェクト参加教員が講義室等で行われる授業風景をそのまま電子コンテンツとして作成いたします。本学の教員は、スタンフォード大学において当大学研究者との間で授業内容等に関する意見交換を行い、支援・協力を得るという形で研修を行います (外国出張1週間程度)。その後、メール等を通して交流を継続的に実践し、その成果についてはスタンフォード大学研究者を招聘してのシンポジウム開催等の形で公開していただきます。

(Ⅱ) ライフデザイン支援システムの構築

研究大学として本学が教育目標に掲げる「指導的人材の養成」に向けた東北大学独自の学生支援システムを構築します。

(A) ライフデザイン支援システムの設計

現状の問題点をアンケート調査等で把握するとともに、スタンフォード大学等の海外調査を実施して新たな学生支援システムを構築します。キャリアに関わる相談・指導システムや進路適性検査の実施、就職支援充実化を含めて、初年次学生の段階から長期的な将来設計を行えるような学生支援体制に向けた事業を推進します。

(B) ライフデザイン教育の構築とSD推進

本学学生の大学生活における主体性を培い、学習意欲を高めて自己形成過程を援助するために、研究大学にふさわしいライフデザイン教育の授業科目を新たに創出します。スタンフォード大学生との交流を通して本学学生のライフデザイン意識を高める事業も展開します。

さらに、学生支援に関わる職員の資質向上を目指した職員研修（スタッフ・ディベロップメント：SD）を推進し、専門職的立場から学生を支援する東北大学独自のシステムを構築します。

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト

参加教員の募集要項

上記のプロジェクト計画に掲げる「ISTU活用による教育の改善・高度化」事業の遂行にあたり、下記のとおり参加教員の募集を行いますので、ご支援ご協力をお願いいたします。

1. 「授業科目の電子コンテンツ化と授業改善」について

教員の教育能力向上と授業改善を進めるために、次のような平成17年9月開始の1年間研修コースを設定します。

平成17年9月事前研修－10月期授業の撮影－（平成18年3月スタンフォードで研修）
－平成18年4月期授業の撮影－平成18年9月研修報告会

本プロジェクトの趣旨に賛同される教員を本学全体で10名程度募集いたします。担当科目は全学教育、学部専門教育、大学院教育を問いません。

2. 「国際交流を活かした先端的教育の開発」について

スタンフォード大学等の研究者との国際交流に基づき、先端的研究分野の教育内容更新を3年計画で推進するために、本プロジェクトの趣旨に賛同される教員を本学全体で10名程度募集いたします。

3. 本プロジェクトに参加を希望される教員には、計画の詳細について御説明いたします。プロジェクト内容をご理解いただいたうえで参加の意思確認をしていただきますので、多数の教員からのご応募、ご連絡をお待ちしております。

4. 締切日 平成17年8月1日（月）

5. ご応募並びに問合せ先は下記のとおりです。

高等教育開発推進センター教授 関内 隆

電話：795－7668 sekiuchi@he.tohoku.ac.jp

平成17年7月25日

東北地区各大学長 殿

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト

参加教員の募集について

東北大学理事（教育・学生支援担当）

菅井邦明

東北大学副学長・高等教育開発推進センター長

坂本尚夫

上記プロジェクト事業が平成17年度より3年計画の文部科学省特別教育研究経費として採択されました。東北大学高等教育開発推進センターが中心となり、教育学研究科、教育情報学研究部 I S T U（東北大学インターネットスクール）支援室並びに各学部・研究科との連携により、大学における教育の改善と学生支援システム創出に向けた新たな高等教育システムの構築に取り組む計画です。

事業内容は「I S T U活用による教育の改善と高度化」と「ライフデザイン支援システムの構築」を2本柱として、米国スタンフォード大学からの支援協力を得ながら、事業を進めてまいります。

本プロジェクトはこのように、大学における教授学習開発機能の充実化を目標に掲げ、東北地区大学の教員から参加協力を得ながら、我が国全体の高等教育改善に資する事業となることを目指しております。

つきましては、別紙プロジェクト計画を遂行するにあたり、「I S T U活用による教育の改善・高度化」事業の参加教員を募集いたしますので、募集要項のとおり、東北地区大学教員のご支援ご協力をお願いする次第です。

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト計画

(I) I S T U活用による教育の改善・高度化

教員が自らの授業科目を撮影することは、その授業内容・方法を改めて見直し、授業実践の自己点検と改善を行う出発点となります。これを踏まえ、I S T Uを活用した教育内容の電子コンテンツ化を基礎に、教育の改善・高度化を推進します。

(A) 授業科目の電子コンテンツ化と授業改善

授業科目の電子コンテンツ化を基盤に、スタンフォード大学の教授・学習センター (Center for Teaching and Learning) の協力を得て、授業内容・方法の改善に向けた新たな教員研修 (FD) システムを構築し、参加教員の教育能力向上を推進します。その成果については研修報告会等で公開します。

プロジェクト参加教員には、授業内容をビデオ収録し、電子コンテンツとして作成していただきます。参加教員は、授業開始前に本学で事前に行う教員研修 (FD) に参加していただくとともに、スタンフォード大学で実施される海外特別集中研修 (FD) に参加することも可能です (外国出張1週間程度)。授業改善の成果については、研修報告会等を通して広く還元していただきます。

(B) 国際交流を活かした先端的教育の開発

先端的研究分野における教員の国際交流を基盤に、大学院授業科目等の電子コンテンツを通して、研究の進展に連動する教育内容の更新・高度化を推進します。これらの成果についてはシンポジウム等を開催して公開します。

プロジェクト参加教員には、授業内容をビデオ収録し、電子コンテンツとして作成していただきます。参加教員は、スタンフォード大学の研究者との間で授業内容等に関する意見交換を行い、支援・協力を得るという形で研修を行います (外国出張1週間程度)。その後、メール等を通して交流を継続的に実践し、その成果については、スタンフォード大学研究者を招聘してのシンポジウム開催等の形で公開していただきます。

(Ⅱ) ライフデザイン支援システムの構築

研究大学として本学が教育目標に掲げる「指導的人材の養成」に向けた東北大学独自の学生支援システムを構築します。

(A) ライフデザイン支援システムの設計

現状の問題点をアンケート調査等で把握するとともに、スタンフォード大学等の海外調査を実施して新たな学生支援システムを構築します。キャリアに関わる相談・指導システムや進路適性検査の実施、就職支援充実化を含めて、初年次学生の段階から長期的な将来設計を行えるような学生支援体制に向けた事業を推進します。

(B) ライフデザイン教育の構築とSD推進

本学学生の大学生活における主体性を培い、学習意欲を高めて自己形成過程を援助するために、研究大学にふさわしいライフデザイン教育の授業科目を新たに創出します。スタンフォード大学生との交流を通して本学学生のライフデザイン意識を高める事業も展開します。

さらに、学生支援に関わる職員の資質向上を目指した職員研修（スタッフ・ディベロップメント：SD）を推進し、専門職的立場から学生を支援する東北大学独自のシステムを構築します。

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト

東北地区大学の参加教員募集要項

上記のプロジェクト計画に掲げる「ISTU活用による教育の改善・高度化」事業の遂行にあたり、下記のとおり参加教員の募集を行いますので、ご支援ご協力をお願いいたします。

1. 「授業科目の電子コンテンツ化と授業改善」について

教員の教育能力向上と授業改善を進めるために、次のような平成17年9月開始の1年間研修コースを設定します。

平成17年9月事前研修－10月期授業の撮影－（平成18年3月スタンフォードで研修）
－平成18年4月期授業の撮影－平成18年9月研修報告会

本プロジェクトの趣旨に賛同される東北地区大学の教員若干名を募集いたします。担当科目は学士課程教育、大学院教育を問いません。

2. 「国際交流を活かした先端的教育の開発」について

スタンフォード大学等の研究者との国際交流を基盤に、先端的研究分野の教育内容更新を3年計画で推進するため、本プロジェクトの趣旨に賛同される東北地区大学の教員若干名を募集いたします。

3. 本プロジェクトに参加を希望される教員には、計画の詳細について御説明いたします。多数の教員からのご応募、ご連絡をお待ちしております。

4. 締切日 平成17年8月22日（月）

5. ご応募並びに問合せ先は下記のとおりです。

東北大学高等教育開発推進センター教授 関内 隆

電話：022-795-7668 sekiuchi@he.tohoku.ac.jp

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト企画メンバー名簿 (2006.3.31 版)

	氏名	役職
担当理事	菅井 邦明	教育・学生支援担当理事
総括責任者	坂本 尚夫	副学長：高等教育開発推進センター長
プロジェクトリーダー	関内 隆	高等教育開発推進センター教授
事務責任者	佐藤 稔	教育・学生支援部長
FD／電子コンテンツ（理系） 関係担当グループ	岩崎 信 (リーダー)	大学院教育情報学研究部教授
	三石 大	大学院教育情報学研究部助教授
	中島 平	大学院教育情報学研究部助教授
FD／電子コンテンツ（文系） 関係担当グループ	谷口 和也 (リーダー)	大学院教育学研究科助教授
	菊田 智	教育・学生支援部教務課課長補佐
	落合 隆一	教育・学生支援部教務課教育支援係主任
プロジェクト技術担当	静谷 啓樹	高等教育開発推進センター教授
ライフデザイン教育／SD関係 担当グループ	吉武 清實 (リーダー)	高等教育開発推進センター教授
	北原 良夫	高等教育開発推進センター助教授
	末松 和子	大学院経済学研究科講師
	嶺岸 幸子	教育・学生支援部学生支援課課長補佐
プロジェクト研究員	渡利 夏子	高等教育開発推進センター助手
プロジェクト関係事務担当 グループ	菊地 壮 (リーダー)	教育・学生支援部学務課長
	佐々木義則 (サブリーダー)	教育・学生支援部学務課課長補佐
	鈴木 賢一 (庶務担当)	学務課学務総務係長
	平野 直樹 (経理担当)	学務課経理係主任
	山越 隆男	教育・学生支援部学生支援課長
プロジェクト支援事務スタッフ	鎌田 裕子	教育・学生支援部教務課

平成 17 年度 参加者名簿 (2006.3.31 版)

	氏 名	所 属
ISTU活用による教育の改善・高度化グループ		
Aタイプ		
東北大学	関内 隆	高等教育開発推進センター・教授
東北大学	岩崎 信	大学院教育情報学研究部・教授
東北大学	谷口 和也	大学院教育学研究科・助教授
東北大学	三石 大	大学院教育情報学研究部・助教授
東北大学	水原 克敏	大学院教育学研究科・教授
東北大学	戸澤 英典	大学院法学研究科・助教授
東北大学	國島 広之	病院検査部・助手
東北大学	岡田 毅	大学院国際文化研究科・教授
東北大学	杉浦 謙介	大学院国際文化研究科・助教授
東北大学	佐竹 正夫	大学院環境科学研究科・教授
東北大学	古川 柳蔵	大学院環境科学研究科・助教授
岩手医科大学	城 茂治	歯学部・教授
岩手医科大学	田中 光郎	歯学部・教授
宮城大学	森山 雅幸	食産業学部・教授
宮城大学	岡田 ロベルト	事業構想学部・助教授
宮城教育大学	石澤 公明	教育学部・教授
宮城教育大学	菅井 裕行	教育学部・助教授
Bタイプ		
東北大学	谷口 和也	大学院教育学研究科・助教授
東北大学	石井 誠一	大学院医学系研究科・助教授
東北大学	長崎 裕	病院総合診療部・助手
東北大学	照井 伸彦	大学院経済学研究科・教授
東北大学	西澤 昭夫	大学院経済学研究科・教授
ライフデザイン支援システムの構築グループ		
東北大学	吉武 清實	高等教育開発推進センター・教授
東北大学	北原 良夫	高等教育開発推進センター・助教授
東北大学	池田 忠義	高等教育開発推進センター・助教授
東北大学	高野 明	高等教育開発推進センター・講師
東北大学	末松 和子	大学院経済学研究科・講師
東北大学	八木 美保子	大学院教育学研究科・博士課程大学院生
東北大学	嶺岸 幸子	教育・学生支援部学生支援課課長補佐
スタンフォード大学客員研究員		
東北大学	中島 平	大学院教育情報学研究部・助教授
東北大学	渡利 夏子	高等教育開発推進センター・助手

Aタイプ

氏名	東北大学 関内 隆	東北大学 岩崎 信	東北大学 三石 大	東北大学 谷口 和也
所属	高等教育開発推進センター・教授	大学院教育情報学研究部・教授	大学院教育情報学研究部・助教授	大学院教育学研究科・助教授
今年度の担当授業科目名	全学教育：歴史論 歴史学 基礎ゼミ 総合科目	全学教育：基礎ゼミ「デジタルシネマ作り」(→来年度交代予定)	全学教育：	全学教育：
	学部専門教育：ヨーロッパ史各論	学部専門教育： 工学部機械知能系（量子エネルギーコース） 機械知能実験II「加速器応用実験」担当	学部専門教育：	学部専門教育： カリキュラム論講義II・等
	大学院教育：欧米近現代史特論	大学院教育： I T教育メディア設計論特論A、I T教育メディア設計論演習A（大学院教育情報学教育部）	大学院教育：IT教育基礎論演習B	大学院教育： カリキュラム論研究演習II
	歴史論	全学教育： 「科学と情報」来年度新設科目	IT教育基礎論演習B	カリキュラム論講義II
撮影授業	火曜日・1 講時	場所、曜日講時未定	火曜日・2 講時	木曜日・3 講時
プロジェクト参加の抱負等	全学教育科目として開講している「歴史論」を1つの素材として自らの授業実践内容と方法を自己点検し、学生の主体性を育み教育的な効果が上がるよう授業改善を図りたい。なお、プロジェクトのまとめ役として、参加された各メンバーの問題関心や課題に可能な限り応えることの出来る体制作りが心掛け、プロジェクト全体の成果をあげるよう努力したい。	「科学と情報」という来年度新設科目について、その設定の意図を確認しながら、開発・設計段階から、このプロジェクトに沿って実施していきたい。I S T Uを積極的に補助的、並行的、レポート提出、連絡、掲示板等に活用していきたい。T Aを活用する。出来るだけ、15回を収録してもらえたいとありがたい。	学習内容に対する学生の動機付けと、実践可能な深い知識を体得可能な授業の実施	①アメリカ及びイギリスの研究者の視点から相対化した比較教育的な構成で、日本におけるシテイズンシップのカリキュラム理論についての授業を体系立てたい。②英語による教科書を作成するとともに、いくつかの講義を英語によるコンテンツとしてISTU化したい。

Aタイプ

氏名	東北大学 水原 克敏	東北大学 戸澤 英典	東北大学 岡田 毅
所属	大学院教育学研究科・教授	大学院法学研究科・助教授	大学院国際文化研究科・教授
今年度の担当授業科目名	全学教育：教育学（展開科目）	全学教育：	全学教育： 実践英語 I A, I B, II 展開英語 II
	学部専門教育： カリキュラム論講義、カリキュラム論演習、教授学習科学実験、教育研究の理論、	学部専門教育：国際関係論（4単位） 国際関係論演習（研究大学院と合同：4単位）	学部専門教育：
	大学院教育： カリキュラム論特論、カリキュラム論演習	大学院教育：国際社会の変容とグローバル・イシュー（4単位） 政策調査の技法（2単位） — いずれも公共政策大学院	大学院教育： マルチメディア運用論、言語教育体系論 特別演習・特論
	カリキュラム講義 I	国際関係論＋公共政策大学院の授業	実践英語 I B
撮影授業	木曜日・5 講時	木曜日・1～2 講時	火曜日・3 講時（工学部 4 ヶ月）
プロジェクト参加の抱負等	新しい時代の新しい教育のあり方の一つとして、e-learningには大変興味があります。すでにいくつか電子コンテンツを作成してみました。その意義と限界も感じました。それでも、その作成と運用したいでは、かなりの可能性があるものと実感することができました。E-learningという新しい教育システムの開発は、世界的なレベルで進められるべきです。今年度のプロジェクト参加は、その良い機会にしたいと思っています。	感染制御御学は病院感染の予防、医療安全の推進という観点から、医師・医学部学生のみならず病院・医療関連施設の従事者一般に普遍的に要求される。しかし、その重要性の認識は十分ではなく、有効な教育方法の開発が必要である。そこで、本プロジェクトに参加して、E-learningの推進を図りたい。	以前からISTUには強い関心を抱いており、e-learningを通して更に見極め、テクノロジーを中心に据えながらも、人間である教育への関わり方を模索したいと授業や教育への関わり方を模索したいと考えています。大学における外国語教育の中でも、初修外国語と英語では事情が若干異なる上に、英語を学ぶ学生のニーズの多様性にも柔軟に対応できる英語教育システムが必要であると痛感しています。

Aタイプ

氏名	東北大学		東北大学		岩手医科大学		岩手医科大学
	杉浦 謙介	佐竹 正夫	古川 柳蔵		城 茂治	田中 光郎	
所属	大学院国際文化研究科・助教授	大学院環境科学研究所・教授	大学院環境科学研究所・助教授	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授
今年度の担当授業科目名	全学教育：基礎ドイツ語ⅠⅡ	全学教育：基礎ゼミ「科学と技術そして環境の境界を考える」(古川)	全学教育：基礎ゼミ「科学と技術そして環境の境界を考える」(古川)	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授
	学部専門教育：	学部専門教育：エネルギー環境入門(古川)	学部専門教育：エネルギー環境入門(古川)	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授
	大学院教育：言語応用論総合演習・言語応用論特論・言語芸術形象論	大学院教育：環境科学概論、環境経済論、地域環境学特論、国際経済環境研究セミナー、国際経済環境研究修(佐竹)	大学院教育：環境科学概論、環境経済論、地域環境学特論、国際経済環境研究修(佐竹)	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授
	基礎ドイツ語Ⅰ	環境科学概論	環境科学概論	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授
撮影授業	火曜日・5 講時	月曜日・4 講時	月曜日・4 講時	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授
プロジェクト参加の抱負等	全学教育の外国語科目で、新開発のWebOCMというプラットフォームとCALL教材とを組み合わせて授業をしています。私の授業の進めかたに問題点はないか指導していただくとともに、WebOCMプラットフォームが外国語以外の授業、e-learning、地域教育への還元、生涯教育などへの応用ができないか試行させていただければと存じます。	平成17年度に必修科目として新設した「環境科学概論」は、研究科の文系・理系の教員がそれぞれ自分の専門の立場から環境科学の基礎的な講義を行い、環境科学の全体的像を示すことを目的としている。この科目は同時に研究科の「高度環境政策・技術マネジメント人材養成ユニット」の科目にもなる。人材養成ユニットは社会人を対象とする5カ年の前期課程のプロジェクトで、すべての講義科目を電子コンテンツ化して学生に提供している。環境科学概論もこのために、15回の講義を毎回ビデオ撮影し、電子コンテンツ化することになっている。電子コンテンツ化された講義を見ることにより、自分の教授法を確認し改善することができただけでなく、他の担当者の講義を見て、授業内容や教授法を学ぶことが期待される。また、電子コンテンツ化した授業は将来HP上で公開して、環境教育の教材として社会に還元したいと考えている。	2年前より講義にパワーポイントを導入している。視覚的なインパクトで一時的な理解度を得ることができている。その深さに疑問を抱いている。そのため、復習・予習を兼ね、学生がどこでも自由に閲覧できるデジタルコンテンツ開示の必要性を痛感している。また、デジタル化により自らの講義の改善にも生かしたい。さらに今後、有効なデジタルコンテンツの活用について検討し、本学の模範となり、他の講座に波及するよう取り組みたい。	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授	歯学部・教授

Aタイプ

宮城教育大学		宮城教育大学		宮城大学		宮城大学	
氏名	菅井 裕行	石澤 公明	岡田 ロベルト	森山 雅幸			
所属	教育学部・助教授	教育学部・教授	事業構想学部・助教授	食産業学部・教授			
今年度の担当授業科目名	全学教育：	教養教育：	全学教育：コンピュータ基礎I	全学教育：			
	学部専門教育：	学部専門教育：	学部専門教育：	学部専門教育：			
	コミュニケーションの理論と実際	生物学講義IA, 生物学講義IB, 自然環境講義C, 生命環境演習、生物学実験I, 生物学実験II, 自然環境実験C	ハードウェアI, ハードウェアII, 人工知能, 情報システム設計D（教育等）, 教育情報事例	造園I、造園II、ランドスケープ作品論（南九州大学）			
	大学院教育：	大学院教育：生物学特論C	大学院教育：知能メディア	大学院教育：			
撮影授業	コミュニケーションの理論と実際	生物学講義IA	ハードウェアII	造園I 水曜日・4講時			
	木曜日・3講時	火曜日・4講時	水曜日・2講時	金曜日・4講時			
プロジェクト参加の抱負等	授業者が学生に提示したい情報について、当の学生にはそれにアクセスするインセンティブが欠けているという事態がある。授業構成に頭を悩ませている。「教員養成」という現場でありながら、実際の教育現場を知らない学生に、いかに効果的に情報の重要性とそれらの活用方法をガイドしていくかについて、このプロジェクトを通じて考えてみたい。	私自身の講義方法の改善していく上で、他の先生方と議論できる場を与えていただけることに期待をしております。	スタンフォード大学のような高いレベルの授業設計及び提供	オレゴン大学MLAプロジェクトとして日米間のランドスケープデザインプロセス比較を研究テーマとし、その後も自分のライフワークテーマとしてきた。本プロジェクトは、日米でのランドスケープ教育と実務経験をベースに、デザイン教育の中でデザインインフィロソフィ教育が、どのようにできるかを開発するため、大変貴重な研究となることと確信しております。また、新たな教育方法のための授業改善を、国際連携の中から探し出せればと願っております。			

Bタイプ

	東北大学	東北大学	東北大学
氏名	石井 誠一	長崎 裕	照井 伸彦
所属	大学院医学系研究科・助教授	病院総合診療部・助手	大学院経済学研究科・教授
取り組みの目的と計画概要	【目的】医学系研究科および病院では教員の教育能力開発セミナー（FD）を手掛けてきたが、その規模と範囲は限定されており十分ではない。本取り組みではStanford Faculty Development Center for Medical Teachers (SFDC)と連携して、教員の教育能力開発を推進する。 【計画概要】SFDCはスタンフォード大学の教員、研修医を対象として臨床教育能力開発、プロフェッションナリズム、カリキュラム開発、コミュニケーション能力開発、基礎医学教育などのセミナー（FD）を毎年開催している。本取り組みではSFDCに教員2名を派遣し、その機構と運営の実際を学び医学系研究科および病院教員の教育能力開発に還元する。また、SFDFよりスタッフを招聘し、学内でのFD開催を企画する。	【目的】医学系研究科および病院では教員の教育能力開発セミナー（FD）を手掛けてきたが、その規模と範囲は限定されており十分ではない。本取り組みではStanford Faculty Development Center for Medical Teachers (SFDC)と連携して、教員の教育能力開発を推進する。 【計画概要】SFDCはスタンフォード大学の教員、研修医を対象として臨床教育能力開発、プロフェッションナリズム、カリキュラム開発、コミュニケーション能力開発、基礎医学教育などのセミナー（FD）を毎年開催している。本取り組みではSFDCに教員2名を派遣し、その機構と運営の実際を学び医学系研究科および病院教員の教育能力開発に還元する。また、SFDFよりスタッフを招聘し、学内でのFD開催を企画する。	大学院科目「中級計量経済学」の国際交流を通じてた授業改善と先端的教育システムの開発を目的とする。交流研究者は、計量経済学の分野で世界的に著名な研究者であり、その業績からEconometric Society(国際計量経済学会)およびアメリカ統計学会のフェローの称号を与えられている。また永年に渡り、米連邦準備銀行（ミネアポリス）の顧問を務め、計量経済学の理論的実証的研究および政策立案に多くの業績を残している。また教育面でもこれまで世界的に優れた業績を挙げている26名の研究者を輩出し、教育においても多大な貢献をしてきた。交流研究者の招聘による模範授業の実施と訪問を通じての意見交換を通じて、世界的にトップレベルの計量経済学の先端的大学院授業へ向けた改善を図る。
交流研究者	Dr. Georgette Stratos	Dr. Georgette Stratos	John F. Geweke
	Stanford Faculty Development Center for Medical Teachers, Director	Stanford Faculty Development Center for Medical Teachers, Director	University of Iowa Harlan McGregor Chair in Economic Theory Professor of Economics and Statistics

Bタイプ

	東北大学	東北大学
氏名	西澤 昭夫	谷口 和也
所属	大学院経済学研究科・教授	大学院教育学研究科・助教授
取り組みの目的と計画概要	大学院科目「ベンチャー企業政策特論」の授業改善を目的とする。交流研究者は、スタンフォード大学の技術移転機関責任者として、知財戦略、技術移転、ベンチャー創業支援などにおいて優れた実績と成果を挙げ、アメリカの産学技術移転担当者の団体であるAUTMにおいても重要な活躍をしてきた。また、産学技術移転の国際化にも積極的に貢献し、最近では、<i>An Operations Manual for a Technology Transfer Organization Based on the Stanford Model</i>を出版して、スタンフォード大学における技術移転や大学発ベンチャー企業支援に関する経験に基づく教育にも多大な貢献を果たしている。交流研究者の招聘による模範講義の実施と訪問による意見交換を通じて、国際的にトップクラスのベンチャー企業論の先端的大学院授業へ向けた改善を図りたい。	【目的】アメリカ及びイギリスの研究者の視点から相対化した比較教育的な構成で、日本におけるシティズンシップのカリキュラム理論についての授業を体系立てる。 【計画概要】 ①海外研究者の視点から日本におけるシティズンシップ教育の体系を明らかにする。 PART 1: Citizenship in Modern Japanese Society: Historical Perspectives PART 2: Citizenship Education in Japan: Curriculum Theories PART 3: Citizenship Education as School Subjects: Social Studies, Civics, Moral Education, Integrated Studies and Seikatsuka PART 4: Citizenship Education in the Purulal Societies: How should we relat globalism, nationalism, and good citizen in a community? ②個人の科研費による国際交流の一環として、イギリス等について、順にシリーズとして英語で発表を行う。 ③スタンフォード大学のSPICEメンバーを中心として、比較文化的に意見交換を行う。さらに、パート4に関わりアメリカにおける「市民性」育成の教育プロジェクトとの対比に関するシンポジウムを行う。
交流研究者	Jon Sandelin	(未定) ①Decker F. Walker, ②Gary Mukai, ③Walter C. Parker
	Stanford University Senior Associate Emeritus Office of Technology Licensing	①Professor of Education, Director of Learning Design and Technology Programs, ②Director of Stanford Program on International and Cross-Cultural Education, ③Professor in Curriculum & Instruction, College of Education, University of Washington

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」
プロジェクト

第 1 回事前研修（F D）

日時：平成 17 年 8 月 2 日（火）13:00～17:00

会場：東北大学高等教育開発推進センター会議室

（東北大学川北合同研究棟 538 号室）

主催：東北大学高等教育開発推進センター

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト

第1回事前研修（FD）

平成17年度より3年計画で実施する上記プロジェクト（文部科学省特別教育研究経費）は、米国スタンフォード大学からの支援協力を得て、東北大学における教授学習開発機能の充実化を図るとともに、東北地区大学の教員からの参加協力も得ることで、わが国全体の高等教育の改善に資する目標を掲げている。

本プロジェクトの一つの柱である「ISTU（東北大学インターネットスクール）活用による教育の改善と高度化」事業は、教員の教育能力向上と授業改善を進めるために1年間の研修コースを設定し、授業科目の電子コンテンツ化を進める中で、授業の自己点検と内容・方法の改善を目指すものである。

そこで、下記の通り第1回事前研修（FD）を開催することとする。

日 時：平成17年8月2日（火）13:00～17:00

会 場：東北大学高等教育開発推進センター会議室

（東北大学川内北キャンパス 川北合同研究棟5階 538号室）

参加者：本プロジェクト参加教員

主 催：東北大学高等教育開発推進センター

〔研修目標〕

- ・ 本プロジェクトの趣旨を踏まえ、研修コースの目的と手順・方法を理解する。
- ・ 教育実践における授業改善例を通して教育能力向上意識を高める。
- ・ 授業実践を自己点検するとともに、教育の質的向上の起点となる授業デザインの基本的骨格とポイントを学ぶ。

研修スケジュール

13:00 開会挨拶 坂本尚夫 東北大学高等教育開発推進センター長

13:10 プロジェクトの目的と授業改善研修コース

(1) プロジェクト趣旨説明と授業改善研修コース

(関内 隆 東北大学高等教育開発推進センター教授)

(2) スタンフォード大学のFD取り組み

(渡利夏子 東北大学高等教育開発推進センター助手)

(3) スタンフォード大学・教授学習センター (CTL) の活動紹介

(中島 平 東北大学教育情報学研究部助教授)

(4) 授業科目の電子コンテンツ化とその意義

(岩崎 信 東北大学教育情報学研究部教授)

14:00 教育実践における授業改善—研修事後報告—

講師 水原克敏 東北大学教育学研究科教授

(司会 谷口和也 東北大学教育学研究科助教授)

15:20 Instructional Design に関する講演

講師 鈴木克明 岩手県立大学ソフトウェア情報学部教授

(司会 三石 大 東北大学教育情報学研究部助教授)

17:00 閉会

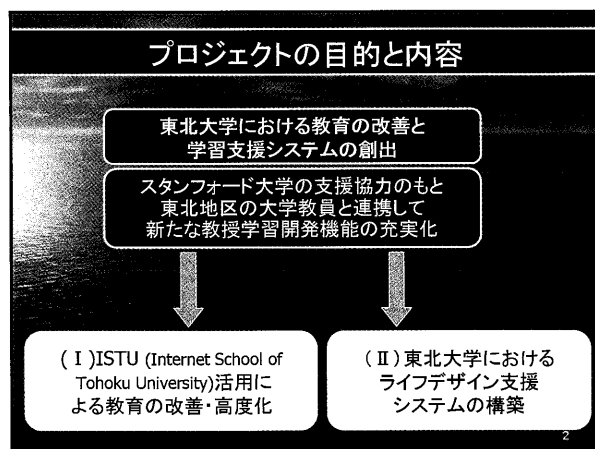
「国際連携を活かした
高等教育システムの構築」
プロジェクト

プロジェクト趣旨説明と 授業改善研修コース

東北大学

東北大学高等教育開発推進センター
関内隆

1



(I) ISTU活用による教育の改善・高度化

- (A) 授業科目の電子コンテンツ化と授業改善
- (B) 国際交流を活かした先端的教育の開発

(II) ライフデザイン支援システムの構築

- (A) ライフデザイン支援システムの設計
- (B) ライフデザイン教育の構築と
Staff Development 推進

3

授業科目の電子コンテンツ化と授業改善

*** 基本戦略と目的 ***

- ・ 教員の個別的な問題関心とニーズを前提に出発
- ・ 現状把握と課題解決のプロセスそのものを重視
- ・ 教育改善プロセスのなかに、新たなシステムの発想、ツール、枠組みを発見
- ・ 参加教員自らの発想で新システムの基盤を構築

4

授業科目の電子コンテンツ化と 授業改善

ー研修の3フェーズー

- (1) 授業内容・方法の自己点検と課題把握
- (2) 課題の解決と授業改善
- (3) 授業改善例の全学的還元と共有化

5

1年間の研修目標とプロセス

- (1) ISTU活用による自己点検と課題把握:
 - ・ 授業の撮影と電子コンテンツ化
 - ・ 相互参観による授業研修
- (2) 課題の解決と授業改善:
 - ・ オンラインのネットワーク研修
 - * メールによるインタラクティブな改善志向
 - * ウェブサイトを通じた有益な情報の提供
 - ・ 多様な課題の解決を目指すテーマ別研修
 - ・ 先駆的事例に学ぶ特別海外研修
- (3) 教育改善成果の全学的還元と共有化:
 - ・ 事後報告会における改善成果の発表
 - ・ シンポジウムでの成果発信と大学間共有化

6

	第1グループ	第2グループ	第3グループ	第4グループ
平成17年度	平成17年08月2日 第1回事前研修	平成17年9月13日 第2回事前研修		
	平成17年度後期 授業撮影①	平成17年度後期 授業撮影①		
	平成18年3月上旬 海外研修	平成18年3月中旬 海外研修		
平成18年度	平成18年度前期 授業撮影②	平成18年度前期 授業撮影②		
	平成18年9月 事後報告	平成18年9月 事後報告	平成18年9月 事前研修	平成18年9月 事前研修
			平成18年度前期 授業撮影①	平成18年度前期 授業撮影①
			平成19年3月上旬 海外研修	平成19年3月中旬 海外研修
平成19年度			平成19年度前期 授業撮影②	平成19年度前期 授業撮影②
			平成19年9月 事後報告	平成19年9月 事後報告

新たな高等教育システムに向けて

- 参加教員の授業改善プロセスとその成果のなかに、新たなシステム構築の萌芽を見出す

(例えば)

授業撮影と自己点検システム

ネットワークを利用した恒常的なFDプログラム

E-Learningによる双方向学習システム

8

新たな高等教育システムの理想像

- 教員の内発的な教育改善の意欲を喚起する魅力あるシステム
- 教員による自律的な教育改善を支える恒常的なシステム
- 教員のための多様で個別的な教育改善を推進する双方向のネットワークシステム

9

本プロジェクトから新システム構築へ

- 教員の個別的で多様なニーズの把握と課題解決
- 授業改善のプロセスとその成果を全学的に還元、共有化してプロジェクトの成果を確認
- 教育改善の実践的成果を踏まえて新たなシステムの骨格を形成

* 参加教員自らの実践例から
新たな高等教育システムの構築へ *

10

「国際連携を活かした
高等教育システムの構築」
プロジェクト

スタンフォード大学の支援協力を に基づくFDプログラム

東北大学

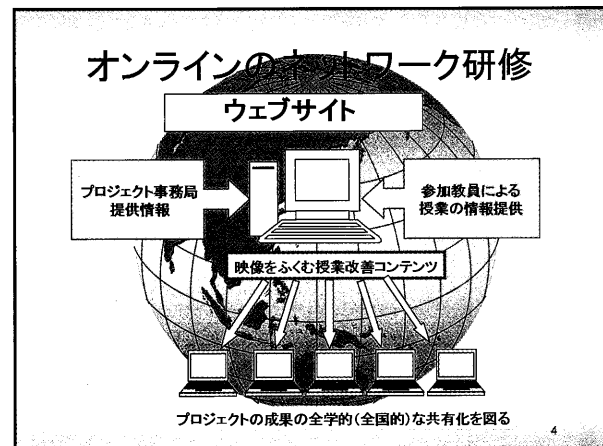
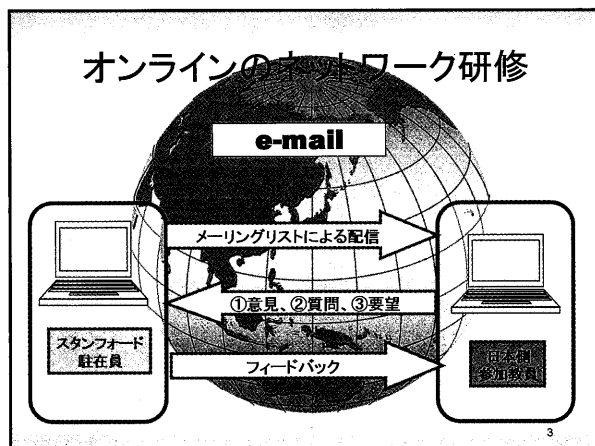
東北大学高等教育開発推進センター
渡利夏子

1

1年間の研修目標とプロセス

- (1) ISTU活用による自己点検と課題把握
- (2) 課題の解決と授業改善:
 - ・オンラインのネットワーク研修
 - * ウェブサイトを通した有益な情報の提供
 - * メールによるインタラクティブな改善志向
 - ・多様な課題の解決を目指すテーマ別研修
 - ・先駆的事例に学ぶ特別海外研修
- (3) 教育改善成果の全学的還元と共有化:

2



多様な課題の解決を目指すテーマ別研修

プロジェクトが
特に有益と考える

教員からの
提案

東北大学において、テーマ別研修を実施
(2ヶ月に1回程度)

特別海外研修 於スタンフォード大学

17年度の3月に1週間の海外研修を行う

スタンフォード大学の教育拠点
スタンフォード大学教員との交流
参加教員間の学問的・部外交流

1年間の研修目標とプロセス

- (1) ISTU活用による自己点検と課題把握:
- (2) 課題の解決と授業改善:
- (3) 教育改善成果の全学的還元と共有化:
 - ・事後報告会における改善成果の発表
 - ・シンポジウムでの成果発信と大学間共有化

7

事後報告会における改善成果の発表

- ・平成18年度実施
- ・平成19年度の研修参加グループの事前研修に基いて、半期の成果を発表
- ・随時研究成果のIRI研修を兼ねた事後報告会を行うことも可能

シンポジウムでの成果発信と大学間共有化

平成19年度の秋に国際シンポジウムを開催予定
 日本と米国の大学教育研究者による講演・
 研究発表を軸とする。教育改善の取り組みの
 報告
 スタンフォード大学での調査研究の成果発表
 日本と米国の大学教育研究者による講演・
 研究発表を軸とする。

スタンフォード大学概要

スタンフォード大学の構成員



Freshman: 1,648名

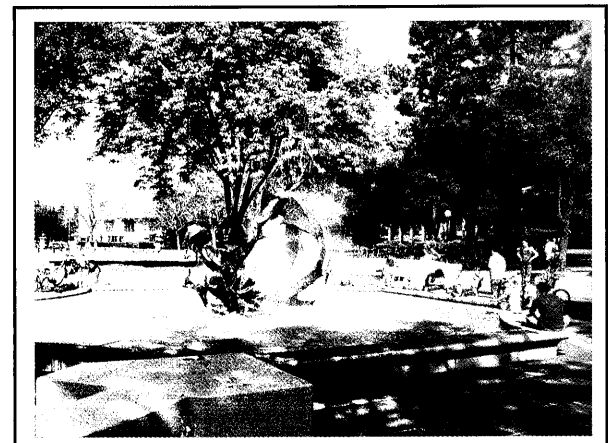
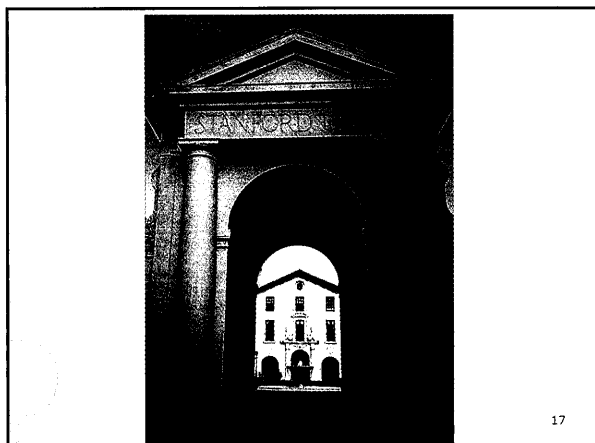
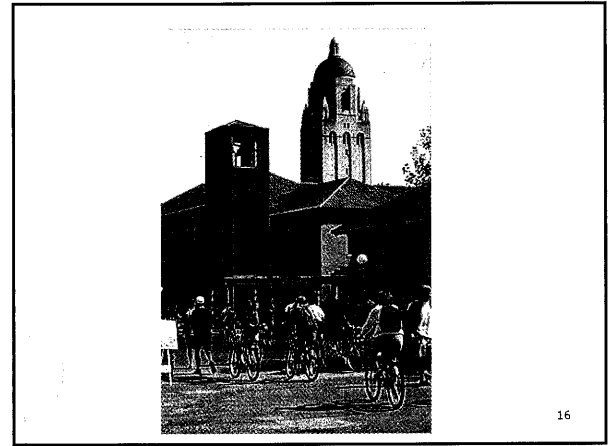
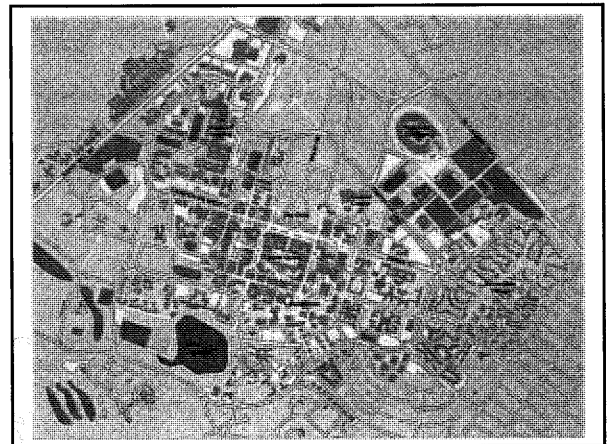
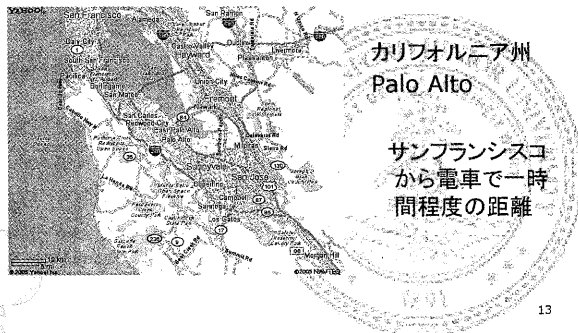
学士課程全体: 6,753名

大学院全体: 8,093名

教員数: 1,783名

12

スタンフォード大学の所在地





19

スタンフォード大学の学士課程

<Majors by school>

- School of Humanities and Sciences (35%)
- School of Engineering (10%)
- School of Earth Sciences (1%)
- Undeclared (54%)

20

スタンフォード大学の大学院

- Graduate School of Business
- School of Earth Sciences
- School of Education
- School of Engineering
- School of Humanities and Sciences
- School of Law
- School of Medicine

21

スタンフォード大学の諸センター例

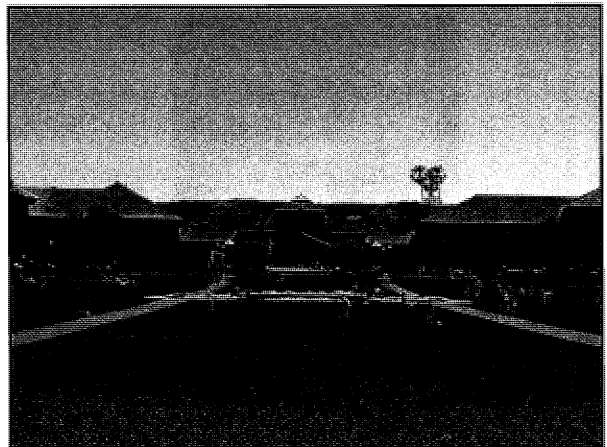
<http://www.stanford.edu/>

- CTL (Center for Teaching and Learning)
- ACOMP (Academic Computing)
- SCIL (Stanford Center for Innovations in Learning)
- Stanford Video
- CDC (Center Development Center)
- Vaden Health Center (Counseling and Psychological Services)
- Stanford Language Center

22

Center for Teaching and Learning (CTL) の紹介

2005/08/02
教育情報学研究部
中島 平



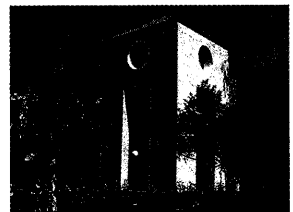
はじめに

1. Center for Teaching and Learning (CTL)は何をしているところ？
2. 我々はCTLに行って何を学べるの？

3

CTLの目的と目標

- 目的
 - 「ティーチング(教授)能力」
 - 「学生の学ぶ能力」向上を促進
- 目標
 - 教員の認識:「教えること」と「研究」へのコミットメントは等しい価値を持つ
 - 優秀なティーチングが可能になるためのトレーニングと資源の提供



SWEET HALL (CTLは4階)
"<http://campus.m.u.tsukuba.ac.jp/~edu/ctl/ctl.html>"より引用

4

CTLの活動

- 教育関連の学会やスピーチへの財政的サポート
- 教員のためのワークショップ(後述)
- 新人・若手教員の援助
- 学期中の授業評価
- ティーチングコンサルテーション
- テクノロジーに関する援助
- 授業の撮影

5

ワークショップの例

- 授業ウェブサイトの有効な使い方(2005年)
- 大きなクラスを持つ(2005年)
- ブログ、ウィキ、フォーラム(2005年)
- パワーポイントスライドの作り方(2003年)

ワークショップへの参加を計画中

6

おわりに

CTL:

教員のティーチング能力
学生の学習能力
向上支援

CTLワークショップ:

ティーチングの一般的トピック

ISTU活用による自己点検と課題把握

- ・授業の撮影と電子コンテンツ化
- ・相互参観による授業研修

岩崎 信

東北大学教育情報学研究部

1

授業の撮影と電子コンテンツ化

- ・授業→ 授業そのもの
- ・電子コンテンツ化＝デジタル化
 - ビデオ映像を編集→ ISTUへ登録
 - ビデオ映像とPP同期編集
 - ISTUへ登録

2

相互参観による授業研修(1)

- ・ISTU(オン・デマンド型)
 - － 発端 2000年
 - － 発足 2002年 今年4年目
 - － 開講授業の目標:5年で大学院開講科目の4割
- ・開講への取り組み状況
 - － 開講中:工学研究科、理学研究科(理学部)、教育学研究科、教育情報学教育部
 - － 取り組み中:医学研究科、歯学研究科、環境科学研究科、情報科学研究科、国際文化研究科、農学研究科
- ・大学院から学部授業等広い活用へ
- ・様々のハイブリッド、ブレンディング授業への活用

3

なぜ、ISTUなのか？

- ・ISTUとFD効果
 - － 岩崎信、「FDから見たISTU(東北大学インターネットスクール)」、第2回大学教育研究集会(京都大学)、第9回大学教育改革フォーラム報文集、pp.114-115, (2003) .
 - － 工学研究科ISTU教員への簡単なアンケート調査(“授業公開研究部会”で報告)

4

インターネット授業の潜在的公開性

- ・授業内容が第三者の目に触れる可能性がある：心理的効果
- ・ある種の公開性を持つ
- ・日本人の体裁重視の性格
- ・より積極的には「授業公開」に通じる

5

工学研究科のアンケート結果

- ・電子メールアンケート
 - 送付14名
 - 回答7名
- ・6/7名がFD効果を肯定



- － 明示的な潜在的公開性の指摘無いが
- － 種々のコメントから、FD効果の仮説をほぼ裏付け

6

どうやるか？

- 授業科目を決定
 - 授業科目名
 - 授業日程(曜日、時間、講義棟+教室、およその受講者人数)を通知
- 授業方式(通常黒板講義、PP講義、その他の形式の講義)を知らせ、収録業者と打ち合わせる
 - PPを渡すか渡さないか、同期させた講義にするのか
 - 黒板を撮すのか(撮すには特別の工夫が必要)
 - 簡単なPPに直すのか
 - 業者下見
- 5回の収録講義を決定し通知する 月日

7

作業工程

- 収録→PPを渡す→第一次編集→講義者チェック
 - (+著作権上の処理のチェック)
- →修正→チェックOK→ISTUへ登録
「国際連携を活かした高等教育システムの構築」:研究科相当)

8

研修活動:自己点検と課題把握

- 授業者が研修者グループに“公開”
 - 注:“公開”は講義者がコントロール
- 種々の研修活動
 - 自己点検コメントを付ける
 - 掲示板や受講者レポートと講評で研修者間の意見交換
 - 課題の把握

9

著作権の重要性

- せっかく、念入りに授業設計をしても
 - 他人の著作物を活用する場合には著作権の処理をしていないと授業が出来ない
 - 著作権の知識が必須
 - 自分の論文でも(著作権を譲り渡している場合には)自由には使えない!
- 通常の形態の授業でも重要であるが、インターネット活用の場合にはなお一層大事

10

著作物と著作権

- 著作物
 - 思想又は感情を創作的に表現したもの
 - 文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属する
 - 10種の例示(10条)
 - 小説、脚本、論文、講演その他の言語の著作物
- 著作権
 - 著作と同時に発生
 - 著作権(財産権):支分権のあつまり
 - 著作者人格権
 - 公表権、氏名表示権、同一性保持権
- 講義と著作権について
 - 岩崎、「ISTUコンテンツの著作権等に関する一考察」教育情報学研究、第1号、2003年、p57

11

著作者人格権

- 公表権(18条)
未公表の著作物の公表の是非、公表の時期、方法などを決定できる
- 氏名表示権(19条)
- 同一性保持権(20条)
著作物の同一性を保持し、著作者の意に反して改変を受けない権利

12

「著作権」の内容: 区分

- 複製権(21条)
- 上演権および演奏権(22条)
- 公衆送信権等(23条)
- 口述権(24条)
- 展示権(25条)
- 上映権および頒布権(26条1)譲渡権(26条2)貸与権(26条3)
- 翻訳権、翻案権等(27条)
- 二次著作物に関する権利(28条)

13

公衆送信権 (23条)

- 公衆送信：通常の放送、有線放送、自動公衆送信、その他の公衆送信の4つのカテゴリ
- 自動公衆送信：いわゆるインターネット等の仕組みを考慮した公衆通信のことを意味し、
- 送信可能化：端的に言えば、サーバに（デジタル）コンテンツ（データ）をアップロードすること

14

例外2： 「引用」（32条）とその要件

- 公表された著作物は引用して利用可
- 報道、批評、研究その他の引用の目的上正当な範囲内
- 引用：「従」、自著作物：「主」
- 引用部分の明確な区分
 - 文章：かぎ括弧等の使用
- 出所（出典）の明示：慣例に従う

15

例外3： 教育機関での複製等（35条）

- 教育機関^{*)}
 - 非営利目的の教育機関：永続的
 - 小学校、中学校、高等学校
 - 大学、高等専門学校
 - （非営利の）専修学校、各種学校
 - 幼稚園、保育所
 - 公民館、青年の家、少年自然の家等
 - 職業訓練所、研修施設
 - 営利目的の塾、予備校、職員研修施設等は除外

*3) 作花1999, 詳解著作権法(第3版)ぎょうせいp.344

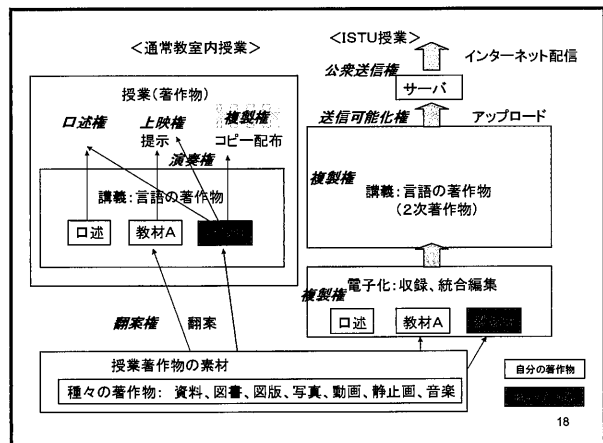
16

授業での利用とは*)

- 複製行為者
 - 授業を担当するもの（その意を受けた職員、事務員等も含まれる）
 - 授業を受ける児童、生徒(H15年改訂)
- 授業での利用
 - 授業の過程での利用
 - 授業の他、学校行事、クラブ活動、講義、ゼミ、実習、実験
 - 自宅学習用、長期休業中の課題などは不可
 - 大学内の生涯学習講座(?)

*3) 作花、同前

17



18

全学教育展開科目「教育学」の授業構想と分析

教育学研究科 教授
水原克敏

本稿は、全学教育の展開科目「教育学」の授業の映像記録と配布資料にもとづいて授業構想と方略について分析報告したものです。さらなる改善についてご意見をいただければ幸いです。

(課題設定) 近代学校がどんなふうにして誕生してきて、そのあとどんな変遷をして、今日までに学校が至っているかという、学校の大まかな歴史をお話ししています。

その場合、教養としての教育学は如何にあるべきか、教養としての数学教育は如何にあるべきか、専門の入門を教えるんじゃないなくて、教養にするにはどうしたらいいのかということが、初めから問題意識を持っていましたが、大変苦しいところでした。

話題としては、学校がどんなふう to 今日まで来たかということですが、それについて覚えてもらうことよりも、現代的観点から、それでいいんだろうか、どうしたらいいんだろう、ということで学ぶようにしたらいいというのが、一つの工夫のつもりだったんですが。できればご意見・ご批判いただければ助かります。

(授業計画表の作成) まず、授業時間の計画表です。これは学生が作ってくれまして。先生はこんなふうに授業をするんですよということで、大変構造的に授業が組まれていて、5分の余裕ありません。学生と一緒に授業を研究し、かつ、一緒になって授業を展開するので、10時半からの授業なのに、10時には研究室を出発しなければなりません。それでいろんな準備を整えて、その場に行くわけです。10時半から授業開始で、最初に前の時間の反省をして、その後本論に入って、そして質疑応答、最後に感想文記入ということでやっています。これは写真を見ながらいずれ詳しく話します。

(授業の配布資料) それから次のB4版、こういう形で毎時間配っています。表側にPowerPointの概略。今日見せるPowerPointの概略の写真ですね。下のほうに学校給食とか、生徒自治会活動とかあり上のほうには写真で『少女フレンド』とかあります。戦後改革の新しい現象などを示す写真を見せています。後ろには資料で、教育基本法の文書を挙げています。われわれの大学の学生は、イメージだけでものを理解してもらっちゃ困るので、やはり文書を管理する能力というのが、たぶん最終的にはつけなきゃならないので。文字をきちんと読める文字が書けるようにしないとイケない。だから、おもしろおかしく授業をやればいいのかというと、そうもいかないだろうと思います。

その次ですが、受講生の感想文です。「この講義を受けて、様々な教育事象に対する多面的な見方を持つことができました。部活動はあつて当たり前なものだと思っていたし、入学試験＝学力試験という考え方も当たり前だと思っていました。でも、違う考え方や違う

制度が世界には存在することを知ったし、それによって視野が広がったように感じました。教育学は奥が深い学問だと感じました。」とあります。

まあそんなふうにしてですね。学校をつくっている原則、実は決まっているようで決まっていなくて、色々歴史的にもあるし、世界的にも色々あるという話をして討論するわけです。それを聞いて、学生たちがこういう感想を書く。で、次の時間に、受けているのが百何名ですから、その感想文を次の週までに印刷して、次の時間に紹介します。ですから、前の時間で習ったことの、感じ方・考え方について、非常に多面的な人たちがいるということ、これによって学びますね。

それから、この2枚目のほうまで続いています。これは学生が工夫してくれまして。この表とか黒い線とか色々ありますが。これは「そぼくな質問」。学生たちの素朴な質問を集めた欄です。そうですね、この表の隣の上のほうに、「そぼくな質問」と書いてですね。素朴な疑問で、「公立学校の教師の給料は決まっているんですか」とかですね。例えば「ランドセルはいつから持っているのか、ランドセルでなければ学校に行けないのか」とか「緑の板なのにどうして黒板なのか」とかですね。そういう素朴な質問を出してもらう欄を作っています。学生たちは「今週のそぼく大賞」なんてことで選んでですね、この質問がいいとか言って、それでそのうちの1つ2つをですね、一緒にやってもらっている学生たちが、右の表のように、勉強してくれたものを発表してくれています。例えば「女の校長先生を見たことがないけども、どのくらいいるんだ」とか出るものですから、それに対して、一緒にやっている4年生たちが調べて、女の校長先生はこれくらいいるとか。それから後ろのページには、世の中全部見ると課長さん部長さんで女性の割合はこのくらいだとか。いろんな女性の進出の具合を、私と一緒に授業をやっている学生たちが調べて報告してくれたりしています。以上が資料です。これを頭に置きながら画面を見てもらえば、たいへん分かりやすいかと思います。

(授業の陣容と事前準備) それじゃ資料を紹介しましたので、本論のほうに入ります。こ



れが大きな授業風景ですが。真ん中で私が授業をしているんですが、こちらに女性が立っていますが、こちらのほうに司会、学生の司会が2人。それから反対側のほうに1人、マイクを持って学生の間を駆け巡る准司会の方が1人で。4年生の女の子3人が付き添っています。その他、私の研究室の3年生の学生が、カメラ班とか録音班とかいうふうにして、私の研究室の4年生3年生一同で授業に向かいます。もちろんこ

の授業の反省も、研究室一同で反省して、次の時間どうするかという対策をとって授業に向かっています。その他、これなぜ映像があるのかというと、これは映画部と提携して

います。映画部と提携して、このビデオ撮りをしてもらって、一緒にやっています。できれば学生たちも色々参加して、みんなでやる、サークルも研究室も含めてやると、学生が盛り上がります。そんなふうにやっております、総勢約 10 名ぐらいでこの授業に押しかけるということで、1 年生対象の授業をやっています。

映像のように資料を見せていますが、真ん中のスクリーンは私の提示する資料です。それから両側のスクリーンは、学生たち、司会陣の動きを、映画部が撮る仕方でやっています。機械操作は、最初なかなか慣れませんでした、映画部などのように専門でやってくれる人たちが居ますと安心して授業ができるようになります。

それでも、その朝授業に行くとコンピュータとか、マイクが利かないとか、下手をすると

受講生:大学1年生 114名



教育学部	75名
文学部	18名
法学部	6名
経済学部	9名
医学部	4名
理学部	1名
工学部	1名

マイクに充電がないとか、いろんな事件が起きます。充電器にちゃんとマイクが入っていないことがありますので慌てることがあります。予備の乾電池を自前で準備していきます。マイクを4本ぐらい使うのでマイクがないと困るんです。本当はその部屋に行ったらいつでも始めることができるような技官の方が居られると安心なんです。司会陣が前に3人、その他3年

生や映画部が居るのが見えるかと思いますが。

受講生は、教育学部 75 名、文学部 18、法学 6、経済 9、医学部 4、理学部 1、工学 1 です。なんか理科系は受けることができない授業に位置づいていることを初めて知りましたが、残念です。議論の時には、志望分野の違う人たちがいると多面的な見方ができていいのですが、スケジュール管理の都合があるようです。2 年目からは理系は受けられるので、幾人かはいましたね。全 114 名ということです。

(授業開始) それでは授業を写した【ビデオ】を見てください

水原 はい、おはようございます。あと 3 回、今日と来週と再来週ということで、今日はこれまでの総括的なまとめをします。今まで歴史的に、学校教育の諸問題について色々話してきましたけれども、今日は今現在どういう課題を抱えているのかということについて、いろんな問題を紹介しておこうかと思います。それを踏まえて、来週、再来週と討論をしてもらって、最後に

10:30 授業開始



レポートをまとめてもらう、という段取りで考えています。

という仕方で授業が始まり、【本論】に入りました。そして授業の最後に、この次は「学生みんなに討論してもらうから」と言い、感想文を書いてもらいました。

(感想文紹介) さて、その次の週の【ビデオ】を見てください。感想文を素材に4年生が前回の授業の復習をやってくれます。授業の最初にやります。

水原 授業を始めます。それじゃ感想のほうからお願いします。

田辺 前回で講義は終わりましたが、明治の学制から始まって、前回ゆとり教育について学びました。じゃあ前回の復習を感想文で行いたいと思います。資料多いですけど、感想文の一番を見てください。山口さんの感想、下線部を読みたいと思います。「総合的な学習の時間において、生徒の興味・関心に重点が置かれ、そこで学んだことと、教科等で学んだ知識を関連付け、生きる力を育もうとしていることがわかった」きれいにまとめられて

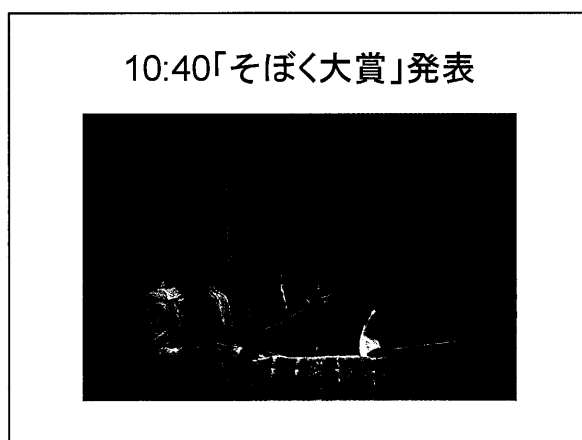
います。このように、ゆとり教育の理想を学びました。でもこの理想と、それが実現できているのかという課題を指摘する感想も多かったですね。ゆとり教育の理想と現実の差、あとは評価について、受験も変わらなければ内容も変わらないんじゃないか。あと教師の負担についてなどなど、いろんな視点からの意見が多くありました。



というように学生の感想を紹介する仕方で授業に入り、復習を兼ねた導入にしています。

(「そぼく大賞」の紹介) さらに次が「そぼく大賞」なんですが、色々素朴な質問。これ私は思いつかなかったんですけど、学生たちがそぼく大賞をつくりましょうってことで、素朴

な質問をしてもいいように、感想文に欄を作ったんですね。そこにいろんな質問が来るというか。それが読んでみてすごく面白いんですね。これは実はその前、「自分」という授業をやったときに、その時も感想文を書かせたんですが、渡利さんの発案で近況報告という欄を作りました。そうしたら学生たちがみんな、自分の近況報告、この頃辛いとか悲しいとか振られたとか、今度いま頑張っているとか、なんかそうい



うことをお互い書く欄で、そこが混み合うというふうなことでしたので、今回もそれをしようかと思ったんですが。しかしそれは自分というものをつくる上ではサブとして効果的だけでも、教育学を教えるのにそれはちょっと趣旨が違うんじゃないかということで、何がいいだろうかと話し合いました。学生には、素朴な疑問をいっぱい挙げてもらう。素朴な疑問が実は普遍的な価値までつながる問題に通じているんだということを気づいてもらう、そういう意味での「そぼく大賞」。今週の「そぼく大賞」ですというふうにして、素朴な質問を励ましてあげるといいですか、そういうことをやっておりました。その【ビデオ】を見てください。

足立 今回のそぼく大賞は、「保健室が逃げ込む場所になる理由」と「蛍光灯がむき出しな件について」の2つにしました。蛍光灯、実は色々事件あるんですね。

田辺 らしいですね。何だっけ、PCB が漏れたりとか……調べたんですけど理解できなくて。でも蛍光灯は危険な部分も多いのに、カバーかけなくていいのかなってというのは、前から思うところも……。

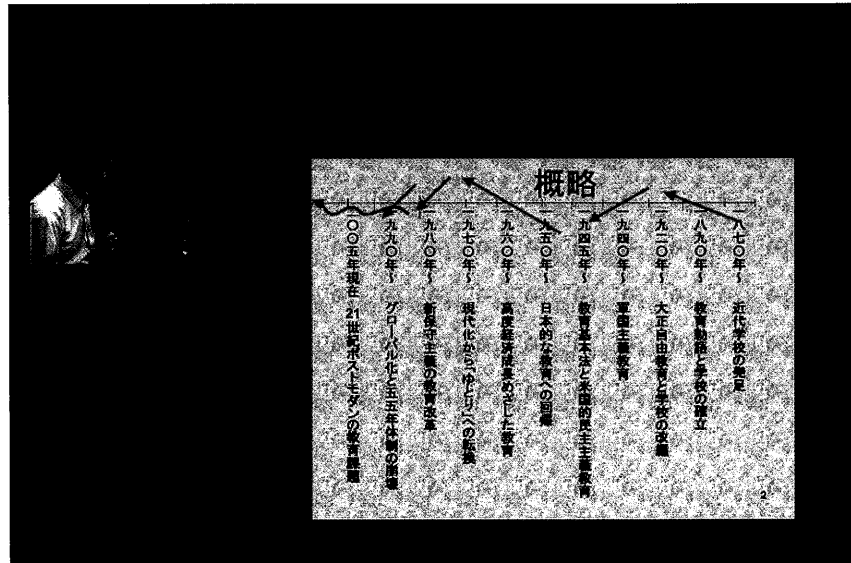
まあ、この問題は、なんで学校の蛍光灯はむき出しになっているのが多いのか、普通の家はむき出しじゃないのにどうしてでしょうかという、そんな質問ですね。それから前者は生徒が保健室に逃げ込む理由ですね。その間が素朴で面白いということです。

(本論の授業) そうして、ようやく私の本論が始まることになります。

水原 10 回分の授業内容を年表だけ示して 5 分くらいで総括します。最初は 1870 年、明治 5 年に近代学校が発足する。従来は身分でやってきたんだけど、今度は学校の勉強でもって人の生き方を分けていく。能力によって人を選別する。近代の原則は能力によって人を選別するということで、新しい原則で始まった。そして欧米から新しいいろんなものを持ってきましたが、しかしそれは日本的な道徳に合わない。日本的な人づくりに合わないの、そのあと 1890 年に教育勅語が出てきて、日本的な人間像が出された。で、ようやく日本の国が固まったんですけども、間もなく日清戦争、日露戦争で、戦前 50 年ぐらい、朝鮮半島、中国の地域を植民地にして、日本の国が豊かになってくる。そこでわれわれは自由を謳歌するので、大正自由教育ということで、様々な私立学校とかいろんな学校が出てくる。しかしその経済も行き詰まって、苦しくなってくると、我々は大陸へ侵略するという仕方で、日本の活路を見出す。そこで軍国主義教育をするようになってくるわけですが。それも束の間で、世界から反発を食らって日本が敗戦となる。

で、そういう野蛮な日本人には民主主義教育を徹底しようってことで、アメリカ民主主義というものが日本人に教育される。で、そのために教育基本法がつくられ、アメリカ的な民主主義教育が、戦後改革で始まった。しかしアメリカがいなくなると、やっぱり日本的な教育へ戻ろうってことで、教育委員会制度もほどほどにしよう、まあ、みんな自分の経

10:50 講義



験から考えるとか討論するとかの新しい勉強スタイルもほどほどにして、やっぱり能率的な暗記暗誦を基本に系統的な知識・技術を勉強しようってことで、高度経済成長を目指す教育をする。で、モーレツサラリーマンのような人間像づくりをして、世界を見返して、やっぱりまた世界1、2位の国にのし上がったということですね。……等々。

まあこんなふうに話しますが覚えてもらう必要もないし、これは一つの解釈に過ぎないんだから、みなさんいろんなそのほかの教養教育を聞きながら自分で考えなきゃいけませんよってことを、何度も念を押しています。そのあと質疑応答などを受けます。

(質疑応答) 次は質疑応答の【ビデオ】です。

受講生 大学それと大学院に関して、最初にある、誰もがいつでも学べるユニバーサル時代っていうのがあるんですけど、これは僕が実際大学受験を受けたときに、授業料の増額に反対っていう署名を受けたんですけど、最初は授業料の増額するのに対して、学校側は何らかのサービス向上を行うというので仕方ないかなと思っていた

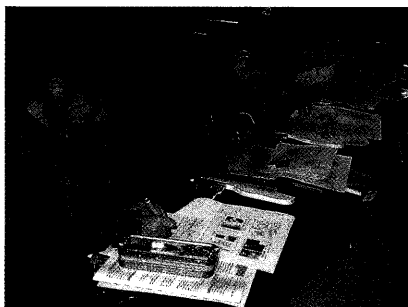
11:30 質疑応答



んですけど、やっぱり誰もがいつでも学べるようにするっていうと、授業料の値上げというのは当然問題になってくるというのがあるんですけど、授業料を上げる意味っていうのはあるんですか。

水原 はい。学校をどういうふうに位置づけるかですよ。例えば社会主義国なんかですと、中国とかソ連なんかですと、授業料は全部無料ですよ。元々は。医療とか教育に関しては無料。どういうことかという、能力さえあれば入れるシステムにするということによって、能力のある人が上がれるのが平等だと。あちら社会主義っていうのは平等主義で、こちら資本主義社会は自由原理でありますから。平等原理のほうですと、お金があろうがなかろうが能力さえあれば上がれるようにする。こちらはお金があるということは勝負に勝ったことだから、それを利用して何が悪いということが原理原則にあって、それでその中間のところで、授業料をほどほどのところにする、みんなが通れる道にするという意味なので、授業料を上げすぎると、所得の高い人しか入れない大学になってしまっ、その結果フェアでない問題が起きる。だからそういう意味では、僕は授業料は可能な限り無料にしたらいと思いますね。本当は。ただそのところが、われわれが 1970 年代に授業料闘争したことがあったんですが、そのとき同級生の床屋になった人が言ったんですが、あんた方は大学を出て結局出世街道に行くんだから、特急料金払えよというのです。結局、大学に行くのは特急に乗って出世することなんだから、その分だけ受益者負担、儲かる分だけ高い料金払うのは当たり前じゃないかということを行いました。われわれ学生は、いや貧しい人みんなが大学にいて、そこでみんなの教育が保障されるべきだということを行ったんですが、これはやっぱり、この国をどういう国にしたいかというところにおいて考え方が分かれるわけなんです。で、今は、受益者負担を原則として、ほどほどの負担をしてもらうことで、儲かる人は儲かる分だけ負担をしてもらいましょうとなっているんです。それがあまり高すぎると、貧しければ行けなくなりですね。ですから本当にユニバーサル、つまり 50%以上の人たちが、みんながいつでも行ける大学にするという意味では、かなり授業料を下げておくというふうにすれば、行きやすいだろうとは思いますが。

11:50 感想文記入



というふうに質疑応答をします。この問題は一つの解釈で、別な原則でも出来るし、他の原則でも出来るということを説明しています。今採用しているのはどういう原則なのか、で、私たちはどうしたらいいかを考えてみなさいということの意味で言うてるんです。で、質疑応答が終わったら、感想文を書いてもらう。たぶん今の考え方に対して、やっぱり 30 通りの疑問なり、

感心したとか、そうでないと思うとか、色々意見が出てきて。後でもらった感想を読むわけですが。先ほどの感想ですね、色々書いてあるのを、研究室みんなで、帰った後実際に読むのは6、7人ですかね。研究室の4年生と3年生と私と院生と、みんな読んで、何がいい感想かと。優秀な感想というよりも、次の時間にみなさんに提示する感想としていいものを選ぶ。つまりなるべく偏らないで、A型の感想、B型、C型、D型の感想って色々そろえて、こんな感想があるんだぞというふうに見せて、もっと考えなければいけないというふうに提示します、少なくともそうなるように感想を選んでいきます。

感想は、まあ114枚ですから、去年まで「自分」の授業では300人でしたから、それに比べたらなんてことはありません。まあそれでみんなを選んで、次の週までに整えて、それをぶつけるというふうにしています。毎週毎週それは結構重いですね。なかなか時間が空いてないんで、空き時間を探しながら読んで、意見の違うところもありますから。でもこれをしないといい授業が創れないですし、一緒にやった学生たちも、その日の成果を確かめたいので読みたがりますし、来週はどうするか話が自然に出てきます。

それで次は、12回目の時に、今のようなことでようやく一通りのことを勉強してきたところで、今度は討論会ということにしました。討論会は何人のグループがいいのかというのは、初め学生たちと討論していると、6人がいいとか4人がいいとか10人がいいとかなんですが、結局この部屋を使うしかないのが大きな条件でした。「自分」の授業をやった時は、C棟の2階のフロア全部借りました。二階フロア全部借りたんですが、討論が各グループで始まるとたいへんな騒ぎになるもんですから、他の教室は迷惑なんですね。でもあのときは金曜日の5時間目だからまあ最小限の迷惑でよかったんですが、これは火曜日の2時間目というゴールデンタイムですので、他の教室では迷惑しますので、やっぱりこの部屋でやるのがいいだろうということになりました。武道場とか体育館とか芝生とか色々考えましたが、まあここってということにしました。4人1組で後ろを向いてしてもらおう。しかもこの4人は、同じグループでないようにくじ引きを作んなきゃならない。だいたいお友達同士で来ますので、そのお友達がみんな割れるように座らせないといけないんで、そのくじ引きをちゃんと作って座らせるところまで工夫しています。そういうのは学生たちがよく発案してくれます。

それで議題は、本当の大きな議題は、「われわれの未来の学校はどうやったらよくなるのか」というのが本来のテーマなんですが、それに向けて3つの課題、学校5日制、つまり学校のカリキュラムをどうしたらいいかっていう学校5日制。週休2日なんてやめて、どんどん勉強時間増やして学力を上げたらいいんだとか、いややっぱり週休2日を休んで勉強時間を減らしたほうがいいという問題。

それから部活の存廃問題。部活・サークル等は、これは規定はない。だから学校でやってもやらなくてもいいのに、学校の中ではすごく重い。部活を廃止している学校もある。やめたらいいか続けるべきか、学校の中ではなく社会的なサークル活動に切り替えたらどうか等々の問題です。

それから入学試験。学力試験だけで人を評価していいか悪いか。それだと一般論になりますので、東北大学をどうするか。東北大学は学力試験だけでいいかどうかとうふうな、3つの議題で、3グループに分けて、賛成・反対の討論にしました。

賛成・反対も、それからテーマも選ばせようかと思ったんですが、一時間90分の授業でやると、まずテーマを何にするか、賛成派にするか反対派にするかという、入り口だけでもう一時間過ぎちゃいますので。初めから、そこに座ったならば部活の廃止論で詰める、

第12回(7/12) 4人グループ討論会



こちらは存続論で詰める、というふうに、初めから指定して議論させました。

それではその時の【ビデオ】を見てください。

学生1 休めなかった環境だったんですね。

学生3 遅刻でさえ。

学生1 そう、遅刻でさえ後ろめたさが、罪悪感がちょっと感じました。それって別

に感じなくていいじゃないですか。別に強制っていうわけじゃないし。

学生2 本当は自由な活動のはずだから。

学生1 だから、大学来て、サークルってすごい自由だなんて。すごい思いましたね。ぜんぜん高校の頃の部活と違う。

学生4 そうだね。

杉原 メリット・デメリット出尽くした？

メリット・デメリットを分析して、メリットの欄デメリットの欄分析して、そしてどういうふうにするかっていう改善策を書く。その理由は何々というふうに書いて。したがってこのようにすべきだという答申を出すというふうに。水原文部大臣に今の答申を出すという

第13回 全体討論会(7/19) 学生発表



う仕方で、各グループが書くようにしてもらいました。それで発表会などを行っているわけですが。

発表会の【ビデオ】を見てください。

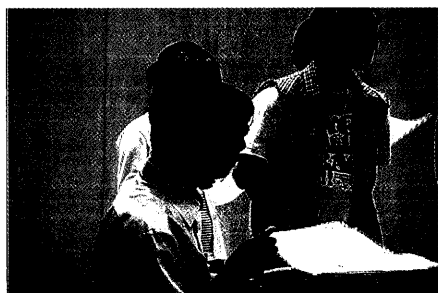
6班代表 私たち6班は週5日制廃止派です。週5日制を廃止して、復活した土曜日を授業の予備日として、月曜から金曜の授業が予定通り行えなかったら、そこで行う。もし行われたら、その日を課外活動の時間

として、学内イベントなり地域活動を行うという意見です。週 5 日制になって休みが増えて、肉体的精神的に楽とか、地域活動や趣味に費やす時間が増えるとか、よく言われますが、結局丸 1 日部活や補講でつぶされているような状況で、これは休みが増えるどころか、むしろ生徒の側にも教師の側にも負担です。また、やる気のある人は進んで休みの日に何かやったりしたり、あとお金がある人は塾とかに行行って勉強したりするけれども、やる気のない人やお金のない人は結局何もしないでだらだらしてしまっ、いろんな面で差が生じてしまうので、これはよくないんじゃないかと思います。

まあこんなふうにして。これは今 4 人グループの討論会が 1 時間終わって、次の回に、みなさんから出してもらった答申、120 人だとすると 4 人グループで 30 グループができますので、30 グループからの答申を受けて、こちらでみんなで読んでみて、どういう主張とどういう主張とをこの場でぶつけたらいいかっていうことで、その主張がぶつかるような人たちを並べて、そこで討論に供するというふうな仕方が、最後の回にやったわけです。ステージに上がってもらって、各グループが言ったことに対して私のほうから、ちょっと論のつめが甘くないかとか、それからフロアのほうからも、ここはどうなのかということを出してもらって、問題を考えるというふうにしてもらったところです。次の【ビデオ】で、私からの追い込みを聞いてください。

水原 あのですね、両者の対立しそうなところは、学校五日制にして規制されない時間が

第13回 全体討論会(7/19)
水原解説



多くなるということは、自由になる時間が増えるんで、この結果いろんな差がつく。個性が出るということを積極的に認めるか、なるべくみんな同じ水準につくるのが学校なんだから、そこはあまり差が出ないようにするのがいいんだと考えるかですね。差がついたほうがいい、差がついて当然だからどんどん差をつけていこうという考え方と、いややっぱり基本的な線を守るために、みんな同じようにかなりの時間を

を学校で使おうという考え方とでは、ずいぶん考え方の基本が違うと思うので、その点に関してどう考えているのか改めて聞いてみたいな。

というふうにしてですね、答えの曖昧なところに関してもう一度、「あんたがたが答申を出した原則はなんだったのか、もう一回詳しく言ってくれ」なんてことを、最後に追い込みをしているわけです。そんなふうにして、私は学校教育が専門ですから、学校というものを素材にしながら、かつ私なりの知識で教えられるところを教えながら、でもそのことは

覚えてもらう必要もないし暗記してもらう必要もなく、いずれ専門に入ったらそれはきちんと覚えて積み上げるから、今はむしろ縦の軸よりも横に広がるような意味で、ものを考える力をつけてほしいということで授業をして参りました。

以上、これぐらいにしておきまして、あとは質疑応答で、是非いろんなご意見・ご批判いただけると、また来年いいものにできると思いますので、よろしくお願いします。

(授業報告への質疑応答)

谷口 水原先生ありがとうございました。今のお話で、大きく 2 つあったと思います。ひとつはですね、教養としての教育学ということをやまず目的として、その中でこういったシラバスを作成し、こういった授業形態を選択し、どのような学生の最終的なゴールを目指すかということ。その中ではやはり多面的な学生の見方・考え方があり、われわれが発信したのに対して多様な受け取り方がされるという点が非常に難しいということがございました。もうひとつは、授業の形態であるとか、機器や設備の管理であるとか、いわゆる学生の発言や討論を促すようなそういった方略、こういったものが様々に工夫されていたと思います。それでまずは水原先生に倣いまして、素朴な質問からみなさん出していただければと思います。よろしくお願いします。

質問者 1 教育情報学研究部の渡部です。どうも貴重な教育実践のご報告ありがとうございました。ちょっと素朴な質問ということなので、質問させていただきたいんですが。とてもすばらしい実践だと思いますが、すごい学生さんも使っていますし、準備のための時間も使ってますし、そのあとのフォロー、次の授業に対する準備、反省プラス準備ですかね。も、すごい時間がかかっていると思うんですが、水原先生ご自身は、やはり全てのわれわれの授業で、このくらいやらないと、東北大学の授業としては、合格点はあげられないとお考えですか。というのが一つと、もう一つ。もしそうじゃないとしたら、先生がなさった例えばこの教育学の授業で、最低このレベルくらいまでは最低レベルとして、全ての教員にしてほしいということがあったら教えてください。

水原 ご質問の意味はよく解ります。じゃあこの方式で全部が全部そういうふうになっているかということ、そうでもないわけです。まあ 1 つか 2 つくらい、本当にいい授業をしようかなという意味でやっています。去年まで「自分」という授業をやってみて、学生の多くは夢と希望を膨らませて大学に来るんだってことがよく解りました。しかし 5 月を過ぎると、ほとんどの学生が失望する。あれは学生が 5 月病にかかったんじゃなくて、大学の教師がそこに学生を追い込んでいるんだということは、いろんな感想文を書いてもらうとよく感じます。ですからせめて学生たちに、夢と希望を膨らませてきた人たちに、これからこんなふうにとったら学問っていうのは面白いし、あんたがたが普通に感じている疑問っていうのは、すごく普遍的な問題につながることなんだと伝えておきたいと思っています。やはり最初の 1 年に、きちんとした入り口を指導するっていうことが、すごく大事なことなんじゃないかというのが、私のここ 2、3 年の感想です。やっぱり 1 年生、特に 1 年生に

対しては、今のような教育があつたらいいんじゃないかなと思っています。段々学年が上がるに従って、もっと教師主導でも可能かと思いますが。たぶんこんなふうにして力がついてきた学生は、今度ゼミでもなんでも主体的に参加するようになるので、いろんなところで反応が違ってくると思います。私、やっていて感じることは、一番力がついてくるのは司会者たちだということです。いつの間にかものすごく力がついてきて、1年生に説明するためにいろんなことを仕組んで勉強することで、実は3年生・4年生の教育になっています。ですから、教え込むよりも、彼らに教える場で一緒にやらせるほうが、はるかに効果的で、かつ1年生にも効果を持ちます。だからまあ、3・4年生は放っておいてもなんとか伸びるんですね。その意味では、どこに力点を置いて学生を教育するかが大事であると思います。ちょっと答えにならないかも知れません。

質問者1 そうすると、いわゆるFDとして、全ての教員がこのようなレベルまで講義をするという考えでは、先生はないということですね。そうすると、FDとして考えると、どのあたりくらいまで、この授業の中のどのあたりまでは浸透して欲しいとお考えですか。

水原 先生方それぞれは得意技があると思うんですね。だからこういう仕方が得意な人とか、そうでない仕方が得意であるとかあるはずで、大事なことは、大学で何か知的な探求やってみようと思わせる何かが仕組めるならば、基礎ゼミでもなんでもいいし、どういう仕方でいいけども、とにかく学生たちが意欲的にやろうというのを受け止める何かを、最低そうして欲しいなと思います。それはいろんな形は色々ありうるんじゃないかなと思います。学生たちは指導を受けたがっているし、学びたがっているし、追究したがっている、そのことは間違いないと思います。それを何らかの形で、先生方の得意技の形でいいから、受け止めてもらえたらいいと思います。

質問者2 ちょっと一つ教えていただきたいんですけども、司会やっている学生たちは、どういうメリットというか。ボランティア？

水原 ボランティアです。ただ、自分の家へ帰ってから感想文を打ってもらうのは、お金払っています。たとえば家に帰ってこれを打ってきてとか、例えばテープ起こしてとかいうのは、払うようにします。この授業をつくるとか、ここで一緒にやること自体は、それはお互いに一種のゼミ、研究みたいなものですから、それは私の教育なんだから、一貫してやってもらっています。

質問者2 聞きそびれているかもしれませんが、3・4年生？

水原 4年生と3年生で、司会は4年生にしています。ただ私も人を見ているから、この人は使えるとか、この人は難しいとかいうことはあります。でもまあどんなタイプの人でも、教員と一緒にやる気があるなら、ご懸念になっていることの意味は解るんですが、学生は狂ったように面白がってやります。不思議なことですね。なんかもう面白くて止められないようで、私以上に熱心になります。私はもうほどほどにして帰りたいと思うのですが、学生たちはそれが許されないほど熱心にどんどん突き進んでいきます。彼らは、青年たちを教えることの面白さを感じてしまい、それで大学院進学して大学の教師になりたい

というふうに思ってくれます。こんなに面白いことならばやってみたいとなり、みんな大学院に来るように変わってきました。ですから教職志望者にも、こんな経験をさせるとすごく効果的なんだと学んだしいです。先生この授業もう終わりなんですか、もっとしまししょうってなります。むしろ私のほうが、もうほほどにして（笑）と及び腰になってしまいます。そのくらい学生は熱心になります。不思議な印象を受けますね。

質問者 2 ありがとうございました。

質問者 3 情報学の岩崎ですが。この教育学という科目ですね、設定されたのはいつで、それが先生のところに頼まれたのはいつで、それでこういったやり方でやろうというふうに決まったのは。その辺ちょっと簡単な。

谷口 3年間私が担当しておりまして4年目の今年、水原先生にお願いしました。

質問者 3 ということは、水原先生が担当ということで、改めて設計し直したということですか。

水原 そう言ってもいいでしょうね。私自身は、昨年までは「自分」という授業をやっていましたから、その手法で教育学もやれないかなと思いました。「自分」という授業に比べると、こちらは知識を教えるのが主ですからすごく楽です。教えるべき正解として一応の知識を私は持っていますのでね。「自分砕き」のほうは正解がないので、人生をどう教えるか、みたいなことが毎回ですから、しかも説教すると飽きられますので、あちらはちょっと辛かったです。教育学まあ然るべき知識が一応あるので、学生の質問に答えて分類も整理もしやすいので楽ですけどね。

質問者 3 素朴な質問に当たるんですけども、成績というのはどういうふうに評価されていますか。

水原 それはレポートを出してきますので、レポートは読めば判ります。従来の様々な議論を踏まえて、それで自分の今後の学校の未来構想みたいなものを書いてもらいます。そこでどういう原理原則を詰めて書いているかによって、良し悪しはよく見えますので、評価はつきます。

質問者 2 FDに、今日のようにすごく質のいい授業を見せていただくと、渡部さんの疑問とひょっとしたら同じ疑問なのかなと思いますけれど。双方向性の授業は、やはりこれだけのボランティアを活用しないとできないんだっていうメッセージを受けてしまっているような気もするんですよ。それはやっぱり、ボランティアがいなくても双方向性の授業ができるのかどうかというふうな。だから、別のまた実践がどこかで、授業実践が提示されれば、それは違いますよということになるのかもしれませんが。毎回授業のレポートを全部見てそれに答えようとするだけでもものすごいですからね。日々たいへんな労力を各教員には負担を持ちながら仕事をしてるわけですよね。そうするとやっぱり、これだけのボランティアを活用しなければできないというメッセージになっちゃう。

水原 本当はボランティアは2人ぐらいでいいです。しかし、私は研究室を抱えているから、学生全体を教育しなければいけないから、4年生・3年生や大学院生など研究室全員引

き連れて、それで何らかの役を与える仕方で教育しているのです。これは一種の教育をするために連れて行きますけども、仕事そのものだったらTA2人位いたら、結構それでこなすには十分です。授業の場で討論程度の双方向だけならば、一人でもやれるとは思いますが。ただやっぱりTA学生がいると伝わるんですよね。教授の言葉だけではやっぱり伝わらない。要するに学生の素朴な言葉や疑問で翻訳しないとイケないんですね。

またこっちが一生懸命になると目を三角にして熱中して喋りまくり始めると、TA学生たちが質問の形で止めてくれるんですね。私の言葉を遮って介入してきて、「それはこういうことなんですか先生」と。私の声が学生の頭の上を飛び始めたなと思うと、学生の司会陣のほうからチェックが入ってきますので。ちょっと待ってってことですね。

質問者2 ボランティア学生の活動を、ボランティアじゃなくてこれが単位になるようにしていけばいいんですかね。8単位とか。

水原 そうですね。関口先生から、いつでしたか助言いただきましたけど。これ大学院の単位にして、大学院で授業開発という科目にして、それがそのままこっちに来て授業をするというふうにしたらいんじゃないでしょうかって言われたこともありましたけども。院生みんなで教養教育を企画して、それでみんなで授業を実際につくりに来る、というふうな仕方なんかやったらいいかのなって感じはします。そういう意味では、大学院生の教養教育の練習になりますね。ただ大学院生で教育に関心を持つというのは通常はないですよ。大学院生は自分だけのますます狭い関心になっていって、論文だけ書こうとするから、大学院の経験だけでそのまま教職に就いた人はあまり教育に熱心でないし、先生方の雑務もしたがりませんよね。ですからそこらへん、院生時代にこういうことに関係するっていうのが、すごくFDになると感じますね。それから、これは本当に大学院に行こうっていう意識になる意味でも効果的なんですね。

谷口 ちょっと補足させていただきますと、双方向自体はそんなに、ちょっと手間隙かけたら、私も実際3年間やっていたときにフィードバックも、200対1のディベートとかですね。双方向自体は簡単なわけで。また今回も後期から、環境科学研究科の大学院の授業の、インストラクション・デザインから入りましてですね、双方向の授業をつくる、そこまでは割りとできるわけです。水原先生の問題というのは、双方向の授業プラスもう一つ、学生が第3者として入ってきて、どう経営するかというのも、非常に特殊だと、そう考えております。ですから、ニーズに対応することと、双方向というのは、水原先生のほどではないですけど可能であり、それプラス、学生をどのように司会として参加させるかというような。スタンフォードのCTLなんかでもですね、就職までに大学院生が、やはりPost Doctorの段階で授業をできるような形で訓練するという。そういったものが一つのポイントとなっております。ですからそういう形でいくつかの示唆を含んでいると考えます。

質問者2 すると水原先生の授業の双方向性は、教員1人ではできない双方向性の授業ですね。そこに質の高さが出てくると思うんですけども。3・4年生がここにコミットすることで、すごく優れたものになっていると。

水原 ですね。やはり学年間の交流って意外とないんですよ。ですからいろんな質問が、3年生・4年生にも質問できるということで。研究室にもいっぱい学生が来るようになって。私はいつも研究室を開けているものですから、そこにワーワーと人がいつも混んでいるといえますか、いつも学生が座り込んでいるって感じになっています。そういうふうにして、連続性を保つようにしています。

谷口 水原先生の授業についての質問なんですけども。多様な見方や受け取り方をされる、そういったものに対応する授業の設計とかですね、われわれが考えている授業のイメージと、それから、求められている目的、教育目的であるとか、学生に対するサービスであるとかっていうのが、また少し違うと思いますね。水原先生、この教育学自体の授業、これは教育学って言っても、1年生に行うものと、それから3年生・2年生の概論、3年生の各論といわれるものと、それからもちろん4年生で専門的に追究していったり、大学院に発展させる専門性っていうもの。そのあたりはどういった形で位置付けられたんですかね。

水原 教育の諸問題をあれこれを話していく授業の仕方も伝統的にあるわけです。毎回毎回トピック風に話す。でも、あれやこれや新聞の紙面みたいに紹介して行って、そこにおける原理的問題を挙げてやっても、あまりきちんと整理されないで、なんだか分からなくなるのではないかと考えました。もちろんそうでないこともありうると思うんですが。それで、自分の持ち味だとすると、日本の120年くらいの近代学校のことが詳しいですね。でもそれをそのまま教えると、教養としての教育学になるんだろうかということが、最初に考えた疑問でした。だから歴史を教えながら、かつ横に広がるような教養の入り口として、このことを教えられないかと考えました。だからそこでの議論は、その歴史的時代を説明するというよりも、そこにおいて採用された原理原則が何だったのか、それを現代的な目で見たならば、それはいいことなのか悪いことなのかというところで議論してみて、それで私たちは未来の学校をどうするかと考えるならば、政治・経済・社会に対するいろんな視野がないと判断できないということを毎回思い知ってもらうことができるのではないかと考えました。そういうふうにすると、教養の横のほうに広がるのではないかな。あといずれ2年生になったら、私はカリキュラム研究を教えるから、そのときは事実をきちんと覚えて、上に積みあがるように勉強してくださいと話しました。ただ、全学教育ではそういう認識よりも、「なるべく横との関係、諸科学との連携の中で学べるように考えてくださいね」って言葉でも言ってるわけですが。これはまあ自分に力がないから言葉で言わざるを得ないので、本当はそんなこと言わなくたって、教える内容から自ずとそこに行くことが望ましいんです。それがすぐに実現できないんで、そういうことが狙いですよって何回も言い訳がましく言ってはいるんです。まあそんなふうにして、教養としての教育学と、入門としての教育学は一応分けて考えてるんだってことを言っています。それで2年生からは、私はカリキュラムの概論を担当し、3年になったら演習をやり、そして4年生になったら卒論を書かせるという、一応自分なりには体系は作れたつもりでいるんです。

教養としての教え方っていうのは、われわれ学生のときはこれが教養かって、単なる易し

い入門の数学、確か私は数列を習いましたが、数列を習うことがなんで教養としての数学なのか解らなかつたです。数学における数列の意味がどういうことか解らなかつたですね。むしろ私が聞きたかつたのは、人類の歴史における数学の意味みたいなことを本当は知りたかつたんです。でもそうはなっていない。ですから、横に広がる意味での教養はどうあったらいいのかということは、ずっと関心あるんです。研究論文では人の授業をそのように批判していますが、今度自分で作ってみようって、今年は自分がその批判を受けながらつくんなきゃならないなと覚悟してやってみました。

質問者4 教養としての教育学とか、入門としての教育学、こちらはやっぱり難しい問題ですので、それはもう水原先生のほうでですね、もう少し確認されていくことだと思うんです。私のほうから質問一つなんですけども、今回初めて教育学っていうのをこういう形で先生やられて、一番最初に学生の能力なり問題関心なり、この程度まで高めようっていうふうな、想定していたものが、実際としてそれなりの予想通りになったのかってちょっとお聞きしたいですね。それで、もし何か問題があったとしたら、どの辺が今後解決されるべき問題として残ったのか。この辺ちょっと最後に聞かせていただけるとありがたいと思います。

水原 始める前からちょっと予想はしていたんですが、「自分」という授業のときもそうでしたが、学生たちは、決め付けの殻に入った概念が砕かれないまま、決まりきったものの見方考え方に囚われて、すごく硬直していますね。それは「自分」自身の捉え方もそうだし、世の中の見方もそうなんで、様々な事実をぶついたり、他の人の考え方をぶつけることで、砕いてやろうと思いました。あの時は「自分砕き」の授業でしたが、今度は概念砕きといいますか。そういう殻にはまった概念を砕いて、事実即して自分の目と頭で考えるという、そういう力をつけたいということでやりました。それは徐々に、事実を教えていく中で、かなり崩すことはできたとは思っていますね。

ただその、教養としての教育学という課題からすると、毎回話したときに、じゃあどういうふうに横に広げればいいのか、学生の実態に応じて、毎回、認識を広く深くするための図書紹介がちゃんとできたらいいんですが、できませんでした。広く関心を持つんだよと言いつ放しで、その後学生がどうしたらいいのか分かるような指導ができなかつたですね。取っ掛かりの入り口と方法が教えられなかつた。やはり自分の読書量や見識の狭さ、自分の教養のなさが改めてすごく感じられました。関係する経済現象・社会現象・自然現象がいっぱい出てくるんだから、それは岩波新書のあれに書いてあって、あれ読んだらおもしろいとか毎回何らかの図書紹介があったならば横に広がるのに、自分の狭いところだけで説明して、あとは難しい教養が必要だって口先だけで言うっていうのは、本当は逃げみたいな教養教育で、そこは駄目だったなあとと思っています。ですからそこら辺は、若い院生や学部3・4年生たちとも協力して、1年生が共感できるレベルで対応するのが効果的ではないかと思います。彼らに若い人が読めそうないい本を挙げてもらうなど、側面から固めるというのも方法かなと思っています。時間のようですので、ありがとうございました。



「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト
大学授業実践を支える理論としての
インストラクショナル・デザイン
2005年8月22日
第1回事前研修 (FD)

eラーニング・ファンダメンタルズ
OJAS 岩手県立大学 教育情報システム学
学習支援 Web サイト

FD 基盤サイト
OJAS 岩手県立大学 教育情報システム学
CMS 比較サイト

岩手県立大学ソフトウェア情報学部教授
鈴木 克明
ksuzuki@iwate-pu.ac.jp
http://www.et.soft.iwate-pu.ac.jp/





まずは本日の感想から
申し述べます。



教育実践における授業改善 (研修事後報告)をお聞きして

- ◆ 教授陣が全員、水原先生のようなだったらFDは必要ありませんね。
 - ・ 自らの実践を研究対象とできる教育学者の特殊事情がある。(巷には紺屋の白袴が多いですが)
 - ・ 嫌な質問: 教育学のどの理論を活用されていますか?
- ◆ 一番大きく育つのは、授業補助にあたる水原研究室の4年生ですね。
 - ・ 教授にとつて、実はこれが一番嬉しいこと。
- ◆ 「これはすごい、でも自分にはできない。」そう思わせる逆効果もありますが、...
 - ・ FD研修の事例としてはすご過ぎるかもしれない。
 - ・ 教育学の特殊事情だと思わせない工夫が必要。





プロジェクトは さすが東北大学という感じ

- ◆ スタンフォードに長期で滞在できるって、すばらしい。うらやましい。
 - ・ カルチャーショックの連続でしょうけど。
- ◆ 一番鍛えられるのは、プロジェクト推進者。
 - ・ 大学における教育改善の専門家になってください。
- ◆ 3年間の研究成果は、他大学の教員が欲しいものになるでしょう。(貢献大)
 - ・ 東北大学の教員が興味を示すかどうかは、別の問題として考えましょう。





研修の目標が明示されているのは 良いことですね。でも、...

- ◆ 『目標』: 授業実践を自己点検するとともに、教育の質向上の起点となる授業デザインの基礎的骨格とポイントを学ぶ。
- ◆ 所与の条件
 - ・ 自身の授業実践を語る場がない。
 - ・ 80分一本勝負である。
- ◆ 改訂目標: 『目標』に示されたことの第一歩として、FDをとりまく現状を把握し、授業実践を向上させる手段としてIDをもっと学ばねばならないと思うようになる。





研修の目標が明示されているのは 良いことですね。でも、...

- ◆ 『目標』: 授業実践を自己点検するとともに、教育の質向上の起点となる授業デザインの基礎的骨格とポイントを学ぶ。
- ◆ 目標を設定すると同時に、目標の達成状況をどう評価するか、評価の計画も同時に立てておくことが重要です。
- ◆ 改訂目標: 『目標』に示されたことの第一歩として、FDをとりまく現状を把握し、授業実践を向上させる手段としてIDをもっと学ばねばならないと思うようになる。







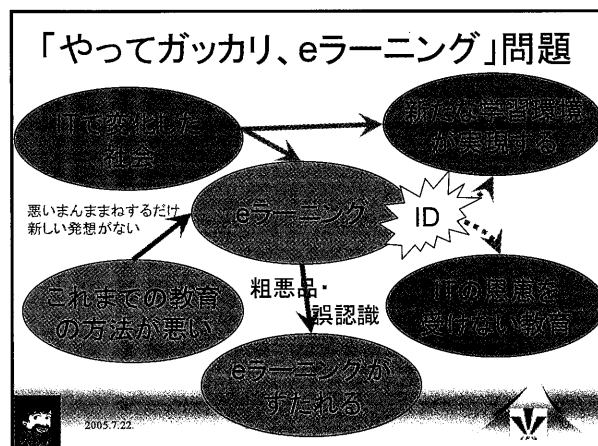
講演概要

- ◆ FDは大学の教育機能向上のための一つの手段ですが、いろいろな問題があるようです。
- ◆ 研究は大部分「徒弟制」的に継承されますが、研究方法論が存在します。同様に、教育も徒弟制・経験ベースですが、授業実践を支える科学的な方法論があります。
- ◆ インストラクショナルデザイン(ID)は、教育の効果・効率・魅力を高めるための工学的研究領域として30年余りの伝統があります。



2005.7.22

E-learning World 2005 L-2



FDを取り巻く状況



日本教育工学会会員募集中！

- ◆ ■あなたはこの大学にどのように貢献されますか？
- ◆ 大学は教育にどんな工夫をしていますか？
- ◆ ～このことの公表が求められる時代になりました～
- ◆ 何もやらない人が居にくくなる(でしょう)。
- ◆ 自分の強みを生かすチャンスになる(かな?)。



2005.7.22

E-learning World 2005 L-2



貢献分野としては、、、

- ◆ 1) 教育(例: 担当科目数、受講学生数、卒論指導学生数、学生による学会発表数等、FD関連活動、、、)
- ◆ 2) 研究(例: 著書・論文発表数、国際会議講演数、競争的資金獲得額、特許申請・取得、委託研究・共同研究、学会理事・編集委員等、学会等による表彰、、、)
- ◆ 3) 地域貢献(例: 県審議会委員等、地域企業等との共同研究、県関連の研究結果、県内の講演等、、、)
- ◆ 4) 大学運営(例: 学部長・学科長、学部運営会議、評議員、全学委員、学部内委員、、、)
- ◆ 5) その他？



2005.7.22

E-learning World 2005 L-2



参考: MBO (Management by Objective: 目標による管理)

- ◆ 1)~5)のどれについてどのぐらいやるか(目標)を申告し、期の終わりにその達成度に応じて査定する方式。→1)~5)の比重について個人差を認めることで、構成員の強みを生かす(どの程度? 最低基準は設定するのか?)。



2005.7.22

E-learning World 2005 L-2



■教育貢献の評価・測定方法: 自分たちで決めていく必要がある。

- ◆ 1)量的負荷(例:科目数、受講生数、ゼミの学生数、シラバスの作成回数、講義回数)
- ◆ 2)プラス面があること(例:学生による授業評価アンケートによる熱心度算定、ベストティーチャー等の人気投票、教育改善活動への貢献、学生の研究成果発表数をポイント化、教材の作成実績、教育上の工夫:自己申告制)
- ◆ 3)マイナス面がないこと(例:成績評価の正確性・迅速性、無断休講、学生による授業評価アンケートにおけるクレームの有無)

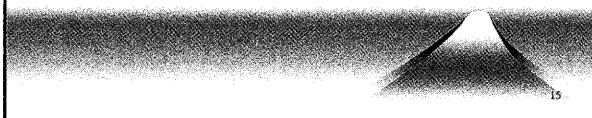


2005.7.22

参考:ソフトピアエデュケーション評価委員会の発表
◆出典:平成16年3月教授会提出資料を一部改訂



■学生による授業評価 大学の自己評価点検の一環



15

1)お付き合い的性格:

- ◆ やらなければならないもの(文科省指導)として導入された。「学生による授業評価をやっています」は宣伝文句にはならない(どこでもやっているから;逆にやらないとマイナス評価)。問題は、それを教育改善にどのように役立てていくか(役立てようとするかどうか)?
- ◆ やりっぱなしだと学生に不信感を持たれても仕方ない;「書くだけ書かせておいて、何も変わらないじゃないか!」



2005.7.22

E-learning World 2005 L-2



2) 学生の評価能力・資格を巡る 論議

- ◆ 自分の講義は学生には評価できない。遅刻・私語・無断欠席の学生が評価する資格はない。
- ◆ 無記名で5段階数値による評価は無責任。
- ◆ でも、学生が満足していない点があれば分かる(すべてが教員の個人的努力で改善できる問題とは限らないが、問題があることだけは明らかになる。)



2005.7.22

E-learning World 2005 L-2



3) 評価の観点が瑣末という論議

- ◆ 「板書が読めない、声が聞こえない」そんなことを調査・点数化してどうするのか。
- ◆ 何を学ばせるべきか、それがどの程度達成できたかの議論は何処へ?
- ◆ 参考:JABEE(日本技術者教育認定機構)も大学評価・学位授与機構が行う大学評価も「アウトカム重視」。実際の教育成果の証左、教育の質を確保・改善する仕組みが機能しているかなどを審査。



2005.7.22

E-learning World 2005 L-2



FD=学生による授業評価か？

- ◆ 4) 教育貢献度は「学生による授業評価」の結果だけでは判定できない。部分的な指標に過ぎない。

■FD (Faculty Development) が、やりっぱなしを防ぐ

- ◆ 1) 大学教員は「教育技術」の体系的訓練を受けていない。教育については無免許運転。
- ◆ 2) 4年間でどのような付加価値をつけて卒業させるのか。大学の大量化・学生の能力差拡大への対処。
- ◆ 3) 研究重視で教育はサービス？ 自分の弟子を効率的に育てる術を身につける必要はないのか。
- ◆ 4) Professor (告白する人) から教育効果向上請負人へ: 研究方法論に並ぶ教育方法論の基盤を

■授業改善の目的は何か？ IDの視点から

- ◆ 教育効果: 学生の実力がつく、期待にこたえるだけの卒業生が出せる。
- ◆ 教育効率: できるだけ短時間で、無駄なく授業をする。学生も教員も省エネ可能。
- ◆ 魅力: さらに勉強したいと思うようになる(継続動機)。勉強のプロセスが苦痛でない。

■授業改善をどう実現するか？ 3つのレベルがある

- ◆ 各教員の資質向上: より良い授業にしようと思う気持ちと裏づけとなるスキル
- ◆ カリキュラム整備: 各教員の努力が全体としてよく構造化できること
- ◆ 改善支援システム: 教育重視としてのカルチャー醸成と物的・精神的サポート

■大学教員による経験則の共有化: Webサイト紹介

- ◆ 成長するティップス先生 Ver1.1- 名古屋大学版ティーチングティップス - (名古屋大学高等教育研究センター)
 - ・ [授業日誌] [授業の基本] [困ったときに] [情報への窓口] [みんなの広場]
- ◆ 大学授業改善事例データベース (平成13年度 科研費、研究代表者: 赤堀侃司)
- ◆ Planning a Class Session On-line Tutorial (ペンシルバニア州立大学)

■教授設計学[Instructional Design Models]の援用: 経験則を学問的に裏づける システムのアプローチ

システムのvs非システムの(1)

- ◆目的・目標が仕事や現実の職責などの教育以外の外的な参照物とつながりを持っている
- ◆目標・目的が教科書や伝統的教育内容、あるいはインストラクタの知識から決められている

システムのvs非システムの(2)

- ◆教授方略はその効果についての実証的な裏づけに基づいている
- ◆教授方略は伝統、インストラクタの技術、あるいは思弁に基づいている

システムのvs非システムの(3)

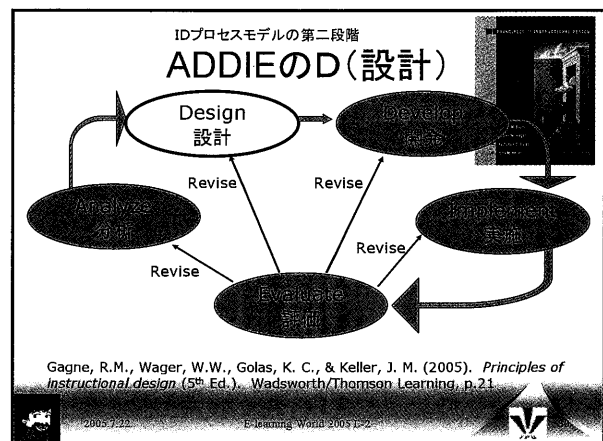
- ◆学習目標と評価基準は、研修開始時に決定・通知されており、何を研修成果として期待されているかを学習者が知っている。テストに驚きは少ない
- ◆学習者は何が研修成果として求められているかを想像しなければならず、テスト問題を見て驚く場合がある

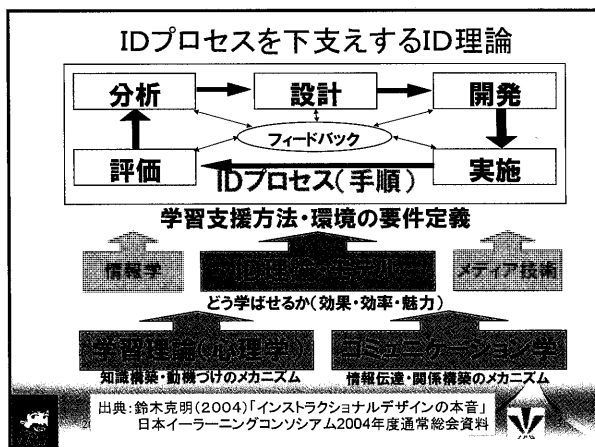
システムのvs非システムの(4)

- ◆高いレベルの研修結果が大多数、もしくは全員の受講者に求められる
- ◆研修成果は受講者によって異なり、正規分布となることが予想されている

システムのvs非システムの(5)

- ◆もし高い学習成果が得られない場合は、研修プログラムが改善される必要があるとみなされる
- ◆もし高い学習成果が得られない場合は、受講者(またはインストラクタ)がより頑張る必要があるとみなされる





代表的なIDモデル(ご紹介)

- ◆ ARCS動機づけモデル(John M. Keller)
 - 心理学研究などに基づいて、学習意欲停滞の原因を4つの要因に分類し、原因に応じた動機づけのための作戦を必要な分だけ織り込んでいくためのモデル。面白そうだな(注意: Attention)、やりがいがありそうだな(関連性: Relevance)、やればできそうだな(自信: Confidence)、やってよかったな(満足感: Satisfaction)の頭文字をとってARCSモデルと命名された。
- ◆ 9教授事象(Robert M. Gagne)
 - 学習支援のための働きかけを、認知心理学(情報処理モデル)をベースに9種類にまとめたモデル。導入—情報提示—学習活動—まとめで何をやるべきか、なぜそれが効果的かを説明。

2005.7.22 E-learning World 2005 D-2



ARCSモデルは 1983年に誕生しました

- 提唱者: John M. Keller
フロリダ州立大学大学院教授
- 4要因モデル: 学習意欲を、
 - 注意 (Attention)
 - 関連性 (Relevance)
 - 自信 (Confidence)
 - 満足感 (Satisfaction)
 の4側面で捉えるモデル



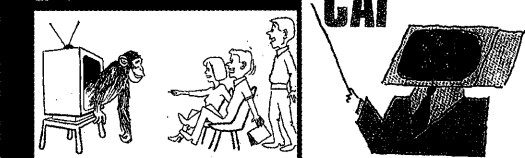
ARCSモデルは実践者向けの Instructional Design Model

- 学習者のプロフィールや学習課題／環境の特質に応じた意欲喚起の方略をシステム的に取捨選択して授業計画や教材に組み入れていこうとするIDモデル
- これまでの膨大な動機づけに関する心理学的研究や実践からの知見を統合
- 「動機づけが問題だ」と言う代わりに、4つの要素に分解して問題を捉えることで解決が図れると主張



注意 (Attention) おもしろそうだ

・ 好奇心が喚起できなかつたり、マンネリ化した授業であれば、やる気に悪影響を与える。



「未来の教室」より



関連性 (Relevance) やりがいがありそうだ

・ 外国語を学ぶ意義を感じられなかつたり、授業に参加すること自体に魅力がなければ、やる気がそがれる。

・ 「何のために英語を学ぶの？」への説得的な回答が必要。

36

自信 (Confidence)
やればできそう

・努力してもマスターできそうもない、自分には無理だと感じるとやる気が高まらない

○ お任せください



37

満足感 (Satisfaction) やってよかった

・「やってよかった」と思える体験をしてきたかどうか。
・せっかくの努力が実を結ばなかったり、嫌な思いをした経験は次へのやる気にマイナス効果をもたらす。



38

ARCSモデルの理論的基

注意 関連性 自信 満足感

欲求の階層構造 (マズロー) 心理学理論等を実践者 統制の位置 (ロッター)

達成動機 (アトキンソン) 向けにまとめた 効力感 (バンデューラ)

強化価値 (ロッター) 期待×価値理論 自己決定感 (ドシャーム)

好奇心喚起 (バーライン) 内発的・外発的動機づけ 獲得された無力感 (セリグマン)

不安感 (ミラー) 原因帰属 (ワイナー)



ARCSモデルの構成要素

動機づけ設計プロセス システム的活用方法

学習意欲を高める作戦のヒント集 動機づけ方略

ARCSの4分類と3つづつの下位分類 設計の枠組み

魅力を高める道具



ARCS4要因の下位分類 (Keller & Suzuki, 1988)

注意	A-1: 知覚的喚起 (Perceptual Arousal) A-2: 探求心の喚起 (Inquiry Arousal) A-3: 変化性 (Variability)
関連性	R-1: 親しみやすさ (Familiarity) R-2: 目的指向性 (Goal Orientation) R-3: 動機との一致 (Motive Matching)
自信	C-1: 学習要求 (Learning Requirement) C-2: 成功の機会 (Success Opportunities) C-3: コントロールの個人化 (Personal Control)
満足感	S-1: 自然な結果 (Natural Consequences) S-2: 肯定的な結果 (Positive Consequences) S-3: 公平さ (Equity)

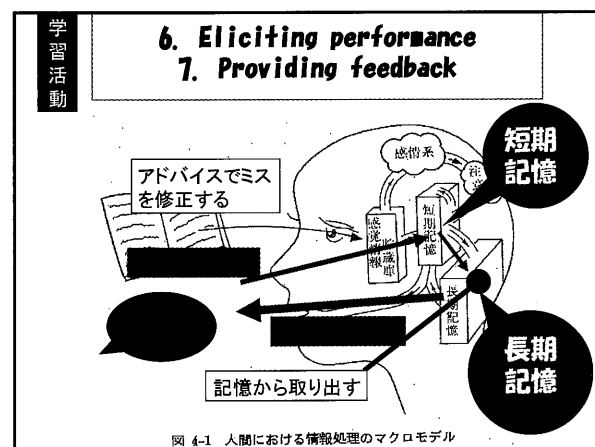
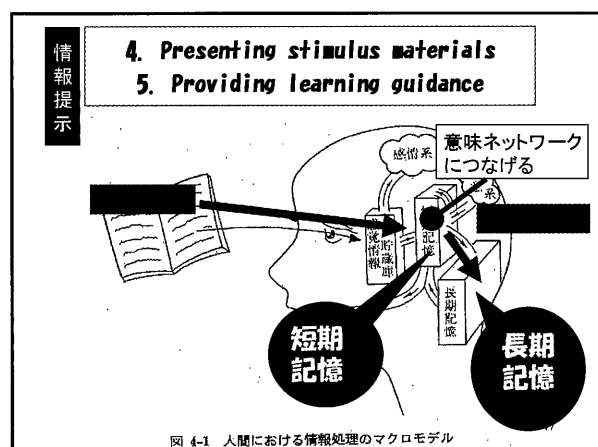
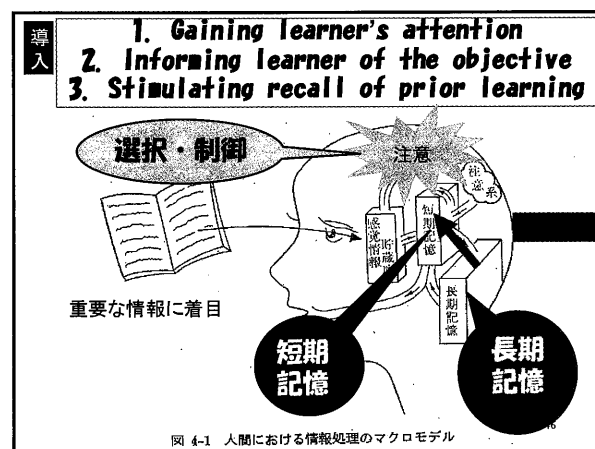
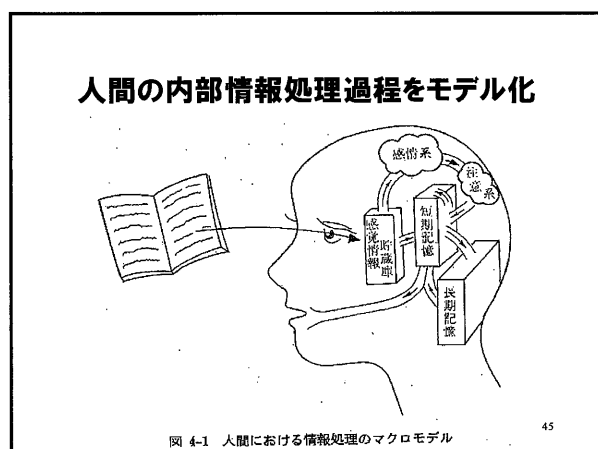
動機づけ方略集がこれまでに提案された領域

- ・ 陸軍における訓練計画立案 (Keller & Dodge, 1982)
- ・ 教員養成プログラムでの応用 (Keller, 1984)
- ・ 社内教育プログラムの立案 (Keller, 1987a)
- ・ 理科の学習教材の改訂案を提出 (Keller & Kopp, 1987)
 - ・ CAI教材の設計・開発 (Keller & Suzuki, 1988)
- ・ マルチメディアの相互作用性分析 (Keller & Keller, 1991)
 - ・ 教授メッセージの設計原理 (Keller & Burkman, 1993)
 - ・ 大学生の学習意欲自己開発 (鈴木, 1993a)
 - ・ 放送番組利用での学習意欲向上 (鈴木, 1993b)
- ・ マルチメディア英語教材の分析 (鈴木・坂谷内・赤堀, 1993)
- ・ マルチメディア教材のネットワーク化 (鈴木, 1994b)



図表9-3 ガニエの9教授事象

ガニエの9教授事象 9つの働きかけ	例：算数「長方形の面積」の場合
1. 学習者の注意を喚起する	たてと横のサイズがもう2冊の漫画本をみせてどちらが大きいかと問いかける。
2. 授業の目標を知らせる	どちらの本も長方形であることに気づかせて、長方形の面積を計算する方法が今日の課題であることを知らせる。
3. 前提条件を思い出させる	長方形の相対する辺が平行で、角が直角であることを確認する。また、前の時間に出てきた正方形の面積の計算を思い出させる。
4. 新しい事項を提示する	長方形の面積の公式（面積＝たて×横）を提示し、この公式をいくつかの例に適用してみせる。
5. 学習の指針を与える	正方形の面積の公式と長方形の場合とを比較させ、どこが違うのかを考えさせる。同じ所、違う所に着目させ公式の適用を促す。
6. 練習の機会をつくる	これまでの例で使わなかった数字を用いて、たてと横の長さの違う長方形の面積をいくつか自分で計算させる。
7. フィードバックを与える	正しい答えを板書し、答えを確認させる。間違えた児童には、あやまりの種類に応じてなぜ違ったのかを指摘する。
8. 学習の成果を評価する	簡単なテストで学習の達成度を調べて、できていない児童には手当てをすると共に次の時間の授業の参考にする。
9. 保持と転移を高める	忘れたと思える頃にもう一度長方形の面積の出し方を確認する。また、平行四辺形や台形の面積の出し方を考えさせる。



8. Assessing performance 9. Enhancing retention & transfer

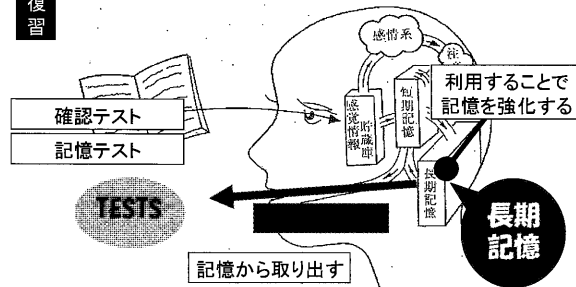


図 4-1 人間における情報処理のマクロモデル

49

質問

- ◆ 教員側の動機づけモデルはあるか？
- ◆ 学生が事象4以外ができなくなった理由は何か？
 - ・ 大学は4だけで良いのではないか、甘やかしすぎ？
- ◆ 大学院教育にどこまで適用可能か？
 - ・ 大学教育、企業内教育への適用はイメージできるが
- ◆ 型にはめるvs相手に任せる のバランスの取り方は？
 - ・ 創造性などの教育は？
- ◆ 15回の設計と心理学の知見の関係は？
 - ・ 一つ一つの授業
 - ・ 一人ひとりの教員
 - ・ →学部全体の教育目標、カリキュラム設計
- ◆ 脳科学の知見は教育に生かせるのではないか？
- ◆ eラーニングでこそ生きる授業とは何か？



2005/7/22

E-learning World 2005/12/2



第1回事前研修(FD)アンケート集計結果(1/3)

アンケート項目		吉武清実	谷口和也	渡部信一	萩原敏郎
1. 教育改善の方法について、関心がある項目にチェックしてください。(複数回答可) 括弧内の数字は回答者数	☐ 15回の講義の組み立て方 (5)		☒		
	☐ 90分の授業の組み立て方 (3)				☒
	☐ シラバスの作成の仕方 (2)				
	☐ オリエンテーションの行い方 (0)				
	☐ e-Learning の導入の仕方 (3)		☒	☒	
	☐ 質問・発言の促し方 (2)				
	☐ クラス・ディスカッションの行い方 (3)				
	☐ 双方向学習の進め方 (1)				
	☐ 学生の動機付けの仕方 (4)		☒		
	☐ 学生の学習成果の確認の方法 (2)		☒		☒
	☐ 試験の作り方 (4)		☒		
	☐ 成績評価の仕方 (5)		☒		
	☐ プロジェクター等の機器の授業内での利用の仕方 (1)				
	☐ オフィス・アワーの利用の仕方 (0)		☒		
	☐ 学生からのフィードバックの仕方 (1)		☒		
	☐ TAの使い方 (3)		☒		
	☐ 研究と教育の関連について (4)		☒		
上記以外のその他の項目 (0)					
2. 本プロジェクトに参加することで、授業など教育活動を進めるうえで、解決したいと考えている課題について記述してください。		学生の動機付けに 対応させた授業設 計を課題としてい ます。	①研究と教育の一致：一定のレベル以上の教育レ ベルを維持しつつ、どのように学生の動機付けを行 うか。 ②評価の方法：目的合理的で、適正な評価方法と は。また国際流動化時代に通じる評価方法とは。 ③学生の育成：授業能力、教育能力をどう育成する のか。 ④研究科全体の教育の体系性(カリキュラム)	単なる知識の伝達(「教え 込み型」教育)ではなく、身 体を通して活用できる知識 の伝達(「しみ込み型」教 育)を行うためにはどうした らよいか、について。	特にな い。
3. 今回の事前研修に対するご感想・ご意見をお願いします。 (改善すべき点を中心に)		授業改善にまつわ る問題を考えたい 上での素材・手が かりを得られた研 究会でした。	特に15回の講義の組み立て方、コース全体のカリ キュラムの整合性がないのが現状の問題。また、 e-learningが単なる「流すだけ」の講義でなくて、ど のような可能性があるのか。それについてきちんと 考えてみたい。	鈴木先生の話が面白かつ た。	大変勉強 になった。
4. 3月に実施される特別海外研修に参加されるご予定ですか ☐ はい ☐ いいえ		はい	はい	未定	

第1回事前研修(FD)アンケート集計結果(2/3)

アンケート項目		村木英治		北村勝郎		岩崎信		岡田ロベルト	
1. 教育改善の方法について、関心がある項目にチェックしてください。(複数回答可)	☐ 15回の講義の組み立て方							☐	
	☐ 90分の授業の組み立て方							☐	
	☐ シラバスの作成の仕方								
	☐ オリエンテーションの行い方								
	☐ e-Learning の導入の仕方								
	☐ 質問・発言の促し方								
	☐ クラス・ディスカッションの行い方							☐	
	☐ 双方向学習の進め方							☐	
	☐ 学生の動機付けの仕方							☐	
	☐ 学生の学習成果の確認の方法							☐	
	☐ 試験の作り方							☐	
	☐ 成績評価の仕方							☐	
	☐ プロジェクター等の機器の授業内での利用の仕方								
	☐ オフィス・アワーの利用の仕方								
	☐ 学生からのフィードバックの仕方								
2. 本プロジェクトに参加することで、授業など教育活動を進めるうえで、解決したいと考えている課題について記述してください。	☐ TAの使い方								
	☐ 研究と教育の関連について								
	上記以外のその他の項目								
3. 今回の事前研修に対するご感想・ご意見をお願いします。(改善すべき点を中心に)									
4. 3月に実施される特別海外研修に参加されるご予定ですか ☐ はい ☐ いいえ									

第1回事前研修(FD)アンケート集計結果(3/3)

アンケート項目		大河雄一	水原克敏	泉山靖人	熊中正之	中島平
1. 教育改善の方法について、関心がある項目にチェックし、教えてください。(複数回答可)	☐ 15回の講義の組み立て方				☐	
	☐ 90分の授業の組み立て方				☐	
	☐ シラバスの作成の仕方			☐		
	☐ オリエンテーションの行い方					
	☐ e-Learning の導入の仕方	☐				
	☐ 質問・発言の促し方					
	☐ クラス・ディスカッションの行い方					☐
	☐ 双方向学習の進め方					
	☐ 学生の動機付けの仕方	☐		☐		
	☐ 学生の学習成果の確認の方法		☐			☐
	☐ 試験の作り方					☐
	☐ 成績評価の仕方					☐
	☐ プロジェクター等の機器の授業内での利用の仕方	☐				
	☐ オフィス・アワーの利用の仕方					
	☐ 学生からのフィードバックの仕方					
	☐ TAの使い方				☐	
	☐ 研究と教育の関連について	☐				☐
	上記以外のその他の項目					
2. 本プロジェクトに参加することで、授業など教育活動を進めるうえで、解決したいと考えている課題について記述してください。		学生にとって必要と思われる知識と、学生が必要と 思っていること、学問にとっ て～、社会にとって～とか なり目標が違ふように感じて おり、何を教えればいいのか、 か、という根本をしっかりと させたいと思っています。	国際的に通用する 青年をいかにして つくるか、世界的視 野で日々の授業を 捉えなおしてみたい。	授業内容と実践との 結びつけの部分はい かに上手に構成する か。	FDとプロジェクト参 加の関係が？	短時間の準備でよ り良い授業をした い。
3. 今回の事前研修に対するご感想・ご意見をお願いします。 (改善すべき点を中心に)		具体例が少なく、イメージが しにくく感じました。	JABEEの指摘の紹 介がためになっ た。	やや総花的な印象を 受けた(私自身はま だ助手のため、実際 に授業を担当する 方々ならば、思い当 たる所が多いのかも しれないが)	鈴木先生の話を もっと聞きたい。教 養・学部・院・分野・ 内容の違い別に具 体的な事例を見た い。	
4. 3月に実施される特別海外研修に参加されるご予定ですか ☐ はい ☐ いいえ					いいえ	

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」
プロジェクト

第 2 回事前研修（F D）

日時：平成 17 年 9 月 13 日（火）13:00～17:00

会場：東北大学 教育・学生支援部大会議室

（東北大学 教育・学生支援部管理棟 3 階）

主催：東北大学高等教育開発推進センター

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト

第2回事前研修（FD）

平成17年度より3年計画で実施する上記プロジェクト（文部科学省特別教育研究経費）は、米国スタンフォード大学からの支援協力を得て、東北大学における教授学習開発機能の充実化を図るとともに、東北地区大学の教員からの参加協力も得ることによって、わが国全体の高等教育の改善に資する目標を掲げている。

本プロジェクトの一つの柱である「ISTU（東北大学インターネットスクール）活用による教育の改善と高度化」事業は、（A）1年間の研修コースを設定して授業科目の電子コンテンツ化を進め、授業の自己点検と内容・方法の改善を目指す取り組みと、（B）国際交流を基盤に、先端的研究分野での研究進展に連動する教育内容の高度化を推進する取り組みの2タイプから構成される事業である。

プロジェクトの遂行に当たり、東北大学ならびに東北地区の国公立大学から参加いただいた教員を対象に下記の通り事前研修（FD）を開催することとする。

日 時：平成17年9月13日（火）13:00～17:00

会 場：東北大学 教育・学生支援部大会議室

（東北大学川内北キャンパス 教育・学生支援部管理棟3階）

参加者：プロジェクト参加の東北大学・東北地区国公立大学の教員

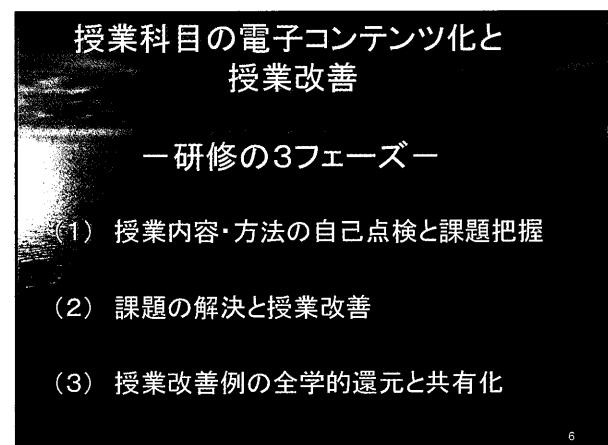
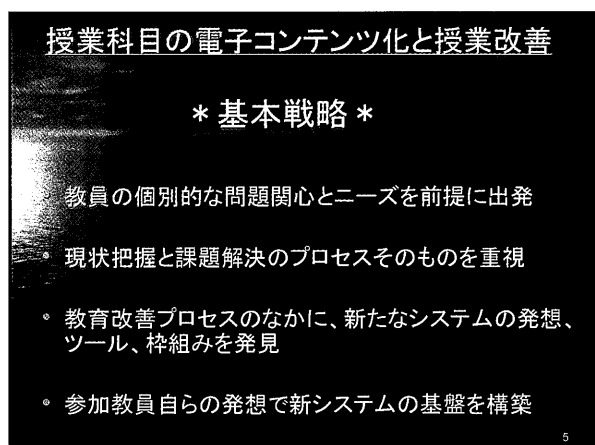
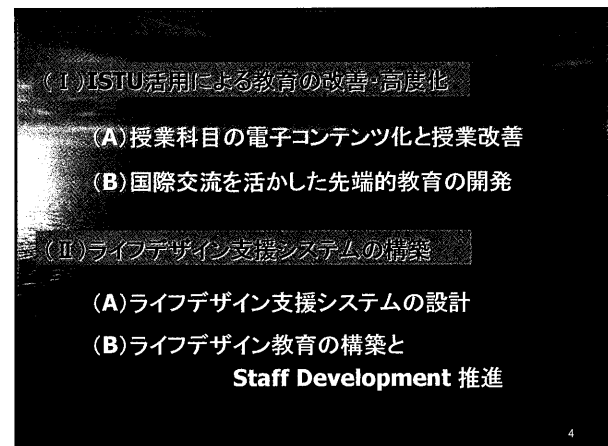
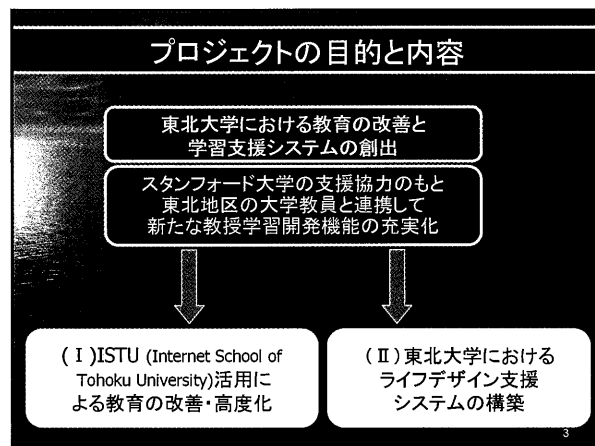
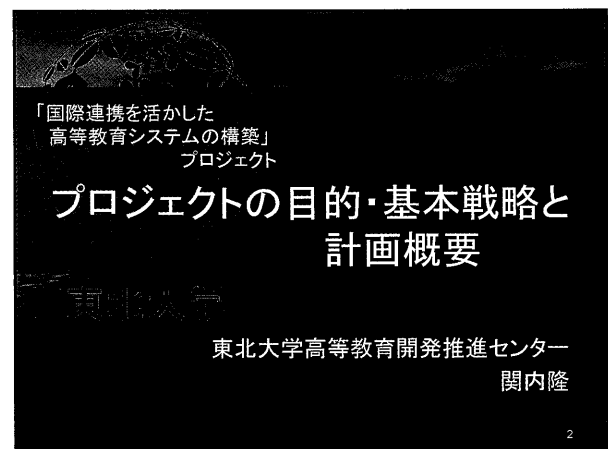
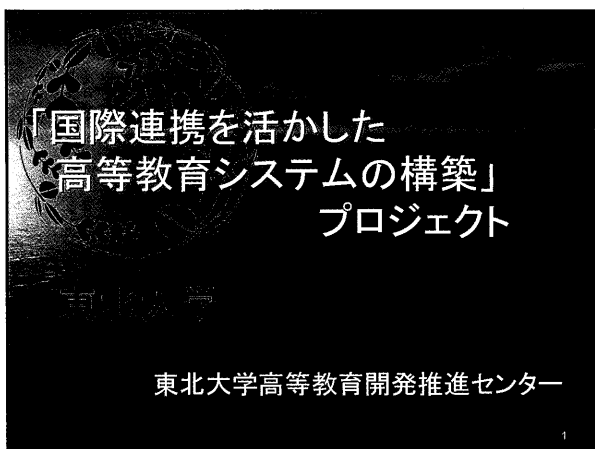
主 催：東北大学高等教育開発推進センター

〔研修目標〕

- ・ 本プロジェクトの趣旨を踏まえ、1年間の研修コースや国際交流の目的と手順・方法を理解する。
- ・ 参加メンバーの問題意識について意見交換を行い、それを通してプロジェクトが目指す教育改善の方向性や手段などについて共通認識を獲得する。

研修スケジュール

- 13:00 開会挨拶 坂本尚夫 東北大学副学長・
高等教育開発推進センター長
- 13:10 プロジェクトの趣旨と具体的な計画内容
- (1) プロジェクトの目的・基本戦略と計画概要
関内 隆 東北大学高等教育開発推進センター教授
 - (2) I S T Uシステムを活用した授業内容の自己点検
中島 平 東北大学大学院教育情報学研究部助教授
 - (3) スタンフォード大学の支援協力に基づくFDプログラム
渡利夏子 東北大学高等教育開発推進センター助手
- 14:00 意見交換 大学における教育実践の課題と展望
—参加メンバーの問題意識と参加の抱負をめぐって—
司会 水原克敏 東北大学大学院教育学研究科教授
- (TEA BREAK : 14:40 ～ 15:10)
- 16:20 プロジェクトの計画内容に関する質疑・応答
- 17:00 閉会挨拶 (菅井邦明 東北大学理事)



1年間の研修目標とプロセス

- (1) ISTU活用による自己点検と課題把握:
 - ・授業の撮影と電子コンテンツ化
 - ・相互参観による授業研修
- (2) 課題の解決と授業改善:
 - ・オンラインのネットワーク研修
 - * メールによるインタラクティブな改善志向
 - * ウェブサイトを通した有益な情報の提供
 - ・多様な課題の解決を目指すテーマ別研修
 - ・先駆的事例に学ぶ特別海外研修
- (3) 教育改善成果の全学的還元と共有化:
 - ・事後報告会における改善成果の発表
 - ・シンポジウムでの成果発信と大学間共有化

7

	平成17年度グループ	平成18年度グループ
平成17年度	平成17年9月13日 事前研修	
	平成17年度後期 授業撮影①	
	平成18年3月 海外研修	
平成18年度	平成18年度前期 授業撮影②	
	平成18年9月 事後報告	平成18年9月 事前研修
		平成18年度前期 授業撮影①
		平成19年3月 海外研修
平成19年度		平成19年度前期 授業撮影②
		平成19年9月 事後報告

8

国際交流を活かした先端的教育の開発

先端的研究分野における教員の国際交流を基盤とする

- ・ 研究の進展に連動する教育内容の更新・高度化を図る
- ・ 外国研究者を招聘して、ミニシンポジウム等で成果を公表する

9

新たな高等教育システムに向けて

参加教員の授業改善プロセスとその成果のなかに、新たなシステム構築の萌芽を見出す

(例えば)

授業撮影と自己点検システム

ネットワークを利用した恒常的なFDプログラム

E-Learningによる双方向学習システム

10

新たな高等教育システムの理想像

教員の内発的な教育改善の意欲を喚起する魅力あるシステム

- ・ 教員による自律的な教育改善を支える恒常的なシステム
- ・ 教員のための多様で個別的な教育改善を推進する双方向のネットワークシステム

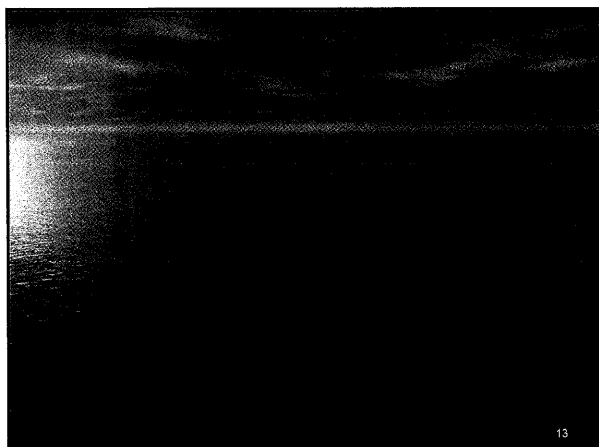
11

本プロジェクトから新システム構築へ

- ・ 教員の個別的で多様なニーズの把握と課題解決
- ・ 授業改善のプロセスとその成果を全学的に還元、共有化してプロジェクトの成果を確認
- ・ 教育改善の実践的成果を踏まえて新たなシステムの骨格を形成

* 参加教員自らの実践例から
新たな高等教育システムの構築へ *

12



13

「国際連携を活かした
高等教育システムの構築」プロジェクト

東北大学

スタンフォード大学の 支援協力に基づくFDプログラム

東北大学高等教育開発推進センター
渡利夏子

CA
HE Center for the Advancement of Higher Education
TOHOKU UNIVERSITY

14

1年間の研修目標とプロセス

- (1) ISTU活用による自己点検と課題把握
- (2) 課題の解決と授業改善:
 - ・オンラインのネットワーク研修
 - * ウェブサイトを通した有益な情報の提供
 - * メールによるインタラクティブな改善志向
 - ・多様な課題の解決を目指すテーマ別研修
 - ・先駆的事例に学ぶ特別海外研修
- (3) 教育改善成果の全学的還元と共有化:

15

オンラインのネットワーク研修<e-mail>

スタンフォード駐在員

メーリングリストによる配信

①意見、②質問、③要望

フィードバック

日本国参加教員

<授業改善に役立つ情報>

- ・コースの組み立て方
- ・e-learningの行い方
- ・クラス内討論の行い方
- ・成績評価の仕方
- ・TAの使い方

16

オンラインのネットワーク研修<ウェブサイト>

プロジェクト駐在員
<授業改善に役立つ情報>

- ・コースの組み立て方
- ・e-learningの行い方
- ・クラス内討論の行い方
- ・成績評価の仕方
- ・TAの使い方

参加教員による
教育実践報告

相互授業参観と
意見交換

17

多様な課題の解決を目指すテーマ別研修

プロジェクトが
有益だと考えるテーマ

参加教員からの
提案

↓

東北大学において、テーマ別研修を実施
(2ヶ月に1回程度)

10月下旬: 大学における教育目標・学生ニーズ・カリキュラムの設計

12月上旬: 学生主導型の教育(事例紹介)

18

特別海外研修 於スタンフォード大学

17年度の3月に1週間の海外研修を行う
1回 8人程度の参加 (×2)

CTL (Center for Teaching and Learning) の教育改善プログラム実施

- ・スタンフォード大学の教育視察
- ・スタンフォード大学教員との交流
- ・参加教員間での意見・情報交換

スタンフォード大学概要

- 1891年創立の私立大学
- most selective (admit rate: 13%)
- 過去16名のノーベル賞受賞者を輩出
- 学士課程教育の充実度で、世界第8位・アメリカ国内では、Best National Universitiesの第5位

スタンフォード大学は教育と研究ともに頂点を目指す。(John L. Hennessy, President)

Center for Teaching and Learning (CTL)

SWEET HALL (CTLは4階)
http://campus-map.stanford.edu/campus_map/results.jsp?blog=Sweet+Hall
 より引用

CTLの目的とサービス内容

- 目的
 - 「教員のteaching(教授)能力」
 - 「学生の learning(学ぶ)能力」
 } 向上を促進
- サービス内容
 - 優秀なティーチングを可能にするためのトレーニングと資源の提供

CTLが提供する教員へのサービス

- 教員のためのワークショップ(後述)
- 授業の撮影
- ティーチングコンサルテーション
(授業観察、ビデオレビュー、個別相談)
- 学生による中間評価のアレンジ
- 授業内で用いるテクノロジーに関する援助
- 授業／教育改善関連の本の貸し出し
- 学会やセミナーでのスピーチへのアドバイス

ワークショップの例

- 授業ウェブサイトの有効な使い方(2005年)
- 受講生が多い授業の行い方(2005年)
- ブログ、ウィキの授業内での活用法(2005年)
- パワーポイントスライドの作り方(2003年)

東北大学教員のための、
特別ワークショップを開催予定

スタンフォード大学の教育視察

スタンフォード大学のスクール／センター例

- Graduate School of Business
- School of Education
- School of Humanities and Sciences
- School of Law
- School of Medicine
- ACOMP (Academic Computing)
- SCIL (Stanford Center for Innovation in Learning)
- Stanford Language Center

25

1年間の研修目標と文庫モズ

- (1) ISTU活用による自己点検と課題把握:
- (2) 課題の解決と授業改善:
- (3) 教育改善成果の全学的還元と共有化:
 - ・事後報告会における改善成果の発表
 - ・シンポジウムでの成果発信と大学間共有化

26

事後報告会における改善成果の発表

- 平成18年9月実施
- 参加者: 当年度の参加者と来年度の研修参加者
- 報告書を作成

27

シンポジウムでの成果発信と 大学間共有化

平成19年度の秋に国際シンポジウムを開催予定

- ・日米の大学教育研究者による講演
- ・研修参加教員による、教育改善の取り組みの報告
- ・スタンフォード大学での調査研究の成果発表

28

まとめ

■ ネットワーク研修 ■ テーマ別研修 ■ 特別海外研修 ■ 事後報告 ■ シンポジウム	}	■ 参加教員の教育改善 ■ 参加教員間のネットワーク ■ 教育改善に有益な情報を全学的・全国的に発信

参加教員の研修で、相互に学びあう。研修
改善予定。研修で学びあう参加者が多い。

29

30

ISTUシステムを活用した 授業内容の自己点検

2005/9/13
教育情報学研究部
中島 平

31

今日の内容

- 授業の撮影と自己点検
- ISTUシステムの紹介
- 実際の利用法のデモンストレーション
- さらなる高みを目指して
 - 他の先生に映像を公開する
 - 遠隔授業(eラーニング)に使ってみる

13枚のスライド、3分程度のISTUシステムのデモ

32

撮影と自己チェック:なぜやるか

授業能力向上のために最も重要なこと
学生に対して効果のあるものとならないものを知る

(バーバラ・グロス・デイビス著, 授業の道具箱, 東海大学出版会, 2002)

- 授業向上のための評価
 - 学生による評価
 - 同僚による評価
 - 自己評価

授業の撮影と自己点検

33

撮影と自己チェック:手順(県内)

授業の撮影から自己点検まで
(県内の先生・東北大で撮影可能な先生)
1セメスターに2回以上授業を撮影(年間4回以上)

- 撮影事前準備
 - 授業撮影計画書の提出(記入時間十分程度)
 - 業者との事前打ち合わせ(三十分程度)
- 授業の撮影
- 授業映像の編集・修正依頼(必要ならば)
- ISTUシステムへの登録
- IDとパスワードの受け取り
- ISTUシステムを利用して授業内容を自己点検
- 授業点検報告フォームの提出(1セメスターで1回)

34

撮影と自己チェック:手順(県外)

授業の撮影から自己点検まで
(県外の先生)

1セメスターに2回以上授業を撮影(年間4回以上)

- 撮影事前準備
 - 授業撮影計画書の提出(記入時間十分程度)
- 授業の撮影
- 撮影テープの送付 → ISTU支援室へ
- 授業映像の編集・修正依頼(必要ならば)
- ISTUシステムへの登録
- IDとパスワードの受け取り
- ISTUシステムを利用して授業内容を自己点検
- 授業点検報告フォームの提出(1セメスターで1回)

35

撮影と自己チェック:ISTUシステム紹介

ISTUシステムとは?

- eラーニング*管理システム
 - 認証、資料配布、レポート授受、成績集計支援
 - eラーニングに必要な機能を利用者にわかりやすく
- Webブラウザ(インターネットエクスプローラなど)のみで利用可能
- 初心者用の利用手引きが充実
- リンク
 - ISTUシステム:
<https://lms.istu.jp/coursenavig/>
 - ISTU利用のヒント:
<http://voyager.ei.tohoku.ac.jp/istu/>

*eラーニング:コンピュータネットワークを利用した(遠隔)教育

36

ISTUシステムのデモンストレーション

- 撮影した授業映像を見る
- 学生ユーザとして使用
- 手順
 - 接続: <https://lms.istu.jp/coursenavig/>
 - 認証(ログイン): ユーザ名, パスワード入力
 - 担当授業の選択
 - 授業の受講(授業映像視聴)
 - 終了(ログアウト)
- 詳しくはチュートリアル学生編を参照*

*前頁「ISTU利用のヒントからダウンロード可能」

37

ここまでのまとめ

- 授業の撮影と自己チェック
- ISTUシステムの紹介
- システムを使った授業映像の閲覧デモ

38

他メンバーへの公開

- 授業向上のために
 - 学生による評価
 - 同僚による評価
 - 自己評価
- 撮影計画書:“授業を他のメンバーに公開”に○

39

eラーニングに使ってみる

ISTUシステムの活用例

- 遠隔地の社会人受講生への授業配信
- 出張中も授業が可能(課題提示→レポート受付)
- 電子化した授業資料の配布・蓄積
- レポート採点・成績集計の手間を削減

著作権処理が必要

40

著作権処理

- 引用...例:文章の一部や挿絵を示し、それを解説
 - 主従関係に注意:自著作物→「主」、引用→「従」
 - 引用部分の明確な区分:かぎ括弧や段組み利用
 - 出所(出典)の明示:出所を明確に特定できるように
 - 正しい引用か自信がない→プロジェクトによるサポートあり
- 引用外の使用...例:他者の映像・音楽作品を鑑賞→感想を書かせる
 - 許諾
 - 著作権者と交渉し、許可を得る。
 - 削除・置き換え
 - 該当部分を削除または、自分の著作物で置き換え

41

ISTUシステムの教員ユーザでの利用

- 学生ユーザ権限に加えて
 - 授業目標・内容などの記入
 - 教材登録・受講生への公開・削除
 - レポート登録・授受・採点
 - 学習状況の確認
 - 成績評価
- 詳しくはチュートリアル教員編を参照*
- プロジェクトメンバーに個別相談(岩崎・三石)

*「ISTU利用のヒント」<http://voyager.ei.tohoku.ac.jp/istu/> からダウンロード可能

42

おわりに

- 授業の撮影と自己点検
 - なぜやるのか
 - 授業の撮影準備から自己点検までの手順
 - 学生ユーザIDでのISTUシステムの使用
- 授業映像のメンバーへの公開
- eラーニングの体験
 - 教員ユーザIDでのISTUシステムの使用
 - 著作権

43

ISTUシステム機能概要

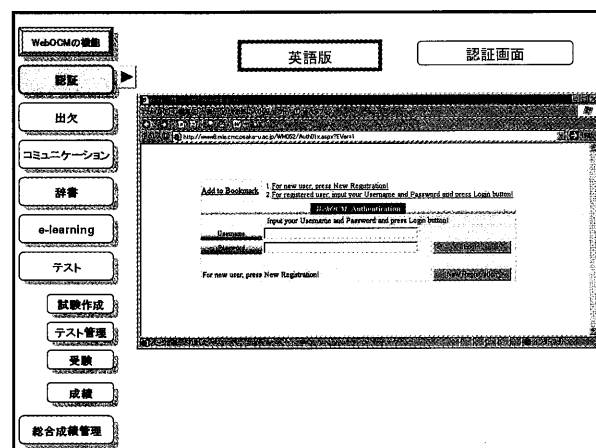
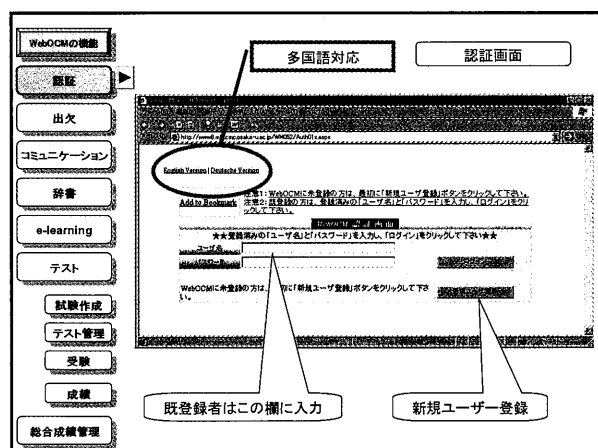
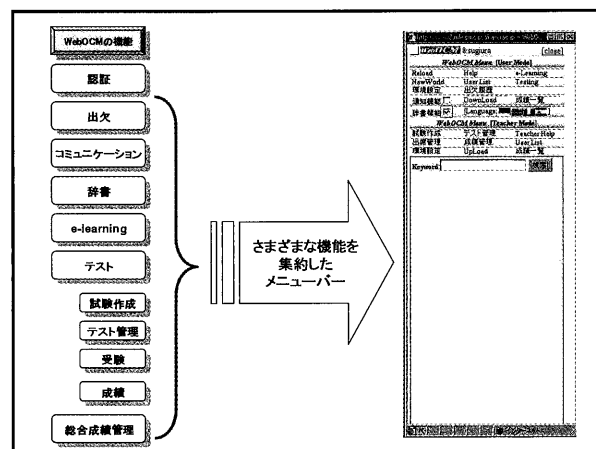
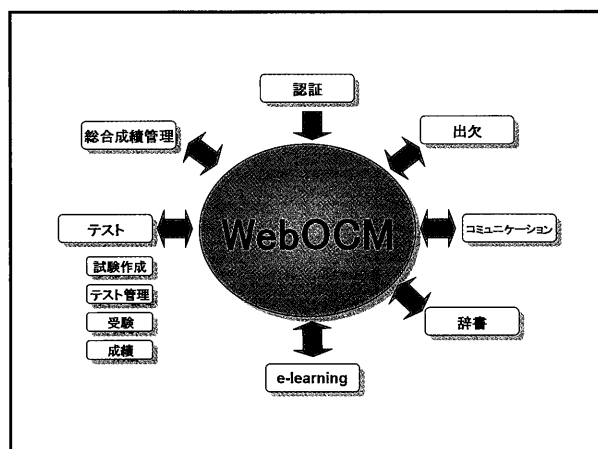
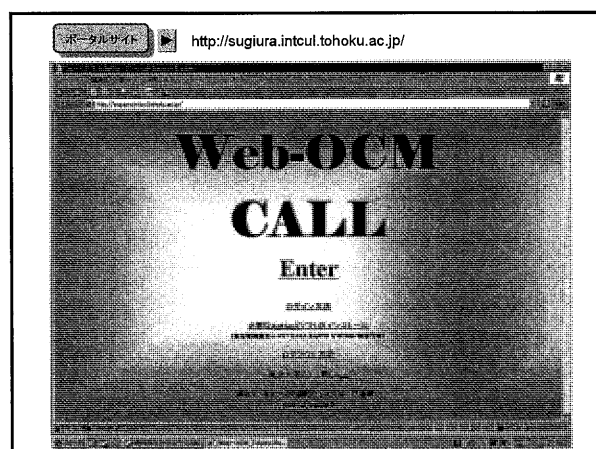
- 受講者・教員の登録・認証
- 授業科目の登録
- 学習資料登録・配布
- レポート登録・提出状況表示・採点支援
- テスト作成・実施・(自動)採点
- 出席・学習状況・成績管理
- お知らせ登録・掲示板

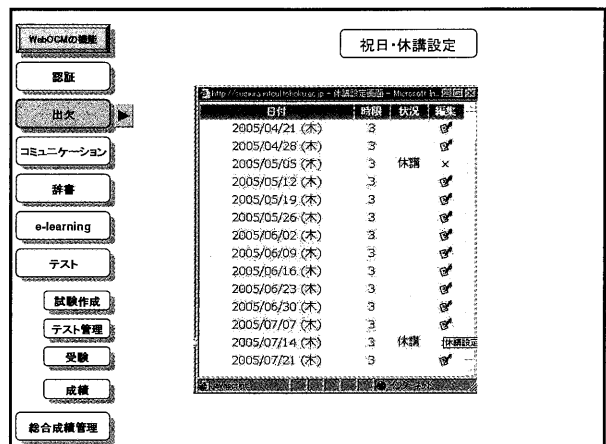
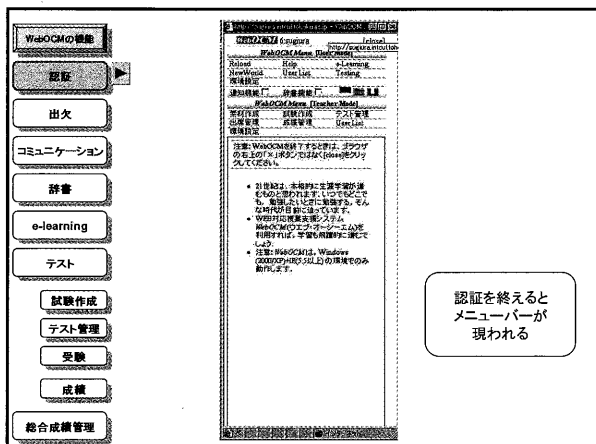
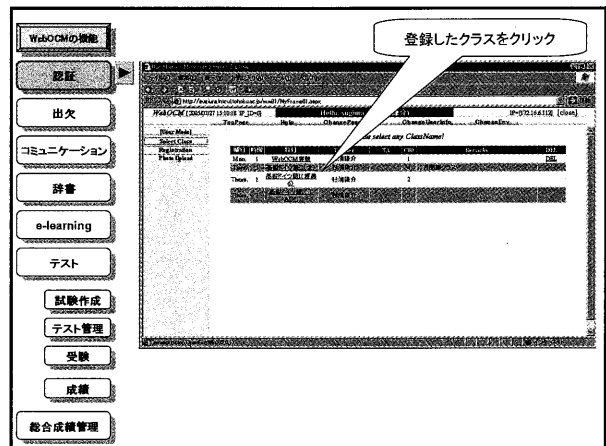
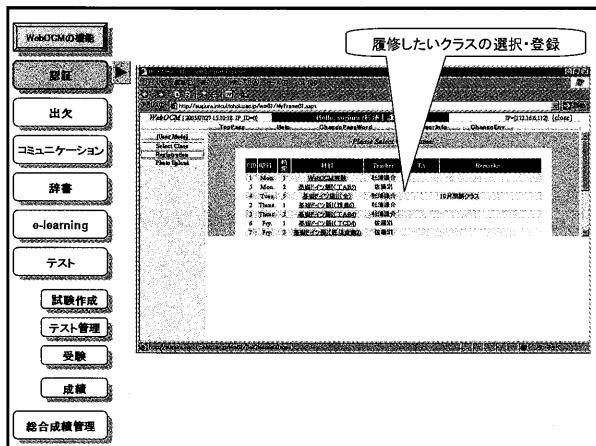
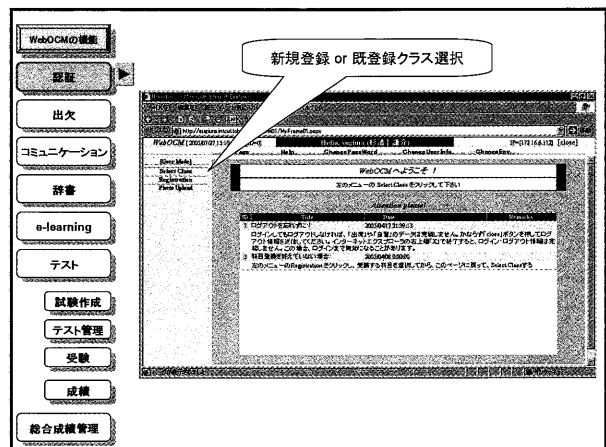
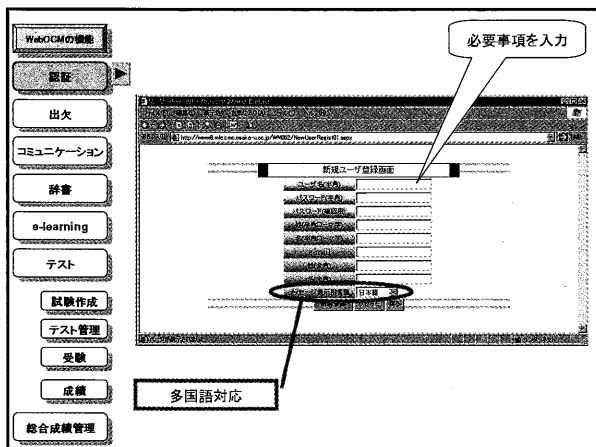
44

Web対応授業支援システム WebOCM 実演説明資料

(2005.9.13)

東北大学国際文化研究科
杉浦謙介
sugiura@intcul.tohoku.ac.jp
Tel: 795-7665





WebOCMの機能

認証

出欠

コミュニケーション

辞書

e-learning

テスト

試験作成

テスト管理

受験

成績

総合成績管理

受講スケジュールと各講義日の出席状況

The screenshot displays the 'WebOCM Pre-Attendance Manager' interface. It features a table with columns for 'Course' (科目), 'Lecture' (講義), 'Date' (日), 'Time' (時間), 'Status' (出席状況), and 'Score' (得点). The table lists multiple courses and their corresponding lecture times, with attendance counts and scores recorded for each.

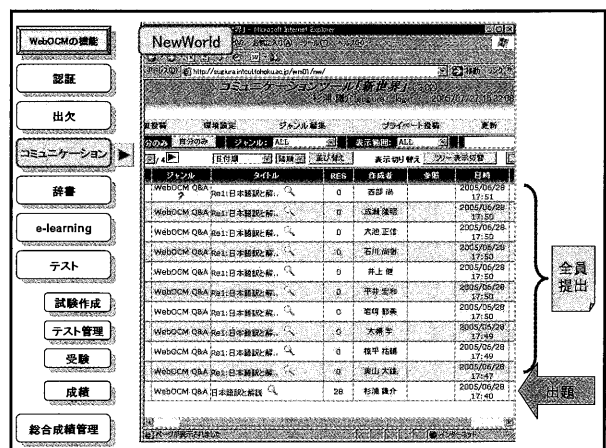
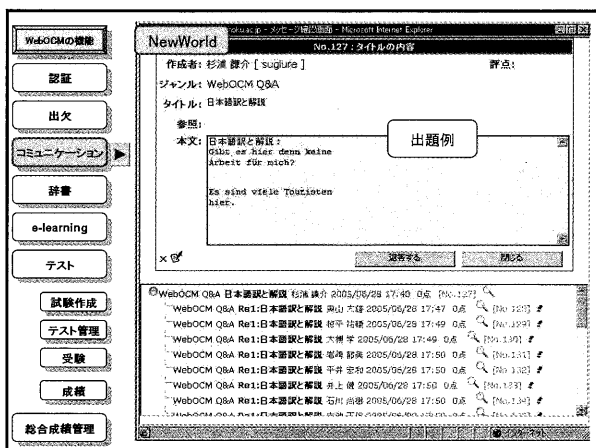
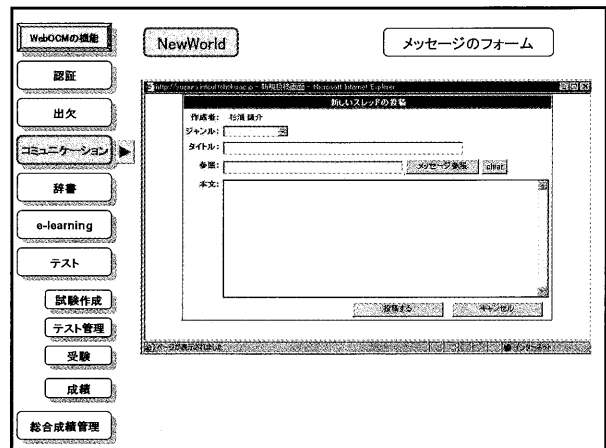
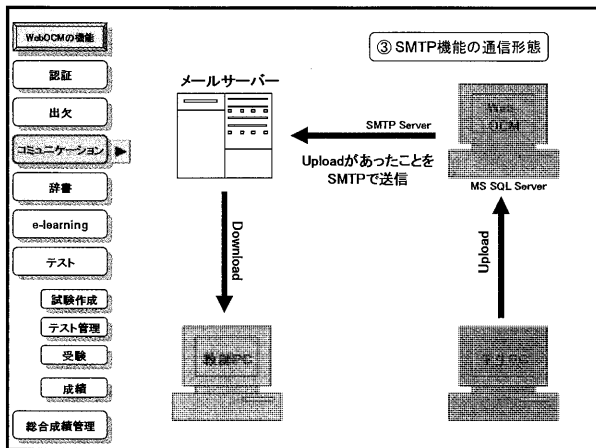
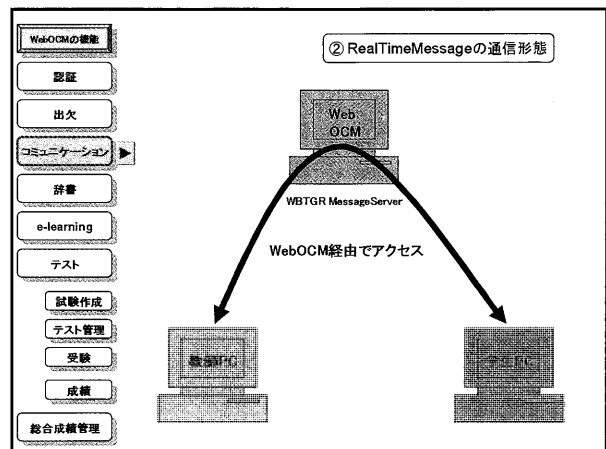
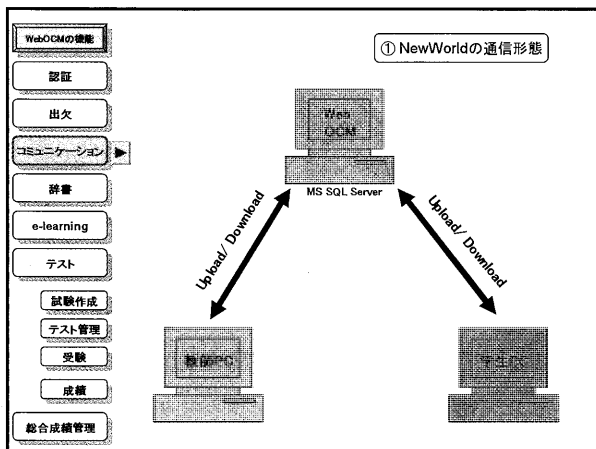
Course	Lecture	Date	Time	Status	Score
2005/05/07(木)	第1講	13:00~14:30	講	23/25	2
2005/05/07(木)	第2講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第3講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第4講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第5講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第6講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第7講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第8講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第9講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第10講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第11講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第12講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第13講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第14講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第15講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第16講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第17講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第18講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第19講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第20講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第21講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第22講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第23講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第24講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第25講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第26講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第27講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第28講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第29講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第30講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第31講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第32講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第33講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第34講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第35講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第36講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第37講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第38講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第39講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第40講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第41講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第42講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第43講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第44講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第45講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第46講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第47講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第48講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第49講	13:00~14:30	休	0/0	0
2005/05/07(木)	第50講	13:00~14:30			

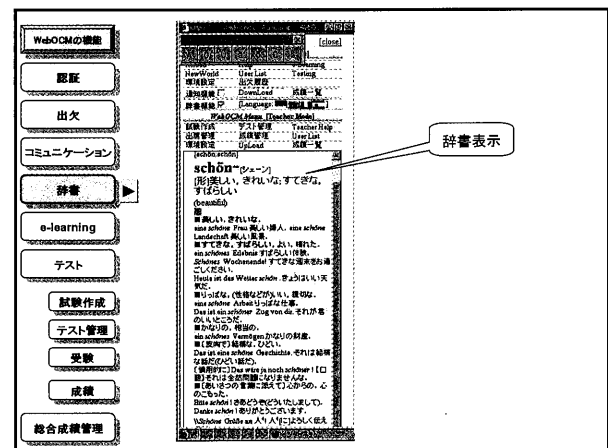
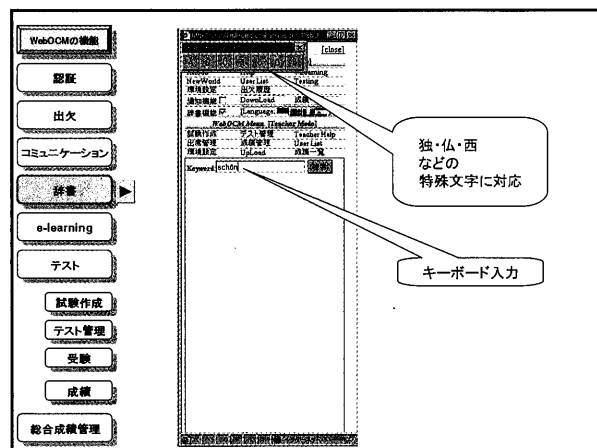
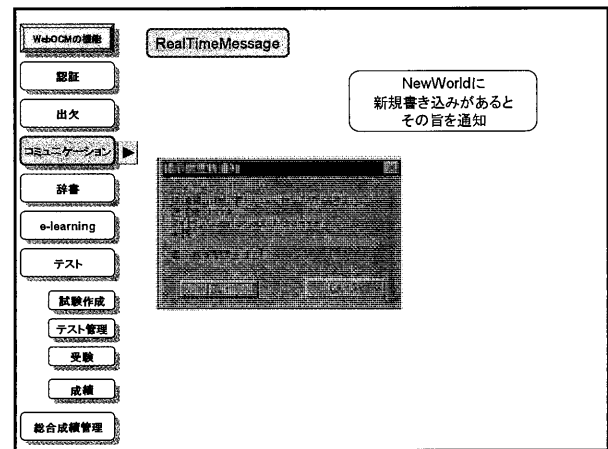
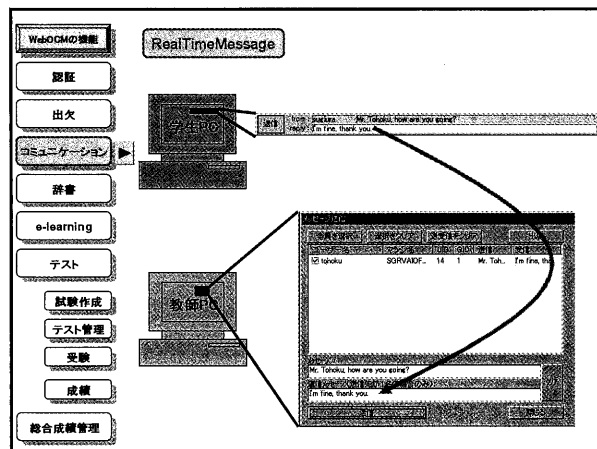
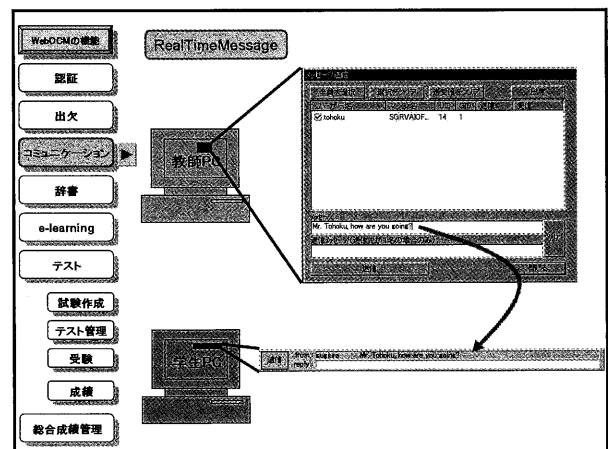
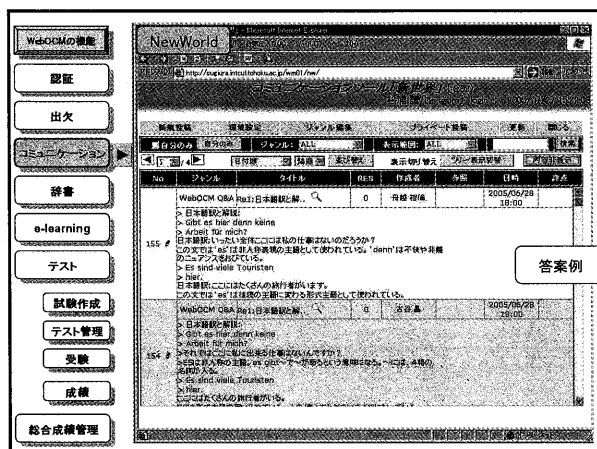
[illegible][illegible][illegible]

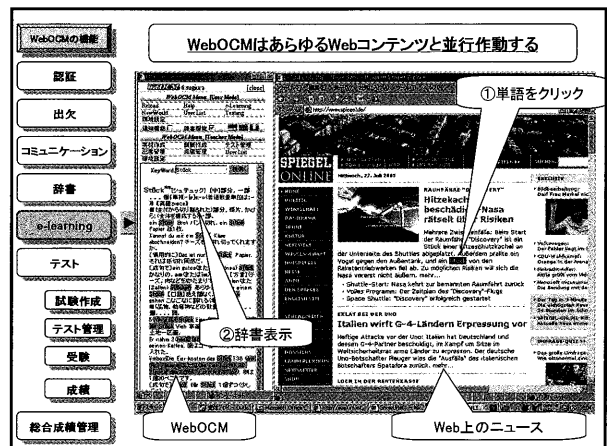
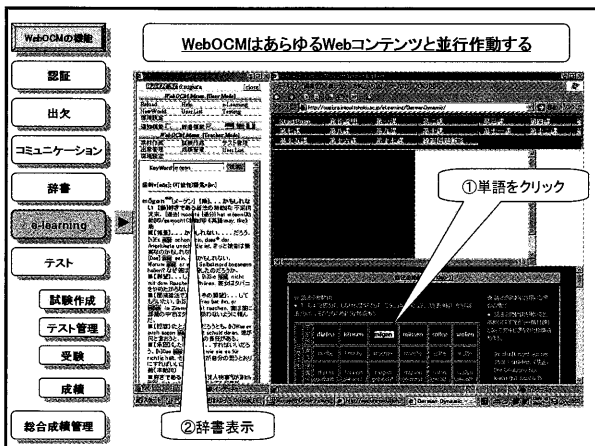
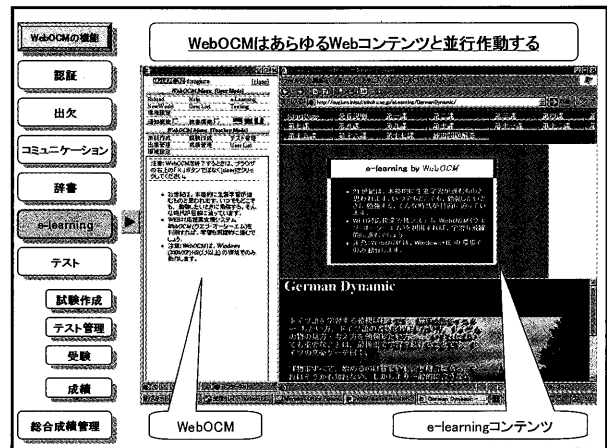
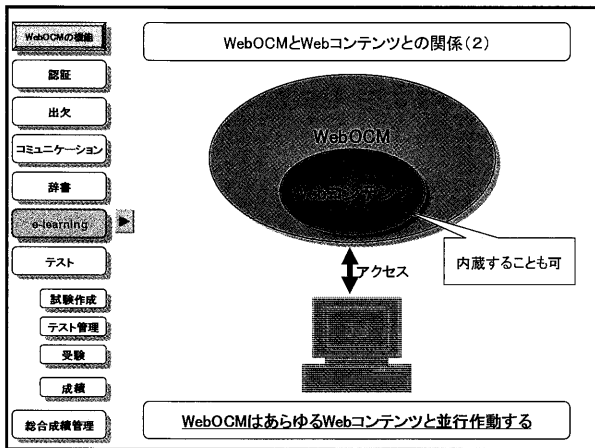
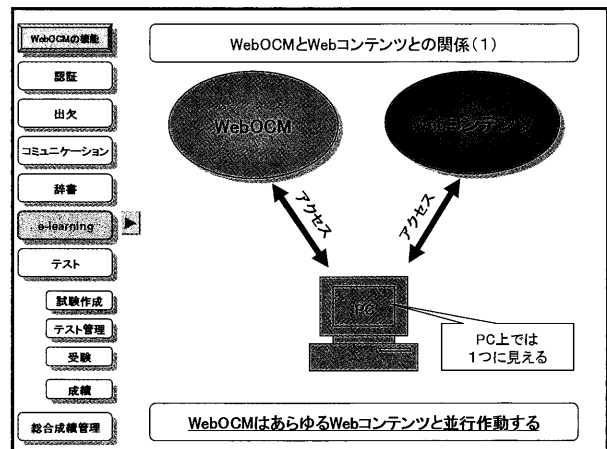
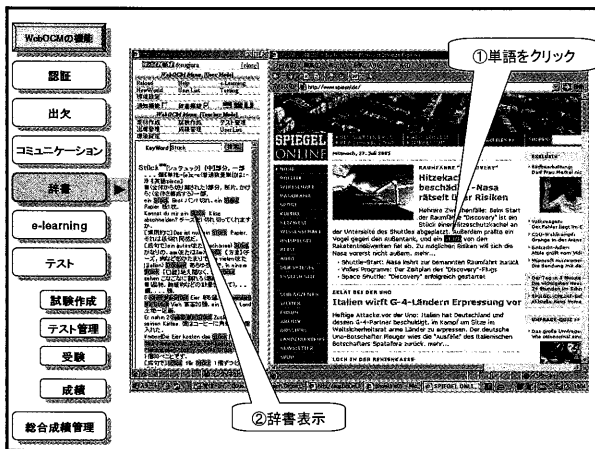
```

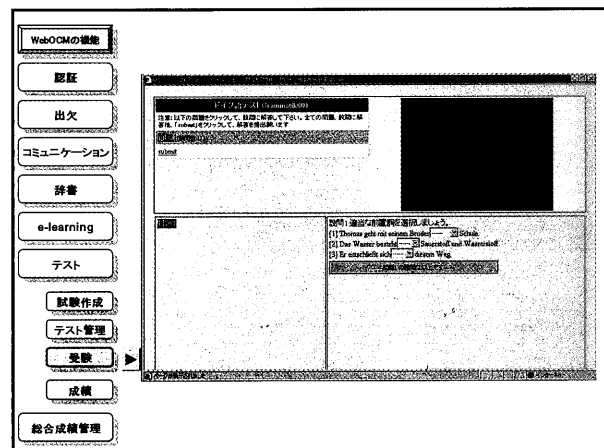
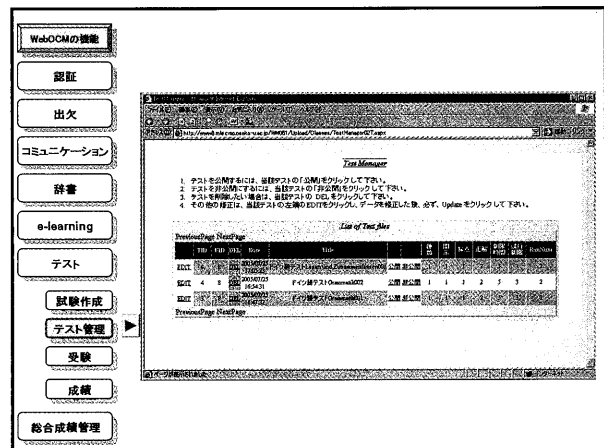
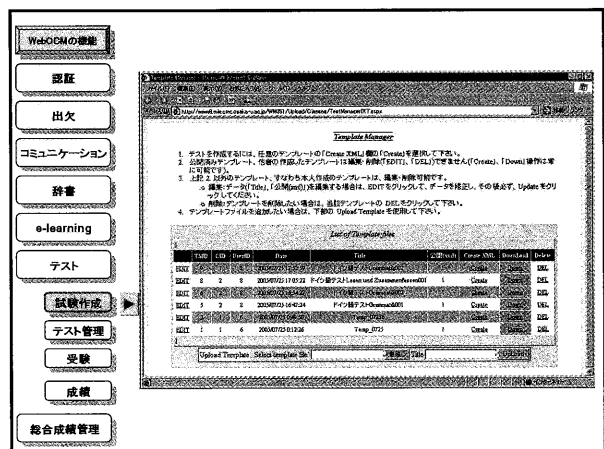
graph LR
    subgraph Sidebar [Web OCM 機能一覧]
        direction TB
        B1[WebOCMの機能]
        B2[認証]
        B3[出欠]
        B4[コミュニケーション]
        B5[辞書]
        B6[e-learning]
        B7[テスト]
        B8[試験作成]
        B9[テスト管理]
        B10[受験]
        B11[成績]
        B12[総合成績管理]
    end

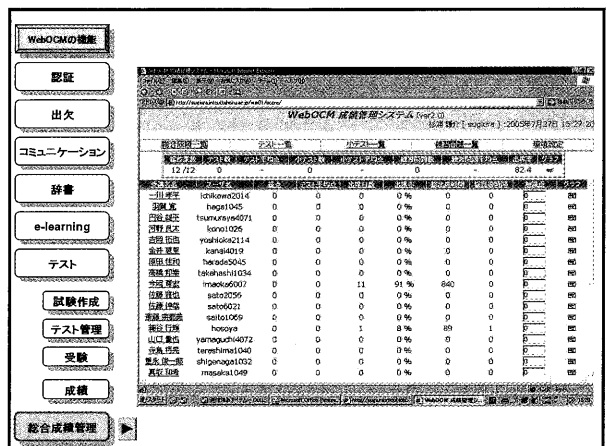
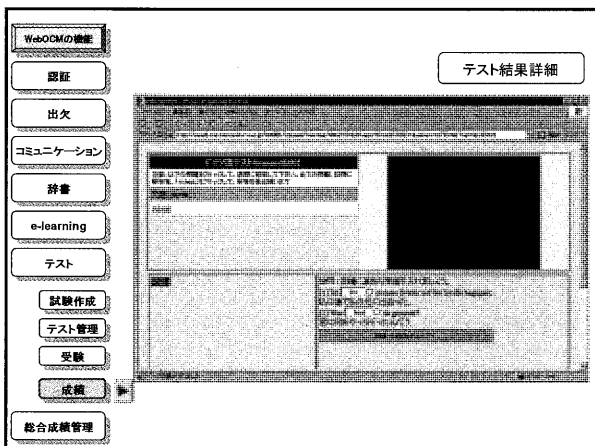
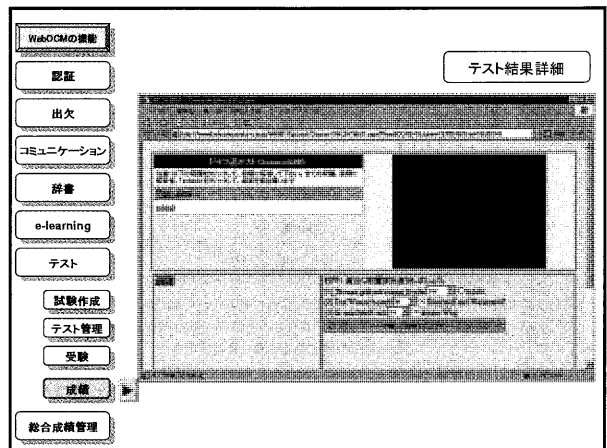
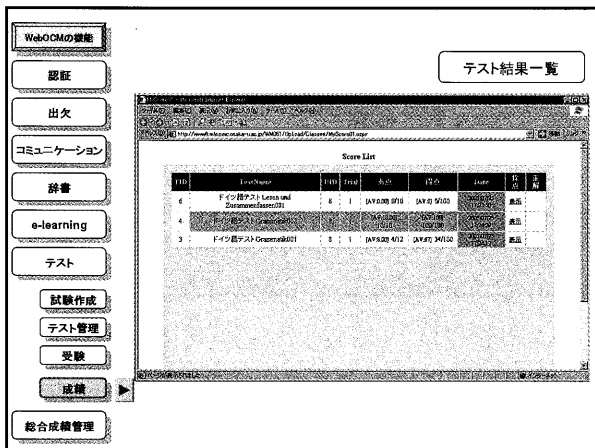
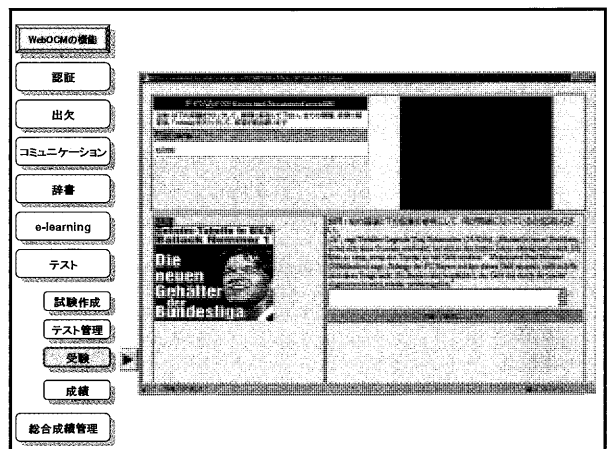
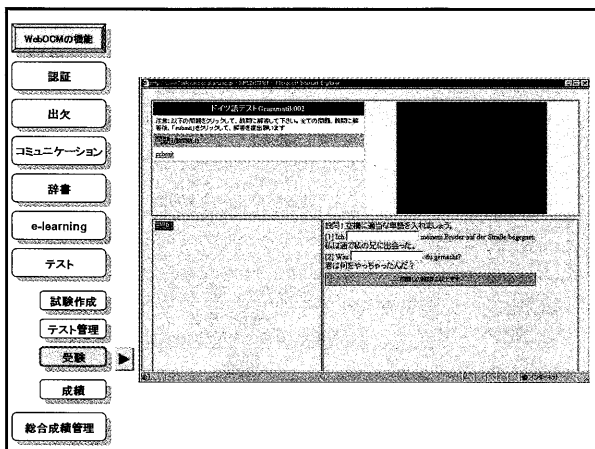
    B4 --> C[3つの通信形態]
    C -.-> D1[① NewWorldの通信形態]
    C -.-> D2[② RealTimeMessageの通信形態]
    C -.-> D3[③ SMTP機能の通信形態]
  
```

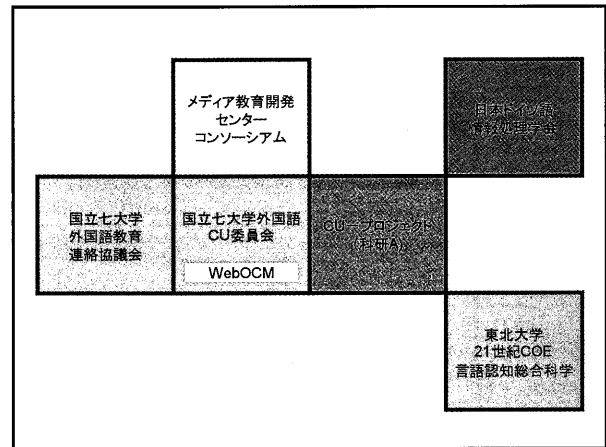
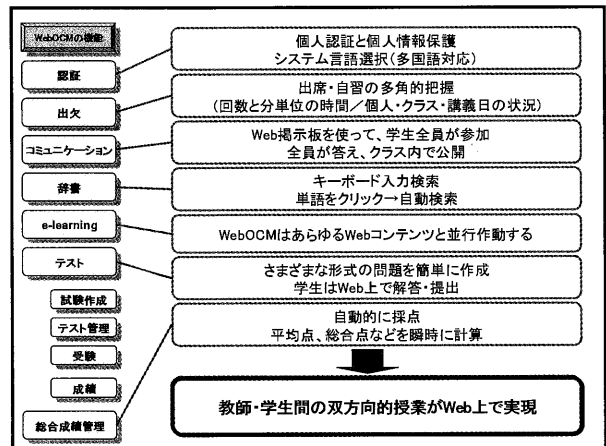
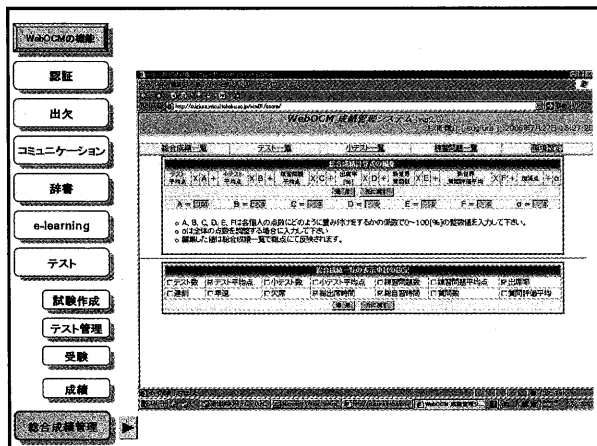












感染対策の基本

～標準予防策とマスクについて～

平成27年11月19日

東北大学大学院 感染制御・検査診断学分野

東北大学病院 感染管理室

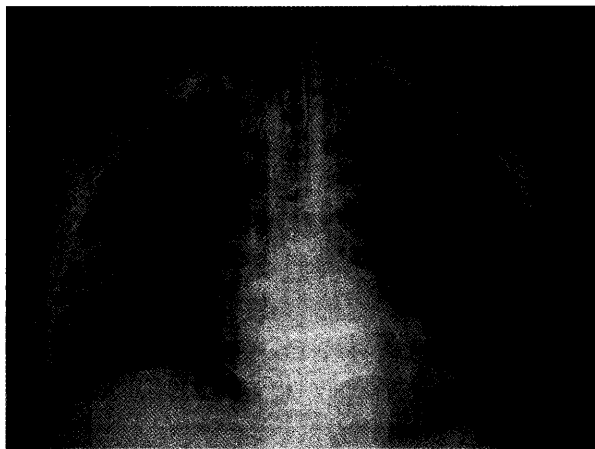
國島 広之

医療関連感染

HAI: Healthcare Associated Infection

病院などの医療施設において入院患者および外来患者が、原疾患とは異なり新たに罹患した感染症。

医療従事者が職業上、患者との接触や針刺し切創、血液体液曝露によって罹患した感染症。

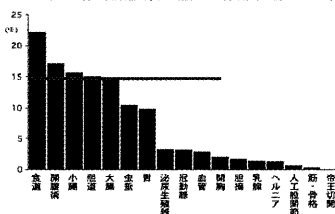


SSI(手術部位感染症)

Surgical Site Infection

JNIS; SSI (手術部位感染症); 6.4%

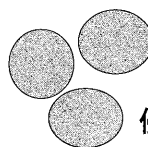
JNIS(Japanese Nosocomial Infection Surveillance)によるSSIサーベイランス結果
(2002年度6月集計結果: 参加33施設16,226例では1,028例のSSI, 6.4%)



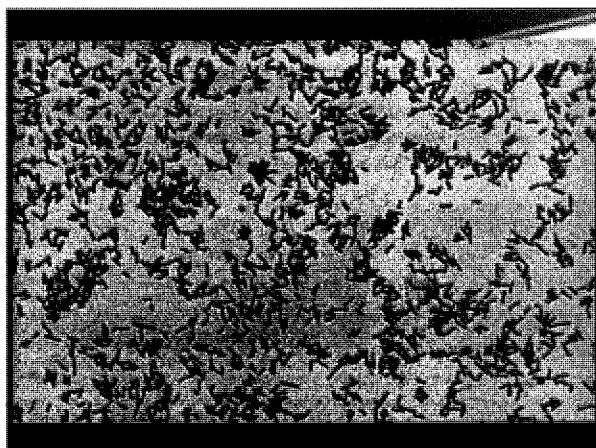
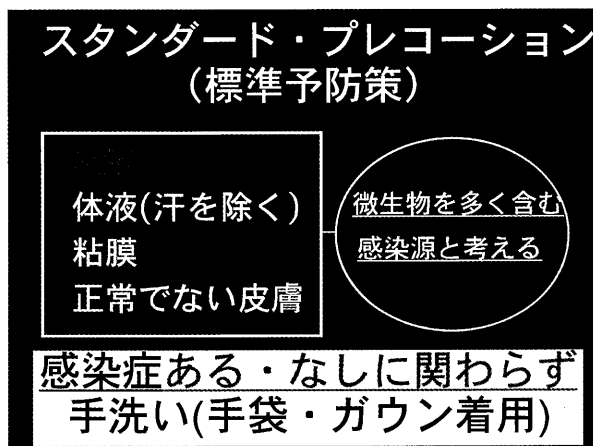
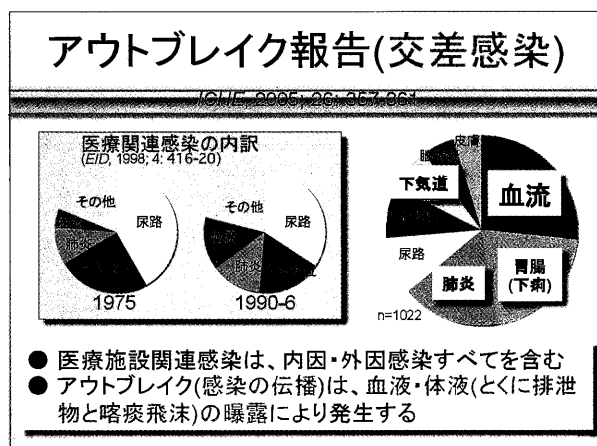
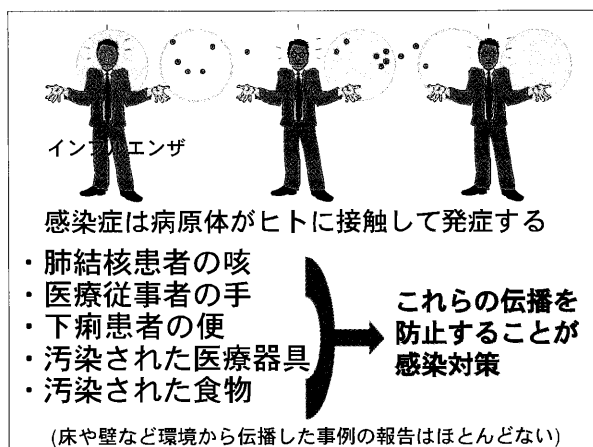
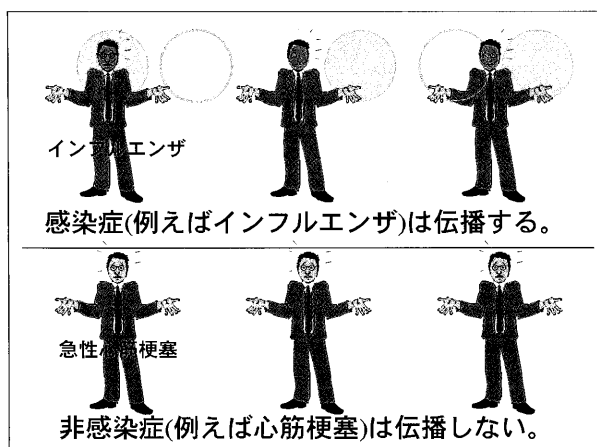
SSIは院内で発症する最も一般的な感染症である

感染症とは

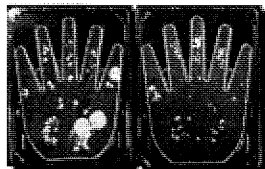
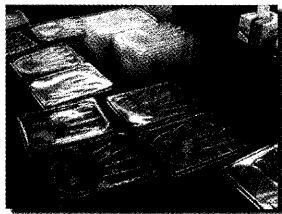
微生物がヒトに



侵入・増殖して
さまざまな症状を
起こすこと

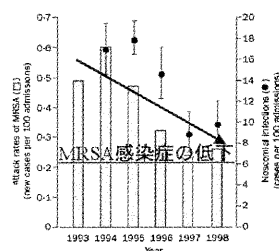
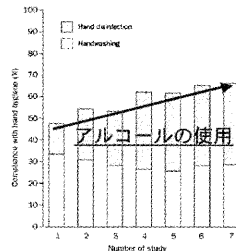


ヒト正常細菌叢 手指に菌がない人はいません



- 皮膚: 1~1,000万/cm² ● 便: 1兆個/g
- 口腔: 1,000万/ml
- (● 土壌: 数千万 ~ 10億/g)

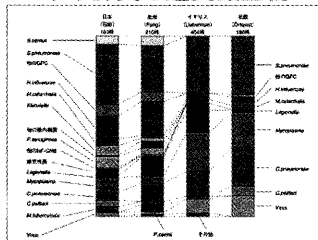
手洗い(特にアルコール使用による)は 院内感染を防止する



アルコールによる手指の消毒が重要

MRSA 感染症

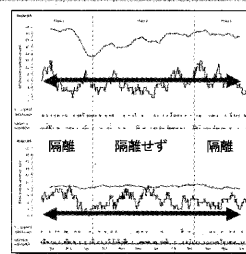
市中肺炎の起炎微生物



- 敗血症
- 褥瘡
- 肺炎 (少ない)
※喀痰MRSA検出における
感染症特異度は10%以下?
- 腸炎(非常に稀)

ブドウ球菌は元来「常在菌」であり、肺炎の起炎菌となることは少ない。血液培養を!!

MRSA 感染対策としての隔離



個室 or 大部屋と
手洗いのコンプライアンス

個室	70 %
2人部屋	59 %
3人部屋	55 %
4人部屋	48 %
5人部屋	33 %

標準予防策の遵守が確実に行われれば隔離は必ずしも必要ないが、
隔離を行った方が遵守率は向上する。
(※ベッド当たりの手洗い頻度はコンプライアンスに影響しない, ICHE, 2003, 224-5他多数)

グラム染色



1. 紫液(クリスタル紫とルゴール)
2. 脱色(アルコール)
3. 赤液(フクシン・サフラニン)
4. 鏡 検

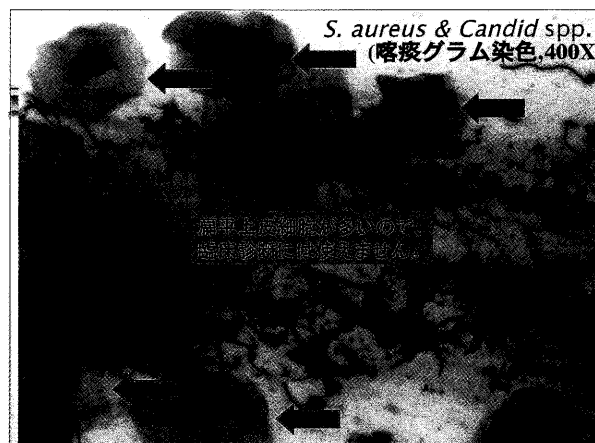
細胞壁にリボ多糖をもつグラム陰性菌は、脱色され赤液に染まる

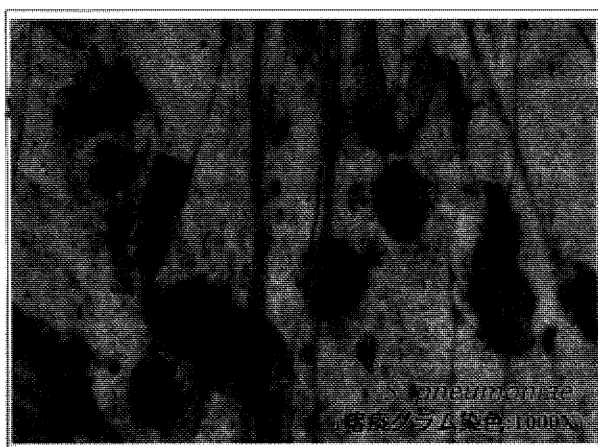
リボ多糖=エンドトキシン



グラム陰性菌

リボ多糖





診断の確定=良質な検体の採取



塗抹鏡検検査(グラム染色)
は最も早い迅速検査

1. 抗菌薬を使う前に検査
2. 膿性痰を採取
3. 白血球多く、上皮細胞少ない検体で判断
4. 血液培養

微生物検査は抗菌薬適正使用の要

MRSA分離状況

仙台市立病院 2004年-2005年

● MRSA分離率 (MRSA / MSSA+MRSA)

検体	57.7 % (222/385)
症例	43.0 % (102/237)

● 入院時検出率 (症例)

57.8% (59/102例)



※入院時検出例: 入院2日以内に採取された検体による検査

常在菌であるブドウ球菌が耐性化(MRSA)

転入院保菌者調査

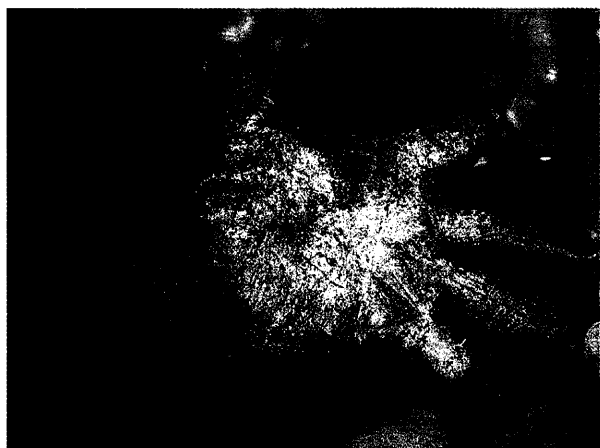
気道分泌物, おむつ着用者は糞便, 尿路カテーテル者は尿検査

仙台市立病院 2004年-2005年

- 32例中9例からMRSA(8例が保菌: 同一施設なし)
転院前に抗菌薬を経静脈投与された12例中では7例から分離
- 32例中14例からカンジダ属菌(すべて保菌)
- 尿カテーテル留置12例中2例から緑膿菌
- 下痢便8例中2例から *C.difficile*

患者番号	転入院先	検査項目	結果
1	市内A病院	MRSA	陽性
2	市内B病院	MRSA	陰性
3	市内C病院	MRSA	陽性
4	市内D病院	MRSA	陰性
5	市内E病院	MRSA	陽性
6	市内F病院	MRSA	陰性
7	市内G病院	MRSA	陽性
8	市内H病院	MRSA	陰性
9	市内I病院	MRSA	陽性
10	市内J病院	MRSA	陰性
11	市内K病院	MRSA	陽性
12	市内L病院	MRSA	陰性
13	市内M病院	MRSA	陽性
14	市内N病院	MRSA	陰性
15	市内O病院	MRSA	陽性
16	市内P病院	MRSA	陰性
17	市内Q病院	MRSA	陽性
18	市内R病院	MRSA	陰性
19	市内S病院	MRSA	陽性
20	市内T病院	MRSA	陰性
21	市内U病院	MRSA	陽性
22	市内V病院	MRSA	陰性
23	市内W病院	MRSA	陽性
24	市内X病院	MRSA	陰性
25	市内Y病院	MRSA	陽性
26	市内Z病院	MRSA	陰性
27	市内AA病院	MRSA	陽性
28	市内AB病院	MRSA	陰性
29	市内AC病院	MRSA	陽性
30	市内AD病院	MRSA	陰性
31	市内AE病院	MRSA	陽性
32	市内AF病院	MRSA	陰性

多くの患者がMRSAを保菌=標準予防策が重要



感染性胃腸炎

● 多種多様な病原微生物による症候群

- 細菌性
- 腸炎ビブリオ、病原性大腸菌、サルモネラ、カンピロバクター等
- ウイルス性
- ノロウイルス、ロタウイルス、アデノウイルス、アストロウイルス
- 寄生虫
- クリプトスポリジウム、アメーバ、ランブル鞭毛虫等

東北でも感染相次ぐ
施設に注意促す通知

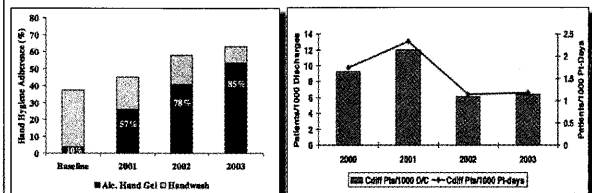
検査法進歩で報告増

クロストリジウム・ディフィシル Clostridium difficile腸炎

- 腸管正常細菌叢(みんな保菌)である
- 抗菌薬投与後、軟便・下痢があったらまず考える。術後虚血もリスク。
- 糞便中Toxin A検査、専用培地嫌気培養検査を行う(オダが必要)
- 下痢患者には、患者毎に手袋・ガウンを着用する
- アルコールは効かないので、糞便処置の際には流水による手洗いを行う

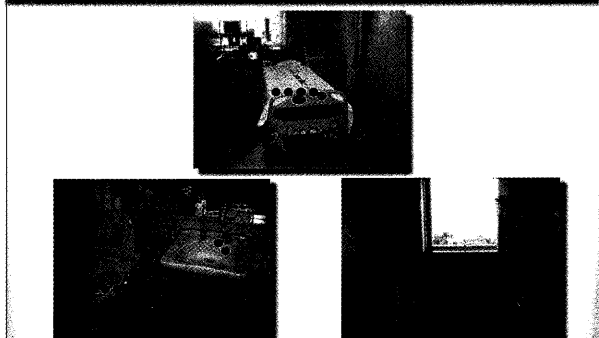
アルコール手指消毒薬使用とC. difficile

Cathy Ligi, Cindy Kohan, Diane Dumigan, John M. Boyce,



アルコール消毒薬使用は、
C. difficile 感染症を増加させない

医療施設における 清掃・消毒はヒトとの接触を常に考慮



消毒におけるポイント



- 医療施設での消毒・滅菌を中央化する
- 浸漬消毒する際には、確実に漬かっていること
- 滅菌済みのディスポ製品を積極的に採用する
- 環境への消毒薬噴霧は行わない
- MRSAやHBVあるなしで消毒方法を変えない

15.11.12 河北新報

結核は院内感染 国立仙台病院

なぜ同僚が娘が... 仙台市立病院 集団感染

悔やむ看護婦 遺族

2000年4月19日 河北新報

16.11.9 河北新報

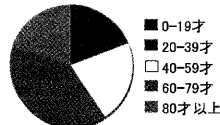
我が国の結核の現状

結核の統計(2004年版)

結定年次・年齢階級別の結核罹患率
(推定、1980年以降は結核罹患率は年々減少傾向)

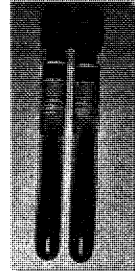
年齢	1995年	2000年	2004年
0-4歳	5.6	0.1	0.1
5-9歳	24.1	0.8	0.2
10-14歳	38.5	0.8	0.4
15-19歳	50.8	0.8	0.8
20-24歳	81.2	1.9	0.8
25-29歳	88.9	1.7	1.2
30-34歳	77.0	2.8	1.8
35-39歳	80.9	4.0	2.0
40-44歳	87.3	5.9	2.8
45-49歳	80.8	10.8	4.8
50-54歳	83.8	17.4	6.7
55-59歳	88.4	26.1	10.8
60-64歳	87.0	42.0	17.7
65-69歳	88.0	68.0	26.8
70-74歳	88.7	82.4	40.4
75-79歳	88.2	70.4	64.1
80-84歳	88.5	77.0	88.3
85-89歳	88.7	82.8	79.7
90歳以上	88.8	88.8	77.8
全人口	37.4	18.4	18.6

- 新規患者数 31,638人
(10万人あたり24.8人)
- 塗抹陽性患者数 11,857人
- 肺結核/全結核: 80.5%
- 肺結核の塗抹陽性: 68.0%



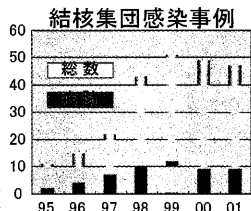
高齢者に多い。欧米諸国より高い頻度。

結核菌検査法



- 塗抹: チールネルゼン法、蛍光染色法
- PCR: *M. tuberculosis*, *M. avium complex*の2菌種を同定(死菌でも陽性となるためPCR単独ではおこなわない)
- 培養: 小川法(12週まで)・液体MIGIT法(8週まで)。その後同定検査。
- 感受性検査: 培養陽性から2週間。
※胃液培養、高調食塩水吸入による誘発喀痰も有用。

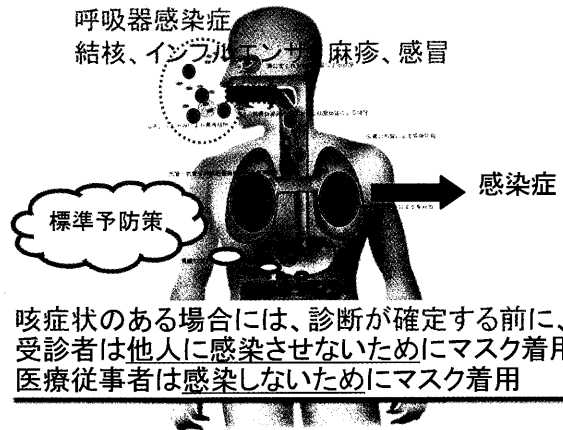
医療施設における結核



- 医療従事者に高いリスク
 - ・医師: 3倍
 - ・看護師: 4倍
 - ・検査技師: 12倍
- 受診後診断まで1ヶ月以上: 26.0%(2004年)

医療施設は高い感染リスクがある

呼吸器感染症
結核、インフルエンザ、麻疹、感冒



咳症状のある場合には、診断が確定する前に、
受診者は他人に感染させないためにマスク着用
医療従事者は感染しないためにマスク着用

医療施設における 呼吸器衛生/レスピラトリー(咳)エチケット



- 啓発ポスターの掲示
- 手洗い、咳をする時のエチケット
- 患者のマスク着用とトリアージ(優先診察)
- 医療従事者の飛沫予防策(マスク着用)の実践

新型インフルエンザ対策

新型インフルエンザ対策行動計画

- 現在フェーズ3(トリ⇒ヒト感染)感染対策の立案
- フェーズ4(ヒト⇒ヒト)
- フェーズ6(パンデミック)

対策の要点

- 咳エチケットの(マスク着用)実施
- ワクチンの開発
- 抗インフルエンザ薬の適正使用

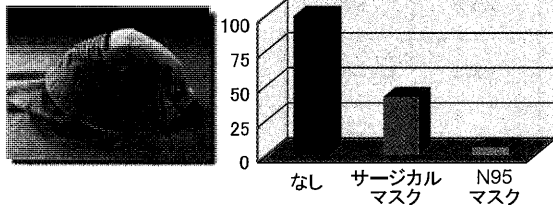
厚生労働省
(平成17年11月)

咳エチケットの実施が最も重要

N-95マスク

J. Occup. Environ. Med. 33(9):1997:649-654

マスクの飛沫核防止効果



試験粉じん(NaCl, 0.06~0.1 μ m), 流量85L/minで95.0%以上補足
結核患者対応ではN95マスクが必要

N-95マスク

JAMA. 2003;4:289(21):2788-9.

フィットテストを行わず、フィット性が不十分であったためにSARSに感染



Cluster of Severe Acute Respiratory Syndrome Cases Among Protected Health-Care Workers — Toronto, Canada, April 2003

Approximately 40 health-care workers (HCWs) who cared for patients with severe acute respiratory syndrome (SARS) in a Toronto hospital became ill. The majority of these infections were acquired in the workplace. HCWs who wore N95 respirators had lower rates of infection than those who wore other types of masks. HCWs who wore N95 respirators also had lower rates of infection than those who wore other types of masks. The report also notes that HCWs who wore N95 respirators had lower rates of infection than those who wore other types of masks.

N95マスク着用においては
フィットテストが必須

N-95マスク

作業エリアに入る前に、毎回フィットチェックを行う

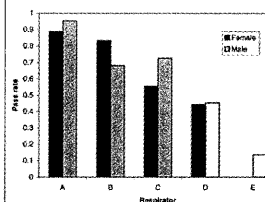


- 両手でマスクの正面を覆い、マスクの位置がずれないようにする
- 両手でマスクを覆い強く息を吐く。空気もれがある場合は、マスクの位置調整またはゴム製ストラップの位置を調整する。
- 次に息を吸い込んで、しっかりとマスクが密着するかをチェックする

N-95マスク

J. Occup. Environ. Hyg. 2004;1(1):22-8.

N95マスクは種類によりフィット性が異なり、その効果も異なることが示唆



	Pass Rate	Cumulative Risk (R) with Low Exposure Scenario		Cumulative Risk (R) with High Exposure Scenario	
		1 yr	5 yr	1 yr	5 yr
Respirator A	0.95	0.0007	0.0036	0.0029	0.0141
Respirator B	0.75	0.0014	0.0070	0.0056	0.0274
Respirator C	0.68	0.0017	0.0082	0.0066	0.0321
Respirator D	0.45	0.0025	0.0122	0.0097	0.0473
Respirator E	0.08	0.0037	0.0185	0.0148	0.0719
No respirator	—	0.0133	0.0648	0.0522	0.2350

N95マスクの選定にはフィット性が重要

病院に感染責任

大阪地裁
賠償命令

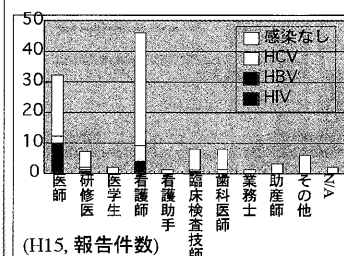
平成11年3月9日 朝日新聞

廃棄注射針、誤って刺す エイズ死亡初の報告例

厚労省委員会に
報告された

平成13年9月8日 朝日新聞

東北大学病院における針刺し切創曝露



- 大学病院(1200床)では、年間120件前後の報告
- 曝露は20件/年程度
- 針刺し切創の報告率は20~30%と推定。
- 全病院として対応開始後に報告が増加。
- 全職種にHBVワクチン接種勧奨

検査技師: 検査24時間対応およびEPINet入力・集計

我が国における針刺し切創



- 30～40件/100床/年
- 我が国では45～60万件/年
- 医療従事者の2人に1人が毎年針刺し切創を経験している可能性あり
- 体液曝露については統計なし

すべての医療施設で日常的に発生している

血液媒介病原体

病原体	HBV	HCV	HIV
感染者	人口の約1.5%	人口の約1.0%	約10,000人
転 帰	B型肝炎	C型肝炎	AIDS
針刺しによる感染率	約30%	約0.5%	約0.3%
ワクチン	不活化ワクチン	なし	なし

血液・体液の曝露

Table 1. Dynamics of injury.

Type of injury	No.	% (of 1418 accidents)	% (of 15,375 procedures)
Needle-stick	516	36.4	3.3
Blade cut	51	3.6	0.3
Conjunctiva exposure	59	4.2	0.3
Face exposure	100	7.1	0.7
Glove breaching	476	33.6	3.1
Electrocution burn	115	8.1	0.8
Strike through gown	110	7.7	0.7
Total	1418	100	9.2

Surgeon, first assistant, or another member of the surgical team were victims of the accident in 50.8%, 28.1%, and 21.1% of cases, respectively.

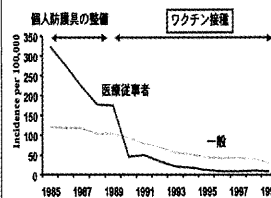
- 15,375手術を検討
- 9.2%(1,418件)で事例が発生
- 3.3%(516件)の手術で針刺し
- 0.3%(50件)の手術で結膜曝露
- 0.7%(100件)の手術でその他の顔面曝露が発生

血液・体液曝露は日常的に発生している可能性がある



手袋、ゴーグルなどのPPEの確実な着用とHBVワクチンの接種が必要不可欠である。

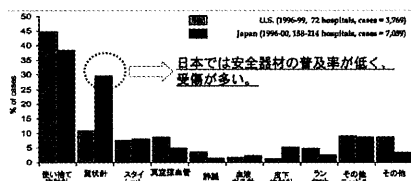
米国におけるB型肝炎感染症の推移 (1985-1999)



- 不活化ワクチンで高い安全性
- 約95%以上は抗体価が陽転 (加齢・喫煙などにより低い陽転率を示すことがある)
- 10 IU/L以上で高い予防効果 (N Engl J Med 1986 24;315(4):209-14.)
- 経年的に抗体価は低下する
- 陰転化しても予防効果は持続 (Ann Intern Med 2005 1;142(5):333-41.)

すべての医療従事者に必須である

針刺し切創安全器材



日本では安全器材の普及率が低く、受傷が多い。

様々な種類の安全器材があり、保険請求上も優遇されている
通常の針12.5点(125円)、安全器材14.5点(145円)

感染対策上、安全器材の採用が必要である

鋭利器材の廃棄

- 病室内でのリキャップによる受傷が多い
- 病室外での受傷、とくに廃棄するまでが多い

病室内に廃棄容器の持ち込み

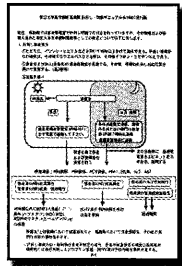


病室内の廃棄容器の設置

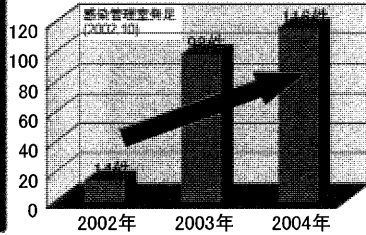


病室内で直ちに鋭利器材を廃棄するように環境整備をおこなう必要がある

針刺し切創フローの整備



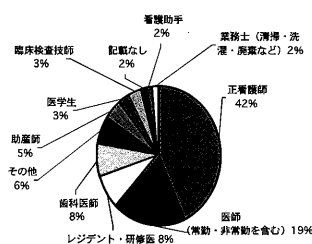
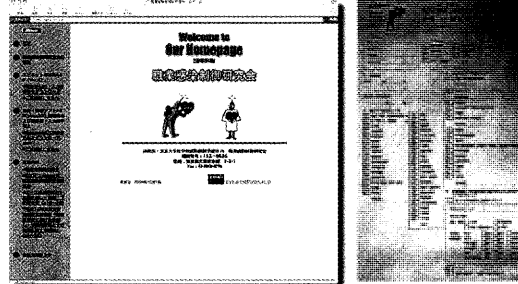
報告件数の推移(東北大)



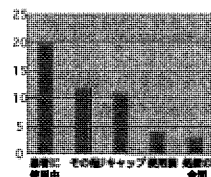
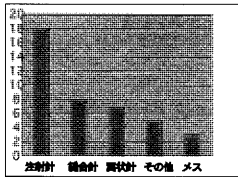
医療施設内の対応を整備する必要がある

職業感染サーベイランス(EPINet日本版)

ホームページから入手可能



エピネットA (針刺し・切創) 院内報告



HIVウイルス

Human Immunodeficiency Virus



- 性行為感染症のひとつ
- 年間1,000人以上の感染報告
- 累計10,000人以上の感染者
- 年々増加傾向にある
- 検査を受けずにAIDSを発症して初めて分かることが多い
- 職業感染では世界で90以上の確定例、170の可能性例が報告

決して稀ではない疾患となりつつある

HIV陽性検体の曝露対応

TABLE 2. LOGISTIC REGRESSION ANALYSIS OF RISK FACTORS FOR HIV INFECTION AFTER TRANSCUTANEOUS EXPOSURE TO HIV-POSITIVE BLOOD

Risk Factor	U.S. Cases*	All Cases†
Deep injury	1.8 (0.4-8.2)	1.8 (0.0-41)
Visible blood on device	4.6 (1.4-14)	6.2 (2.2-21)
Procedure involving needle in artery or vein	3.6 (1.3-11)	4.2 (1.7-12)
Terminal illness in source patient‡	8.5 (2.3-28)	5.6 (2.0-16)
Fluorescence test of substrate	0.14 (0.03-0.67)	0.19 (0.06-0.52)

- リスクファクター
 - ・深い傷: OR15 (6.0-41)
 - ・目に見える血液: OR6.2 (2.2-21)
 - ・血管留置針: OR4.3 (1.7-12)
 - ・AIDS末期: OR5.6 (2.0-16)
- 抗HIV薬による予防内服の実施
 - OR 0.19 (0.06-0.52)
 - 80%以上の感染防止効果

抗HIV薬による予防内服は高い効果が期待できる

迅速検査体制の整備

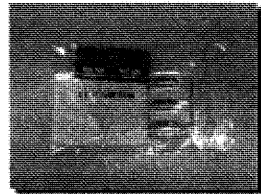
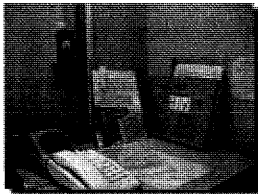


HBV・HCV・HIVに関する迅速検査体制を整備する必要がある

例)	トータル1659.6円/回
HBs抗原: ダイナスクリーン・HBsAg	100回用 ¥12,250 (@122.5)
HBs抗体: エスプラインHBsAb-N	10テスト×5 ¥8,080 (@161.6)
HCV抗体オートクイックチェイサーHCVAb	40回用 ¥34,700 (@867.5)
HIV抗体: ダイナスクリーン・HIV-1/2	100回用 ¥50,800 (@508)

HIV予防内服体制の整備

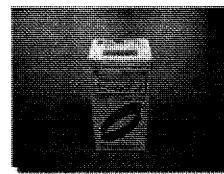
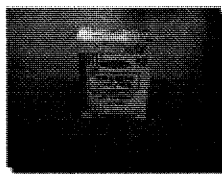
直ちに開始: 4週間継続投与



迅速に予防内服が開始できるように
あらかじめ体制を整備する必要がある

HBV予防投薬体制の整備

48時間以内に抗HBsヒト免疫グロブリン・B型肝炎ワクチンを接種
(90%以上の有効性が期待できる)

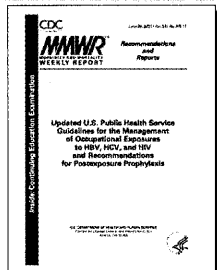
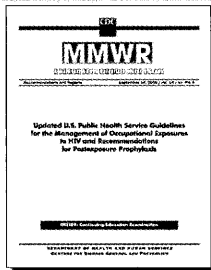


迅速に予防投薬が開始できるように
あらかじめ体制を整備する必要がある

針刺し切創・血液体液曝露 に対するCDCガイドライン

HIV・2005:3改訂

HBV・HCV・HIV・2001



- 標準予防策の遵守
- HBVワクチンの接種
- 迅速な検査体制の整備
- 迅速な予防薬剤の投与

針刺し切創・体液曝露対策の要点

1. 標準予防策の遵守

- 手洗いを励行する。
- 血液・体液に触れる際には手袋を着用する。
- マスク・ガウン・ゴーグルなどの個人防護具(PPE)を確実に用いる。

2. 予防体制を整備する。

- すべての医療従事者を対象にHBVワクチン接種を推進する。
- 安全器材を積極的に採用し、作動方法のトレーニングを行う。
- 鋭利物の廃棄システム・シャープスコンテナの改善を行う。

3. 事後体制を整備する。

- 報告体制の整備、サーベイランス(EPINetなど)により改善活動を行う。
- HBV・HCV・HIVの緊急検査体制を整備する。
- HBVのグロブリン・ワクチン接種、HIVの予防内服体制を整備する。

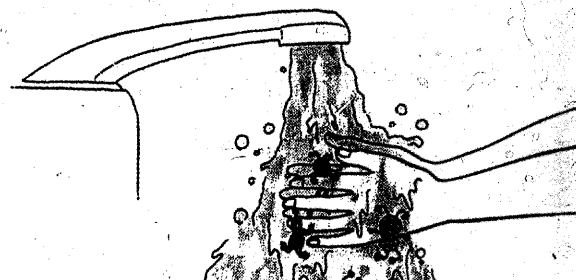
感染制御のキーポイント

- 1, 患者処置時における手洗いの励行
- 2, 調剤時における交差感染防止
- 3, 汚物処理時における交差感染防止



標準予防策のコンプライアンス向上
が最も重要な感染対策

標準予防策の遵守が感染制御の基本



感染症ある・なしに関わらず
手洗い(手袋・ガウン着用)

手洗いの コンプライアンスの検証

大部屋(4床室)に24時間で1ベッドあたり、3回医療従事者が訪室し、医療行為(患者に触れること)をおこなうと仮定。

例) **500 ml**
3 (1日訪室回数) × 2 (前・後) × 3ml (一回量) × 4 (床室)



1週間で1本消費(するはず)



手洗い遵守率: 500ml/1ヶ月 ➡ 25%
500ml/2ヶ月 ➡ 12.5%
500ml/3ヶ月 ➡ 6.25%

感染対策のコンプライアンス

ICHE 2001-22-10-12

ICHE 2000-21-336-340

Item	Score	Target	Actual	Gap
Hand hygiene	100	100	100	0
Wear of mask	100	100	100	0
Wear of gloves	100	100	100	0
Wear of gown	100	100	100	0
Wear of shoe cover	100	100	100	0
Wear of cap	100	100	100	0
Wear of face shield	100	100	100	0

● 各職種のマスク着用・ドア閉めなど7項目について評価

● 全体の評価数に占める違反件数は64/541(11.8%)

● 医師16/47, 看護師11/135

Item	Score	Target	Actual	Gap
Hand hygiene	100	100	100	0
Wear of mask	100	100	100	0
Wear of gloves	100	100	100	0
Wear of gown	100	100	100	0
Wear of shoe cover	100	100	100	0
Wear of cap	100	100	100	0
Wear of face shield	100	100	100	0

● ツ反接種歴に職種別の差異を認める

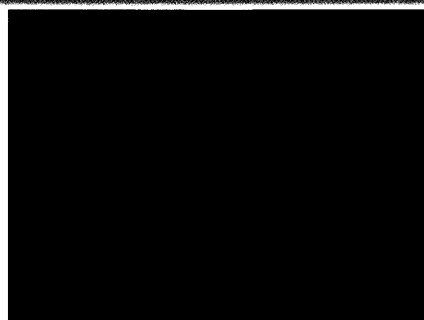
コンプライアンス維持・向上が必要

ICT Infection Control Team

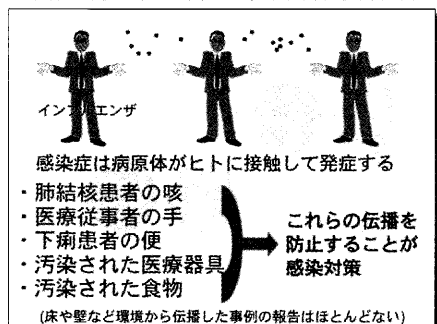


感染対策の実動部隊として、専門性を生かし、職種を超えて対策を遂行する

感染対策のポイント=ICTラウンドのポイント



確実な感染対策を行えば十分対応できる



感染対策は基本から



第2回事前研修アンケート集計結果(1/4)

	岩崎信	谷口和也	國島広之	岡田 毅
☐ 15回の講義の組み立て方(3) ☐ 90分の授業の組み立て方(9) ☐ シラバスの作成の仕方(4) ☐ オリエンテーションの行い方(1) ☐ 質問・発言の促し方(6) ☐ クラス・ディスカッションの行い方(6) ☐ 実習およびその他の体験型学習の行い方(6) ☐ 学生の学習動機付けの仕方(8) ☐ 学生の学習成果の確認方法(9) ☐ 試験問題の作り方(2) ☐ 成績評価の問題について(8) ☐ プロジェクター等、機器類の利用の仕方(1) ☐ e-learningの活用方法(10) ☐ e-learningにおける著作権について(7) ☐ 授業におけるTAの効果的な活用方法(2) ☐ オフィス・アワーの利用の仕方(0) ☐ 学生による授業評価の活用(2) ☐ 研究と教育の関連について(6) ☐ 上記以外のその他の項目	☐ 不明	☐ はい	☐ はい	☐ はい
2. 3月に実施される特別海外研修に参加されますか。				
3. 海外研修で、特に習得したいと考えているものがありましたら、教えてください。		特に教育学研究の国際性と国内の政策依存性について、どのように研究・教育の国際基準が成立しているか。	教育のアウトカムとe-learning	日本では外国語である英語(EFL)と米国での第2言語としての英語(ESL)の取り組みの差を、e-learningの視点から見たい。同時に、Academic Writingを、東北大学の英語教育の中で、どのように位置付けるべきかという問題についても、stanfordのlanguage centerでの実践例と比較することによって考察を深めたい。
4. 当プロジェクトのウェブサイト及び各種報告書に、氏名・所属・プロジェクト参加の抱負等を掲載してもよろしいですか。□はい・□いいえ	はい	はい(もう少し修正をしたい)	はい	はい
5. 今回の事前研修に対するご感想・ご意見をお願いします。(改善すべき点を中心に)	今後は、学内外の大学教育に関心のある先生方とネットワークが出来る結果となって大変有効だと思う。		東北大学、他大学の学部を超えた連携を感じることができました。ありがとうございました。日本およびグローバルネットワークのさきがけとなれと思います。	次回以降の研修や特にテーマ別研修の方向性に期待します。ISTUのWebページからの積極的な情報提供に一層期待します。
6. その他、プロジェクトへの質問・希望がありましたら教えてください。	東北大学の教育目標との関係で、全学教育の目標はどのようなのか現在では不明確なので意見交換し提案すべきだ。			このようなアンケートは、事後にメール等で出させて頂ける方が、責任を持った内容にできます。

第2回事前研修アンケート集計結果(2/4)

	杉浦謙介	城 茂治	田中光郎	菅井裕行
□ 15回の講義の組み立て方				○
□ 90分の授業の組み立て方		○	○	
□ シラバスの作成の仕方				
□ オリエンテーションの行い方				○
□ 質問・発言の促し方	○		○	○
□ クラス・ディスカッションの行い方		○	○	○
□ 実習およびその他の体験型学習の行い方		○	○	○
□ 学生の学習動機付けの仕方		○	○	○
□ 学生の学習成果の確認方法		○	○	○
□ 試験問題の作り方			○	
□ 成績評価の問題について			○	
□ プロジェクター等、機器類の利用の仕方		○	○	
□ e-learningの活用方法	○			
□ e-learningにおける著作権について	○			
□ 授業におけるTAの効果的な活用法				
□ オフィス・アワーの利用の仕方				
□ 学生による授業評価の活用利用の仕方				
□ 研究と教育の関連について				
上記以外のその他の項目	いいえ	はい(ただし、日程による)	はい	はい 特に教育学部(school of Education)で、学生に教育実践力を身につけさせる方法をどのように開発しているかor大学とコミュニティの学校とがどのようなように連携して、実践的力量形成を行っているか(Reflective Practiceの実践)。
2. 3月に実施される特別海外研修に参加されますか。				
3. 海外研修で、特に習得したいと考えているものがありましたら、教えてください。		授業の進め方、カリキュラム、実習等について学びたい。 特にビデオ、e-learning等の活用について。	・学生と教員の距離感 ・学生のmotivationとその高め方	
4. 当プロジェクトのウェブサイト及び各種報告書に、氏名・所属・プロジェクト参加の抱負等を掲載してもよろしいですか。□はい・□いいえ	はい	はい	はい	はい
5. 今回の事前研修に対するご感想・ご意見をお願いします。(改善すべき点を中心に)	さまざまな分野の先生方の取り組みを聞くことができて有意義でした。	専門の異なる多くの先生方の意見を拝聴でき有意義でした。一方、専門性が異なるため、本プロジェクトに参加する目的も多様であるとの印象を持ちました。この多様性があるようにまとまるのか、不安であると共に楽しみにもあります。1年間で成果を出し、評価し、フィードバックが行なうのは大変では？ただしフィードバックができないと思います。プロジェクトの目的は達成できないと思っています。	各方面の方々の話を伺って参考になった。	多様な専門領域に共通する課題(特にプロフェッショナル養成を目指すカリキュラム)があることを知り、とても興味深く思いました。
6. その他、プロジェクトへの質問・希望がありましたら教えてください。		せっかくの機会ですので是非1年で途切れることなく情報交換の発信をしていただきたい。	ISTUシステムの利用をできれば延長して頂きたい。	双方向のやりとりをできるだけ丁寧に進められたらと思います。

第2回事前研修アンケート集計結果(3/4)

	石澤公明	森山雅幸	石井誠一	長崎 裕
1. 今後、テーマ別研修で扱って欲しいテーマにチェックし、複数回答可) 括弧内の数字は回答者数 ☐ 15回の講義の組み立て方 ☐ 90分の授業の組み立て方 ☐ シラバスの作成の仕方 ☐ オリエンテーションの行い方 ☐ 質問・発言の促し方 ☐ クラス・ディスカッションの行い方 ☐ 実習およびその他の体験型学習の行い方 ☐ 学生の学習動機付けの仕方 ☐ 学生の学習成果の確認方法 ☐ 試験問題の作り方 ☐ 成績評価の問題について ☐ プロジェクター等、機器類の利用の仕方 ☐ e-learningの活用方法 ☐ e-learningにおける著作権について ☐ 授業におけるTAの効果的な活用方法 ☐ オフィス・アワーの利用の仕方 ☐ 学生による授業評価の活用方法 ☐ 研究と教育の関連について 上記以外のその他の項目			○	
	○	○	○	○
	○		○	
			○	
			○	
		○	○	
	○		○	○
	○		○	
	○		○	
			○	
		○		○
			○	○
	○		○	
		○		
				e-learning!における学習評価(特に技術、態度評価)
2. 3月に実施される特別海外研修に参加されますか。	はい	はい	3月中に別にstanford大学を訪問します	はい
3. 海外研修で、特に習得したいと考えているものがありましたら、教えてください。	スタンフォードでの自然科学(生物学関連科目)の初等教育の内容。	デザイン教育と行動心理学的関係・関連性	医学部FDセンターの企画・運営・評価について	e-learningの限界と補完策
4. 当プロジェクトのウェブサイト及び各種報告書に、氏名・所属・プロジェクト参加の抱負等を掲載してもよろしいですか。□はい・□いいえ	はい	はい	はい	はい
5. 今回の事前研修に対するご感想・ご意見をお願いします。(改善すべき点を中心に)	個人の授業内容の改善に、授業撮影以外にどのような具体的な方法があるか今後の活動の中で考えてみたいと思います。	大変良い勉強になりました。次回楽しみにしています。	時間が長い	
6. その他、プロジェクトへの質問・希望がありましたら教えてください。		多分野の方々の同一テーマに対する考え(例えば「教育」)をお聞きする機会を希望します。		このプロジェクトは最終的には東北大版CTLのコンテンツを作ると考えればよいのでしょうか。コンテンツ作製の特に権利関係のサポートをよろしく願います。

第2回事前研修アンケート集計結果(4/4)

	西澤昭夫	佐竹正夫	古川柳蔵	村田 功
☐ 15回の講義の組み立て方 ☐ 90分の授業の組み立て方 ☐ シラバスの作成の仕方 ☐ オリエンテーションの行い方 ☐ 質問・発言の促し方 ☐ クラス・ティスカッションの行い方 ☐ 実習およびその他の体験型学習の行い方 ☐ 学生の学習動機付けの仕方 ☐ 学生の学習成果の確認方法 ☐ 試験問題の作り方 ☐ 成績評価の問題について ☐ プロジェクター等、機器類の利用の仕方 ☐ e-learningの活用方法 ☐ e-learningにおける著作権について ☐ 授業におけるTAの効果的な活用方法 ☐ オフィス・アワーの利用の仕方 ☐ 学生による授業評価の活用方法 ☐ 研究と教育の関連について				
1. 今後、 テーマ別 研修で扱っ て欲しい テーマに チェックし てくださ い。(複数 回答可) 括弧内の 数字は回 答者数	上記以外のその他の項目 社会人学生に対す る教材開発、多様な 関心と能力を持つ社 会人学生に対する 共通基盤の形成方 法など。			学生に「自分で学ぶ、調べる」ことをどう教え るか。(1年生にレポート課題で自分で調べる 問題を出したら、Webページを参考にしたも のが多かったが、かなりの部分が、間違った 情報載せている「怪しい」ページを参考にし ていた。社会に出れば自分で情報を集めて 判断することになるので、いかに正しい情報 を選択するかは重要になると思う。)
2. 3月に実施される特別海外研修に参加されますか。	いいえ	グループの誰かが参加 させていたみたいと考 えています。		いいえ
3. 海外研修で、特に習得したいと考えているものがあり ましたら、教えてください。	大学院レベルのプロ フェシヨナリティの具 体像を確認したい。			
4. 当プロジェクトのウェブサイト及び各種報告書に、 氏名・所属・プロジェクト参加の抱負等を掲載してもよろ しいですか。□はい・□いいえ	はい	いいえ(未定の部分が ありますので)	はい	いいえ
5. 今回の事前研修に対するご感想・ご意見をお願い します。(改善すべき点を中心に)		有意義でした。テーマを とりあげて議論して、あ る程度の結論が出れば よかったですと思います。	他の事例(計画)が参考に なりました。特に、既にe- learning化した事例につい て。	
6. その他、プロジェクトへの質問・希望がありましたら 教えてください。	英語での講義への 事前対応は必要あり ますか？			

第1回テーマ別研修会

大学教育におけるカリキュラム・デザイン

日 時：平成17年10月24日（月） 午後3時30分～5時30分

会 場：東北大学 教育・学生支援部大会議室（管理棟3階）

講 師：東北大学大学院教育学研究科助教授 谷口 和也

研修内容：

テーマ「大学教育におけるカリキュラム・デザイン」

開 会

【第一部】

具体的事例を通してカリキュラム・デザインの基本的な考え方について学ぶ

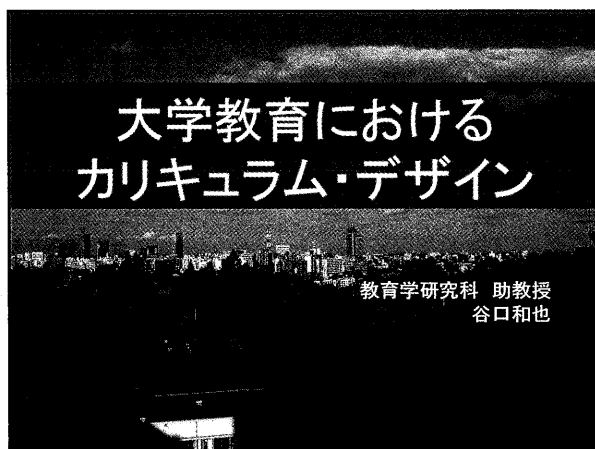
- I. シラバスをつくるということ
- II. 目標と評価
- III. カリキュラム・マネジメント
- IV. 新しい大学教育をどうデザインするか

【第二部】

参加各グループの取り組みの紹介と討論会

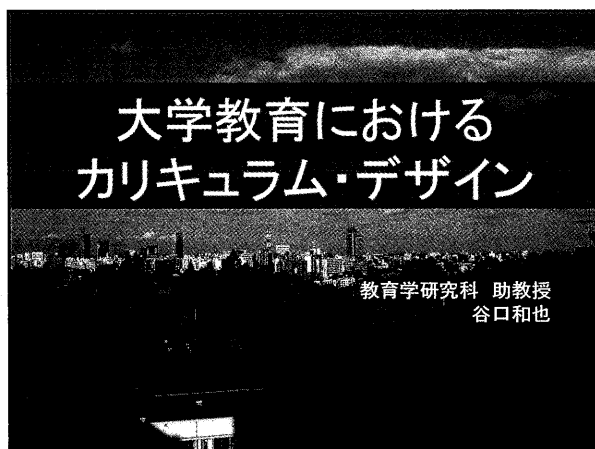
閉 会

主催：東北大学高等教育開発推進センター



大学教育における カリキュラム・デザイン

教育学研究科 助教授
谷口和也



大学教育における カリキュラム・デザイン

教育学研究科 助教授
谷口和也

I . シラバスを作ること

I . シラバスを作ること

多くの大学教員の考え方

卓越した授業技術

学問に対する
研鑽

学生の理解
過程の把握

3

多くの大学教員の考え方

卓越した授業技術

学問に対する研鑽

学生の理解過程の把握

3

多くの大学教員の考え方

卓越した授業技術

学問に対する
研鑽

学生の理解
過程の把握

3

多くの大学教員の考え方

卓越した授業技術

学問に対する研鑽

学生の理解過程の把握

3

多くの大学教員の考え方

卓越した授業技術

学問に対する
研鑽

学生の理解
過程の把握

3

授業に内在する授業「理論」

稲作に適した自然条件

↓

庄内平野で米作りがさかん

JA庄内ホームページより。

授業に内在する授業「理論」

庄内平野

稲作に適した自然条件

庄内平野で米作りがさかん

JA庄内ホームページより。

● 社会科教科書≠暗記物(常識的な授業観)

決して稲作に適していな

明治30年(1897年)から明治40年(1907年)に遡ると、日本では稲作が盛んに行われていた。これは、日本では稲作が盛んに行われていた。これは、日本では稲作が盛んに行われていた。

内平野の稲作の様子を写した写真。

庄内平野は、古くから米の産地として知られてきました。しかし、現在のような稲作地帯として発展するまでには、さまざまな問題がありました。土地が低く平らなため、かえって川から水が引くのに苦労したり、また、季節風など

問題の一つずつ解決しながら、現在の庄内平野の水田をつくってきたのです。

月	庄内平野 (mm)	日本の平均 (mm)
1	100	50
2	120	60
3	150	70
4	180	80
5	200	90
6	220	100
7	200	110
8	180	120
9	150	130
10	120	140
11	100	150
12	80	160

資料元: 気象庁「日本の気象統計」

5

[illegible]

● 社会科教科書≠暗記物(常識的な授業観)

決して稲作に適してはいない。

選定 300 年ほど前からの稲作地帯に選定されて稲作が盛んになったのは、江戸時代のことだ。江戸時代、日本では、水田が盛んになった。江戸時代、日本では、水田が盛んになった。

江戸時代、日本では、水田が盛んになった。

庄内平野は、古くから米の産地として知られてきました。しかし、現在のような稲作地帯として発展するまでには、さまざまな問題がありました。土地が低く平らなため、かえって川から水が引くのに苦労したり、また、季節風など：

稲の栽培にたいへん不利な問題の一つずつ解決しながら、現在の庄内平野の水田をつくってきたのです。

月	庄内平野 (mm)	日本の平均 (mm)
1	100	50
2	120	60
3	150	70
4	180	80
5	200	90
6	220	100
7	200	110
8	180	120
9	150	130
10	120	140
11	100	150
12	80	160

資料元：気象庁「日本の気象」

5

● 社会科教科書≠暗記物(常識的な授業観)



庄内平野は、古くから米の産地として知られてきました。しかし、現在のような稲作地帯として発展するまでには、さまざまな問題がありました。

決して稲作に適していなかった

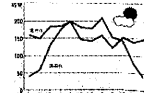
明治30年からはおもに米の生産のために農家が土地を開墾した。このとき、水田を作るには、水を流すための水路が必要で、

庄内平野には、水の量が足りない。

「水不足」が、稲作の妨げとなり、農業を営むことが難しくなりました。



庄内平野には、**水の量が少ない**ので、**稲作の妨げ**となり、**農業を営むことが難しくなりました。**



(単位：ミリメートル)
④ 山形県と宮城県(谷千穂)の1月の月別降水量

[illegible]

● 社会科教科書≠暗記物(常識的な授業観)

決して稲作に適していな

選定 300 年ほど前からの
稲作には、現在でも
お稲作は出来た。出来た
お稲作は出来た。出来た
お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

庄内平野は、古くから米の産地として知られてきました。しかし、現在のような稲作地帯として発展するまでには、さまざまな問題がありました。土地が低く平らなため、かえって川から水が引くのに苦労したり、また、季節風など

問題の一つずつ解決しながら、現在の庄内平野の水田をつくってきたのです。

図 1 仙台市と仙台平野の水田の水の平均温度の月別平均値

月	仙台市の平均気温 (°C)	仙台平野の水田の水の平均温度 (°C)
1	5	5
2	6	6
3	8	8
4	12	12
5	18	18
6	22	22
7	25	25
8	24	24
9	20	20
10	15	15
11	10	10
12	6	6

5

● 社会科教科書≠暗記物(常識的な授業観)

決して稲作に適していな

選定 300 年ほど前からの
稲作には、現在でも
お稲作は出来た。出来た
お稲作は出来た。出来た
お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

お稲作は出来た。出来た

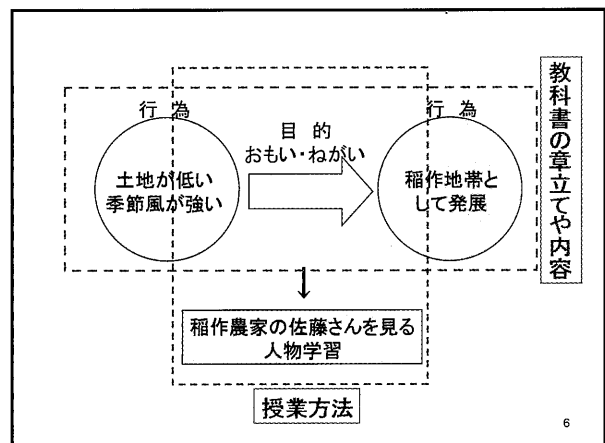
庄内平野は、古くから米の産地として知られてきました。しかし、現在のような稲作地帯として発展するまでには、さまざまな問題がありました。土地が低く平らなため、かえって川から水が引くのに苦労したり、また、季節風など

問題の一つずつ解決しながら、現在の庄内平野の水田をつくってきたのです。

図 1 仙台市と仙台平野の水田の水の平均温度の月別平均値

月	仙台市の平均気温 (°C)	仙台平野の水田の水の平均温度 (°C)
1	5	5
2	6	6
3	8	8
4	12	12
5	18	18
6	22	22
7	25	25
8	24	24
9	20	20
10	15	15
11	10	10
12	6	6

5

[illegible]

教科書の章立てや内容

行為

土地が低い
季節風が強い

目的
おもい・ねがい

行為

稲作地帯として発展

稲作農家の佐藤さんを見る
人物学習

授業方法

行為

土地が低い
季節風が強い

目的
おもい・ねがい

行為

稲作地帯として発展

稲作農家の佐藤さんを見る
人物学習

授業方法

教科書の章立てや内容

6

より良い授業をおこなうために

- ・見学、体験学習、活動を取り入れる
- ・インタビュー、人物学習
- ・調べ学習、NIE学習、インターネット学習
- ・実験・実習、作業、模型づくり
- ・資料、プリントの工夫
- ・学生の身近な素材を教材にする...

7

水の通る橋。右の写真を見ながら、みんなで話し合いました。

「水がふき出しているよ。これはなんだらう。」

「さっさと壊だよ。でも、なぜ橋のどちゅうから水が出ているんだらう。」

「橋の下が丸くなくなっているよ。かわった形の橋だね。」

「どうして、こんな橋をつくらしたのかしら。」

いろいろな感想を出し合っていると、先生が次のような話をしてくださいました。

「この橋は、熊本県矢部町にある通潤橋という名の橋です。今から140年ほど前に、石を組んでつくったものです。」

みんなは、このめずらしい橋のことが少しずつわかってきました。

水の通る橋は、どんな人たちが、なんのために、につくったのでしょうか。



①事象の詳細な理解

↓

②目的・行為の因果連鎖をたどる

↓

③当時の社会への影響

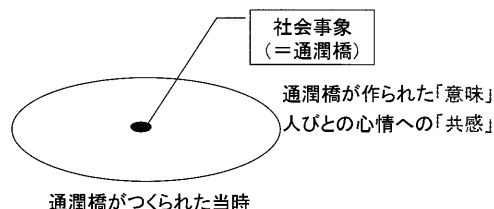
↓

④現代社会への影響

8

①事象を詳しく知る

授業方法は？



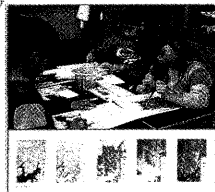
9



①事象を詳しく知る

調べ学習
NIE学習
インターネット学習
インタビュー
見学、体験学習
作業、模型づくり...

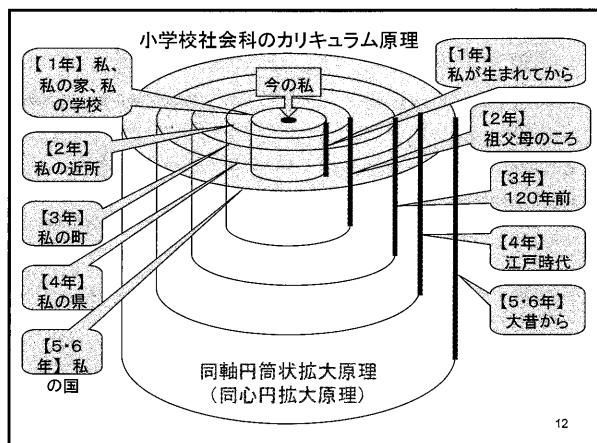
地図をぬって重ねる作業→



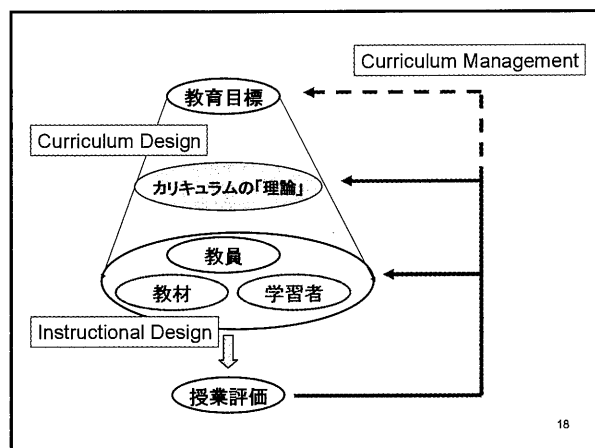
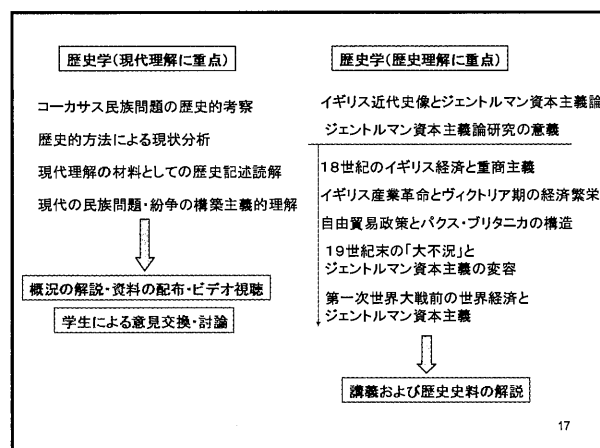
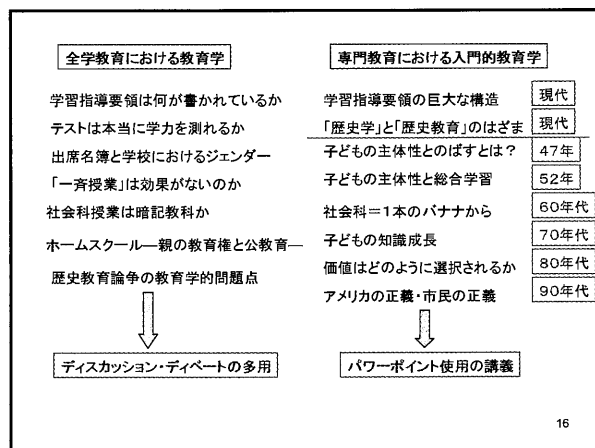
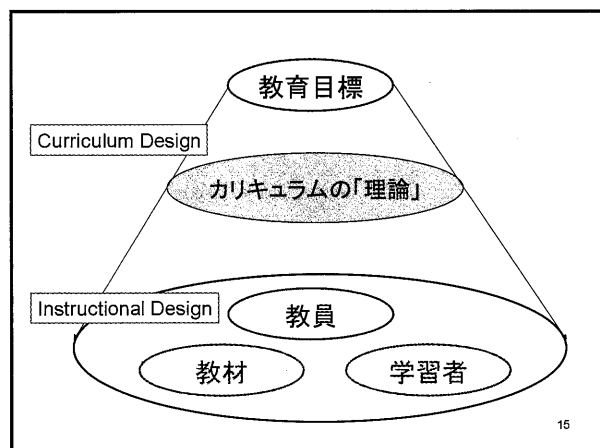
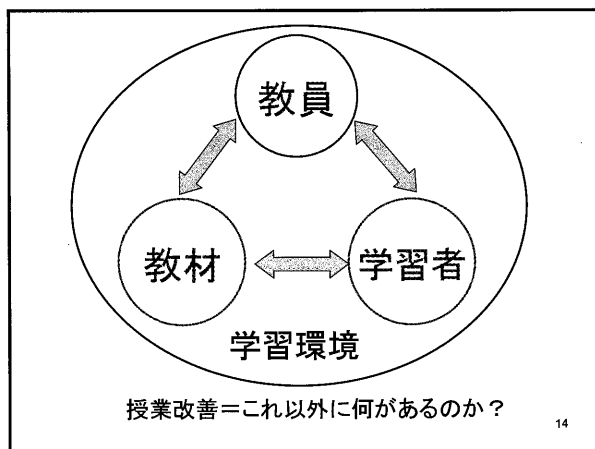
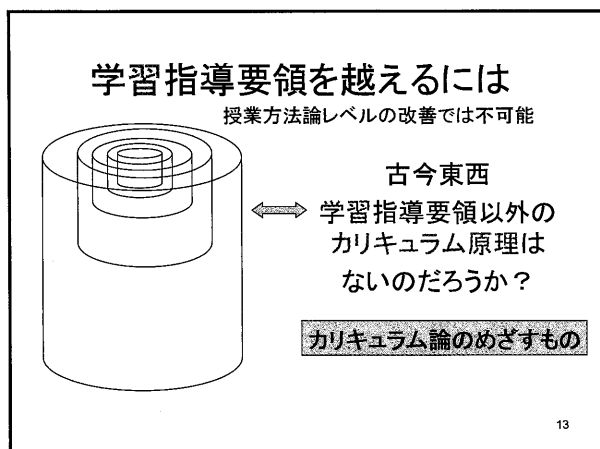
小学校社会科教科書に見られる「理解主義」の四段階

社会の分かり方の四段階	有効な教授方法	得られる結果
①事象を詳しく知る	調べ学習、NIE学習、インターネット学習、インタビュー、見学、体験学習、作業、模型づくり...	事象の存在する「意味」や関連する人々への「共感」が可能となる。
②目的・行為の因果連鎖をたどる	人物学習 インタビュー	事象の存在する「意味」を一定の視点から位置付ける。
③当時の社会への影響を「理解」する	加工された資料、グラフ、制御された調べ学習	一定の視点から事象の評価を行い、社会に対する一定の見方・態度を養う。
④現代社会への影響を「理解」する	子どもの身近な地域素材を教材にする	現代に生きる子どもに、一定の生き方・態度を方向付ける。

11



12



Point 1

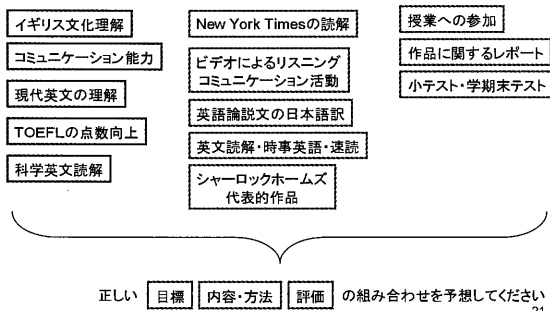
授業には「目標」と「内容」「授業方法」を有機的に結びつける授業「理論」があり、単なる環境改善や方法の工夫では不足。シラバスは、そのような授業「理論」にもとづくデザインである。

19

Ⅱ. 目標と評価

20

「展開英語」の目標—授業—評価



21

一般的に、授業は「授業目標」と「内容」や「方法」、「評価項目」が整合性を持つように作成されている。

大学の授業でしばしばおきる
授業と授業「理論」のずれ

伝統的常識的授業理論

本来の目標

旧師のやり方

旧師のやり方

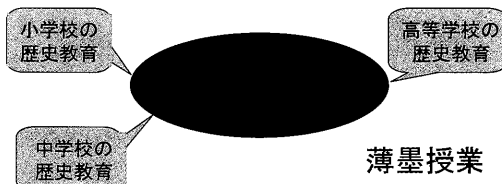
大学の教員

22

授業「理論」の多様性とずれ

- 小学校→中学校→高等学校の歴史教育は学年があがるにつれて詳しくなる。

...本当か？



23

小学校では「江戸時代」を教えていない！



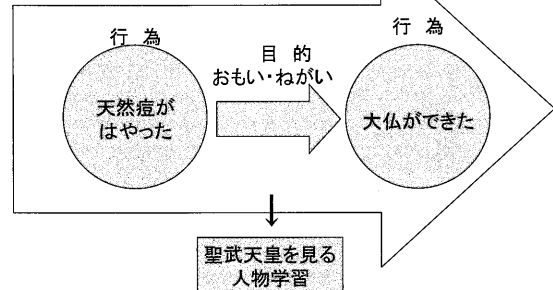
24

小学校と中学校の教科書の章

- ・ 地域の人々を見直そう
- ・ 古墳にほうむられた人々
- ・ 聖武天皇と奈良の大仏
- ・ 藤原道長と貴族のくらし
- ・ 源頼朝と鎌倉武士
- ・ 武士の文化と民衆の文化
- ・ 3人の武將と天下統一
- ・ 徳川家光と江戸幕府
- ・ 移り変わる社会
- ・ 明治の新しい世の中
- ・ 2つの戦争と日本の動き
- ・ 戦争と新しい日本の出発
- ・ 歴史と日本のあけぼの
- ・ 古代日本の歩みと東アジア
- ・ 中世日本の成り立ちとアジア
- ・ 近世日本と世界の動き
- ・ 近代ヨーロッパの発展
- ・ 変わりゆくアジア
- ・ 近代日本の成り立ち

25

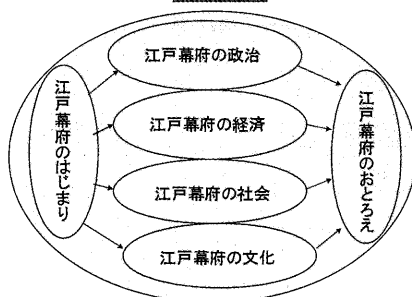
歴史の流れ



聖武天皇は、不安な世の中を大仏の力でなんとかしようとねがって大仏を建てた。

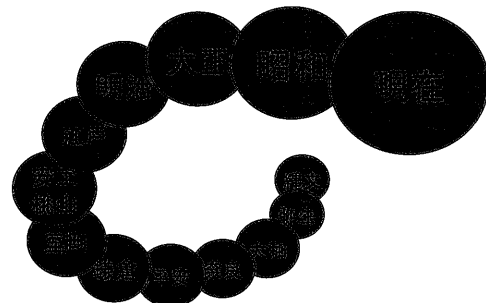
26

中学校歴史教育の構造 ＝時代の「特色」を知る



27

中学校歴史教育の構造



28

「授業目標」「評価」と授業のずれ

奈良の大仏は...

聖武天皇が作りたいとねがったからできた。

小学校: 目的—行為の因果連関

中国の文化を移入した律令文化の特色の典型。

中学校: 時代区分と時代の特徴

あまりあつかわれない＝律令体制の解説に関係ない。

高等学校: 社会体制の理解

29

「授業目標」「評価」と授業のずれ

「江戸時代」の特徴
について教える授業

歴史文献を
読みこなす

地域の典型的な
歴史的事象を中心に

歴史上の人物の
エピソード中心

小学校
目的—行為の因果連関

中学校
時代区分と時代の特徴

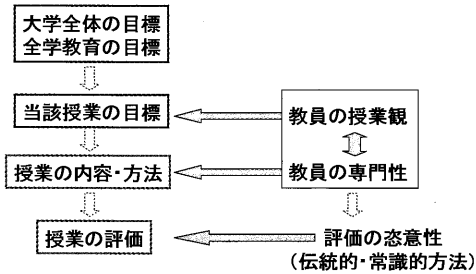
「江戸時代」の特徴
について理解する

先人の苦勞や
ねがいについて理解する

歴史史料・文献を
読みこなすことができる

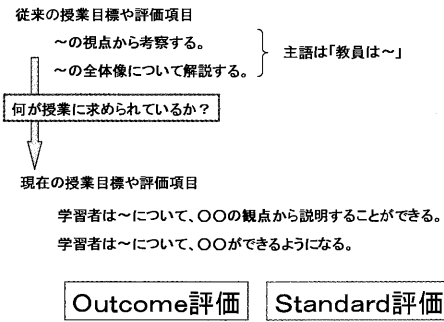
30

大学教育に見られるずれ



31

評価項目・視点の転換



32

Outcome評価

- 実例①
「コンパスを使って、紙の上に、同心円の二重円を書くことができる。」
- 実例②
「リストにある日本の河川名50のうち、80%以上について暗記ができる。」

長所

「授業目標」や「評価項目」が、「授業内容」や「授業方法」を直接示している。
達成の基準が客観化でき、測定可能である。

短所

より大きな「大学の目標」との整合性については説明が困難。
達成された基準と形成された学力との関連が不明確。

「できる」ことが重要な実験・実習向き?

33

Standard評価

- 実例①
「18世紀のイギリスの資本主義の展開について説明できる。」
- 実例②
「現在の民族紛争に関して自らの意見で説明し、評価できる。」

長所

達成基準にいたる方法に多様性や自由度がある。
学習者に、「授業目標」や「達成基準」を周知しやすい。

短所

テスト等自体が授業内容の内実を規定するので、注意深く行なう必要がある。
「授業内容」や「授業方法」が、基準達成に最適かどうか、つねに吟味される。

講義や演習向き?

34

Point 2

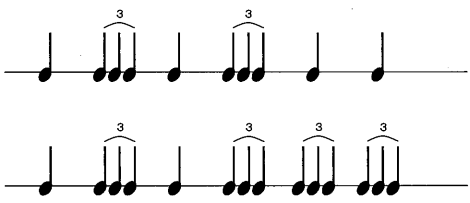
少なからぬ大学の授業は、「授業目標」と「授業」および「評価」が相互に関連性のないものになっている。
授業は、「授業目標」と「評価項目」達成のために、最適の「内容」と「方法」が選択されるように設計されなければならない。
そのためには、自らの学問研究の基礎的方法論を相対化する必要もある。

35

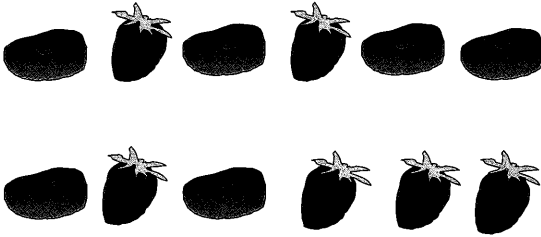
Ⅲ. カリキュラム・マネジメント

36

 ポレロのリズムを刻んでみよう

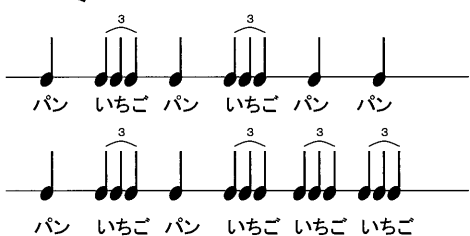


37



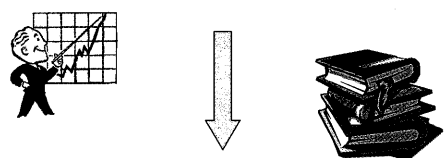
38

 ポレロのリズムを刻んでみよう



39

非常に有効な教育の技術



こういう技術をたくさん仕入れ、共有化できれば「よい授業」ができる？

40

 ポレロのリズムを刻んでみよう

ポレロのリズムは
上手に刻めた
...しかし

音楽教育はそれが目的か？
公教育で教えるべきことか？



41

目標の社会性・公共性

なぜ、この時間にこのような内容をこのような方法で学ばなければならないのか？

授業目標の公共性
(大学全体の目標)

学習者の必要や欲求
(何を期待して受講するか)

↓ ↓

授業目標

中東近代史入門

コーカサスの民族問題

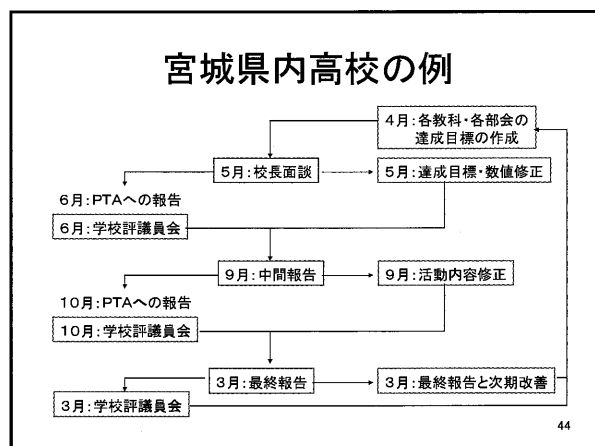
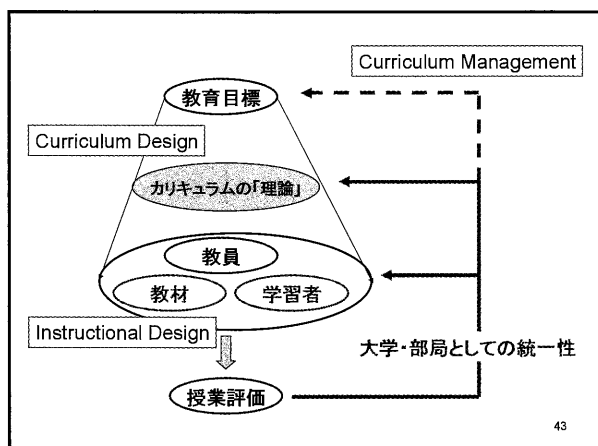
近代イギリス対外政策

初期イスラムの歴史的展開

近代フランス地域史

＝全学教育に必要な「歴史学」？

42

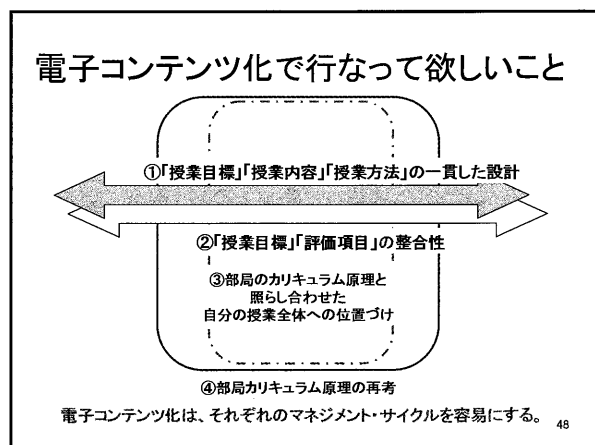
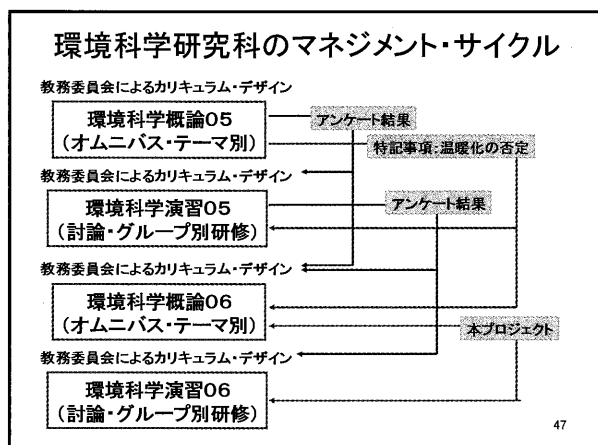


IV. 新しい大学教育を どうデザインするか

The number 45 is at the bottom right.

1年生 全学教育	全学教育・教育学	トピック: 討論中心
2年生 専門・概論	教育研究の理論Ⅳ (オムニバス)	入門: 講義と討論
3年生 専門・各論	カリキュラム論各論 カリキュラム論演習	系統的: 講義 最新の研究: 講読と発表
4年生 実験・実習	教授学習科学実験Ⅰ・Ⅱ	個別研究指導
大学院 講義・演習	カリキュラム論研究演習	最新の研究: 講読と発表

The number 46 is at the bottom right.



第1回テーマ別研修会 アンケート集計(10/24)

○参加者数:11名 ○アンケート回答者数:8名

1. 本日の研修会についてお聞きたいです。下記項目について、理解できましたか。5段階評価でお答えください。

項 目		5	4	3	2	1
Ⅰ. シラバスをつくるということ	1. 自らが授業は、意図するとなしにかかわらず、一定の「理論」のもとに構成されていることが理解できましたか。	1	3	2	2	0
	2. 表面的な「授業方法」の改善と、「授業目標」やシラバス全体を見通した授業の改善の違いについて理解できましたか。	2	4	1	0	1
	3. なじんだ授業方法ではなく、自らの「授業目標」に最適な「授業構成」や「授業方法」の選択することの重要性について理解できましたか。	3	3	1	1	0
Ⅱ. 目標と評価	1. 「評価項目」は「授業目標」に対応していること、授業自体は「授業目標」「授業項目」の達成のために構成されていることが理解できましたか。	3	4	1	0	0
	2. 「授業目標」「評価項目」の達成のために構成されていない授業は、学生を意図しない別の目標に導いてしまう可能性について理解できましたか。	1	5	2	0	0
	3. Outcome評価とStandard評価はどのようなものか、また、それぞれどのような利点と欠点があるのか理解できましたか。	1	4	2	0	1
Ⅲ. カリキュラム・マネジメント	1. 授業評価を授業改善へと生かす、個人レベルのカリキュラム・マネジメントについて理解できましたか。	3	2	2	0	1
	2. 高等学校で進められている学校評価とカリキュラム・マネジメントの具体的な流れについて理解できましたか。	1	2	3	1	1
	3. 「授業目標」や「評価項目」について、個別教員の考え方だけではなく、大学や部局全体の目標やカリキュラムの考え方と整合性を持たせる必要性について理解できましたか。	5	1	1	1	0
Ⅳ. 新しい大学教育をどうデザインするか	1. 本レクチャーを通して、部局におけるカリキュラム改善についてのヒントが得られましたか。	2	1	4	1	0
	2. 環境科学研究科の取り組みを通して、カリキュラムのデザインプロセスおよびマネジメント・サイクルについてのヒントが得られましたか。	0	4	2	1	1
	3. 本レクチャーを通して、個々のグループのカリキュラム・デザインについてのヒントが得られましたか。	1	2	4	1	0

2. 自由記述欄

- ・授業改善の表面的な工夫や方法ではなく、「目標」に連動したカリキュラムデザインの重要性が良く分かった。
- ・授業科目の性格、大学全体での位置付けを考慮うえで、重要な示唆を得た。授業の改善はこれらを、常に意識しながら進めていかなければならないことを改めて認識した。
- ・上記の内容等で、学生の評価、実際に授業をe-learningで作った例に基づき学生が(どのように受けとめたか)の資料があれば参考にしたいです。
- ・Ⅰ～Ⅲは知っていることです。授業技術の話も必要では。カリキュラムマネジメントは大変重要だが、東北大ではまだ未発達。

第 1 回 授 業 相 互 参 観 研 修

日 時：平成 17 年 12 月 21 日（水） 10：30～12：00

会 場：東北大学川内北キャンパス

教育・学生支援部大会議室（管理棟3階）

研修内容：

開 会

（1）授業改善に向けた自己点検・相互参観の方法について

（2）本年度における今後の研修計画について

閉 会

主催：東北大学高等教育開発推進センター

第1回授業相互参観研修内容メモ		
2005年12月21日		メモ作成：谷口、内容確認：関内

- ・関内先生挨拶。第1回授業相互参観研修をはじめます。
- ・資料確認、「ユーザーID」「冊子体」「アンケート」「次回のテーマ別研修会会場の案内」

(1) 授業改善に向けた自己点検・相互参観の方法について

- ・今回、自己点検・相互参観システムが、高等教育センターの情報教育室とアドックスの協力により出来上がった。
- ・最初に、「授業コンテンツの自己点検・相互参観研修法について」(案)の確認。
- ・1番目として、本プロジェクトの趣旨は、授業撮影をして自分の授業内容を相対化することを通して自己点検、授業改善に努めることにある。
- ・2番目として、他のメンバーの先生から学ぶべきところを吸収して授業改善を図るようにする。そのために、可能な限りの他の先生に授業コンテンツを公開するよう努める。
- ・3番目として、他のメンバーに公開するには勇気がいり、自分の授業にはプライドがあるだろうから、個別的な授業の批判は行なわないことを原則としたい。
- ・ただし、4番目として、個別ではなくて共通する課題、相互に授業を参観する中で表面に出てきた諸課題については、プロジェクトとしてどう考えるべきかと積極的に問題提起して欲しい。これを素材に我々として、授業改善に向けた共通のベースを作りたい。
- ・4番目の中には、例えば著作権をめぐる問題や、医学・歯学系の先生の中で共通の問題があったり、語学系の共通課題があったりするので、こちらにあげて欲しい。専門分野を越えて情報交換をしたい。
- ・5番目として、プロジェクトを通して作った各先生方のコンテンツの著作権問題について提案したい。著作権は高等教育開発推進センターに帰属すると規定して、私的利用をこえて使用する場合はセンター長の許可を得て欲しい。著作権は、作成された先生方、高等教育センター、アドックスにあるが、センターが統合して調整したいと思う。
- ・この点に関する背景として、参加のメンバーの中に今回作成したコンテンツを学会などで使用したいという話があり、これに対応する基本方針を作る必要があった。授業をオープンにしたいという考えもあるが、コンテンツの内容に関わる著作権の問題などから慎重でありたいと思う。
- ・以上、5点について提案したい。

Q センター長の承諾を必要とするということだが、これを大学で E-learning に使用する場合に、いちいち承諾を必要とするか、それとも自動的に許可が下りるのか。

A 今回の自己点検・相互参観の中で、FD 活動の一環として著作権問題も検討課題としており、コンテンツの中には著作権に触れるケースも出てくると思われるので、申請すれば自動的に承諾を得られるとは考えていない。

Q 著作権の帰属をはっきりさせることが必要だというのはわかるが、センター長に著作権が帰属するということは、例えば、本人の承諾なしでセンター長が許可できるのか。

A 本人が申請した場合を想定していたので、文章中のどこかに教員本人だということを入れたほうがよいように思う。

Q 相互参観するということで、プロジェクトの参加メンバーは想定していないのか。

A 非常に厳密を言うと、ネットワークに乗せた時点で著作権のことが問われるが、私たちも、著作権自体が今回の研修テーマの一つとなると考えている。

Q 自分自身は、著作権自体は、そのつど自分で判断したいのだが…

A 一応、プロジェクトとして公に外に出した場合、著作権に触れるケースが生じると問題が大きい。それから、撮影したアドックス社の立場から考えても、著作権に触れるコンテンツが表に出ることは避けなければならないと思う。著作権、肖像権などをめぐっては、学生の肖像権や、医学系なら患者の肖像権、パワーポイントの中の資料の著作権など、さらに資料自体は大丈夫としても参考文献の表紙の著作権、機器類のメーカーの名前など、我々の間で確認していく必要があるものが多い。

Q 著作権に関して、公開の4段階の中から自分で設定できるのか。

A 自己点検として他のメンバーに見せないということになれば著作権は問題にならないだろうが、このプロジェクトの趣旨ではないが大学として今後、授業コンテンツを E-learning の形で公開していく方向性もあるので、今回は著作権に関する問題も検討課題として扱っていきたい。

Q 5番目の項目の文章の主語はだれか？各メンバーか？

A 作成したメンバーだけだ。他のメンバーがすることはありえないのでは。

Q ありうる。例えばセンター長が、他の場所で大学の取り組みとして紹介することもありうるのでは。

・授業コンテンツが二次著作物である場合もある。センター長や関係者が紹介する場合は、引用になる。だから、センターはどのような利用の仕方をするのかを明示する必要がある。センターは著作権を持つものだから自由に使える。だから、限定すべきである。さらに、この先生方がどのように使えるのかを示す必要がある。

・著作権の問題が入り口でもあり出口でもあり、大きな問題である。このプロジェクトでは、自己点検と相互参観のために授業コンテンツを撮影した。これがネット公開になるところに問題がある。DVD に焼いて、メンバーに配布するだけなら問題は少なくなる。ISTU 自体もできる限り武装する必要があるが、それを考え出すと何もできなくなる。現在は、メンバーが相互に分ち合う必要にある段階で、センター長がどこまで統括するかが問題ではないか。もう少し範囲を限るべきではないか。ご存知のように授業の過程で様々な資料、教材を使用する場合には相当自由がある。しかし、不特定多数に公開することになると、かなりの問題が生ずる。そうすると、自己点検、相互参観の目的が限定される。

A 実は、医学系研究科の石井先生から、今回撮影したコンテンツを他の研究プロジェクト等

に使えるかどうかの問い合わせがあり、コンテンツの著作権帰属をはっきりさせる必要が出てきた。そこで、授業コンテンツは、基本的にはメンバーの先生方の相互参観だけの使用に限定するという趣旨で5番の項目が出てきた。

Q 授業担当者の本人からの承諾も必要としてほしい。例えば、本人とセンター長として欲しい。本人の承諾なしにどこかで使われるのがいやだという思いがある。

A では、「授業担当者とセンター長」としてはどうか。

・アドックスの寺崎です。まとめてみると、私的利用の前に「原作者及びセンター長」とすれば、皆さんの問題の80%ほど納得されるのではないかな。

A それでは、これまでの意見交換を踏まえて、自己点検・相互参観法の基本方針を修正してメンバーの先生方に提示したいと思います。

・次に、自己点検と相互参観の具体的な方法について、完成したシステムを中心にアドックス社から説明していただきます。

ーシステムと利用法についての説明ー

Q 編集されたフィルムは、一授業あたり何分になったのか？

A 大体、1時間15～27分。基本的には頭と後ろの余分な部分をカットして、中身はそのままにしてある。先生方の要求で短くしている場合もあり、著作権の関係でカットして、例えば一授業が20分ほどになっているケースもある。

・演習科目でとった部分は、学生が考えているところや著作権関係で問題となる部分をカットしたので20分になった。

Q それぞれの授業の頁が、「概要」になっているが、「講義一覧」でよいのではないかな。

A 「講義一覧」に変更したい。

Q シラバスを掲げたり、2～3行の授業概要をつけたり、いろいろしてみるのはいかがでしょうか。そのうえで、みんなと比較したらどうか。

・個別対応は大変なので、ある程度の共通の改定をしてもらおうほうがよい。

Q パワーポイントの画面があればどうするか。

A 講義別に添付資料の添付は可能である。予算の関係で対応してもらえば、可能である。

Q シラバスについてはどうか。

・実際の授業で本当にシラバスに書いたとおりのことができるかという問題もある。学生に提示した年度初めのものと、シラバスの流れ、コンテンツの微妙なずれについてはどう考えるか。シラバスの書き方に関しても考える必要があるが、各先生の授業の流れについては知りたいので、コンテンツ作成後に、簡単なコメントを教員が載せてはどうか。

A 経費の問題があるが、予算上可能であれば対応はできる。検討を要すると思う。

Q シラバスではなく、コメントという形で担当教官が2～3行書けるようになるとうよいのではないかな。

A 画面の写真の下にコメント欄を設けることもできる。また、授業ボタンの横にそれぞれの

授業に関するコメントをいただくボタンをつけることもできる。

Q リンクを張って、シラバスに飛ばせることができないだろうか。また、コンテンツの時間がどの程度かを示すのもよいのではないか。

Q ボタンの反応がわかりにくいので、マウスを重ねた場合にハイライトするようにしてほしい。

A ジャバスプリクトで対応可能である。

A その他のシステムについて要望などがあつたら（関内先生）あてに連絡して欲しい。すべて実現できるとは約束できないが、経費との兼ね合いで今後検討したい。

Q 私は4こまを撮影するが、そのうちの2こまは実験的なもので公開したくない。1こまは見たいのがある。こういう場合に、授業ごとに公開の程度をそれぞれ設定できないか。または、例えば、2こま分だけについて編集したものをDVDでいただけないか。

A これまで、何人かの先生方から自分のコンテンツのDVDが欲しいという要求が、特に学外の先生からあつたが、検討の結果、難しいとわかった。

- ・それでは、公開のレベルを下げるか、取る数を減らすようになる。
- ・撮影されているのを意識するのは仕方がないが、撮影のための授業をするのはおかしい。できるだけ自分の自然な授業を撮影するほうが、本来の意味ではないか。撮影のための実験というのは変ではないか。
- ・実際に、Webの画面を使う授業が見難いといわれているので、どれだけ見難いかを見てみたいと考えている。パワーポイントは見やすいだろうが、そのあたりを自己点検してみたい。見難ければ、他の先生にも迷惑をかける。方式による見易さの感じをつかみたい。内容が変わるわけではない。

Q 前に質問した各授業単位で公開の度合いの属性を設定するのは難しいのか。

A 技術的にはどうということではないが、採用しなかった理由は二点あつた。第一は納期の問題、第二は、個別の設定は日々のメンテナンスの負担が問題。そこまで必要かどうかという問題があるので設定が避けたが、必要であれば先生方がWeb上で設定することもできるようにすることは可能である。

Q 学会出張時や何らかの理由で欠席した学生に見せるのはできるのか。学生を集めて見せることもできるが…

A 今回は、メンバーの先生方の自己点検を目的に作ったので、そうした方法で使うことは想定していない。現状のISTUで載せているものとは違う。むしろISTUに正式登録してそのような利用をすることが考えられる。

Q 特定の学生を集めて、助手が画面を操作して見せるのは可能か。

- ・それは原著作者の私的使用にあたるのではないか。
- Q 今の授業を、ISTUにアップすることはできるのか。
 - ・できるが、著作権の問題がかかわってくる。まあ、それについてセンターはノーとは言わないのではないか。

・最後に一点だけ、操作上の補足説明。ログイン画面に戻るが、ID とパスワードを入力すると認証チケットが送られるが、20 分操作しないと認証がおかしくなる。さらに、ギリシヤ数字などは機種依存文字なので、文字化けが起こる可能性がある。ここではアラビア数字にさせてもらったので了承いただきたい。

(2) 今年度における今後の研修企画

ー経理係平野主任から海外研修の手続き等について説明ー

以上

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」

プロジェクト

授業コンテンツの自己点検・相互参観研修法

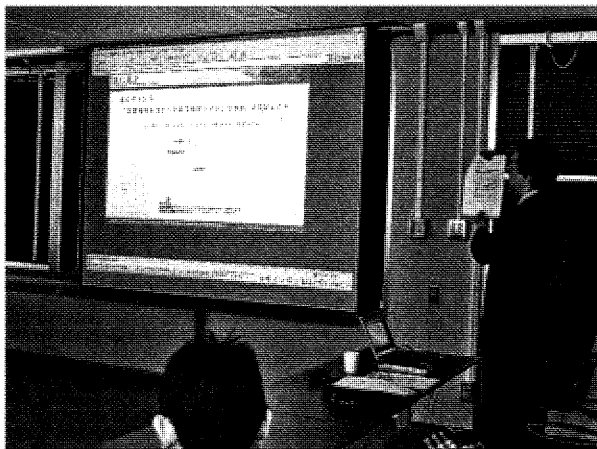
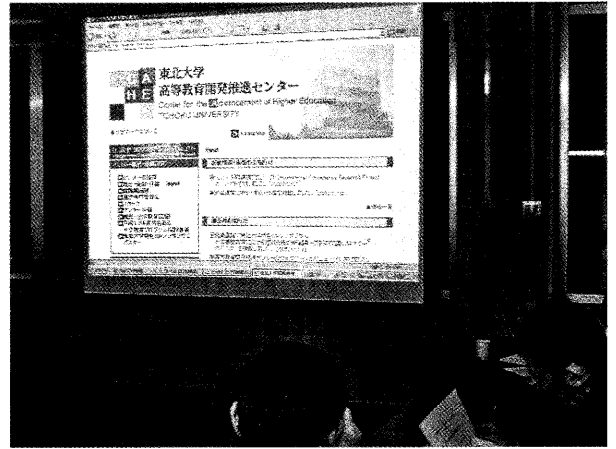
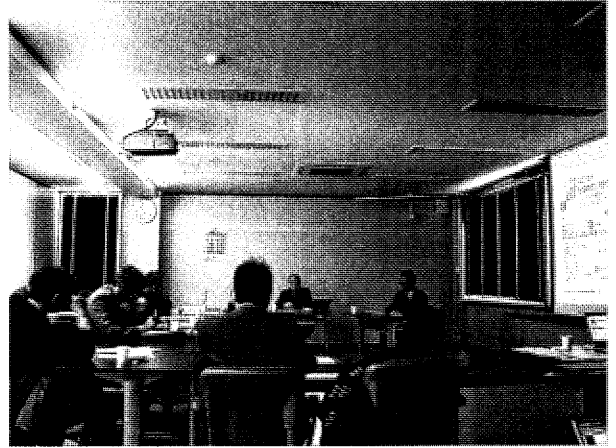
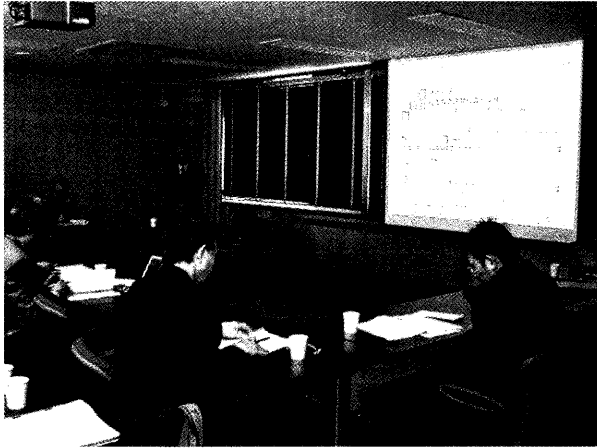
－基本方針－

- 1 各メンバーは授業コンテンツ視聴をもとに、授業内容と方法について自己点検し、その改善に努める。
- 2 各メンバーは授業コンテンツの相互参観を通して、参考となる授業実践例について情報交換を行い、自らの授業改善に取り入れるよう努める。
- 3 各メンバーは授業コンテンツの相互参観を行う過程で、他のメンバーの授業実践に対する個別的な批判、批評を行わない。
- 4 各メンバーは、相互参観を行う過程で明らかとなった諸課題の中で、プロジェクト全体として取り上げるべき問題等を積極的に提起する。
- 5 授業コンテンツの著作権は、東北大学高等教育開発推進センターに帰属し、各メンバーが私的利用や「引用」を超えて使用する場合には、原著者および高等教育開発推進センター長の承諾を必要とする。

第1回 授業相互参観研修 感想 (12/21)

○参加人数:13名

	感 想
1	プロジェクトの全体構想が分かって、良かった。 全体的に実際的で良かった。
2	・プロジェクト主旨の確認が出来ました。 ・相互参観用ビデオのファーストステップガイドは、基本的に良く構成されていました。 ・もう少し時間を取って、サンプルビデオが鑑賞できたらしかったです。 ・著作権は、研修時で提案された修正で了解しました。 ・他のメンバーの撮影回数が多いようでしたので、1～2回追加することを考えたいと思います。 大変内容のある研修でした。有難うございました。
3	全体の進行状況が分かりました。 経理係の方にも努力いただき有難うございました。
4	専用のサーバにまとめられて、統一感があり大変結構だと思います。 尚「自己公開」というのは、一寸変なので「自己点検」では。 注:I.C.R.P.は、大昔(70～80年前)からある著名な国際機関ICRP (International Committee for Radiation Protection)とまったく同じですが、O.K.でしょうか？
6	有意義な研修を企画して頂き感謝いたします。 研修の席上でも発言しましたが、著作権や肖像権の問題は本プロジェクトにとっても極めて大きなものであり、簡単に解決を見ないものと思います。いろいろな法律や権利を守る規則に規制されてしまい、教員自身の、授業・講義に対する創造性を伴った活力が削がれてしまうことが懸念されます。また、non-linear性とon-demand性が何といっても魅力であるe-learningの効果や、果てはその存在価値そのものが、これらの問題によってどのような影響を受けるのかを、現場の人間として真剣に見つめていかなければならないと痛感します。 以前、ISTUの方から、教育コンテンツに関わる著作権問題のガイドラインが示される予定、と伺った記憶があります。担当教員や少人数の教員グループでは手に負える問題ではありません。法学部の専門家や事務方の専門知識、外部業者からの提案等を統合して、それこそreal timeで、大学教育の場における著作権・肖像権の具体的な問題や事案についてきめ細かい対応が出来るシステムや専従の部署を本学として構築・設置する必要があると思います。 また、相互参観のあり方についても、参加者間で十分な討議がなされておらず、若干の温度差も感じられますし、しっかりとしたコンセンサス形成が必要であると感じられます。 講義形式の授業と、演習形式の授業、実験を中心に据えた形式の授業などでは、電子コンテンツ化する場合に、相当の性格上の違いが出てくることは想像に難くありません。しかもこの際にも著作権や肖像権の問題が複雑に絡み合ってきます。「パンドラの箱を開けてしまう」と表現しましたが、避けては通れない箱のような気が致します。本プロジェクトが、このような大きな問題に対して、可能な限り大学教育の現場に根ざした問題提起と、その解決法を模索し続ける役割を担うのも、意義深いことではないでしょうか。



第2回テーマ別研修会

eラーニングの新たな教育実践
ーWebOCMによるeラーニングー

日 時：平成18年1月31日（火） 15：00～17：00

会 場：東北大学川内北キャンパス

マルチメディア教育研究棟2F M203教室（CALL教室）

講 師：東北大学大学院国際文化研究科 助教授 杉浦 謙介

スケジュール：

開 会

研 修：テーマ「eラーニングの新たな教育実践
ーWebOCMによるeラーニングー」

- ① WebOCM の基本的機能
- ② WebOCM による e ラーニングの特徴
- ③ e ラーニング教材 ー作成とアップロードー
- ④ 音声ファイルの作成
- ⑤ e ラーニング授業の進行

閉 会

主催：東北大学高等教育開発推進センター

第2回テーマ別研修会

「e-ラーニングの新たな教育実践 ーWebOCMによるe-ラーニングー」

日 時：2006年1月31日（火）15：00～17：00

場 所：東北大学川内北キャンパス
マルチメディア教育研究棟2F M203教室（CALL教室）

講 師：東北大学大学院国際文化研究科助教授 杉浦 謙介

研修の趣旨：e-ラーニングを安くかつ簡単に実施するにはどうすればいいでしょうか。
この研修では、¥780のマイクとWordを使って教材を作り、WebOCMという
プラットフォームと連動させることによって、e-ラーニングを実施する方法を
紹介します。

参加申込みの締切り：2006年1月13日（金）

申込み先アドレス：y.kamada@bureau.tohoku.ac.jp

* ①所属②氏名③連絡先をご記入の上、メールにてお申込みください。

実施マニュアル：
http://www.he.tohoku.ac.jp/~sugiura/elearning_manual/

WebOCMサイト：
http://sugiura.intcul.tohoku.ac.jp/zengaku_e-learning.html
「WebOCM実験」クラスを開放しています。
教師ID: sensei Passwd: sensei
学生ID: student Passwd: student

WebOCM開発プロジェクトのサイト：
http://www.he.tohoku.ac.jp/~sugiura/cu_project/

参考：
2006年1月28日（土）に「第二言語習得研究とコンピュータ支援外国語教育」
というテーマでシンポジウムをおこないます。WebOCM開発グループも講演します。
<http://www.lbc21.jp/TEMP/sympo2j.htm>

東北大学ドイツ語CALLのサイト：
http://www.he.tohoku.ac.jp/~sugiura/german_call/



高等教育開発推進センター
TEL: 022 (795) 7551

第2回テーマ別研修会 アンケート集計(1/31)

○参加者数:23名 ○アンケート回答者数:23名

1. 本日の研修会についてお聞きたいします。下記項目について、理解できましたか。4段階評価でお答えください。

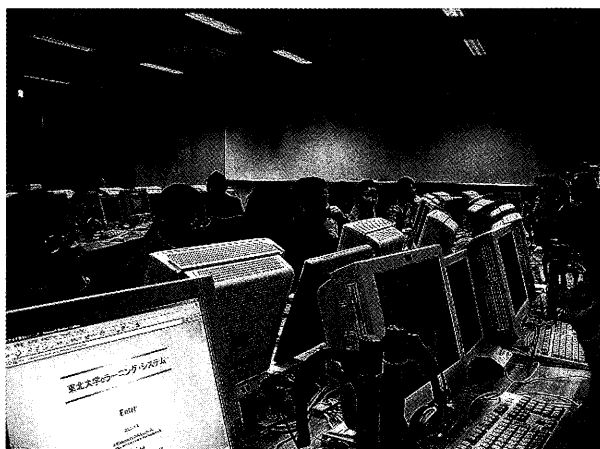
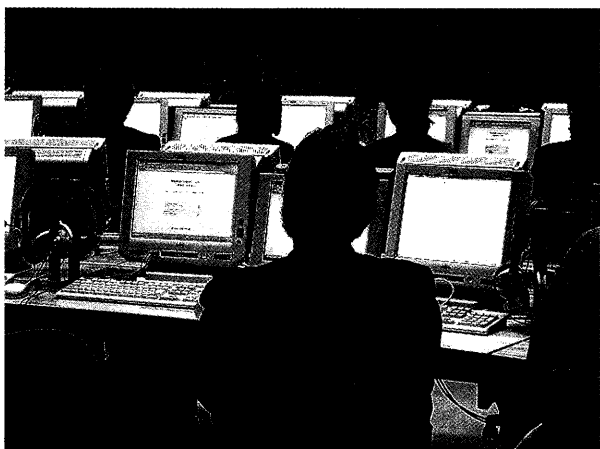
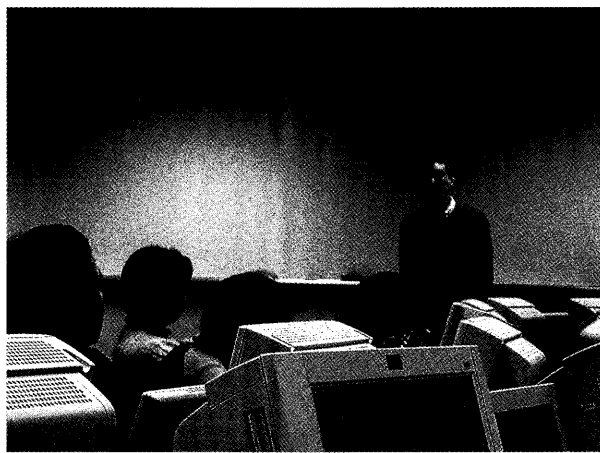
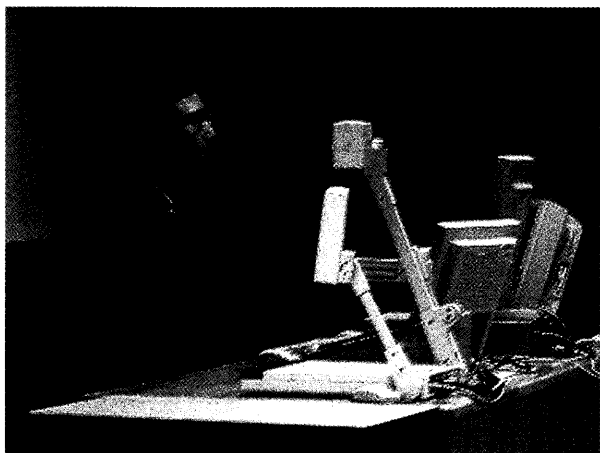
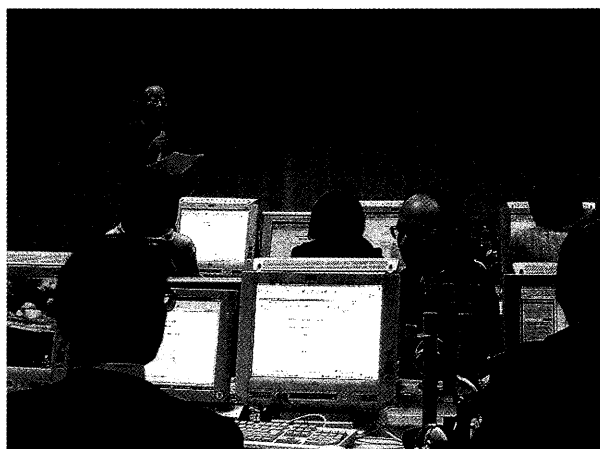
	4				2	1
	よく理解できた	理解できた	あまり理解できなかった	全く理解できなかった		
① WebOCMの基本的機能	12	10	1	0		
② WebOCMによるeラーニングの特徴	15	7	1	0		
③ eラーニング教材 ー作成とアップロードー	7	12	4	0		
④ 音声ファイルの作成	9	10	4	0		
⑤ eラーニング授業の進行	9	11	2	1		

2. 自由記述欄

- ・今後の開発課題も多々あると思われるが、大変興味深い取り組みと感じられた。
- ・ありがとうございます。もう授業をもつ可能性が低くなってしまいましたが、若い人に勧めてみます。
- ・辞書の単語をしゃべらせたり、CNNの記事等の英語をしゃべらせたりはできるんですか？今日は大変勉強になりました。また、WebOCM勉強し直したいです。
- ・とても興味深い講義でした。今までこういった形の授業を体験したことが無いので、とても新鮮でした。語学勉強においてはとても良いシステムだと思います。今後の発展にも期待しています。お疲れ様でした。
- ・「仲間と一緒に作ってゆく」という言葉にうらやましさを感じた。授業の構成法、ウェブでの著作権問題の回避法に感心した。
- ・このPC自体の操作に慣れていたため、実技についてゆけなかった。
- ・私は学生ですが、今後の研究に非常に役立つ研修会でした。ありがとうございます。
- ・よく勉強になりました。WebOCMの全体像がなんとなくわかって、自分の研究にも参考になると思います。
- ・病院職員の安全教育(2000名程度)等に使えると大変有用に思えました。ところで、20名～50名程度で、CALL教室等を使わずに簡単に設置できる双方向教育のシステムについて御紹介いただけると有り難いのですが、「ケータイゴング」やHPのPDAを使ったものは、知っておりますが、もっと簡単なものはないでしょうか。
- ・理解できたに○をつけましたが、実は、理解できたのかどうかがよく分かりませんでした。ただし、WebOCMが大変面白い方法であることはよく分かりました。機会があれば是非取り組んでみたいと思います。

2. 自由記述欄(つづき)

- ・第2段もぜひお願いします。
- ・色々使ってみたいと思います。
- ・大変有益なシステムをご紹介いただきありがとうございます。近い将来ぜひ利用させていただきたいと思います。
- ・WebOCMの利用は、東北大学内のみでしょうか？他大学においても、利用できれば良いと思います。また、自分はMacOSを使っているのですが、Macにも対応すれば…。今後、しっかりとシステムを理解して、自分でも使いたいです。
- ・丁寧なご説明に感謝いたします。
- ・WebOCMの機能はわかりましたが、他システムとの違いは？
- ・何度か手を動かしながらの研修を受けたくなりました。新しいシステム開発には大変興味があり、eラーニングの使用が可能ならばチャレンジしたいと思います。このような機会を持って頂き、本日はどうも有難うございました。次回も参加したいと思います。
- ・とてもエキサイティングなデモでした。是非利用して、エキサイティングな教材を作り「学ぶ楽しさ」を学生と共有したいと思います。学生をペアにして、1台のコンピュータを使用したり、グループを作り、時々画面に戻るなどの工夫をすれば、黙々と画面に向かうシーンは改善されるのではないかと思います。特に語学の授業は自分で声を出すことが重要なので。
- ・elearningの教材作成に関わったことがあり、多額のお金がかかったため、紙教材や、昔ながらの切り貼りに戻りかけたところでした。杉浦先生のお話を伺って、自分にも出来そうな気がしてきましたが、もし、分からないことがあったら、伺うことができる方が、東北大にいちしやるといことが分かっただけで、心強く思います。ぜひ、チャレンジしてみたいと思います。今日は有難うございました。
- ・使いやすい機能が多いようですね。使ってみようと思います。
- ・語学の授業だけでなく、他の授業科目でも使えるような多くの機能(掲示板、課題提示etc.)を備えていると思います。大学全体にこのシステムが普及して、教育改善の基盤作りとなるように期待しています。



第 2 回 授 業 相 互 参 観 研 修

日 時：平成 18 年 2 月 28 日（火） 10：30～12：00

会 場：東北大学川内北キャンパス

教育・学生支援部大会議室（管理棟 3 階）

開 会

研修内容：

- ① 自己点検・相互参観研修の成果に関する第 1 回アンケート調査に寄せられたご意見
- ② メーリングリストに寄せられたご意見
- ③ 自己点検の事例紹介（三石担当授業科目）

閉 会

主催：東北大学高等教育開発推進センター

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修 ～前半を実施して～

東北大学大学院教育情報学研究部
三石 大

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

1

■ 自己点検・相互参観研修の目的

- ◆ 自己点検:
→ 普段の授業をふり返る
- ◆ 相互参観:
→ 他教員の実施する授業を参考にする
他教員からの意見をもらう



今後の自身の授業設計、実施に活かす

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

2

■ 期待される効果

◆ 授業のふり返り

- 過去に実施した授業から次回授業を改善

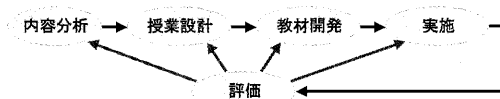


図1: 教授設計プロセスモデルの例: ADDIEモデル[1]

- 日常的な取り組みによる実践スキルの向上[2]

[1] R.M. Gagne, W. W. Wager, K. C. Golas, and J. M. Keller, Principles of Instructional Design (5th ed.), Thomson Wadsworth, 2004
[2] 澤本和子:「授業研究と教師の成長」学校の研修ガイドブック③ 学力向上・学習評価研修, 教育開発研究所, pp.92-99 (2004)

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

3

■ 期待される効果

◆ 授業のふり返りによる高度化:

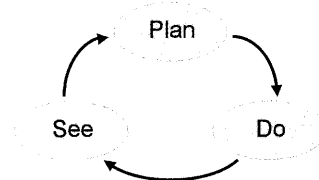


図1: 継続的な授業設計プロセスの繰り返し

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

4

■ 期待される効果

◆ 他教員の実施する授業を参考にする

- 自分とは異なる授業方法を知る
 - 自分のやり方とは違う方法を知り、自身参考にする
- 自分の不得意な部分の解決方法を知る
 - 自分ができていないことを他者がどのように解決しているかを確認し、自身の参考にする
- 自分や他教員に共通の失敗を確認する
 - 陥りやすい失敗を洗い出し、共に解決方法を探る

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

5

■ 期待される効果

◆ 他教員からの意見をもらう

- 自分とは異なる視点で確認してもらう
 - 自分では気づかない良い点、悪い点を知る
 - 自分では気づかない問題解決方法の助言を受ける
 - 自身で感じていることの再確認を行なう
- 他者に見られることを意識する
 - よりよい授業を目指すきっかけとなる

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

6

■ 実施結果

- ◆ 自己点検に関して寄せられた意見(1/2)
 - 授業計画に関して
 - 導入がよくない
 - 授業計画が不十分
 - 進捗方法に関して
 - 学生全員の確認が必要
 - ペース配分が悪い
 - ペースが速すぎる / 内容が多すぎる
 - 冗長な箇所がある

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

7

■ 実施結果

- ◆ 自己点検に関して寄せられた意見(2/2)
 - 授業方法に関して
 - 板書内容が解りづらい
 - 感嘆詞、間投詞が多い
 - 学生との対話に関して
 - 質疑応答がよくない
 - 学生が受身 / 一方的な授業展開
 - その他
 - 授業の雰囲気、授業後の印象がつかめた

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

8

■ 実施結果

- ◆ 他者の授業を見ての意見
 - 様々な授業形態、個性あふれる授業がある
 - ダイナミックな授業ぶりに感銘を受けた
 - etc

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

9

■ 具体例

- ◆ 三石の授業を例に取り...
 - 授業: IT教育基礎論演習B
授業概要: eラーニングの実現に必要な情報技術の習得
 - 授業時間内に技術の解説、演習内容の説明
 - 実施後、レポート課題を課し、1週間後に提出
 - 全13回
- 対象学生: 大学院教育情報学教育部 修士1年

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

10

■ 具体例

- ◆ 授業にあたり意識したこと
 - 授業計画、内容の明確化
 - 授業内容を文書化し、学生の繰り返し学習へ対応
 - 自身の授業計画、再設計に利用
 - 少人数教育を活かした対話性
 - できるだけ個別の学生との対話を行なう
 - 全レポートを採点し、次回に返却
 - 授業への親しみやすさを出す
- ARCS動機付けモデルを目指す

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

11

■ 補足: ARCSモデル

- ◆ ARCSモデル:
学習意欲を高めるためのインストラクショナルデザイン手法の1つ
 - Attention (面白そう)
 - 学習者の注意を引き、興味を抱かせる
 - Relevance (やりがいがありそう)
 - 目的とともに既存知識との関連を示す
 - Confidence (やればできそうだ)
 - 適切なフィードバックを継続的に与える
 - Satisfaction (やってよかった)
 - 学習者の到達度を明確にし、評価する

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

12

■ 具体例

◆ 自己点検の結果:

- 適切な授業展開となっていない
 - 予定したペース配分となっていない
 - 20~30分を演習時間として残す予定が、1時間半しゃべり続ける
 - 授業展開が明確になっていない
 - 授業計画が十分ではなく、いったりきたり
 - 授業内容を文書化したことによる自己満足
 - 需要項目が不明確
- 学生との対話が乏しい
 - 学生の注意を喚起できていない
 - 学生の質問を引き出せていない
 - 黒板の方を向き、学生に背を向けている時間が長い

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

13

■ 具体例

◆ 他先生からのご意見(1/2):

- 一方通行の授業展開
 - 学生の反応が乏しいのでは?
 - 説明事項が多いことを理由に、つい、おそろかにしていました。要所要所に、問いかけが必要だとわかりました。
 - 理解度チェックをしてはどうか?
 - レポート提出による確認に頼りすぎでした。その場での学生の理解の確認をする必要がありました。

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

14

■ 具体例

◆ 他先生からのご意見(2/2):

- 理解しやすい
 - 話し方がゆっくりで聞き取りやすいのでは?
 - 聞き取りやすいというより、退屈な授業でした。授業展開のメリハリ、テンポを検討する必要がありそうです。
- 板書が中心
 - 図を用意し、学生に参加させてはどうか?
 - 授業計画、準備が不十分で図を用意できていませんでした。今回の実施記録から、図を用意できそうです。

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

15

■ 具体例

◆ 自己点検・相互参観の感想

- 自身の授業の欠点がよく判った
 - 他先生からの指摘がためになった
 - うすうす感じていた痛いところを指摘していただいた
 - 自分が気づいていなかった点を指摘していただいた
- ↓
- 改善すべき点が明らかになった
 - 改善策の検討のきっかけとなった

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

16

■ 効果的なふり返しを行なうには?

◆ ビデオ確認の問題

- 記録したビデオを見るのは大変!!
 - ビデオのどこを見て良いか判らない!!
- ↓

◆ 効果的なふり返し方法はないのか?

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

17

■ 効果的なふり返しを行なうには?

◆ 授業計画と実施内容の相違

- 完全な授業計画は立てられない
 - 設計段階では必ずしも完全な授業プランを立てておらず、授業中に生徒の反応を基に局所的なプランを立てている[3]
 - 想定外の事態も起こる
 - 授業中には予め想定しなかった事態がおき、このような場合、授業プランは背後に退き、生徒との相互作用的な意思決定が重要
- ↓
- 授業計画と実態との差が意思決定のきっかけとなり、授業計画の設計、再設計に重要な情報となる[4]

[3] 浅田匡:「授業設計・運営における教室情報の活用に関する事例研究: 経験教師と若手教師との比較」, 日本教育工学雑誌, Vol. 22, No.1, pp.57-69 (1998).
 [4] 岩崎静夫:「授業における教師の意思決定モデルの開発」, 日本教育工学雑誌, Vol. 12, No.2, pp.51-59 (1988).

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

18

■ 効果的な振り返りを行なうには？

◆ 授業中の教師の対話的な教授活動の考慮

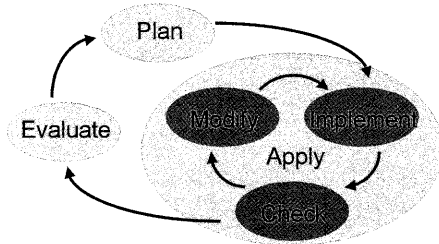


図2: DoubleLoop教授設計プロセスモデル

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

19

■ 効果的な振り返りを行なうには？

◆ 授業計画と実施内容の差

■ なんらかの対応行動をとった結果

- 授業計画の不備への対応
- 授業計画の詳細化、緻密化
- 確認された学習者の理解状況への対応
- 学習者からの質問、意見への対応
- etc



- 差異を特定し、確認
→ 振り返りのポイントをつかむことが可能？

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

20

■ 効果的な振り返りを行なうには？

◆ 差異の特定方法

■ 教授行動の変更箇所の確認

- 教授行動の「追加」、「変更」、「詳細化」
 - 計画された教授行動以外の活動の実施
- 教授行動の「削除」
 - 計画された教授行動の取りやめ
- 教授行動の「入れ替え」
 - 計画とは異なる順序での教授行動の実施

■ 教授行動の所要時間の確認

- 詳細化、簡略化された箇所の特定

2006/2/28

I.C.R.P. 自己点検・相互参観研修

21

自己点検・相互参観研修の成果に関する第1回アンケート調査

	ア ン ケ ー ト 項 目
	【1】自己点検・相互参観を実施しての感想
1-①	①ご自分のコンテンツを視聴して、授業内容・方法等の分析、改善への方向性など自由に記入してください。
1-②	②他のメンバーのコンテンツ視聴から、学べき点やプロジェクト全体で取り上げてほしいテーマなどについて記入してください。
2	【2】システムの利用に関して 授業コンテンツの自己点検・相互参観システムで、システム上改善してほしいと思うことがありましたなら、記入してください。
3	【3】回答内容の公表に関して アンケートの回答を、メーリングリスト等を利用してメンバー内に紹介したいと思います。公表に関して下記に丸をつけてお知らせください。 公表可 () 無記名の公表は可 () 公表不可 ()

1-①	18年度スタートの新規に設定された東北大学全学教育基幹科目「科学と情報」を8月にお引き受けし、18年4月からの開講準備中の授業です。ISTUを活用した(併用)授業であり、大学1年生受講者100数十名、TA4名(含む収録要員)を想定して準備しております。第1回目の授業を想定して、使用予定の講義室で、予定TAを含む大学院生を前にして予行演習授業を実施しました。 第1回目の狙いはもちろん導入です。準備の出来て居ない大学1年生を前にいたずらに、難しいことを述べるのではなく、まずは親しみを持って貰うために、講師の自己紹介を長く行い、これからの大学での生活や進路の一旦を知ってもらうなどしてイメージをつかんで貰うことを狙いとしました。今の大学1年生の最も大きな困難さは、教師とのコミュニケーション、対話が出来ないことです。その意味で、教員がバリアを下げるのが大事だと考えており、そのようなことを伝えるようにしました。大学院生のTAはそんなことのコーディネーション役としての役割もあります。 実施したのはいまのところ1回だけですが(見やすいように3部に分けて閲覧して頂いております。課題はありますが、概ね目標は達したものと思います。本番前に3、4回実施したいと思っています。 大学1年生向けPP利用授業のよく知られた大きな問題は、文字の大きさ、提示速度、話の速度と、彼らのノート筆記の速度との兼ね合いです。ノート筆記は、人間のマルチモーダルな神経ネットワーク構築のために非常に重要な学習活動ですので、推奨し、PPのハンドアウトは配ることはしません。授業の中で、ノートの取り方についてアドバイスしたこと(ノートが取れたかどうか授業後確認すべきだったことは反省点)、復習を兼ねてISTUで再度確認補充が出来る条件を用意したことで概ね妥当なものだと考えています。文字の大きさについても注意しました。なお、大学院生からの評価を集めることが出来ていませので、これから実施します。 彼らに、毎回課題を出すこと、特に「授業内容の要旨をまとめること」は必ず課すことを授業の最初に伝えておいた方が良くと思いました。本番では修正します。 なお、他人の著作物を「引用」の範囲を超える形でISTUには搭載出来ませんので、適当な教材はプリントで配ることも考えております。しかし、その量(配布数)については著作権法上議論がありますので、検討中です。ウェブサイトの紹介をメインにしたいと思っています。
	第1回目の授業の狙いのもう一つは、彼らの「科学と情報」の文脈での初期状態を把握することで、授業のかなり早い段階(授業に入って簡単な自己紹介の後すぐ)でアンケートを行ったことです。授業の最後にも、似たようなアンケートをして、彼らの成長を確認したいと思っています。(もちろん、彼らの成長への当該授業の寄与は一部に過ぎませんが)それが目標達成という意味での評価の一環だと思っています。 なお、本科目の開発や狙いややり方については、別途、「論文」を用意しており、折に触れてご紹介します。「論文」の目的は、大学院教育情報学研究部教育部の一員として、ISTU併用科目(ブレンディング授業)の一つの事例(模範ではありません)をお示しすることで、何かの役に立つのであればと思っております。
1-②	それぞれの先生が個性あふれる授業をされておられることが分かりました。ビデオ収録のことを皆さんが学生にお断りになっていたのは良かったと思います。初めはビデオをちょっと気にしておられますが、だんだんと気にならなくなります。これは自身の経験からも明らかです。この点を克服すると、eラーニングへの道のりは大分近くなるのではないかと思います。 なお、それぞれ、授業の目的、目標、対象者(学生)がどのような(大学生、大学院生)人たちなのか、拝見した授業が何回目の授業で、それまで、どんな前提知識が与えられ、どのような授業活動がなされてきた後の授業なのかが分かりませんので、今の段階ではコメントはしようがありません。
2	上とも関係しますが、シラバスを掲載することが最低限必要と思います。

1-①	CALLの授業ですので、学生の自律学習をどのように教室内・授業時間内に支援するかが大きな課題です。その際に、学生がコンピュータを介した教材に集中している時間帯と、教員による解説や説明に耳を傾けなければならない時間帯との区別の一層の明確化を図らなければならないと感じます。何度もcall attentionして、「講義」する時間帯を合図しているつもりですが、その直前まで自律的に行っていた学習や訓練の進捗差が学生間に当然生じているわけで、その差をTAと協力しながら全体的に把握することの必要性を改めて感じています。
	PCやネットワークを中心とした諸機器に発生する不慮の不具合が、授業運営上、決定的な障害となることがありますが、一応の対処準備をしてあるので、かなりの場合、受講生の不利益を回避できていると思います。そのための準備や心構えが大変な労力を要求することも事実ですが。
1-②	このプロジェクト立ち上げ当初から感じておりましたが、やはり「講義」形式の授業と、全学教育の外国語の授業のように「演習」形式で行われるものとは、コンテンツ化の対象として相当の相違があると感じました。著作権法上の問題はさておくにしても、特に私の担当しているCALL教室を使った一種の自律学習を前提とした演習の授業を、「マネージする」手法の参観・自己点検という面から捉えるのは構いませんが、授業そのものの流れとか、さらには授業の内容にまで踏み込んだ観察の対象とするのには無理があるのではないかと思います。
	従って、本プロジェクトの中でも。上記のような「講義形式」、「演習形式」の授業に関してという2本立ての路線が必要なのかもしれません。大学院の授業でも、言語教育実践などを扱う場合には、具体的な語学教材作成というような演習的な要素も「講義」中に混在することもあります。
2	最大のテーマはやはり著作権の問題だと思います。ISTUから教育現場に直結した著作権問題解決に関わるガイドラインが公開されると以前聞き及びました。それを大いに参考にしながら、このプロジェクトが、大学の教育現場での実態と照し合わせた著作権・肖像権等に関わる諸問題のより良い解決手段を見出す糸口になるべきではないかと思います。
	授業の撮影そのものは、さすがにプロの仕事で、音声やアングルやパンニング等に関しても申し分ないかと思います。しかし、講義中に使用したPower PointのスライドがWeb公開用画面の左上隅等に表示される時、全学生が実際に読めるような大きなサイズのフォントを用いたスライドであるにも関わらず、ブラウザ上では文字が不鮮明で、判読に苦しみます。コンテンツの画質を、少なくともPower Pointの画面が判読可能なレベルにまで上げておく必要が感じられました。

1-①	実習的内容は、学生も相当積極的に参加していたが、講義となると授業全体のトーンが受け身的で、消極的になっている。実習の内容と講義とを結びつけるものをもっと工夫して提示すべきであった。また学生からの質問の受け方も、あるいは学生への質問の仕方も工夫がなく、形式的で対話性に欠けていた。
1-②	ビデオを見返す際の、チェックポイント（できれば短時間で振り返りを済ませたい。気になる箇所を見返したり、メモをとったりしていると実際の講義の倍近い時間が必要になる。日常的な評価に結びつけるには、もう少し要領を考える必要があると感じている）、教師と学生のコミュニケーションを評価する視点など
2	特に現時点で困っていることはありません。

1-①	授業展開の計画が十分ではなく、だらだらしゃべっていたり、説明が後戻りしたりする点があり、学生にとってわかりやすい説明となっていない部分が多々見受けられた。パワーポイント等のプレゼンテーションツールを使わず、板書に頼っているために、黒板に向かっている時間が長く、学生に向いて説明を行なっている時間が少ない。
1-②	授業の導入(動機付け)、展開方法(興味を持続させる方法)など、授業設計における指針などを学べるとありがたい。
2	授業概要、目的など、シラバス情報、もしくはシラバスへのリンクがあると便利ではないか。他メンバーに確認してもらいたい点など、コメントを登録できると便利ではないか。

1-①	授業の導入部分がまだまだ不慣れであると思います。
	質疑応答部分がまだまだ不慣れであると思います。
	専門的な事項について、現場や日常の事柄に置き換えて話をすると、理解して頂いたようです。 最後の方に急ぐと話が早くなるので、ペース配分を考えて講義内容を調整した方が良いと思いました。
1-②	皆さま素晴らしい講義と思います。それぞれ授業の目的や要旨について予め教えて頂けると、他分野でも理解が進むと思います。
	グループディスカッションや実習などにおける教育手法についてもご教授して頂ければと思います。
2	動画像がより大きくなるようであれば、スライドや黒板の内容が見易いようにも思います。
	公開の有無は別として、聴講者も撮影し反応が分かれば、有り難いと思います。

1-①	電子コンテンツ化（撮影し再生しながら利用する）した場合とライブの授業では、各々に相応しい形態があるように感じた。具体的には、例えば、話者の動きで、電子コンテンツ化した場合にはあまり動かない方が（撮影しやすく）視聴しやすい。
	その他にもいろいろとあるのですが、特に共有すべき感想かどうか・・・
1-②	岡田ロベルトさんのダイナミックな授業ぶりには感銘を受けた。多分に、教室の設備が可能にしている面もあり、羨ましい。
2	ADOXのSEさんに会議の席上で提案のあった点が全く取り入れられていない。シラバスとの連動、コメント欄の新設、コンテンツ一本あたりの時間表示や再生時の時間表示等は早急に改善してもらわないと不便である。
	公開のレベルが希望していたものと違うと思うが、もはや手遅れのような・・・。

1-①	授業に必要な図表はプリントで配布しているが、電子化する場合に、これを PowerPoint などスクリーンに提示しながら授業を進行させる必要があること。
	一方的にしゃべる講義からの脱却について。
1-②	板書の際、整理番号を付ける。
	区切りを設けて、質問時間を設定する。
	板書をしながら、プリントや教科書などの教材をPowerPointで有効に提示する方法。
2	—

1-①	カメラを意識してか、普段よりかなりゆっくりと話をしていた感じがして、自分自身、冗長な印象を受けた。繰り返しの内容もあったので、テンポを上げたりズミカルな展開も必要と感じた。
	板書を中心にした講義であるが、学生にとって理解しやすい板書になっていないところがあり、反省材料である。 40名前後の授業なので、講義型授業の中で学生からの発言も求める双方向の展開を来年度以降、ぜひ実践してみたい。
1-②	講義、実習、演習など様々なタイプの授業形態があり、そこでの教師と学生との関係という観点から多くを学ぶことができ、大変勉強になっている。
2	シラバスの概要提示等をして、他のメンバーの授業内容の骨子、コンテンツの位置づけなどが分かるようシステムを工夫しなければならないと感じた。

	授業内容・方法： 授業の構成は、講義内容によって組み立て方を検討し、講義方法も内容に従って使いこなすことが必要だと感じた。映像を通して、学生の立場から授業を理解することが出来るため、より学生のための講義方法の検討が可能となる。
1-①	改善の方向性： 授業撮影による自己チェック機能は、はじめて自分の授業映像を見ることによって理解することが出来た。映像からは、授業全体の雰囲気や授業後の印象などを感じることが出来るため、それらの点に気をつけた今後の授業に役立たせることが出来る。映像は、ドキュメンタリー映画のように撮影して頂いた為、改善後の授業では、授業前に絵コンテを描きながらの授業構成づくりも考えられる。 授業中の説明は、言葉を選びながら簡潔明瞭に話すことの大事さを感じることが出来た為、今後の授業改善に役立てたい。
1-②	他のメンバー2名の講義映像を視聴させていただき感じたことですが、講義内容にあった授業方法の選択と構成が出来ていて、各先生方の授業に対する工夫や方法が大変参考になりました。また、授業を通して学生に伝えたいことは、授業の最後に整理して学生たちに再確認する方法もを見せていただき、学生にとって効果的な授業になることが分かりました。 プロジェクト全体で取り上げてほしいテーマ： 講義映像された先生方と授業に出席した学生たちが参加して、一緒に授業について討論できるワークショップのような場が持てると、授業改善のための検討により具体性や現実性が増すことと思います。
2	宮城大学内で自己点検が出来るように映像視聴の方法を改善して頂きたい。 相互参観システムの中で、各授業の講義概要・キーワード等があれば、視聴するときに見るポイントが分かりやすい。 授業中の学生たちの受講姿や講義への反応が分かるような撮影が可能ならばお願いしたい。
1-①	「えーと、まあ～、あのお～」が多いのでなくしたい（自分の日本語の限界？） もう少し落ち浮いてお話できるように工夫が必要 お話のペースが速い？ （ダイナミックでテンポの良い授業を心得ているけど、早すぎると逆効果？） パワーポイントを使用していることで、進み具合もややはやいのでは？ ※パワーポイントの資料は学生に配布している
1-②	—
2	—
1-①	CALL教材を用いたドイツ語の授業。実際は、学生はドイツ語の音の洪水なかで、つぎつぎと解答を迫られている。教員のほうは、教材説明や解答へのヒントを出し続けている。90分の授業後には、学生も教員も魂が抜けたようになる。しかし、ビデオに撮られた教室風景は、何も起こっていないかのようなのである。授業の実体は、教室のなかではなく、ネットワークのなかにあることを実感した。今後は、CALLの特性を生かして、教室をこえたところでも学習できる環境をさらに整えたい。
1-②	現在、勉強させていただいています。
2	とくにありません。

1-①	〔授業内容・方法等の分析〕	
	授業内容が、多すぎる。	
	話し方が、単調すぎる。	
	一方向の授業である。	
	ポイントが不明瞭である。	
	〔改善への方向性〕	
	授業内容の、事前検討をさらに吟味する必要がある。授業内容が多すぎるため、パワーポイントの列挙事項の棒読みになることが多く、学生の授業で学ぶ内容の深さが不足しているような印象を受ける。	
	語りかけるような話方に変える。興味を持たせる話し方について検討する。	
	途中、学生に質問、意見を問う方法を取り入れる。	
	授業内容の事前検討をさらに吟味し、重要事項を学生に認識させるための方法を検討する。その一つとして、プレ・ポストテストを実施しているが、比較的効果が上がっているように思われる。強調のない授業であっても、プレポストで重要事項が把握できるようである。その結果、ポストテストの改善率が良い。	
1-②	〔問題点〕	
	モデル・コアカリキュラムで教授内容が一応、指定されているが、その内容は具体的でなく、内容を理解させるためには指定内容の周辺も含め、相応の授業内容が必要に思われる。それを、従前より少ない講義枠（従前より30%カット）で行おうとする余り、つつい1回の講義内容が多くなってしまい、教える方も、教わる方も消化不良の状態である。教育内容をさらに吟味し、1コマ（90分）の授業内容に適した講義を実施する必要があるように思われる。	
2	理由はまだ、解明しておりませんが、教室内のLANでは、授業ビデオを閲覧できませんでした。これは、他の教室では閲覧できたので私の教室の問題とと思われますが・・・。	
	授業コンテンツは、自己点検、相互参観による評価も重要と思われますが、学生からも評価を受けられるようになれば、さらに良いのではないかと思います。学生が、自宅あるいは大学内のPCから自由に閲覧でき、評価、質問等をできるようになれば、教育する側の自己評価、改善に役立つような気がします。また、時間制約があり、なかなか授業中には実施し難い双方向の意見交換も行えるのではないのでしょうか。これにより、学生の自主学習にも一躍買うことになるように思います。	
1-①	話の中に「えー」「えーと」などがこんなに多く入っていたことに驚きました、聞き取り難いので減らす努力をしたいと思います。	
	聞く方の立場からすれば、単調で長いと感じるであろうと思いました。途中で授業内容とはちがうトピックスを入れて、区切りを入れたらどうかと思いました。	
	質問を入れることで一方通行にならないようにしているのは良いと思っておりますが、指名をもっとランダムにした方が学生の緊張感が高まるかもしれないと思いました。	
1-②	字だけのスライドは退屈そうな印象でした。これまでも写真を多く入れようと思っておりましたが、さらに増やす努力をしたいと思います。	
	プレテスト、ポストテストを何回か行いましたが、学生の注意がその内容に偏る危険も感じます。この方法に対してはどのような評価になっておりますでしょうか？	
	授業中に海外の歯科大学を視察したときの写真などを見せたりしておりますが、教育法としてこうした試みの評価がなされているのでしょうか。	
2	授業時間は90分になっていますが、緊張が続くのはせいぜい45分から1時間ではないかと感じております。適切な授業時間についての研究はありますでしょうか？	
	短い時間で視聴できるように1.3倍速、2倍速で音声聞き取れるようであればありがたいと思いました。	
	スライドがいまひとつ不鮮明なので必ずしも画像の中に入れなくても、画面に併映するように流していただいたほうが見やすいのではないかと思います。	

第2回授業相互参観研修内容メモ	
2006年2月28日	メモ作成：谷口、内容確認：三石

- ・海外研修に関する事務連絡（関内）
- ・司会者（関内先生）挨拶。
- ・今回は、本学の教育情報学研究部の三石先生。アンケートやメーリングリスト、担当授業の自己点検など。
- ・三石先生挨拶。
- ・今回のプロジェクトの1つのテーマは、自己点検、相互参観は、半年過ぎた。今後に向けての考察を行なって欲しい。
- ・自己点検、相互参観の目的の確認。自己点検は普段からやっているが、自分の授業の振り返り。ビデオでみる。
- ・相互参観に関しては、授業見学という形でやることが多い。
- ・相互参観を行なって他の先生の授業のやり方や内容を参考にする。自分の授業も他の先生に見てもらうことによって今後の授業に役立てる。
- ・自己点検、相互参観の意味。自己点検は、一般に授業の振り返りが重要だといわれている。過去の授業からこれまでの授業を振り返る。
- ・教授設計授業モデル、IDモデルについて。自己開発用の授業を開発するモデルである。
- ・普通の授業でも、おおむねこのようなプロセスが採られている。
- ・扱われている内容や学生を踏まえて、授業を設計、実施する。
- ・実施後は、必ず評価を行なう。この評価に関しては内容や、設計、教材や実施が適切であったか評価する。
- ・これを日常的に実施することで、授業のスキルが向上する。
- ・新任の先生に関しては、自分の授業を振り返ることによって、実践的なスキルが向上する。
- ・これを考えると授業の設計、準備 PlanDoSee でまわしていくことが重要。
- ・この PlanDo See は授業以外にもさまざまなプロセスに用いられる。
- ・相互参観の意味。他の先生が実施する授業を参考にする。
- ・どこが参考になるのか。さまざまな授業科目や、さまざまな授業方法が展開される。自分とは違うやり方を見て、今後のやり方に取り入れられるか確認する。
- ・二点目として、自分の不得意な分野の解決方法を知る。それぞれの先生の不得意部分を、例えば学生に対して質問をするきっかけをつかめないなど、他の先生の解決方法を見る。
- ・三点目として、自分や他の先生の共通の失敗部分を確認する。ここで参加された先生は授業に積極的に取り組んでいられる。しかし、それでもうまくいかない部分がある。それが自分自身だけなのか、他の先生も共通でうまくいかないのか、意外と共通の部分で失敗

し、共通で気をつけていかねばならない、陥りやすい部分であるといえる。

- ・それがみつければ、どのように解決すればいいか一緒に考えられる。
- ・それから、自分の授業を他の先生に参観していただき、意見をいただく効果。
- ・自分とは違う視点で意見をもらう。自分では思い込みで気づかず、第三者の視点で見ていくことが重要。
- ・しかしながら、同じように授業をする方法として、自分では気づかないよい点、悪い点に気づくことができる。
- ・さらに、こういう風にやってみては、という助言をいただき、問題を解決する糸口を見つけることができる。
- ・自分自身が感じていたことを、問題を実際に指摘していただいて再確認ができる。自分ではうすうす気づいているが問題解決を後回しにする部分、自分ではうすうす気づいているがはっきりと確認していなかった部分を、他の先生に指摘されてははっきりわかる。
- ・今回はネガティブな意見を言わないことになっていたが、私（三石先生）についてははっきり言っていたきたい。
- ・他の先生に関しては、同業者ということになる。よく見られたいという意識が働くので、相互参観を通じてよりより授業を目指そうという気になる。
- ・相互参観は、ご自身のビデオでも、確認することは大変であり、時間もかかる。1時間半の授業を細かく確認すると、止めたりまき戻すので、2～3倍の時間がかかる。
- ・なかなか大変な作業であるが、普段から自己点検、相互参観をしている人は少ないので、今回のもの（プロジェクト）が役に立っているのでは？
- ・アンケート用紙のほうの集計結果は、配布資料にある。
- ・1-①の部分は、自身の授業を見ての結果である。
- ・授業計画に関しては、計画についての意見があった。「導入がうまくいかない」「授業計画が十分練られていない」という意見があった。
- ・進捗方法についてはたくさんの意見があった。授業に関して演習を取り入れた授業に関しては「学生のペースの進捗を確認する必要」が出された。そのほか、「ペース配分がよくない」「ペースが速い」など、内容の詰め込みすぎについての意見があった。さらに、「冗長な箇所があった」などの意見もあった。
- ・授業の実施方法に関しても多数の意見があった。「板書内容が学生にわかりづらい」という意見があった。内容まではわからないが、字が小さいとか難しい言葉ということであろう。ビデオを見られて「感嘆詞や間投詞」などえっとやあの～が多くて、事業の店舗を悪くしたり学生の注意をそいでしまうなどの問題があった。
- ・他に学生との対応についての意見もあった。「質疑応答がうまくいっていない」「学生が受身になってしまう」などの学生とのコミュニケーションの悪さがあった。というのがあ
- ・また、ビデオを確認することで、自分の授業の全体の雰囲気をつかむことができた。と

いう意見もあった。

- ・このような意見があったが、せっかくの機会ですから、ご自身が考えたことや再確認したこと、初めて気づいたことなどの意見をあげていただきたい。

- ・ちなみに「何か意見はありませんか」は、わるい質問ですね。

- ・授業計画に関して、授業方法に関して、学生との対話に関して、全体に関して、とに分けたい。

- ・授業計画に関して、自分の意図した授業計画とは異なるとか、授業計画を不十分だったとか、授業計画がよかったからうまく行ったなどをいかがですか？

- ・自分の授業計画に関して、予定とは違った部分などに気づいた人は手を挙げていただきたい。ひとりですか？他の皆さんは自分授業計画はよかったのですね。

○私の場合は、15回の授業を隔週でやった。1回授業、1回予習でしたが、それがよかったか。学生が読んでくると言う前提でやるのがよかったか、という疑問が残った。

- ・学生が予習するという前提がよかったかということですね。授業が実施するのには、予復習が含まれている。しかし、意外と予習してくる学生、やってこない学生がある。それが授業計画に大きく影響する。それを普段から感じられている先生は？そんなにいない。

- ・今回は、学生の反応も撮影、確認しているので、それも見ていただきたい。

- ・ここでも注意していただくと、また第三者的な立場で見るとよい。

- ・他に気づいたことは？

○毎回、英語版のカードを授業後に出させるが、それをもとに次回の授業後に回答することからはじめるが、私にとっていいポイントをつく「いい質問」について答えることに熱が入り、それが本論になる。相手の出方と授業計画の齟齬をどうするか、大きくシラバスが狂った。学生自体には対話形式は評価が高かったが、私自身は6割しか出来なかった。他の先生はどうしたか。

- ・いい質問である。学生の授業評価を毎回されている先生はどうしているか。

- ・シラバスで提示したものの6割しかできなかったが学生の評判はよかったという意見。どちらがいいか。

- ・私（三石先生）は、教員免許があり教育実習をしたことがある、「10を教えて1を理解してもらえばよいかな」というものもある。「10回のうち5回やって、6割理解してもらった」つまり3割の理解。しかし、後の学生にとっての理解のきっかけを与えたことになる。全部やって1割理解させること、半分実現してその6割を理解させること、目的によって、両方あればよい。

- ・他の先生にご意見は？

○教育の目標やバックグラウンドの違いによって違う印象。医学部の場合、学生時代の楽手は基盤で、生涯学習する必要。今の医学のガイドラインを伝えること、「面白かった」ということが重要である。各テーマによって幅広く学習して欲しいということから情報伝達が中心か、それとも生涯学習の基礎をつくるのか、その性格によって重み付けが必要。

・現場に直結する学問だけあって重みが違う。今、お伺いした話は、充分考えられる。その意味で、学生の意見を聞いて、授業を積極的に見直していくことも必要。

○三つ感想がある。岡田先生の隔週に関して、経験から2週離れると学生は忘れている、自分は隔週はダメだと思った。それから、授業計画は立てるが、学生によって授業が伝わったかどうかは、授業が終わったらわかる、10個まで終えて、補講で授業のまとめ的に行なう。今回の研修で教わったやり方「A4 1枚のもちこみを可能にした」ことで、テストの成果はよかった。自分の教えた内容を、学生が学んだりまとめたりすることで、真に自分が伝えたいことをどう伝えるか考えて行きたい。

・学習内容の定着にはくり返しが必要である、ということはよく言われ、前回の内容を次の初めにまとめようというのはよく言われる。

○私も教員養成系の大学にいた、意見が入り混じっている。今の意見は大学の授業で大事だと思う。コースデザインと、クラスルームマネジメント、スキルの三つが入り混じっている。黒板に二つのものを書いてはいけない、色チョークは5%以下、配布資料について…スキルの問題である。これと1回の授業のクラスルームマネジメントに関するものと混じっているのではないか。中高の授業と大学の授業の違いはシラバスの提示である。セメスタや15回の授業はどうか。中高の先生に求められるのはコンピテンス、学問の能力を高めて欲しいという、しかし大学は専門家である、学問分野は自分で高めている。中高と、大学の問題が若干入り混じっている。このプロジェクトは、大学の中で生じるファクターを中心にすべき。やはり、コースデザインと実際の15週の授業が一致していることが我々の目的か、それともシラバスから少し離れても自分の気づいたことを次のシラバスに積み重ねていくことがいいのか。「シラバスどおりだったのか」という評価項目は危険。シラバス自体が悪かったら、シラバス通りというのがよいのか。それが大学の授業である。

・シラバス通りがよい授業なのか、それとも時代の変化に応じた授業を行なうことも考えられる。また、ある学問体系ができていて、その基礎部分に関しては、ある程度その中身を抑えておくべき。さらに、いろいろなケースがあることに気づいた。シラバスをキチンと立てておくが、扱う内容を変えるものの、ドラスティックに変えないことをしてきた。教員になって4年、違うのではないかと思うこともある。どこが高等教育のものか、どこが中高のものか明らかにすることもこの場では必要。実際大学の教員は、その内容の専門家であるが、ティーチングの専門家である人は少ない。私（三石先生）が持っているといった教員免許も高校のもので、大学の授業をどうやっていくかを考えておく必要がある。

○「大学で英語が教えられる教員」を作りたい。英語の免許を持っているが、多くの場合自分が良かれと思う授業を展開している。能力やスキルも乏しい。どこかで学の授業に対応する養成を行なわなければならないと思っている。

・大学の教員のためのスキルの育成が必要であるという意見はないか。

○教育情報学の岩崎である。私はアメリカの大学の教育の調査をした経験がある。アメリカの大学は教員の支援をするシステムがある。アメリカが進んでいるのは問題をかかえて

いたから。そのための支援であり日本より2～30年進んでいるわけである。初中高と大学とは、そんなに違わない。クラスマネジメントやコースマネジメントは必要である。大学の教員の養成は必要である。しかし、学校をつくって組むまでは必要とは思わない。さらに、教員の悩みは一人で解決する必要がある。だから大学がその悩みを支えていく体制が必要。それがこのプロジェクトの意味でもある。

・今、そういったしくみが必要であるという話、さらに、高等教育のためのスキルが必要。今回の海外研修のテーマ、今回のスタンフォード大学のCTLはそのための機関。そこで我々のための研修をしていただける。そこでどんな研修がなされているのか、単に受けるだけでなく、研修の体制自体もぜひご覧いただきたい。

・そのほかの意見は？

○医学部の石井です。三石先生の最初のほうは自分の疑問と一致している。ここでは、授業を知識の伝達ととらえられている。しかし、医学部は高度専門職業人、すなわち技能伝授が中心である。それを以下に教えるかを教員に教える、それをFDと言っている。スタンフォードメディカルにもメディカルセンターがある。ここでも「教員にいかに技術を教えることを教えるか」を学んで行きたい。

・ぜひ、テーマ別研修で成果を報告いただきたい。

・実は、教育情報でも、演習と名前をつけているか、実際はコンピュータのプログラミング技能を中心であり、トレーニングが中心。このトレーニングに必要な知識は何かをかんがえているが、それ以前に興味を持ってもらうことが重要。暗中模索である。ぜひ医学部の話を聞きたい。

・そのほかには？

○医学部からつづいて、僕は医者であるが、医者の一歩の基本は患者と話をし納得してもらうことが重要。学生患者を含め、素人に「よくわかりました」と伝えられる技能を教えている。5年生の学生に患者と話すトレーニングをしているが、ふんぞり返っている学生がいる。コミュニケーションをわかりやすくするトレーニングスキルを学ぶ場は、どうして身に付ければよいのか。

・今のは、プレゼンテーションではなく、コミュニケーションであるが、最近はプレゼンテーションスキルを身に付けさせる授業が大学でもあるが、あまりうまくいっていない。ゼミでも、発表内容に対する以前に、発表方法にかかわってしまう。

・これに対して、こんな風になっているという意見は？

○私もやっていないが、オレゴン大学のデザインコースは、卒業制作に関して最後のプレゼンを行なうクラスがある。何をまとめようとしているか考え、説明し、最後にまとめるクラスがある。私も授業時間が少なくて、そこまでやっていないが、スタンフォードでそこを見てきたい。

・大分、スタンフォードで研修を受ける意義が見えてきたようである。今回の自己点検、相互点検は、そういった議論の出発点にすることが必要。それを受けて、実際向こうでは

何をするかを考えることが必要。

- ・時間も来ましたので、自己点検については区切りをして、相互参観にいて話したい。
- ・アンケートの中での意見は、「さまざまな授業形態」があることがわかった、それから「ダイナミックな授業ぶりに感銘を受けた」というのがある。日本以外の大学で授業を受けてこられた岡田ロベルト先生のは違うと言う意見があった。
- ・さらに、自分(三石)授業についての自己点検、相互参観の結果。E-Learningの実現に必要な情報技術の習得について。われわれのところ(教育情報)は文理融合のところで、基礎が学んでいない学生も多い。
- ・授業にあたり意識したこととして、授業内容の明確化するため、授業内容を文書化する。われわれのところ(教育情報)は、学生が少ないので、少人数で対話的な授業ができるようにしたいと思っていた。さらに、学生へのフィードバックをするために米か入れ歩オートと採点をおこなった。
- ・さらに、ARCSモデルを意識した。
- ・ARCSモデルは、このようなもので、学生の意欲や動機づけを行なうにはどのようにしたらよいかということである。
- ・実際に自分の授業を撮影してやってみた感想として、適切な授業展開とはなっていなかった、ペース配分が充分でなかった、さらに文書化して授業を説明していたつもりであるが、授業の内容を書いただけで授業計画ではなかった。
- ・さらに、学生との対話を目指していたが、ほとんど一方的にしゃべっていただけだった。これとこれを教えなければならない、という意識が強く、説明しようとしてしまった。その結果、学生との対話が欠如していた。
- ・さらに黒板のほうを向いて学生のほうを向いていなかったという自己反省があった。
- ・さらに他の先生からも、同様の指摘として授業展開が一方通行で、学生の反応が乏しいと言う指摘があった。
- ・さらに、学生の反応が乏しいことに関して、理解度チェックをしたらどうかという意見があった。レポート提出によって理解度をチェックしているつもりであったが、授業内で理解度をチェックする必要がある。
- ・話し方がゆっくりで聞き取りやすいという意見があった。親切なご意見。しかし自分で見ていると、抑揚がなくて眠そうであった。
- ・さらに、図を用意して、学生に参加させてはどうかという意見があった。確かに、事前の準備が不十分であったが、意外と学生の顔を見ながら図を描くことができた。こうやって自分の授業を見てみると、どこでどんな図を描いていたかがわかる。これをもとに、次回からは準備したい。
- ・さらに、学生に対応して授業を書くのも必要だから、せめて学生の方を見て図をかけるようにしたい。
- ・自分の授業をとってみてよくわかったことがあり、さらに他の先生に意見をもらうこと

で、うすうす感じていることで、よくわかるようになった。

- ・改善すべき点がわかったと同時に、改善策を検討するきっかけになった。そういう意味で自己点検、相互参観は有効であった。

- ・確かに大変であるが、今日のディスカッションでアイスブレイキングができたのでは、これをきっかけに、メーリングリストも参加いただきたい。

- ・これを効果的に進めるために、効果的な振り返りの方法について。

- ・ひとつめに、早送りを行なう。

- ・次に、確認すべき点を明らかにする。

- ・一般に「完全な授業計画は立てられない」。学生の反応をみて局所的なプランを立てている。

- ・実際に授業計画をもとに学生の理解の様子や反応をチェックし、修正し、授業後にさらに評価するような方法が有効。

- ・授業計画と実施内容に差は、何らかの対応行動をとった結果であり、授業計画の不備や、授業計画の詳細化・緻密化、学習者の理解状況への対応、学生の質問や意見への対応など、の結果である。

- ・どうもありがとうございました。

- ・(関内先生) 三石先生への意見や質問があれば。

○ダブルループについて、医者と患者、教師と学生の瞬間芸と、大きなループが必要。その場での対応の必要と、一步引いてものを考える大きなループの存在が必要。強く感銘を受けた。

- ・実は今日のディスカッションの中でも大きく考えた。このプロジェクトをはじめたことをきっかけに、どのようなことができるかを考えた。その結果が、ダブルループモデルである。このプロジェクトを通じて議論をさせていただければありがたい。

- ・他にないか？

○医学部の石井です。医学部の授業はたくさんあって、講義の評価が大変だが、昨年やった。すると、両極に分かれる。では、評価の悪い人に改善の意欲を持ってもらおうとするにはどうするかが、今の課題。

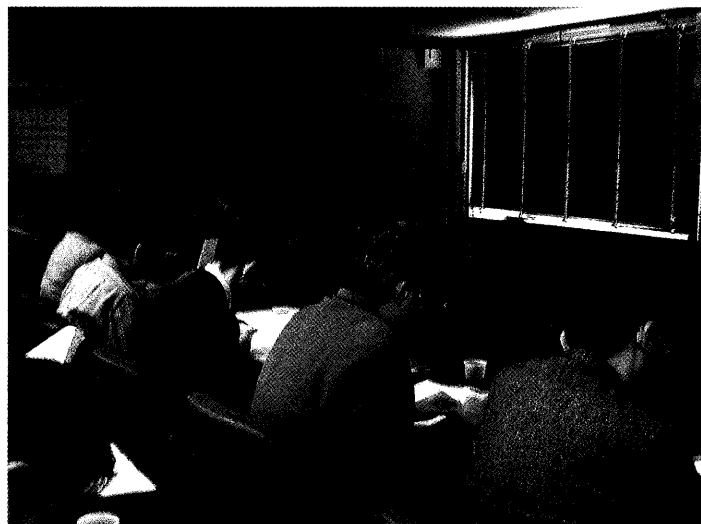
- ・(関内先生) 今の石井先生や、医学部グループの(技能の教え方を教える)ことも来年度について考えて行きたい。

- ・(関内先生) さらに、ダブルループだけではなく、途上での評価も考えられる。センターのほうでも途上での評価についての提言を行ないたい。

- ・(関内先生) 三石先生、ありがとうございました。第二回の研修を終わります。

- ・(関内先生) 連絡事項(システム改善への対応状況、公開範囲について)。

以上



グループ1: 3月5日-3月11日 (8名) グループ2: 3月12日-3月18日(8名) ※研修内容は4日目(水)10:00のセッションを除き、両グループで同じです。

日付	時間	イベント	選択・必須	主な担当者	場所・備考(*)
5,12 日	9:30	サンフランシスコ国際空港→パロアルト		中島、渡利	
6,13 月	10:00-10:30	ティーチングからラーニングへ	必須	CTL	Sweet Hal
	10:30-11:00	教育担当部局のツアー。学部・大学院の教育プログラム紹介	必須	中島、渡利	(*)2グループに分かれる
	11:00-11:30	キャンパスガイド(いくつかの授業も聞く)	必須	中島、渡利	(*)2グループに分かれる
	11:30-14:00	昼食/米国におけるFD/パーソンナリティタイプ	必須	中島、渡利	CIS 会議室
	14:00-15:30	新しいファカルティディベロップメントを必要とする理由	必須	ダシジャー氏	CIS 会議室
7,14 火	10:00-11:30	コースデザイン① 授業設計の発想転換	必須	CTL	Sweet Hal
	11:30-13:00	コースデザイン② アクティブラーニング/昼食	必須	CTL	Sweet Hal
	13:00-18:00	スタンフォード近辺の名所を巡りつつ、インフォーマルな交流	選択	中島、渡利	
8,15 水	10:00-11:30	優秀教員の授業を参観(8日のみ)	選択	Best Teachers	
		優秀教員によるパネルディスカッション(15日のみ)			
	11:30-13:00	優秀教員との昼食	選択	Best Teachers	Faculty Clut
	13:00-14:30	コースデザイン③ インターネットの活用	選択	CTL	Sweet Hal
9,16 木	12:00-14:00	昼食/まとめ(日本の大学教育と米国の大学教育)	必須	スタンフォード大の日本人教員	
	14:30-16:00	コースデザイン④ フィードバックとアセスメント	必須	CTL	
	17:00-19:30	総括・懇親会	必須	ダシジャー氏	
10,17 金	SF→仙台				
11,18 土	仙台				

グループ 1: 3月5日(日)ー3月11日(土)

氏名	所属大学	役職	所属部局
関内隆	東北大学	教授/プロジェクトディレクター	高等教育開発推進センター
谷口和也	東北大学	助教授	教育学部
三石大	東北大学	助教授	大学院教育情報学研究部
岡田ロベルト	宮城大学	助教授	事業構想学部
森山雅幸	宮城大学	教授	食産業学部
田中光郎	岩手医科大学	教授	歯学部
石澤公明	宮城教育大学	助教授	教育学部

医学部グループ (月曜日と火曜日のみグループ1に合流)

氏名	所属大学	役職	所属部局
石井誠一	東北大学	助教授	大学院医学系研究科
國島広之	東北大学	助手	病院
長崎 裕	東北大学	助手	病院

グループ 2: 3月12日(日)ー3月18日(土)

氏名	所属大学	役職	所属部局
関内 隆	東北大学	教授/プロジェクトディレクター	高等教育開発推進センター
三石 大	東北大学	助教授	大学院教育情報学研究部
戸澤英典	東北大学	助教授	法学部
古川柳蔵	東北大学	助教授	大学院環境科学研究科
岡田 毅	東北大学	教授	大学院国際文化研究科
菅井裕行	宮城教育大学	助教授	教育学部

海外研修では、CTLスタッフと中島 平・渡利夏子による、4回のワークショップが企画されています。このワークショップは海外研修の中核となりますので、ここでは、そのワークショップの目的と内容について簡単に説明いたします。事前準備として、皆さまには自分の授業で使っているシラバスを持参していただきます。

1) コースデザインワークショップの目的

自分が授業で使っているシラバスを、コースデザインの視点からもう一度捉えなおし、来年度以降の授業改善に役立ててもらう。

2) コースデザインワークショップの内容

第1回: コースデザインの発想転換: 授業目標を学生の学習到達度の視点で設定する。

第2回: アクティブラーニング: アクティブラーニング手法の導入を検討することで、15回の授業内容を捉えなおす。

第3回: テクノロジーの利用: スタンフォード大学の教育で利用されるテクノロジーを学び、学生・教員に役立つテクノロジーの導入を検討する。

第4回: フィードバックとアセスメント: 試験や課題と、その学生へのフィードバックと成績評価方法を学び、シラバスに反映させる。

グループ1 & グループ2 詳細スケジュール

日付	時間	プログラム	コーディネータ
5&12 日	11:13	成田(19:15)ーサンフランシスコ (11:13) NH7012 カーディナルホテル	中島, 渡利
6&13 月	10:00-10:45	スタンフォード大学のFD研修のイントロダクション	
		-全員で自己紹介(このワークショップへの期待)	中島
		-研修の目的とスケジュール	渡利
		-スタンフォード大学の教育	Michele Marinovich (Director, CTL)
		-教員のためのCTL リソース	Michele Marinovich
	10:45-11:30	Sweet Hall(スタンフォード大学の教育関連部門の集中する建物) ガイド	
		-CTL(Center for Teaching and Learning)	Michele Marinovich
		-学部教育プログラム	Robyn Wright Dunbar (Senior Associate Director for Science and Engineering, CTL)

6&13 月	12:00-14:00	昼食	
		- これからのイベントに関する Q&A - パーソナリティタイプを知ることと学生とのすれ違いを防ぐ	中島
7&14 火	14:00-15:30	新しいファカルティ・ディベロップメントが必要な理由	Richard Dasher (Director, US-Asia Technology Management Center)
	10:00-11:30	コースデザイン① コースデザインの発想転換	Robyn Wright Dunbar
	11:30-13:00	コースデザイン② アクティブラーニング/昼食	Robyn Wright Dunbar
	13:20-18:00	インフォーマルな交流 (スタンフォード・シリコンバレー) - 美術館、ハイキングコース - google, yahoo!, adobe, apple, intel, cisco, oracle(詳細は未定)	中島, 渡利
8&15 水	10:00-11:00	授業見学 (専門ごと2〜3グループに分かれて、スタンフォード大学の実際の授業を見学します)	
	11:30-13:00	スタンフォードの先生方と昼食	中島, 渡利, Robyn Wright Dunbar, Richard Dasher
	13:30-15:00	コースデザイン③ テクノロジーの利用	Jeremy Sabor (Academic Technology Specialist)
9&16 木		スタンフォードの日本人教員と昼食	中島, 渡利
	12:00-14:00	- アメリカと日本の教育における共通課題	Yoshiko Matsumoto and/or Miyako Inoue, 中島, 渡利, Richard Dasher
	14:30-16:00	コースデザイン④ フィードバックとアセスメント	Robyn Wright Dunbar
	18:00-20:00	総括・懇親会	中島, 渡利
10&17 金	SF→仙台	サンフランシスコ(10:50)ー11th 成田 (15:05) NH7	

「国際連携を活かした高等教育システム構築」プロジェクト

スタッフ・ディベロップメント（職員研修SD）

－職員による国内大学視察－

- (1) 高等教育システム構築の担い手として、教員とともに職員（事務職員・技術職員）をその重要な柱に位置づけ、国内大学の視察研修を行う。視察研修は、平成18年2～3月に一大学5名前後の規模で実施する。
- (2) 職員はその成果について、職員としての独自の視線で整理、総括して報告書を作成し発表する。今後のプロジェクト実施内容・方法に対する職員からの斬新な提言を獲得することが目的である。
- (3) この計画は、視察前の周到な準備－視察－視察後の発表会を通して、職員の資質向上を図る実践的な研修SDである

(A) FDのあり方や「授業改善」の工夫

・名古屋大学

平成16年度GP：教員の自発的な授業改善の促進・支援

授業支援ツール、ティーチング・ティップス、（電子コンテンツ教材）

・京都大学

平成16年度GP：相互研修型FDの組織化による授業改善

FD支援システム、公開授業・検討会、工学部の取り組み（授業評価）

・岡山大学

平成17年度GP：新機軸「学生参画」による教育改善システム

学生・教員・職員の一体化

(B) ITによる授業改善

・帝塚山大学

平成16年度GP：学生に自立性を高める教育学習支援システム

学習支援、Eラーニング、教材コンテンツと著作権

・熊本大学

平成15年度GP：IT環境を用いた自立学習支援システム

平成16年度GP：学習と社会に扉を開く全学共通情報基礎教育

(C) 学習支援・学生支援

・愛媛大学

平成16年度GP：「お接待」の心に学ぶキャンパス・ボランティア

学生のピアサポート（補修学習）

・広島大学

学生のピアサポート（補修学習に関する学生活用とシステム化）

スタッフ・ディベロップメント報告会

■日 時：平成18年3月23日（木）16:30～

■会 場：東北大学川内北キャンパス管理棟3階 教育・学生支援部大会議室

■プログラム：

開会挨拶：高等教育開発推進センター長 坂本 尚夫

報告内容：

課題1：FDのあり方や「授業改善」の工夫

No.1 名古屋大学	情報教務 塚 本 修 一* 薬教務 甲 斐 翔 吾	経済教務 荒 美貴子 学務課 嶋 津 貴 宏
	(関内隆教授 菊田教務課補佐)	
No.2 京都大学	教務課 原 子 智 裕 工化学 触 沢 樹 子*	情報システム課 加 藤 純 学務課 藤 井 啓 太
	(宇野忍教授 只野全学教育係長)	
No.3 岡山大学	農教務 遠 藤 裕 之 環境教務 原 田 誠 子	医短教務 田 辺 貴 徳* 教務課 落 合 隆 一
	(佐藤勝則教授 梅津教務課長 武内学務企画係長)	

課題2：ITによる授業改善

No.4 帝塚山大学	教務課 武 田 豊 教務課 千木里 温 子*	教務課 乳 井 まさこ 理物理 阿 部 忠 宣*
	(坂本副学長 二階堂技術専門職員)	
No.5 熊本大学	教務課 高 橋 裕 之 工機械 垣 見 徹 征*	教務課 森 裕 司 学務課 鈴 木 友 和
	(杉浦助教授 安西技術一般職員)	

課題3：学習支援・学生支援

No.6 愛媛大学	工機械 内 山 喜美子 支援課 斎 藤 知 子	法教務 千 葉 涼*
	(池田助教授 斎藤教育支援係長 新沼学生係長)	
No.7 広島大学	支援課 木 村 宙* 支援課 小 林 修	支援課 高 橋 千 秋 教務課 城 間 克 文
	(関谷助手 嶺岸学生支援課補佐)	

注 *印は発表者で、()内はアドバイザー

閉会挨拶：教育・学生支援部教務課補佐 菊田 智

全体司会：高等教育開発推進センター教授 関内 隆

主催：東北大学高等教育開発推進センター

「変わろう。変えるために。」

—名古屋大学訪問を通じての東北大学への提言—

スタッフディベロップメント報告会

2006.03.23

名古屋大学訪問の概要

訪問の目的

特色G Pに採択された「教員の自発的な授業改善の促進・支援—授業支援ツールを活用した授業デザイン力の形成—」の取り組みについての情報収集を通じた、職員の意識向上。

問題意識

1. 名古屋大学はどのような取り組みをして、どのような成果をあげているのか。
2. 「1」の取り組みに事務職員はどのように関わっているのか。
3. 東北大学への導入は可能か。

名古屋大学の取り組み ～2つの目玉ツール～

1. ティーチング・ティップス

- 授業の実施方法や計画の立て方、学生対応等の「授業運営How to ツール」。
- “学生のやる気をだすには”といった具体的な事例も提供。

ティーチングティップス画面例

名古屋大学の取り組み ～2つの目玉ツール～

1. ティーチング・ティップス

- 「7つの提案」としてまとめたものについてWebでの情報提供に加え、冊子も刊行。（教員編、学生編、大学編）

「7つの提案」画面例

「7つの提案」冊子

名古屋大学の取り組み ～2つの目玉ツール～

2. ゴーイングシラバス

- パソコンの高度な知識がなくても導入・利用できることを念頭に開発。
- いわゆる「電話帳型シラバス」とは異なる。

シラバス：授業計画

名古屋大学の取り組み ～2つの目玉ツール～

2. ゴーイングシラバス

- 授業ごとに学生・教員の交流の場所（電子掲示板型）があり、そこで生まれた意見や提案を、次の授業内容や課題等に取り込むことができる。

電子掲示板

名古屋大学の取り組み ～2つの目玉ツール～

2. ゴーイングシラバス

- 毎回の授業活動をデータとして残すことができる。

授業の記録			
日付	授業の記録	授業の記録	授業の記録
10/24	10/24(木) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/24(木) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/24(木) 18時30分～20時30分 授業の記録
10/25	10/25(金) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/25(金) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/25(金) 18時30分～20時30分 授業の記録
10/26	10/26(土) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/26(土) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/26(土) 18時30分～20時30分 授業の記録
10/27	10/27(日) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/27(日) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/27(日) 18時30分～20時30分 授業の記録
10/28	10/28(月) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/28(月) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/28(月) 18時30分～20時30分 授業の記録
10/29	10/29(火) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/29(火) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/29(火) 18時30分～20時30分 授業の記録
10/30	10/30(水) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/30(水) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/30(水) 18時30分～20時30分 授業の記録
10/31	10/31(木) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/31(木) 18時30分～20時30分 授業の記録	10/31(木) 18時30分～20時30分 授業の記録

名古屋大学での支援ツール利用状況

全学（教養）教育主導で実施

- ティーチング・ティップス
- ゴーイングシラバス

学内への浸透は進まず

※他大学など、外部からのアクセスは多い

名古屋大学の抱える問題

～なぜ、浸透しないのか？～ 4つの問題。

1. 既存のツール使用

- 既存の授業支援ソフトを使用している教員がおり、ゴーイングシラバスへの乗り換えに対して積極的ではない。

※使用に専門的な知識を要するため、万人向けとは言えない

2. 教員の意識

- 「研究者」としての意識＞「教育者」としての意識

名古屋大学の抱える問題

～なぜ、浸透しないのか？～ 4つの問題。

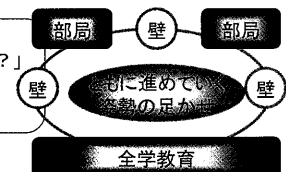
3. 心理的な問題

- 「身内に言われると面白くない」

※ティーチングティップスへの学外からのアクセスは多い。

4. 組織的な問題

- 「全学教育で勝手にやれば？」
- 「部局自治」の負の側面。



名古屋大学の抱える問題から見たもの

優れたツールも、活かす土壌がなくては無意味。

授業支援ツールがどんなに優れていても、活用するための土壌（大学の運営基盤、実行力）がなくては意味がない。

大学、職員が教員を取り込んで、ともに進めて行くような土壌が必要。

東北大学にはその「土壌」が整備されているのか？

名古屋大学の抱える問題から見たもの

～「土壌の整備」の構成要素を考えてみました～

1. 組織と組織の関係

- 「学部自治」の在り方
- 各学部⇄全学教育／各学部間関係

2. ヒトとヒトとの関係

- 教務委員教員と教務系事務職員の関係
- 教務系事務職員どうしの関係

東北大学の現状

～東北大学では、どうでしょう？～

1. 組織と組織の関係

- 大学全体としての取り組みでも、部局によってなかなか足並みが揃わない、というのは本学でも見られる問題

[illegible]

東北大学の現状

～東北大学では、どうでしょう？～

2. ヒトとヒトとの関係

- 「教務委員長・教務係長の間で情報共有が不十分」
- 「教務委員会に事務員が同席していない」
- 「認証評価、中期目標、年度計画など、大学全体の経営・評価に関わることにについて、教員と事務員、事務員間の認知度がまちまち」

東北大学の現状分析

どうやら、残念ながら・・・

現状の東北大学では、土壌の整備は不十分。

↓

東北大学でゴーイングシラバスのような授業支援ツールを導入しようとしても、名古屋大学と同様、浸透には困難がともなう。

どんなに効果有り！のダイエット器具でも、
買っただけでは得るのは安心感だけ・・・

東北大学の現状改善に向けて

こんなこと、思っていませんか？

「ウチの先生がたは授業改善に積極的」

「ウチは教務委員の先生との連携がとれている」

「ウチ」さえ良ければ、それでいいんですか？

東北大学の現状改善に向けて

社会に対する大学の使命・義務って、何でしょう？

➡ 「質の高い教育と研究の提供」

東北大学の中期目標

指導的人材の養成 世界と地域に開かれた大学

質の高い教育と
研究の提供

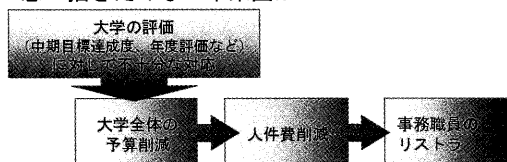
教務事務担当者が「ウチらの
大学の問題」として連帯意識、
問題意識の共有

**それでも
「ウチ」さえ良ければ、それでいいんですか？**

東北大学の現状改善に向けて

「うちさえ良ければ」とか言っていると・・・

思い描きたくない未来図が・・・



それでも

「うち」さえ良ければ、それでいいんですか？

19

東北大学への提言

変わろう。変えるために。

20

東北大学への提言

1. 私たちの意識改革

- 大学全体の教育のあり方に注目する。
(例：学務審議会の動向)
- 職員全員が大学の運営に関わっている、という事実の認識。
- 事務職員が常に教員に働きかけ、提案できる専門性とプロ意識を持つ。
- 専門性を高めるための勉強を持つ。

21

東北大学への提言

2. 横のつながり

全学教育⇄学部⇄他学部の情報・認識の共有と連携強化

① 全部局教務系係長連絡会（全学教育含む）の定期開催

- 重要事項についての共通認識を持つ。
- 各部局の対応方法や現状などについて情報交換を行う場を設ける。

22

東北大学への提言

2. 横のつながり

全学教育⇄学部⇄他学部の情報・認識の共有と連携強化

② 教務系事務職員研修会の定期開催

- 部局間の情報交換・交流・提案の場を定期的に設ける。
- 係長等連絡会の重要事項について、理解を主任・係員レベルまで浸透させる場としても利用。

23

東北大学への提言

2. 横のつながり

全学教育⇄学部⇄他学部の情報・認識の共有と連携強化

③ 全学教育からの情報発信を工夫

- 「必ず全学部がやらなければならないこと」について全学教育から情報を発信する場合、学部に対してメールや文書外の方法で（前述の連絡会などで）伝える。
- 学部に発信する依頼や照会等について、重要度をつける。（例：L v. A A＝認証評価等、A＝学部長又は会議での検討が必要等）
- 各部局での情報の重要性の捉え方を共通化。

24

東北大学への提言

3. 縦のつながり

教員（教務委員会）⇄事務職員（教務係長）の連携強化

■ 各部署の教務委員会に教務係長（できれば主任級係員も）が同席

■ 事務職員に対して、就業時間内に定期的な研修（実質勉強会）を設け、勉強時間を保証・確保

25

最後に。

名古屋大学高等教育センター・夏目達也教授に伺いました。

Q. 「これからの事務職員に求めるものは？」

「高い専門性」と「教員とは異なった視点からの企画力」を持った、新しい型の事務職員

事務職員の活力が、教育・研究の質を向上させ、大学全体の活力になる。

変わろう。変えるために。

26

Presented by

スタッフディベロップメント 名古屋大学担当チーム

<アドバイザー>
高等教育開発センター
関内 隆 教授

教育・学生支援部教務課
菊田 智 課長補佐

<チームメンバー>
経済学部教務係 荒 美貴子
学務企画課 嶋津 貴宏
薬学部教務係 甲斐 翔吾
情報科学教務係 塚本 修一

<参考URL>

名古屋大学高等教育研究センター <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>

27

相互研修型FDによる教育改善とは？

～公開授業の実施, 工学部授業アンケートの
取り組みから特色を探る～

・京都大学側
田中 每実教授, 松下 佳代教授,
大山 泰宏助教授, 酒井 博之助手

・東北大学側
宇野 忍教授, 只野 育子全学教育係長,
原子 智裕主任, 加藤 純事務職員,
船沢 樹子事務職員, 藤井 啓太事務職員

1

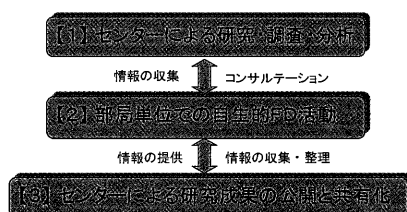
1. はじめに

・京都大学の「相互研修型FDの組織化による
教育改善」とは



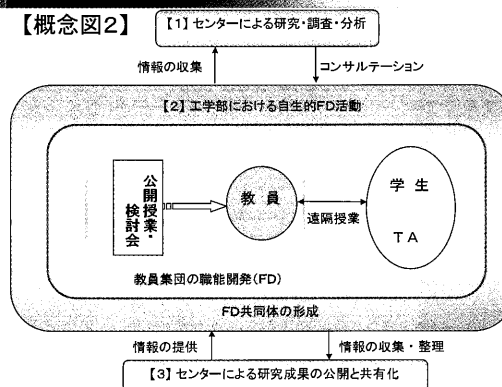
【概念図1】

相互研修型FD支援システム



京都大学 高等教育研究開発推進センターHP (<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/>) 内より引用 3

【概念図2】



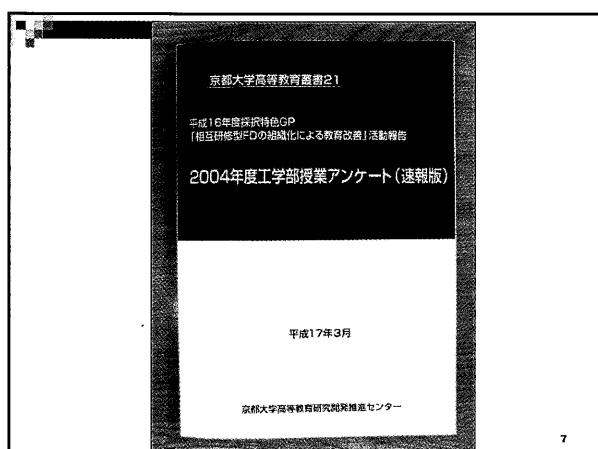
京都大学 高等教育研究開発推進センターHP (<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/>) 内より引用 4

2. 京都大学での教育改善の取り組み

- ・教育実践と研究と相互研修を目指した公開授業
- ・工学部と連携した「授業アンケート」
- ・その他の取り組み
 - ・ポケットゼミナール
 - ・大学院生のための教育実践講座
 - ・工学部卒業研究調査
 - ・香港科学技術大学とのFDに関する国際交流の実施

5

京都大学 高等教育研究開発推進センターHP (<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/>) 内で公開 6



3. 本学における教育改善の現状と問題点および提言

・本学における教育改善

問題点: 相互研修型FDではないため、一部の教職員の中だけの情報にとどまってしまうがち

改善策: 教職員、学生にも参加を呼びかけ公開授業等の実施
Web上で公開し、意見を交換
これらの仕組みの構築のためのWGを教員・学生・職員で

・本学における工学部の授業評価の実施について

問題点: カリキュラムに関するアンケートは授業評価に比べて回収率が低くなりがち

改善策: 授業評価の中に、カリキュラム改善に関わる内容も
カリキュラムアンケートの日時を具体的に設ける
授業評価アンケートの実施方法や内容に関するWGを
教員・学生・職員で

4. 事務職員のFDへの関わり・役割



新機軸「学生参画」による 教育改善システム

平成17年度特色GP

取組担当者 岡山大学 教育開発センター 橋本 勝 教授

岡山大学SDグループ

【研修者】

農学部・農学研究科教務係
遠藤 裕之
医療技術短期大学部教務係
田辺 貴徳
環境科学研究科教務係
原田 誠子
教育・学生支援部教務課教育支援係
落合 隆一

【アドバイザー】

文学部・文学研究科 教授
佐藤 勝則
教育・学生支援部教務課長
梅津 哲雄
教育・学生支援部学務企画係長
武内 由美

はじまり

- 平成10年頃から、学内の教育問題に関する全学シンポジウムに学生の参加を促す教員が目立ち始めた。

学内の最大構成員である学生の声をしっかりと受け止める必要があることが、教員間で早くから意識されていた。

【学生参画組織立ち上げの理由】

- 単発的なシンポジウム(イベント的な催し)では…
討論を十分に行うことが困難。
- 「普段からこうしたことについて議論・検討を重ねられるような組織」の必要性を感じる。

【学生が参加する組織のあり方】

- 「指示待ち症候群」と揶揄されたり、とかく現実的なメリットに走ったりしがちな現代学生も…
一定の環境が整えば大学教育改善という、およそ主体的に取り組むに足る縁遠い内容であっても積極的に取り組む。
- 一部の学生が純粋なサークル的に取り組んだのでは…
長続きしないし、何より大学全体への浸透も弱い。

- 学生委員は基本的に毎年、各学部から1年次生を推薦してもらう。

→ 公的な選出により、学生たちは、時には各学部の代表者として、時には学生全体を代弁する意識で発言・行動するし、教員・職員も個人的な一教員・一職員としての意見というより、大学教育全体のあり方を意識してそれに対処している。

学生の「やる気」を引き出す

- 主目的だけでなく、いろいろな活動を行い、自由な雰囲気を作り出す空間を提供する。
- 学生を「参加」させているという意識ではなく、学生が「主体」とであると捉え、学生と教職員の相互理解を深める。
→ 意見をいかに早く実現するか
→ 意見に公的な性格を持たせる
(大学の検討議題とする)

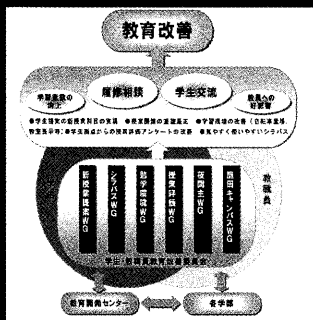
学生の「やる気」と組織の関わり

- スタート時点では「やる気」のある学生の選定が重要
→ 物事を進めるエネルギーとなる。
- 「やる気」があるばかりではなく、「冷静」で「客観的」な意見も必要である。
→ 一般の学生(比較的冷静で客観的)へも
広がりを持たせるため。

参加する学生の理由

- 学生自身、能動的に何かを行う能力が自分達に不足しているという自覚があると思われる。
- 学生は「学生参画」活動を通じて、自分たちが提案した事案が受け入れられやすくするための…
事前準備や提案の仕方、コミュニケーションの重要性を学んでいく。

学生・教職員教育改善委員会



その他の取り組みとして…

- 履修相談会
- シラバス
- 授業評価
- 勉学環境
- 夜間主
- 鹿田キャンパス

【主な「学生参画」活動】

【新授業提案】

- 小グループから話し合いの場を作り、最終的に全体的な発表の場を設ける。
- 興味本位だけでなく、大学にとって相応しい授業科目の提案。
- 最近の学生の傾向として、ディベートを取り入れた授業を望んでいる。

(大学授業改善論)

- ・授業アンケートだけではなく…
学生が直接、授業担当教員へ要望を伝える機会を作る。
→ 教員の反論の機会も提供できるので、教員サイドからも好評である。
- ・教育改革に携わっている教員が授業担当することにより、学生にとって強い後ろ盾となる。
- ・受講者全体の賛同が得られれば、学生としての一体感を持つことができ、成績評価に対する安心感にもつながる。

【学生のFD参加】

「桃太郎フォーラム」

- 全国30の大学から、教職員の参加があった。
- 学生と教員の対話の場となっている。
- フォーラム風景

岡山大学SDで学んだこと

- 学生参画型教育改善は・・・
現代の大学に、あるいはこれからの大学に
必要不可欠の要素である。
- 教育改善は決して「教員側の問題」ではな
く・・・
「学生と教員の双方の問題」である。

【本学の現状と提言】

- 東北大学においてはHPの「学生の声」や「授
業評価アンケート」を実施しているが、相互理
解・対話という点では不十分であるといえる。
- 今年度から全学教育科目における「学生との
懇談会」が開催されているので、こうした取り
組みを活発にしていける必要がある。

帝塚山大学

～学生の自立性を高める教育学習支援システム～

参加者 教務課 武田 豊
教務課 乳井 まさこ
教務課 千木里 温子
理学部 阿部 忠宣

1

取組みの内容

- 学生の学力低下に対応した体系的な学習支援
- 学生の自立的な学習を実現させる学習支援
- 教育内容の豊富化を実現する教育支援

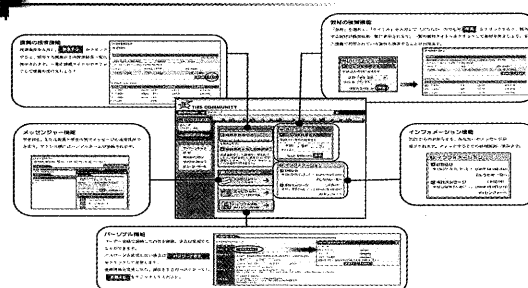
2

TIESとは・・・

- TIES(タイズ・Tezukayama Internet Educational Service)は、講義を録画し、Webに載せることによって学生がネット上で学習できるシステム

3

TIES画面



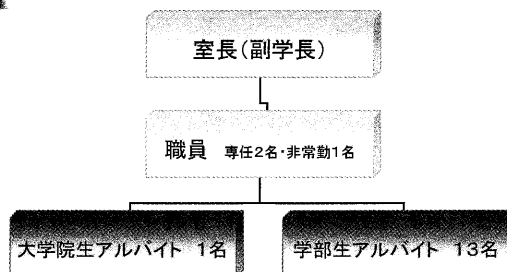
4

TIESのメリット

- 教員への質問がネット上で可能
- アクセスに制限がないので、いつでも学習可能
- 予習・欠席フォロー・復習にも対応可能

5

TIES 教材開発室 ～サポート体制～



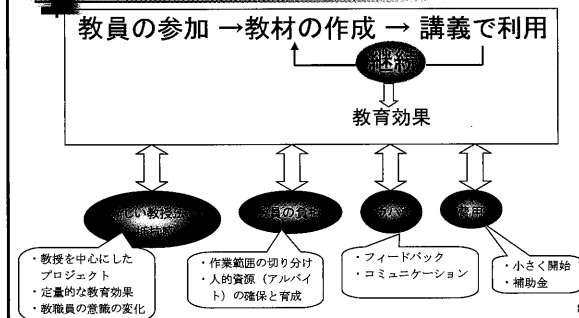
6

TIES活用法

- ライブ塾
ネットワークシステムを使い、社会で活躍している人材によるライブ講義をする産学連携型の講義
- 他大学の講義
TIESに参加している他大学の講義も、Webで視聴可能

7

TIES成功への条件



8

サイバーチューター制度

- ネット上でチューターを希望する学生に対し、教職員が学生の受講履歴や学習状況を把握しながら、学習指導や進路指導を行う制度

9

本学での適用可能性

- 科目を限定して始める
- 専任スタッフ(学生アルバイトを含む)の配置
- 教職員の育成(意識改革)

10

実施方法 その1 ～ライブの場合～

- 活用例
 - ・遠隔地にいながら講義が受けられる
 - ・専門科目において、企業や社会で活躍している人の生の声が聞ける

11

実施方法 その2 ～収録の場合～

- 活用例
 - ・時間の制約を受けずに講義が受けられる
 - ・復習や欠席フォロー

12

ITによる授業改善 (訪問先: 熊本大学)

教務課 高橋 裕之
教務課 森 裕司
学務課 鈴木 友和
工機械 垣見 徹征

アドバイザー 杉浦 助教授
安西 技術一般職員

『熊本大学』

高度情報化キャンパス構築

(IT環境を用いた自学習支援システムの
開発・運用)

『東北大学』

高度情報型教育システムの実現

(学務事務のIT化を進め、効率的で学生が
利用しやすい仕組みの充実)

SOSEKI 学務情報システム (1)

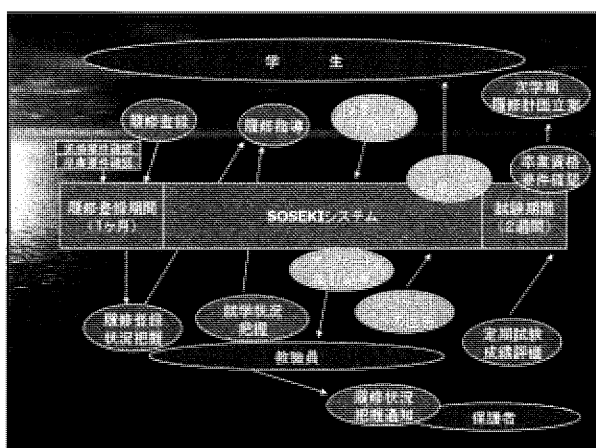
学生

- 学籍参照
- 履修登録・確認
- シラバス参照
- 教員研究情報参照
- 成績参照
- 就職情報参照
- 掲示閲覧
- 教員への面会予約
- 健康診断履歴参照と診断書申し込み
- 講義アンケート回答

SOSEKI 学務情報システム (2)

教員

- 学籍参照
- シラバス作成
- 教員研究情報作成
- 受講者名簿参照
- 成績入力
- 就職情報参照
- 施設利用予約
- 掲示通知
- 学生との面会予約
- 講義アンケート作成



参考: 履修科目の樹形図

樹形図

学年	履修科目	科目名	単位数	履修人数	履修率	履修率	履修率
1年次	必修科目	基礎科目	136	28	0	38	平均値
2年次	必修科目	基礎科目	34	10	0	18	平均値
3年次	必修科目	基礎科目	14	10	0	5	平均値
4年次	必修科目	基礎科目	2	2	0	1	平均値
5年次	必修科目	基礎科目	10	8	0	5	平均値
6年次	必修科目	基礎科目	8	4	0	4	平均値
7年次	必修科目	基礎科目	2	2	0	1	平均値
8年次	必修科目	基礎科目	18	18	0	10	平均値
9年次	必修科目	基礎科目	0	2	0	2	平均値
10年次	必修科目	基礎科目	4	10	0	5	平均値
11年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
12年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
13年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
14年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
15年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
16年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
17年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
18年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
19年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
20年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
21年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
22年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
23年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
24年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
25年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
26年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
27年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
28年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
29年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
30年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
31年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
32年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
33年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
34年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
35年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
36年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
37年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
38年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
39年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
40年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
41年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
42年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
43年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
44年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
45年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
46年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
47年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
48年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
49年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
50年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
51年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
52年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
53年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
54年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
55年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
56年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
57年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
58年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
59年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
60年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
61年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
62年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
63年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
64年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
65年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
66年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
67年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
68年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
69年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
70年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
71年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
72年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
73年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
74年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
75年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
76年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
77年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
78年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
79年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
80年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
81年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
82年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
83年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
84年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
85年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
86年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
87年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
88年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
89年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
90年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
91年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
92年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
93年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
94年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
95年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
96年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
97年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
98年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
99年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値
100年次	必修科目	基礎科目	0	0	0	0	平均値

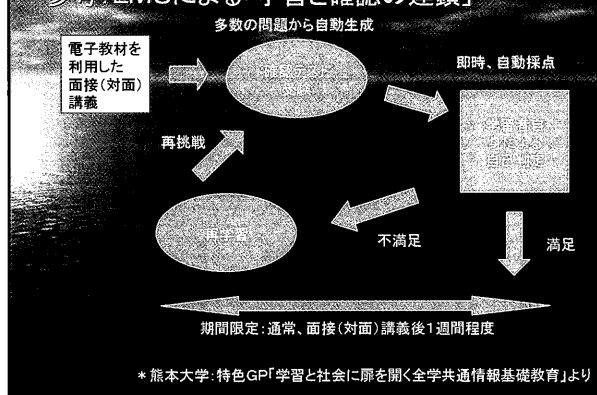
参考：シラバス(講義内容) 平成15年度情報基礎A (前期)

1. ログインと Windows の基本操作
2. 学務
3. 情報倫理1 (コンピュータウイルス等)
4. 電子メール1 (電子メールの基礎)
5. エラー対処, 文字コードと文字化け
6. ワードプロセッサ1 (レイアウト)
7. ペイント (イメージ画像作成, 編集)
8. 情報倫理(2) (知的所有権等)
9. スプレッドシート1 (数値, 式の入力)
10. スプレッドシート2 (作表と関数)
11. ドロー (作図, ギャラリー利用)
12. 情報検索 (検索エンジン等)
13. ワードプロセッサ2
14. プレゼンテーション
15. 情報倫理3 (不正アクセス等)

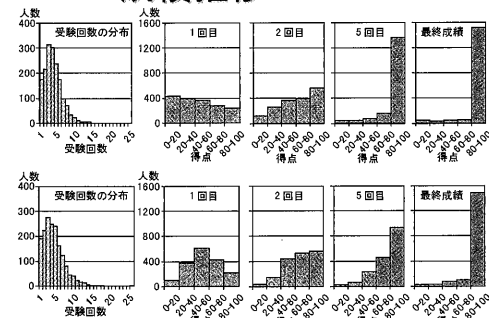
LMS (e-Learning) システム (Web-CT)

- ・全学生登録: 約10, 000名
- ・全教員登録: 約1, 200名
- ・全講義登録: 約8, 000講義
(延受講者: 約114, 000名)

参考: LMSによる「学習と確認の連鎖」



参考：確認テストにおける 成績推移



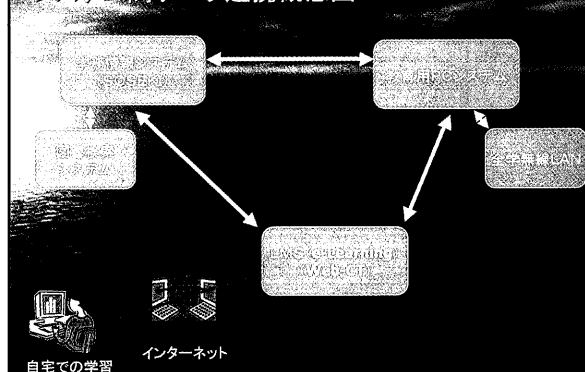
参考：教育環境の全学的整備

学内のどこでも同じように
利用できる920台以上の
コンピュータを整備

- * 上記コンピュータシステムを
運用するための専用教室
(最大900名収容可能)

- * パスワード管理された全学約100箇所以上の
無線LANアクセスポイントの整備

システム間データ連携概念図



システム間の連携（１）

学生の立場

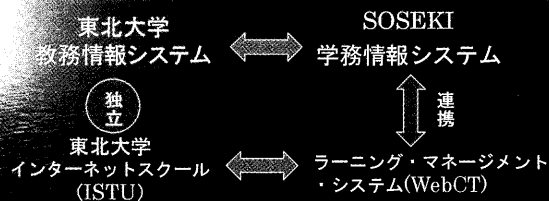
- ・ 同一の認証用IDとパスワードで各システムにログインできる。
- ・ WebCTに入ると、SOSEKIで自分が受講登録した講義名が翌日には全てWebCT上に並び、コンテンツがあればすぐに利用できる。
- ・ 自宅からでも、WebCTにアクセスし、予習、復習を行うことができる。

システム間の連携（２）

教員の立場

- ・ 学生と同様、同一の認証用IDとパスワードで各システムにログインできる。
- ・ WebCTに入ると、自分が担当する講義名が全てWebCT上に並び、前日までにSOSEKIに登録された学生が全て登録されている。
- ・ 自宅からでも、WebCTにアクセスし、コンテンツの作成や学生の学習状況を見ることができる。
- ・ 自分の講義をとっている学生のみへの連絡にWebCTをすぐに利用でき、講義終了後も一定期間、連絡をとることが可能になる。
- ・ WebCT上で成績処理等を行った結果をCSVを介してSOSEKIに入力可能。

東北大学 と 熊本大学



本学の現状と問題点

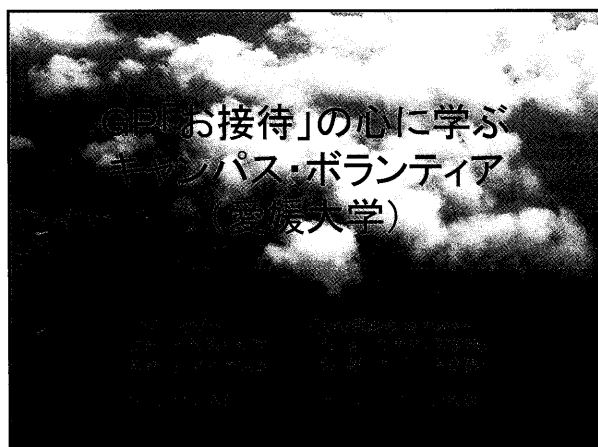
- ・ 環境の整備が必須であり、教育用PCを最低全学生数の1割程度は準備する必要がある。(約 1,500台)
- ・ それと平行して、e-learningを実施するには、教員も専門の知識、技能が要求されるので、講演会及び講習会を開くなど、専門家の育成やスタッフの増強が急務と思われる。

教授システム学専攻

eラーニング専門家の不足



eラーニングの専門家をeラーニングで養成する大学院の設置



愛媛大学のGPとは？

『「お接待」の心に学ぶキャンパスボランティア』

「お接待」の精神に基づく、学生による、
学生のための 学生支援ボランティア

スチューデント キャンパス ボランティア
(SCV)

2

と、その前に・・・お接待とは？

- ここでの「お接待」とは、取引先との「接待」、「接待ゴルフ」などといった時に用いられる意味のものではない。
- ここでの「お接待」とは、愛媛(四国地方)に根付く文化で、地元の人々が無理をしない範囲で、「お遍路さん(巡礼者)」に対し食べ物や心づけ等の援助を行うことを指す。

3

愛媛大学のSCVとは？

スチューデント キャンパス ボランティア
(SCV)は、

もともと学生の間で自然に行われていた
支援活動を、大学が協力してさらに発展
させていこう、という取り組み。

4

SCVの目的とは？

学習支援、生活支援、障害学生支援、
留学生支援などの活動分野で、

「教えあい 学びあい 助け合う力」
を身に付けること。

5

SCVの概要 1

- 現在のSCVは 全部で9団体(別紙参照)
- 現在ボランティアとして登録している学生数
→ 約150人(うちノートテーカーが約100人)
- 原則単位なし・謝金なしの「無償ボランティア」

※ 一部例外有

- 各団体には、顧問として担当教員を配置。
- 学生生活課が事務を所掌
SCV申込受付、物品提供、お接待研修参画等

6

SCVの概要 2

- SCV発足のきっかけ
 - 1995年 教育学部に重度の聴覚障害者が入学
 - 友人同士の助け合い(学生による支援)
 - ・ノートテイク
 - 障害学生支援について、学生側から大学側へ問題提起。
 - ・障害学生の授業補償を求める要望書
 - 障害学生支援委員会の発足 学生スタッフの公募
- 佐藤浩章先生を中心に、草の根的に行われてきた学生による支援活動を大学として大々的にバックアップ。
 - GPとして採択を受ける。

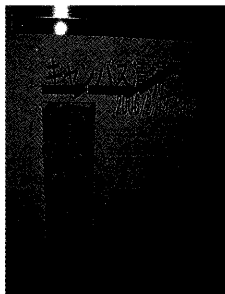
7

SCV の 9団体

- ① 愛媛大学学生メンターズ(ESMO)
- ② 火曜ナイトサロン実行委員会(TNS)
- ③ 国際交流コーディネーター(ICO)
- ④ ボランティアコーディネーター(AIVO)
- ⑤ キャリアサポーター(CS)
- ⑥ 障害学生支援ボランティア(HSSV)
- ⑦ メディア・サポーター出版部(MSPT)
- ⑧ メディア・サポーター映像部(MSBT)
- ⑨ 図書館サポーター

8

① 愛媛大学学生メンターズの掲示物



9

⑥ 障害学生支援ボランティアのノートテイク募集掲示



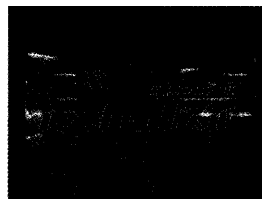
10

⑧ メディア・サポーター映像部 のスタジオ



11

⑧ メディア・サポーター映像部 関連



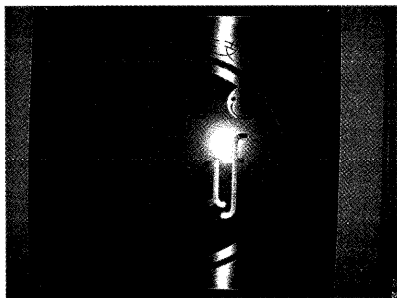
↑ 学内の生協等で一部配信開始の
「愛キャンバスTV」



↑ 愛媛大学に住み着いた
野良犬のハナちゃん
「愛キャンバスTV」マスコットキャラ

12

SCV の 活動拠点「ピア@カフェ」



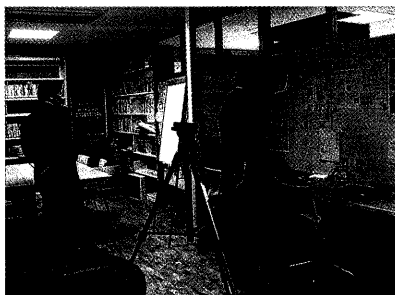
13

ピア@カフェ の様子①



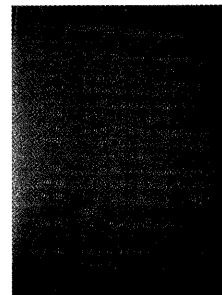
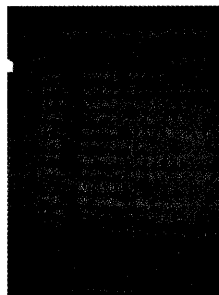
14

ピア@カフェ の様子②



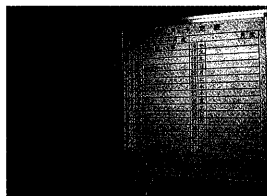
15

ピア@カフェ の様子③



16

ピア@カフェ の様子④



17

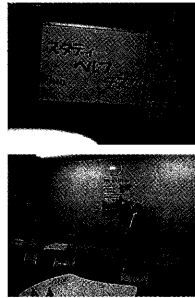
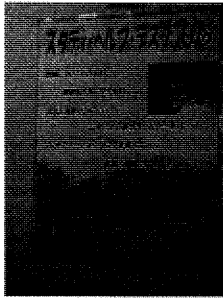
スタディ ヘルプ デスク (SHD)

共通教育科目に関する質問を中心に、
大学院生がスタディーアドバイザーとして、
勉強の仕方に悩む学生の相談にのる制度。

その他 勉強以外のことでも相談にのる。
将来の進路、就職活動etc

18

スタディ ヘルプ デスク (SHD)



19

SCVの課題

○ GP採択期間終了後、SCVをどのように維持していくか。
(現在 毎年 約1,500万 のGP予算)

- ① 採択期間内に、ハード面の整備を図る。
ピア@カフェ、映像スタジオ整備etc
- ② 外部のボランティア団体等との連携強化
- ③ 外部資金の獲得を図る。
AIVOの「地域再生計画」: 内閣府の資金獲得に成功
- ④ 現在9団体あるSCVの団体数の見直し。

20

愛媛大学GP(SCV)の優れている点

- ① 学生の間で自発的に実施されていたボランティア精神に基づく相互支援活動が基礎となっていること。
- ② 学生の側からボトムアップで沸き起こった活動の芽に教職員が着目し、適切な支援を差し伸べたこと。
- ③ 活動の推進体制が明確に組織化されていること。

(「特色ある大学教育支援プログラム実施委員会」による採択理由より)

21

SDチームが評価する 愛媛大学GP(SCV)の優れているところ

- 愛媛大学は、
- ① 地域に根付く「お接待」の文化
 - ② 学生による学生支援(学生ボランティア)
 - ③ 大学の基本目標
をうまく融合させている。

※ どこの大学にも必ず存在する「学生」の力を、巧みに利用し、大学の活性化につなげている。

22

SDチームからの提案

愛媛大学の取り組み、GP(SCV)をヒントに...

愛媛大学は、もともとある「学生」の力を、巧みに利用し、大学の活性化につなげた。

どこの大学にも必ず存在する学生の力

= 「学生力」に着目

● この「学生力」の積極的活用を提案!

23

「学生力」の活用について(提案)

- ① SHD(スタディ ヘルプ デスク(仮称))
- ② 障害者支援ボランティア(仮称)
- ③ 学生生活改善ボランティア(仮称)
※ ①～③の創設・組織化
- ④ 大学経営への学生参画
- ⑤ 「学生力」活用を推進する部署の新設

24

① SHD(スタディ ヘルプ デスク(仮称))

愛媛大学にあるSHDをモデルとして、学生による、学生のための支援のひとつとして、「SHD(仮称)」の導入を図る。

(メリット)

- ・教職員ではなく、学生がアドバイザーとなるため、精神的に相談しやすい。→勉強方法に悩む学生の減少
- ・相談場所の増加による、相談先の選択肢増。
→各学部の窓口及び学生相談所等への相談件数(負担)減
- ・教える側、教えられる側、相互に自己の成長につながる。

25

① SHD(仮称)の問題点・課題

● 問題点

- ・指導する学生及び経費の確保が恒常的に可能か？
- ・カバーする学問分野は、どの範囲までとするのか？
「全学教育科目」+「(各学部研究科)の専門科目」
etc

※工学研究科で導入されている「修学アドバイザー制度(運営主体は学生ではない)」をヒントに、SHDの全学的普及を推進し、将来的には運営主体を学生自身に委ねる。
→本来の意味での「学生による学生の支援」というかたちの組織に移行 = 学生力強化へ

26

② 障害者支援ボランティア(仮称)

愛媛大学にある団体(HSSV)をモデルとして、学生による、学生のための支援のひとつとして、「障害者支援ボランティア(仮称)」の導入を図る。

(メリット)

- ・教職員ではなく、学生が支援者となるため、精神的にも気軽に支援を受けやすい。相談しやすい。
- ・障害学生の支援体制強化により、意欲のある優秀な障害学生の獲得へ。→本学の「門戸開放」の理念にも合致
- ・本学の魅力のひとつとしての障害学生支援。
→本学の社会における貢献度、本学のイメージアップに。

27

② 障害者支援ボランティア(仮称)の問題点・課題

● 問題点

- ・支援する学生ボランティアの確保、養成方法？
- ・必要性(現実に障害学生の受入れ)が本当にあるのか？
(現在聴覚障害者は、本学に在籍していない)
- ・費用対効果として、満足のいく結果が得られるのか？
etc

※費用対効果の点から、組織化に疑問……しかし、
→将来の障害学生入学に備え、本学の「門戸開放」の理念に照らし、果たすべき役割のひとつとして、「障害学生支援」という切り口を避けることなく、学内で議論していくべき。

28

③ 学生生活改善ボランティア(仮称)

愛媛大学にある団体(ESMO)をモデルとして、学生による、学生のための支援のひとつとして、大学と学生の橋渡し役、大学環境の改善を主な活動内容とする「学生生活改善ボランティア(仮称)」の導入を図る。

(メリット)

- ・教職員とは異なる、学生の立場からの大学環境改善を考えるため、真に学生が必要としている「もの」が見えてくる。
→教職員が気がつかない、思わぬ問題点なども把握可能に？
- ・一人では弱い立場にある学生が、自分達の考えを臆せず、大学へ伝えられる伝達手段を得る。
- ・本学学生の意識改革、本学への愛着増
→東北大学をより良くするために、学生自身が自ら主体的に考え、行動するようになる。= 学生力の強化

29

③ 学生生活改善ボランティア(仮称)の問題点・課題

● 問題点

- ・学生ボランティアの担い手をどのように発掘するか？
- ・学生の要望にどの程度応えることが可能か？
- ・学生運動との関係で、弊害がおきないか？
(寮問題等、一部過激団体の活性化につながらないか懸念。)
etc

※大学と学生がきちんと正面から向き合うという意味でも、学生自身の意識改革をするという意味でも、有効なものとなるのでは？
学生の声を真摯に受け止め、その声をもとに改善努力する大学側の姿勢強化という意味でも有効では？

30

④ 大学経営への学生参画

学生による、学生のための支援団体である、①～③等のボランティア団体の組織化をかわきりに、東北大学(の学生生活)をより良くするために何ができるのか、主体的に考え行動する学生達の力、すなわち「学生力」を活用し、学生の大学経営への参画を推進する。

○具体例

- ・ 学生裁量経費の割当
→ 学生の自由裁量で利用できる予算を与え、大学環境改善等に寄与する各種活動・物品・イベント等の費用に。
- ・ その他、カリキュラム編成、履修相談、就職相談、入学式等イベント事業への学生参画。

etc

31

④ 大学経営への学生参画

(メリット)

- ・ 大学経営に、学生色を付す。
→ 学生の立場からのアプローチとして、大学の経営方法に一石を投じる。
- ・ 学生自身の意識改革を促す効果。
→ 自分達が大学をよくする主役となりえるという自覚
「2(元気のいい学生)→6(普通の学生)→2(元気がない学生)」
- ・ 学生の大学経営(業務)参画によって、安価な資源(学生力)を用いて、大学側の業務量減・コスト減につながる可能性。
→ 入試直前の清掃作業等

32

④ 大学経営への学生参画の問題点・課題

● 問題点

- ・ 学生を大学経営に参画させることは必要か？
- ・ どのレベルまで、大学経営に参画させるのか？
- ・ 大学経営の一端を担う学生の「学生力」が本当に育つか？

etc

※ ①～③のボランティア団体等の組織化、活動の成熟化を待ち、少しずつ学生達自身の意識改革を進める。

大学と学生が協力し合いながら、大学改善・大学経営について議論しあうことも必要？

「学生力」をうまく利用しながら、東北大学のよりよい未来のため、独自の試みを模索していくべき。

33

⑤ 「学生力」活用を推進する部署の新設

- ①～③に掲げてきたボランティア団体の創設・組織化、④の大学経営への学生参画を企画・誘導し、東北大学の「学生力」の活用を推進する、専門の部署を設置する。

- ・ 従来の教員・事務職員の枠、文系・理系の枠、教務・庶務・会計の枠にとらわれない職員の組織。
- ・ 従来の考え・慣習にとらわれない若手教職員中心による組織。(ボトムアップ機能の強化。)
- ・ 実現可能・不可能は別として、とにかく様々な角度から、いろいろな提案をし「学生力」の活用を模索。

34

まとめとして・・・

愛媛大学のGP(SCV)は、もともとある「学生力」を巧みに利用し、大学活性化に活かしたものの。

- ・ この「学生力」に着目し、本学でも積極的に「学生力」の活用を推進
 - ・ 大学経営への「学生力」の活用方法を模索
- 大学業務 及び コストの削減、学生自身の意識改革
→ 東北大学の活性化

※ 法人化後は、「アドミニストレーター」としての自覚をもち、大学経営を事務職員一人ひとりが考えていくべき。
今回のSD研修は、我々にとってよいきっかけづくりに。

35



広島大学を訪問して

—本学におけるピア・サポートの
現状と問題点および提言—

アドバイザー

学相：関谷助手
嶺岸学生支援課補
佐

チームスタッフ

城間 克文(教務課)
木村 宙(支援課)
高橋 千秋(支援課)
小林 修(支援課)

PSRの組織

- ピア・サポーター
- ピア・アドバイザー
- 非常勤専門アドバイザー
- 常勤アドバイザー
- PSRの事務担当

相談の流れ

□相談の流れ□



悩み・困ったこと

ピア・サポート・ルームへ

担当ピア・サポーターが話を聞く

相談内容に応じて適切な情報や機関を紹介

PSRの優れている点

- 研修制度がしっかりしている
- 全学的支援体制が確立されている

広島大学における その他のピア・サポート

- 障害学生に対する、学生ボランティアの修学支援
- 「学習支援室」での院生による学習指導

本学のピア・サポートの現状

- 工学部TAによる修学・履修相談
- 理学部キャンパスライフ支援室における 修学相談
- 理学部数学科における履修相談
- 就職内定者による就職相談

問題点

ピア・サポートの全学的な体制が整っていない



ピア・サポートに関する 本学への提言

- 全学的なピア・サポート支援体制の
確立
- 教職員の意識改革

平成 17 年度研修成果報告会

日 時：平成 18 年 3 月 30 日（木） 13：00～15：00

会 場：東北大学川内北キャンパス
教育・学生支援部大会議室（管理棟 3 階）

プログラム：

1. 開会挨拶：東北大学高等教育開発推進センター長 坂本 尚夫
2. 海外研修報告
発表者 1) 海外研修第 1 グループ（A）タイプ
宮城大学事業構想学部助教授 岡田 ロベルト
2) 海外研修第 2 グループ（A）タイプ
東北大学大学院環境科学研究科助教授 古川 柳蔵
3) 医学部グループ（B）タイプ海外研修
東北大学大学院医学系研究科助教授 石井 誠一
東北大学病院検査部助手 國島 広之
東北大学病院総合診療部助手 長崎 裕
4) ライフデザイングループ海外研修
東北大学高等教育開発推進センター教授 吉武 清實
3. 半年間の研修成果を振り返って
4. 閉会挨拶：東北大学教育・学生支援担当理事 菅井 邦明

主催：東北大学高等教育開発推進センター

「国際連携を活かした 高等教育システムの構築」

平成17年度海外研修(グループ①)報告

宮城大学 岡田ロベルト

2006.03.30

全体の研修スケジュール

日付	プログラム	Stanford対応者
3月6日(月)	1) Stanford大学の教育	M. Marinkovich
	2) CTL	R. Dunbar
3月7日(火)	Ws①: コースデザインの発想転換	R. Dunbar
	Ws②: アクティブラーニング	R. Dunbar
3月8日(水)	授業見学: Air Quality Management	L. Hildemann (三石、岡田が見学)
	Ws③: テクノロジーの利用	J. Sabol
3月8日(木)	アメリカと日本の教育における共通課題	R. Dasher M. Inoue
	Ws④: フィードバックとアセスメント	R. Dunbar

Stanfordにおける教育の重要性

- "We believe it is not only possible but vital that we give teaching as much emphasis and support as we give research."

.....
We ask that you be a leader in your teaching as well"

John Hennessy
President

ws①: コースデザインの発想転換

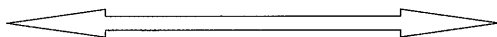
- シラバスの重み
- 受講生を知る
- Learning objective を明確にする

~~曖昧なことは「学習する、知識を習得する」~~

→ 具体的に書く!

ws②: アクティブラーニング

- 先生から学生への一方通行の講義ではなく、
→ 学生を積極的に参加させるactive learning



現状の授業形態
に導入

授業形態自身
を変える

質問の仕方を工夫するだけで学習者を積極的に参加させることも可能

授業見学 : Air quality management

- 総合評価 (中間テスト+課題+期末テスト)
の様々な重み付けを提供
- 授業に課題結果をうまく盛り込んでいる

ws③:テクノロジーの利用

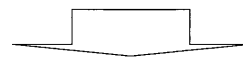
- Learning objectiveを実現するために
必要であれば技術を導入する

7



アメリカと日本の教育に関して

スタンフォードの仕組みをそのまま
日本の大学で適応してもうまくいく??



日本の大学に合う仕組みを考える必要がある

8



ws④: Feedback & Assessment

- アセスメントは学生からみたらマイナスのイメージ
→ motivationをあげるアセスメントもあり得る
- “people can learn more deeply and can retain longer
when they have frequent practice and timely feedback”
- Authentic evaluationを導入することで
学生の学習レベルを上げることが可能

9



制度の違い

- 先生はtenure取得するために真剣
(tenure審査では研究、教育、運営が評価される)
- 私立大学では評価が給料に直接関係してくる
例: best は、最高で1万ドルの賞金
- 人気の低い授業(専門科目)は開講される
- 1科目は週2から3回, 1コマは45分. 課題の量は非常に多い
例: 週3科目履修の場合, 課題提出のため週60時間程度は必要
- TAをうまく活用している (課題採点もOK)

10



まとめ

- シラバス作成に関して, 学習ゴールの明確化
- 学習者の積極的参加をうならす工夫の幅
- 教育現場にITを導入する場合, 本当に必要?
- アセスメントを有効に使用
→ 学習者のmotivationを上げることが可能
- タイムリーなフィードバックの必要性

11



Thank you!!



12



本音トーク

- もう少し時間ほしかった

※ 限られた時間でのプログラムの
バランスは良かった！

- 裏話をもっと聞きたかった....
(success storyだけではなく)



国際連携プロジェクト Stanford 大学訪問報告

2006 年 3 月 30 日

東北大学医学部・東北大学病院

医学部教育評価センター：石井誠一

総 合 診 療 部：長崎 裕

感染制御・検査診断学分野：國島広之

日程表

月日	訪問先	担当者	内容	備考
2006 年 3 月 5 日(日)	(仙台発) (Palo Alto 着)	—	(往路)	(移動)
3 月 6 日(月)	Stanford Teaching and Learning Center	Dr. Marincovich	1) Stanford 大学の歴史 2) Undergraduate 教育の特色 3) CTL の案内	第一グループと行動
3 月 7 日(火)	Stanford Medical FD Center	Dr. Stratos, Dr. Skeff, Dr. Braddock,	1) Medical FD Center が提供する FD プログラムの紹介 2) Team-Based Learning 3) Stanford Hospital 内部案内	医学部 3 名
3 月 8 日(水)	a) Medical Library b) Medical Media Information Technologies	Dr. Stringer Dr. Ketchell Dr. Dev	1) Medical Library の業務 2) Information Technology を 駆使した教材の作製 3) 同、授業の運営 4) 教室のアレンジ 5) Simulator, Media を用いた 技能教育	医学部 3 名
3 月 9 日(木)	Carnegie Foundation	Dr. Irby (UCSF, Medical School) Dr. Iiyoshi	1) UCSF Medical School における最近のカリキュラム改革 2) 同、FD プログラム 3) Carnegie 財団の教育研究 内容について	医学部 3 名
3 月 10 日(金)	(UCSF)	(Dr. Irby)	前日に変更	日程変更
3 月 11 日(土)	(San Francisco 発)	—	(復路)	(機内泊)
3 月 12 日(日)	(仙台着)	—	—	—

国際連携プロジェクト ライフデザイン班 平成17年度 海外視察報告

吉武清實、北原良夫、高野 明
(高等教育開発推進センター)
末松和子
(経済学研究科)
嶺岸幸子(教育・学生支援部)
八木美保子(教育学研究科博士課程)

視察の目的

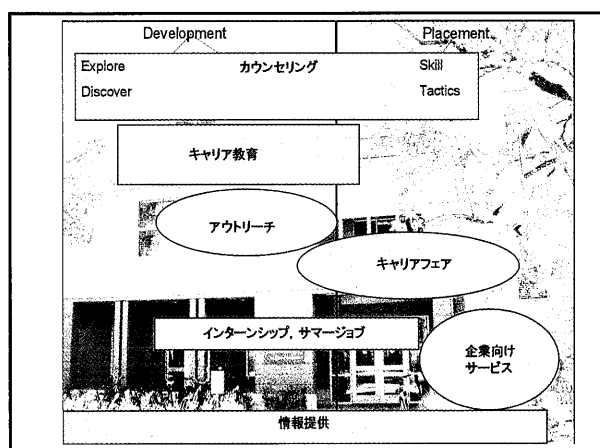
- ・ 大学院重点化、国立大学法人化、日本型雇用慣行・経済構造のゆらぎといった変動の中で、東北大学および日本の大学におけるライフ・キャリアデザインに関わる教育をどのようにしていくのか、米国の大学を視察し、検討の資料を得る。

視察した大学

- ・ スタンフォード大学(平成18年3月8日)
- ・ カリフォルニア大学アーヴァイン校(3月10日)
- ・ ミネソタ大学(3月13日)
- ・ シカゴ大学(3月15日)
- ・ イリノイ大学(3月16日、17日)
- ・ インディアナ大学(3月21、22日)

調査項目

- ・ 本視察では、あらかじめ質問項目を送付しておいた上でインタビューによって、次の項目について聞き取りを行った
 - 組織の構成および目的
 - 組織の運営
 - 提供しているサービスの内容
 - 他機関との連携および人材リソースの活用
- ・ 結果
 - 各大学の特徴は報告書で紹介



まとめ

全ては学生(のニーズ)にはじまる

- ・ 姿勢:
キャリア支援は、入学から卒業後までの発達援助と **placement**援助(進路・就職先探しのプロセス)として行う、という基本姿勢
- ・ サービス内容:
キャリア支援組織のサービスの内容は、キャリアカウンセリング、キャリア教育、webも使った情報提供、キャリアフェア、インターンシップ、企業向けサービスなど。
- ・ 学生活用:
積極的に学生を活用したサービスを提供しようとする傾向がどの大学にも共通してみられた。

まとめ

全ては学生(のニーズ)にはじまる

- 設置組織(部局と全学との関係):
支援組織は、部局組織と全学組織が組み合わせられており、その組み合わせ方に大学ごとの個性がある。
- 援助の力点:
部局組織は**placement**援助により力点をおき、全学組織は発達援助(カウンセリングと教育)により力点をおいているという傾向
- **Placement**に関しては、企業向けの事業や企業とつながるインターフェースの場の提供

まとめ

全ては学生(のニーズ)にはじまる

- スタッフ:
キャリアカウンセラーは修士資格、カウンセリングセンターの心理カウンセラーはP.H.D.



「プロジェクト通信」第1号～13号 コンテンツ一覧

号数	担当者	送信 予定日	プロジェクトの お知らせ	FDのヒント	FDの普及戦略	FDのリソース	その他
1	渡利	11-26-05	紹介				
2	中島	11-30-05		効果的な質問の 仕方(T)	Center for Teaching and Learningの概要 (W)	teaching at Stanford	
3	渡利	12-7-05	海外研修①/授 業相互参観研修 (12-21-05)	セメスター中期 の授業評価(T)	FD研修の参加者 を集めるために は(W)	バークレーの 本・ウェブサイ ト	
4	中島	12-14-05	海外研修②	授業映像の効果 的な自己点検方 法～基礎編～ (T)	Teaching Centersの設立 と発展の理由 (W)	名古屋大学 チップス先生 (W)	
5	渡利	12-21-05	海外研修③/第 2回テーマ別研 修(12-21-05) ／ウェブサイト	授業映像の効果 的な自己点検方 法～発展編～ (T)	効果的なワーク ショップを企画 するには(W)	IDEA	
6	中島	1-11-06	テーマ別研修 「ウェブを使っ た相互参加型学 習」	学生に効果的な 試験勉強をさせ るヒント(W)		アクティブラー ニング(T)	<海外研修特集 1>「アクティ ブラーニングと は」
7	渡利	1-18-06	海外研修の参加 者発表	学生にいいレ ポートを書かせ るヒント(W)		レポートの書き 方サイト(W)	<海外研修特集 2>「アクティ ブラーニングと は2」
8	中島	1-25-06	海外研修の詳細 な日程発表(フ ライツスケ ジュール、宿泊 ホテル、参加メ ンバーの変更) キャリアデザイ ンのブログ	レポートの採点 方法(W)	デスクトップFD (T)	FDのメーリング リスト	
9	渡利	2-1-06		優れた授業実践 のための7つの 原則(T)	CTLの組織(T)	7つの原則の関 連書籍・ウェブ サイト(T)	
10	中島	2-8-06	海外研修詳細ス ケジュール、 ワークショップ 説明(添付ファ イル)	コースデザイン の発想転換(W)		コースデザイ ンの発想転換(W)	<海外研修の事 前知識1>「シ ラバスとは」 (W)
11	渡利	2-15-06	2月28日 第2 回授業相互参観 研修のお知らせ	アクティブラー ニング(T)		アクティブラー ニング(T)	<海外研修の事 前知識2>(T)
12	渡利	2-22-06	2月28日 第2 回授業相互参観 研修のお知らせ	テクノロジーの 利用(T)		テクノロジーの 利用(T)	<海外研修の事 前知識3>(T)
13	中島	3-1-06		フィードバック とアセスメント (W)		フィードバック とアセスメント (W)	<海外研修の事 前知識4>スタ ンフォード大学 の教育プログラ ムについて(W)

国際連携プロジェクト関係者の皆様

こんにちは。当プロジェクトの専属研究員の渡利夏子です。

教育情報学研究部の中島平助教授と共に、スタンフォード大学の訪問研究者(visiting scholar)として、スタンフォード大学を初めとするアメリカでの Faculty Development の取り組みの調査研究を行っています。その事を通じて、日本における FD の在り方について有益な提案が出来ればと考えています。

渡米してから 2 ヶ月が経とうとしておりますが、相変わらず、「日常」生活に翻弄される場面が多い日々を過ごしています。

その一方で、スタンフォード大学でのワークショップやインタビュー、POD Conference という全米の FD センターが集まる勉強会への参加を通して、Faculty Development を初めとする大学のあり方について大きく考えを成長させることもできました。

その成果を、プロジェクト関係者の皆様とも共有したいと考え、「プロジェクト通信」と題したメーリングリストを企画しました。

毎週木曜日に配信します。

その内容については、以下のものを予定しております。

- ・当プロジェクトの海外研修、テーマ別研修等についてのお知らせ
- ・「授業のヒント」: 個々の教員の教育改善に有益な方法の紹介。
(授業設計の方法、討論を活発にする方法、授業評価の方法等)
- ・「FD リソース」: FD に有益な本やウェブサイト、イベント/学会の紹介
- ・「FD の普及戦略」: Stanford 大学の CTL (Center for Teaching and Learning) を初めとする FD センターの提供するサービスについて紹介するとともに、その活動が成立している要因について考察。これは、特に FD を企画・運営する側を主な読者として想定した内容になります。

12 月 1 日から、実際に上記の内容を含んだ「プロジェクト通信」を配信したいと思います。初期設定として、送信対象者は 17 年度のプロジェクト参加者としておりますが、送信を希望されない方はその旨を渡利までご連絡ください。

では、未熟ではありますが、精一杯頑張りたいと思いますので今後ともよろしくお願いいたします。

渡利夏子

プロジェクト関係者各位

国際連携プロジェクト通信第二回目を担当させていただきます、中島です。
プロジェクト通信配信予告に対して、多くの皆様から激励のメールをいただきました。ありがとうございました。

水原教授が渡利さん宛てに送ったメールが、誤ってメーリングリストに送られてしまいましたが、それに対しても荒井先生から御反応がありました。ありがとうございました。

日本はずいぶん寒くなってきて、雪が降ったという話を聞きました。
こちら、スタンフォード大学のあるパロアルトでは、朝晩はコートが必要なほど寒くなったり、また雨も時々降るのですが、基本的に昼は暖かく、仙台の9月半ば頃の陽気を感じさせます。
一週間前には穏やかな陽ざしの中、プールサイドで日光浴をする人もいたくらいでした。

さて、第二回目のプロジェクト通信は、以下の内容でお届けします。
長いですが、時間のある時に興味のある箇所だけでも読んでいただければ幸いです。

目次

＜授業のヒント＞ : 授業の活性化
「効果的な質問の仕方」

＜FDの普及戦略＞ : CTLの概要

＜文献・資料紹介＞ : Teaching at Stanford

＜後記＞

.....
＜授業のヒント＞

学期の半ばに入っています。そうすると学生の欠席が増えたり、授業中の集中力が切れたりすることが多くありませんか。

そこで、今回は授業を活性化する方法の一つとして、「効果的な質問の仕方」を3つ紹介します。

1. 「何か質問ありますか？」よりも良い質問は？

私もよく、学生に向かって「何か質問ありますか？」と聞いてしまうのですが、たいてい、教室内は静まり返ってしまいます。

それは、質問があまりにも漠然としているためなのだそうです。

例えば、

「ここまで、〇〇について話してきましたが、その中で××が大切であるという理由がいくつかあります。それは何ですか？」のように、より具体的な質問をすることで、学生は発言しやすくなるでしょう。

2. 答える前に書かせる

質問をした後に 2、3 分の時間をとって、各々の学生に質問の答えを紙に書かせます。その後、口頭で答えてもらいます。

それによって、学生は自分の考えを一旦整理してまとめることができるだけでなく、発表時の緊張も和らげることができます。

紙に書いている間、先生は学生のそばを歩いて回り、学生からの質問を受け付けることもできます。

私はこの方法をワークショップで教わったとき、「これなら日本のシャイな学生にもすぐに適用できる！」と思いました。

3.隣の人と相談させる

質問をした後に、2、3 分の時間をとって、隣の人同士で質問について相談させます。先生と学生間のコミュニケーションだけでなく、学生間でもコミュニケーションを持たせることで、学生に発言の自信を持たせたり、授業への積極的な参加を促すことができます。

授業の出席者同士で相談させるこの方法は、大変効果が高いようです。

CTL のさまざまなワークショップで繰り返し紹介されているだけでなく、ワークショップ中に出席者を議論に巻き込むために、実際に「この問題を隣の人と話し合ってください」手法が多用されています。

以上、「効果的な質問の仕方」に関して、より詳細に知りたい場合はぜひ、中島まで、お知らせください。

<FDの普及戦略①「CTLの概要」>

CTL(Center for Teaching and Learning)はスタンフォード大学にある、大学教員とティーチングアシスタントの教育活動の支援を行うセンターです。

具体的には、以下のようなサービスを提供しています。

- ・授業観察を踏まえてのアドバイス
- ・授業撮影
- ・学生による評価: 授業の最後の 20 分を使って、スタッフが学生の授業に対する意見を取りまとめて、教員に報告する。
- ・新任教員へのオリエンテーション
- ・優秀教員の授業公開
- ・教育改善に役立つワークショップ
- ・授業でのテクノロジー利用の支援
- ・授業のウェブサイト開設の支援
- ・TA に対する教育オリエンテーション
- ・大学院生に対する教育履歴書の書き方の指導

上記の活動に関して、日本の FD と比べて新鮮に写った点は以下の 3 点です。

1. 日本では上記のような活動をファカルティ ディベロップメントと 一般的には呼んでいますが、スタンフォード大学では Teaching(教育活動)Resources (供給源/資源)と呼んでいます。

つまり、CTL の活動の利用者は教員だけではなく、TA を行う 大学院生や非常勤教員も含まれ、彼らの教育活動のためのリソースを提供する事が CTL の役割であるという事です。

2. Teaching Resourceと呼んでいることから分かるように、 CTL は、利用者が希望すること、必要としている事を、必要なだけ(その他の業務に差し支えがない程度に)サービスを提供するというスタンスを取っています。

そのために、例えば、教育改善に役立つワークショップは、利用者が必要とするテーマについて、昼休みを利用して開かれます。そこでは昼食も用意されます。

3. CTL がワークショップ等のサービスで強調する点は
“efficiently(効率的に) and effectively(効果的に)”という事です。ただ教育を重視するためだけのワークショップは、研究大学であるスタンフォードでは需要がほとんどありません。

そこで、これまでの教育活動を見直して、削る所は削り、効果的な方法を新たに加えるという方法を取るよう勧めます。

CTL のサービスの利用者は、その習得のためにいくらかの時間を取られますが、そこで学んだ方法を使うことで、長期的には教育に費やす時間や労力を減らすことができ、且つ効果的な教育を行うことができるということになります。

以上のようなスタンス、戦略を取ることによってCTLはスタンフォード大学内での地位を築いているといえます。

ただし、これはわずか 2 ヶ月の滞在の間に気がついた事なので、今後もこの点については追究していきたいと思います。

次号では、CTL が提供するワークショップについて、詳しく紹介したいと思います。

3 月に行われる海外研修では、CTL のスタッフによるワークショップを提供する予定です。

今回紹介した CTL の活動については、下記のウェブサイトをご覧ください。

<http://ctl.stanford.edu>

以上、＜FDの普及戦略＞は渡利が担当しました。

＜文献・資料紹介＞

Teaching at Stanford: An Introductory Handbook for Faculty,
Academic Staff, and Teaching Assistants

スタンフォード大学における、ティーチングの心得、種々の具体的なテクニックが一通り(授業構想から学生の評価方法、授業アセスメントまで)読みやすくまとめてあります。

CTL のワークショップで、Teaching の資料として配られることも多く、まず始めに手に取って役に立つ資料としてご紹介させていただきます。

(<http://ctl.stanford.edu/handbook.pdf> PDF 版。印刷に適しています)

(<http://ctl.stanford.edu/teach/handbook.html> HTML 版。ブラウザで読むのに適しています)

＜後記＞

みなさまの多くは、授業を既に撮影なさっているかと思います。

自分の授業の様子を見てみましたでしょうか？

私が初めて自分の授業姿をビデオでチェックして感じたのは、落ち着きのなさ、説明の最後に語尾が、いまいになることがあること、それから、間の取り方のヘタさでした。

それから同時に、授業姿のチェックに時間と労力がかかることも痛感しました。

これは、何回もできるものではないなと思いました。

個人的な研究の話で申し訳ないのですが、現在、撮影した授業映像をもっと手軽、かつ効果的にチェックすることができるシステムを開発中です。

無事完成しましたら、来年度の国際連携プロジェクトにフィードバックできれば…、と思っております。

プロジェクト通信では、取り上げてもらいたいトピック、疑問点など、みなさまのご意見やご提案をお待ちしております。

また、みなさまが取り組んでいらっしゃる教育活動や、授業撮影をしてみたの感想なども送っていただけたらと思います。

あて先は渡利です。

よろしくお願いいたします。

文責：中島 平

プロジェクト関係者の皆様

前回の「プロジェクト通信」はいかがでしたでしょうか。

忙しくて、見る時間もないという方もいらっしゃると思いますが、同様の内容を、当プロジェクトのウェブサイト(12月末開設予定)に掲載する予定ですので、そちらでまとめて確認することもできるようになります。

第3回目の「プロジェクト通信」は以下の内容でお送りします。特に、＜海外研修のお知らせ＞には、3月に行われる海外研修の日程が掲載されておりますので、関係者の方は必ずご確認ください。

目次

＜海外研修のお知らせ＞

＜授業相互参観研修のお知らせ＞

＜授業のヒント＞ :「セメスター中期の授業評価」

＜FDの普及戦略＞ :「FD研修の参加者を集めるためには」

＜FDのリソース＞ :『授業の道具箱』

＜後記＞

＜海外研修のお知らせ＞

第1グループ:3月5日(日)～11日(土)

(5日に仙台を出発、11日に仙台に到着)

第2グループ:3月12日(日)～18日(土)

(12日に仙台を出発、18日に仙台に到着)

その主な内容は、以下の通りです。

- ・CTLのスタッフによるFDワークショップ
- ・授業見学
- ・スタンフォード大学の日本人教員・学生との交流

グループによる行動が主ですが、個別行動の時間もあります。

楽しくてためになる海外研修になる予定ですので、是非、ご参加ください。

海外研修に関わる今後の日程を発表します。

12月15日:海外研修の具体的なスケジュール発表

参加受付開始

1月11日:参加締め切り

1月18日:グループメンバー発表

＜12月21日授業相互参観研修のお知らせ＞

日 時:2005年12月21日(水)10:30～12:00

場 所:東北大学川内北キャンパス 管理棟3F大会議室

研修内容:授業改善に向けた自己点検・相互参観について

今後の研修プロセスについて

参加申込期日:2005年12月12日(月)

詳しくは、12月5日に鎌田さんから送信されたメールをご覧ください。

<授業のヒント>:「セメスター中期の授業評価」

皆さま、そろそろ授業も折り返し点かと思います。

私も現在、遠隔で授業を持っておりますが、対面授業に対して情報のやりとりが困難なことから、想像以上に苦慮しております。

あるカリキュラムに沿って授業を行っているとき、その授業を向上させるのに最も役立つことは、

「授業の評価」

であると、カリフォルニア大学バークレー校の教授、バーバラ・グロス・デビスは、名著『授業の道具箱』の中で述べています。

授業の評価方法には

- 1.学期中の(学生からの)フィードバック
- 2.自分の授業をビデオ録画で見る
- 3.自己評価及び、ティーチングの調査書

の3つがあるのですが、今回はセメスター中期の授業評価によって授業の軌道修正する方法を紹介したいと思います。

さて、セメスター中期の授業評価は、セメスター終了後の評価と比較して、

- a) 学生が直接フィードバックの恩恵にあずかることができる
- b) 先生がすぐにフィードバックを授業に活かすことができる

という点で優れています。

(1)中期授業評価の目的

- 1.学生がここまで授業を理解してきているかのチェック
- 2.自分の授業が効果的に行われているかのチェック

この二つが重要なものとして挙げられます。

もちろん、他に自分が知りたいことを自由に加えることもできます。

(2)カリフォルニア大学バークレー校における中期評価の例

(参照:http://teaching.berkeley.edu/docs/Sample_midterm_evals.pdf)

いくつかの中期評価の例が載っていますが、基本となるのは以下の3つの質問でしょう。

- 1) この科目で最もあなたの助けになったのは、どのような点ですか？
- 2) この科目で最もあなたの助けにならなかったのは、どのような点ですか？
- 3) この科目を良くするために、私が何か一つ変えたとしたら、それは何ですか？

「助けになった」を「気に入った」、「役に立った」、「重要だった」などに変化させることもできると思います。

(3)学生へのレスポンス方法のヒント

(参照:<http://teaching.berkeley.edu/respond.html>)

中期評価は、やりっぱなしでは効果半減。以下に学生へのレスポンスで重要となるポイントをご紹介します。

- ・できるかぎり、すぐに返答する。
次の回の授業で取り上げるのが良さそうです。集計がしんどいですが。
- ・学生の意見を慎重に検討する。
このセメスターで変更すること、来年の授業で取り入れること、変更しないことに分類します。
- ・学生に変更点を知らせる。

- コメントに感謝しつつ、検討の結果を学生に話します。
- ・学生のフィードバックへのレスポンス方法を選ぶ。
- 多くの先生は、授業でフィードバックについて紹介・議論しているそうです。

さて、ちょっと長くなってしまいましたが、いかがでしたでしょうか？
私も、やり方を自分流にアレンジしつつ、早速学生さんに送ってみる予定です。

以上、中島が担当しました。

<FDの普及戦略>:「FD研修の参加者を集めるためには」

今回は、FD研修に自発的な参加者を増やす方法についてCTLの事例から考えていきたいと思います。

自発的な参加者を増やすためには、FDへの理解を深めてもらうための啓蒙活動も重要ですが、FDをより身近で参加しやすいものにする方が簡単かつ効果的です。そのためには、FD研修は参加者にとって

“Efficiently(効率的に)and Effectively(効果的に)”

である必要があります。
具体的には、以下の3点がポイントです。

1. 仕事の合間に
2. 食事をしながら
3. 実用的な事を学ぶ事ができる

CTLのファカルティ・ワークショップは、それを踏まえたFDワークショップの企画・運営をしています。
以下、1つのワークショップの事例を紹介します。

テーマ:「人文科学の授業を設計する」
主催:CTL(人文科学担当のスタッフが1名参加)
日時:12月1日 12:00-14:00(昼食付)
参加者:人文科学の教員10名(大半が新任・若手教員)

1. 自己紹介(30分)
名前、所属、担当科目の他に、「なぜ、このワークショップに参加したのか」について話をする。
2. スタッフによる講義(10分)
“Designing Courses Backwards”、つまり、学生の学習目標から授業作りをする方法を紹介。
3. コースデザインの作業(1時間半弱)
 - (1)授業の前提条件を書き出す。(10分)
 - ・受講生の特徴(受講人数/学年/専攻/興味関心)
 - ・自分がやりたい事・できる事(研究対象/性格/関心)
 - ・大学全体のカリキュラム(必修・選択/共通・専門)
 - (発表・質疑応答(10分))
 - (2)学生の学習目標を立てる。(10分)
e.g.「国家による大学教育カリキュラムの変遷のポイントを論述することができる」(渡利案)
 - (発表・質疑応答(30分))

(3)その学習目標に到達するために必要な授業内容、授業方法、課題、評価方法を考える。(10 分)

(発表・質疑応答(10 分))

このように、CTLのFDワークショップは

1. 仕事の合間に(昼食の時間帯。途中参加・退室も可)
2. 食事をしながら(サンドイッチ・サラダ・飲み物を提供)
3. 実用的な事を学ぶ事ができる(シラバス作り)

という方法で、自発的な参加者を獲得しています。

もちろん、この方法は万能という訳ではありません。

人文科学系学部の全教員の内、10 名しか参加しなかったことから分かるように、スタンフォード大学のFD活動も試行錯誤の途上です。もし、皆さんの中でよい方法をご存知の方がいらっしゃいましたら、是非、ご紹介ください。

以上、渡利が担当しました。

<FDのリソース>

今回は、<授業のヒント>で取り上げられたUCバークレーの本・ウェブサイトを紹介します。

(1)『授業の道具箱』

バーバラ・グロス・デイビス著

東海大学出版会 2002 年 7 月出版

¥2,940 (税込) ISBN:4-486-01532-0

(2)『授業をどうする!—カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』(お手軽なハンドブックです。)

バーバラ・グロス・デイビス[ほか著]

東海大学出版会 1995 年 12 月出版

¥1,575 (税込) ISBN:4-486-01365-4

(3)Tools for Teaching(注:①の原著)

Barbara Gross Davis (著)

Jossey-Bass Inc Publishers, 1993

【Amazonで輸入した場合、¥5,214(税込)】

(4)『授業の道具箱』のウェブ版

<http://teaching.berkeley.edu/compendium/>

読みにくいですが、特定の項目について調べるのなら便利です。

<後記>

今回の「プロジェクト通信」はどうでしたか。

長くて、ここまでたどり着くのも一苦勞ですね。すいません。

皆様にとって、少しでも授業のヒント、FD活動のヒントになれば幸いです。

中島・渡利にとっては、毎週このような報告を出すというのはその他の予定と相まって大変ではありますが、まじめに勉強をするよいきっかけになっていますし、何よりもプロジェクトの参加者の皆様との「対話」のきっかけとなっていることが嬉しいです。

ご意見・ご感想の連絡先は渡利まで。
もし、プロジェクト関係者の皆様とも共有したいとお考えでしたら、
project-tsushin@ei.tohoku.ac.jp までメールをお送りください。

海外研修の日程も決まり、アメリカで皆様と再会できる日も近づいてきました。一人でも多くの方のご参加をお待ちしております。

文責：渡利夏子

□プロジェクト通信 第4号

2005年12月16日 16:13

プロジェクト関係者の皆様

こんにちは。プロジェクト通信 第4号担当の中島です。
みなさま、年末に向かって大変にお忙しい日々をお過ごしのことと思います。

こちらパロアルトでは風邪が流行っているようで、周りでも咳をしている人をちらほらと見かけます。
季節の変わり目に風邪をひきやすいのは、万国共通なのかもしれません。

どうか、皆様も体にお気をつけてお過ごしください。

さて、第4回目の「プロジェクト通信」は以下の内容でお送りします。特に、＜海外研修のお知らせ2＞には、3月に行われる海外研修のスケジュールと参加申し込み方法が掲載されておりますので、関係者の方は前回に引き続き必ずご確認ください。

目次

- ＜海外研修のお知らせ2＞：スケジュール・参加申し込み方法
- ＜授業のヒント＞：「授業映像の効果的な自己点検方法1」
- ＜FDの普及戦略＞：「Teaching Centersの設立と発展の理由」
- ＜FDのリソース＞：「成長するティップス先生」
- ＜後記＞

＜海外研修のお知らせ2＞

・海外研修スケジュール

グループ1：3月5日(日)～11日(土)

(5日に仙台を出発、11日に仙台に到着)

グループ2：3月12日(日)～18日(土)

(12日に仙台を出発、18日に仙台に到着)

詳細はこのメールに添付のPDFファイルをご参照ください。
(先方の都合で、内容が一部変更になる可能性があります。)

グループ1とグループ2で、内容は一点を除き、同じです。
その異なる点は4日目(水)の10:00から11:30のセッションです。
ご注意ください。
研修は必須のものと、選択のものの2種類があります。
選択のものは、参加申し込み時に参加の可否をお知らせください。

・海外研修の参加申込み

参加申込みの受付は 下記の申込み専用 Web ページを使って行います。

<http://www.istu.jp/iproject/kaigaikenshu-input.html>

※送信ボタンが表示されない場合、ブラウザの文字サイズを「中」以下に設定してください。

申込みを行うと数日以内に確認メールが担当者から届きます。

参加申し込みの期日は、2006 年 1 月 11 日(水)の 17:00 です。

海外研修には、スタンフォード大学の Best Teacher と会ったり、スタンフォード大学の日本人教員と、日米の授業や教育に関して話し合うなど、海外ならではのイベントが多く盛り込まれております。是非ご参加くださいませ。

<授業のヒント>:「授業映像の効果的な自己点検方法 1」

今年の夏に国際会議の発表で、フロアにいる人たちに「自分の授業をビデオで見て、いかがでしたか？」と聞いてみたのですが、苦笑いをしている人が多数。

「イヤなんですけど、役に立つんですよね～」と話すと、「うん、うん。」とうなずいていました。

ビデオで自分の授業姿を見ると、どうしても外見や口調など、自分の外面的な弱点ばかりが気になってしまいがちです。

そうすると、肝心の「授業内容改善に役立てる」という目的も、かすんでしまいがちです。

そこで、今回は自分の授業映像を自己点検する際に効果的と思われるいくつかのチェックポイントをご紹介します。

・できるだけ早く見る

授業中、何を考え、何を感じていたのか、記憶が鮮明なうちに見ます。

できれば、録画した当日か翌日。すぐに見られない場合は、授業後に、授業に関する自分のコメントを残しておくのも良いでしょう。

・良いところにも注目する

とにかく自分の授業の問題点が自然に浮かび上がって来てしまいますが、自分の授業の長所に注目するのを忘れないようにしましょう。

・自己点検のヒント

ビデオをひと通り見て、次の 6 つの質問に自分で答えてみましょう。

- 1)この授業で私が上手にできた点は、何だろう？
- 2)もっと上手にできた点は何だろう？
- 3)学生たちが最も楽しんでいたのは、何だろう？
- 4)学生たちが最も楽しまなかったのは、何だろう？
- 5)もう一度この授業をやり直すとしたら、
どの点を変更するだろうか？(3つ挙げてみる)
- 6)それらの3つの点をどのように変更するだろうか？

以上、忙しく、十分な時間が取れない先生のための授業自己点検のヒントでした。

来週は、もっと詳細に自分の授業を分析してみたい先生のために「授業映像の効果的な自己点検方法 2」をお送りする予定です。

<FDの普及戦略>

「Teaching Centers の設立と発展の理由」

これまでの「プロジェクト通信」では、CTL のサービス一覧とワークショップを例に、FD の普及戦略を幾つか指摘しました。

今回は、CTL がスタンフォード大学に設立された経緯を中心に、「Teaching Centers の設立と発展の理由」について説明したいと思います。

Teaching Center の設立と発展に必要なものは大きく2つあります。

- 1) 資金
- 2) 教育改善に関する情報という資源

スタンフォードに CTL が設立されたのは 1975 年ですが、その目的は主に「2) 教育改善に関する情報という資源」を蓄積することにあります。

CTL はスタンフォード自身の資金ではなく、ダンフォース基金という私的な財団からの寄付金によって設立されました。その寄付の目的は、以下の 2 点でした。

- ① サンフランシスコ近辺の大学の教育改善のための資源を集める事
- ② スタンフォード大学における新任教員と TA のためのサポートをする事

同財団は、スタンフォード大学の他にハーバード大学他、計 5 校に寄付をしましたが、ダンフォース財団の寄付が終了した 1978 年以後にも学内の資金で Teaching Center を維持できたのは、スタンフォード大学とハーバード大学だけでした。

その他の teaching centers が多く設立されるようになったのは、National Teaching & Learning Forum が 1991 年に活動を開始してからです。このフォーラムは、「2) 教育改善に関する情報という資源」を全米の大学に提供しました。

その事によって、資源を持たない多くの大学が teaching Center を設立することが可能になりました。

その他、POD Network (Professional and Organizational Development in Higher Education) も教育改善のための情報交換の場を提供するだけでなく、新しく Teaching Center を設立する大学を資金・資源の両面から支援しています。

私がこのような歴史を調べて思った事は、「意外と歴史が浅い」ということです。大学の大半は、90 年代から取り組み始めたばかりですし、スタンフォードの CTL も老舗をいえども 20 年です。

しかし、アメリカの事例で素晴らしいと思うのは、大学同士のネットワークを構築した点です。その事が短期間で全米に FD を普及・発展させた理由ではないでしょうか。

今回は、FD の普及に貢献している POD について紹介したいと思います。

以上、渡利が担当しました。

<FD リソース>

今回、紹介しますのは名古屋大学 高等教育研究センターのウェブサイト、「成長するティップス先生」です。
(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/>)

サイトには、1 年を通しての授業の流れの概説、授業の基本(大学教授法)、授業で使う情報サイト一覧、授業改善を希望する時や困った時のためのサポート体制等について詳しく書かれています。

この取り組みは、2004 年度の「特色ある大学教育プログラム」(文部科学省)に採択されています。

(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/gp/abst.html>)

蛇足になりますが、この名古屋大学のセンターの方々といつ先月、ミルウォーキーで開催されたPOD会議（FDセンターの職員のための学会）でお会いしました。

お二人とも、非常に意欲的且つFDに見識がある方でした。

もし、FDに関して国内視察をする機会がありましたら、名古屋大学を訪問することをお勧めします。

<後記>

お忙しい中、最後までお読みくださり、ありがとうございます。

今回の「プロジェクト通信」はいかがでしたか。

12月21日の授業相互参観研修を控え、今回は授業映像の自己点検のヒントを中心にお送りしました。

ご意見・ご感想の連絡先は watanatu@stanford.edu です。

もし、プロジェクト関係者の皆様とも共有したいとお考えでしたら、

project-tsushin@ei.tohoku.ac.jp までメールをお送りください。

東北地方は雪が積もっているそうですね。仕事が忙しく、帰りが遅くなることも多いかと存じます。どうか、交通にはお気をつけください。

それでは、これからもよろしくお願いいたします。

文責：中島 平

□プロジェクト通信 第5号

2005年12月22日 6:22

プロジェクト関係者の皆様

こんにちは。プロジェクト通信 第5号担当の渡利です。

日本では、記録的な寒さと降雪だそうです、いかがお過ごしでしょうか？

海外研修の参加申し込みをされた方から、3月のパロアルトの気候について、お問い合わせがありました。パロアルトの3月の平均最高気温は約17度、平均最低気温は約7度ですが、これは仙台の5月の気温に相当します。

海外研修の際には、東北より1枚薄着でお越しください。

さて、第5回目の「プロジェクト通信」は以下の内容でお送りします。

目次

<海外研修のお知らせ3> :1月11日参加締め切り

<第2回テーマ別研修会の開催について>1月13日参加締め切り

<プロジェクトのウェブサイトについて>

<授業のヒント> :「授業映像の効果的な自己点検方法2」

<FDの普及戦略> :「効果的なワークショップを企画するには」

<FDのリソース> :「授業評価のフィードバック」

<後記>

<海外研修のお知らせ 3>

前号でお知らせした海外研修の申し込みのウェブサイトが、機能せず、申し訳ありませんでした。
現在では、受付が可能となっており、何人かの方から参加の申し込みを承りました。

海外研修申込みページは以下の通りです。
<http://www.istu.jp/iproject/kaigaikenshu-input.html>

参加申し込みの締め切りは 1 月 11 日の 17 時です。
一人でも多くの方のご参加をお待ちしております。

海外研修について、ご質問がありましたら i-project@he.tohoku.ac.jp までご連絡ください。

<第2回テーマ別研修会の開催について>

日 時:2006 年 1 月 31 日(火)15:00-17:00
場 所:東北大学川内北キャンパス
マルチメディア教育研究棟 2F M203 教室(CALL 教室)
テーマ:「e-ラーニングの新たな教育実践
ーWebOCM による e-ラーニングー」
講 師:東北大学大学院国際文化研究科助教授 杉浦 謙介

参加申込みの締切:2006 年 1 月 13 日(金)

研修会参加の申込み先:鎌田
内容等に関するお問合せ:関内

<プロジェクトのウェブサイトについて>

「国際連携プロジェクト」のウェブサイトができました。
<http://istu01.ei.tohoku.ac.jp/iproject/index.htm>

現在は、工事中の箇所が多く、ご不便をおかけしますが、
・今後のイベントの確認
・「プロジェクト通信」の内容閲覧
・海外研修の申し込み
が可能となっております。どうぞ、ご利用ください。

<授業のヒント>:「授業映像の効果的な自己点検方法 2」

先週に引き続き、撮影した授業映像の効果的な点検方法をお送りします。

今週は、より細かく授業を分析したい場合のために、授業分析のための 7 項目チェックリストをご紹介します。
分析には、授業時間の 2 倍程度の時間をかけることが推奨されています。

(1)授業の構成と準備

- ・授業の最初に今日の授業の目的と、前回の授業との関わりを示しましたか？
- ・授業のアウトラインを学生に手渡すか、黒板などで説明しましたか？
- ・今日の授業教材の内容説明はしましたか？
- ・黒板やパワーポイントなどを使って、内容を明確化、あるいは強調できましたか？

・授業の最後に今日重要だった点を、まとめましたか？

(2)プレゼンテーションスタイル

- ・聞き取り易い、はっきりとした強い声で話せましたか？
- ・話すスピードは速すぎたり、遅すぎたりしませんでしたか？
- ・学生がノートを取れるペースで話せましたか？

(3)プレゼンテーションのわかりやすさ

- ・新しい用語、概念、原理を定義しましたか？
- ・抽象的な概念を明確にするために、例や挿絵や応用を示しましたか？
- ・新しい概念を、親しみのある概念と明示的に結びつけましたか？

(4)質問の技術

- ・講義中の話題について、学生が理解したかどうか判断できるような質問をしましたか？
- ・学生を試し、惹きつけるために、様々なレベル、様々な種類の質問をしましたか？
- ・学生が答えられるように、全ての質問の後で十分な時間待ちましたか？

(5)学生の興味と参加

- ・学生の質問を奨励しましたか？
- ・異なったものの見方を受け入れましたか？
- ・学生の知的興味を惹きつけましたか？

(6)クラスの雰囲気

- ・学生をちゃんと名前呼びましたか？
- ・全ての学生のコメントや質問を公平に注意を持って聞き、公平に答えましたか？

(7)ディスカッション

- ・全ての学生がディスカッションに参加することを、奨励しましたか？
- ・意見の衝突や違いを調停しましたか？
- ・ディスカッションをきちんと終結させましたか？

前回と今回の＜授業のヒント＞は、カリフォルニア大学
バークレー校 Office of Educational Development の
<http://teaching.berkeley.edu/bgd/videotape.html>

を参考にしました。このページには、さらに詳しい情報がありますので、必要に応じてご参照ください。

(担当：中島)

.....
＜FDの普及戦略＞

「効果的なワークショップを企画するには」

先週は、Teaching Centersの歴史を取り上げましたが、その末尾に取り上げたPOD Networkを覚えていら
っしゃいますでしょうか。FDの企画に携わる人たちの組織です。

(PODウェブサイト：<http://www.podnetwork.org/>)

今週は、そのPODの学会で学んだ、効果的なワークショップを企画する上で考慮すべき点について紹介し
たいと思います。

この方法は、The University of Texas at Austinの
The Division of Instructional Innovation and Assessment
によって発表されたものを参考にしております。

(DIIA ウェブサイト:<http://www.utexas.edu/academic/diia/>)

(1) ワークショップたりうるために必要なポイント

- ・短い時間で濃い内容
- ・小さなグループでの話し合いを重視
- ・具体的な変化が実感できる
- ・新しい学習理論を応用する

(2) ワークショップのテーマを考えるヒント

- ・授業の進行状況に対応しているか
e.g. 学期の初めに「オリエンテーションの方法」
学期の終わりに「学期末評価の方法」
- ・教員の知りたい事に答えているか
- ・実用的であるか

(3) ワークショップでの効果的な活動

- ・参加者同士の自己紹介 (Social icebreakers)
- ・予定表の作成 (Agenda Creation)
事前にプログラムを考えておくが、参加者からの希望に応じて、プログラムを変更する。
- ・自己評価活動 (Self Assessment Activities)
他の参加者と意見を交換した後に、自分の意見を見直す。
- ・ペアになって意見交換 (Think-pair-share/Write-pair-share)
隣の人とピックや質問について意見交換をした後に、全体で話し合いを進める。
- ・グループ討論 (Group Discussions)
- ・獲得した技術を実際に応用する (Test of Skill)
- ・ケース・スタディ (Case Studies/ Simulations)
実際の授業を想定して、その問題を解決する方法を考え出す。

(4) ワークショップの周知の方法

- ・チラシ、ポスター
- ・e-mail
- ・口コミ
- ・ウェブサイト
- ・学内の定期刊行物

「プロジェクト通信」や3月に行う海外研修は、上記のポイントを参考にしている所が数多くあります。皆様も今後、FD 研修を企画される際に、ご参考にしてみたいはいかがでしょうか。

(担当: 渡利)

<FD リソース>「授業評価のフィードバック」

今回は、個々の授業改善のためというよりは、FD の企画を担当されている方々のためのリソースです。授業評価の作成、分析、フィードバックを行う IDEA (Individual Development and Educational Assessment) Center を紹介いたします。(IDEA ウェブサイト:<http://www.idea.ksu.edu/>)
このセンターに注目したのは、授業評価のフィードバックを POD との連携の下で、実施している所です。授業評価の分析の結果、改善すべきと考えられる点について、改善案を書いた用紙を配布するという方法を用いています。
(改善案:<http://www.idea.ksu.edu/resources/index.html>)

授業評価が普及した現在、その評価をどのようにフィードバックするのが課題となっております。

IDEA Center は、その際の参考となるのではないのでしょうか。

(担当:渡利)

.....
<後記>

お忙しい中、最後までお読みくださり、ありがとうございます。
「プロジェクト通信」の内容についてのご意見・ご提案をいただけると、今後の企画を考える上で非常に参考になります。どうぞ、よろしくお願いいたします。

ご意見・ご感想の連絡先は i-project@he.tohoku.ac.jp です。
このメールアドレスは、中島と渡利に送られます。
海外研修へのお問い合わせも同アドレスにお送りください。
プロジェクト関係者の皆様とも共有したいとお考えでしたら、
project-tsushin@ei.tohoku.ac.jp までメールをお送りください。

先日は、岩崎先生から授業案のメールを、project-tsushin@ei.tohoku.ac.jp
を経由していただきました。是非、皆様もご活用ください。

次号の「プロジェクト通信」は 1 月 12 日(木)配信予定です。
それでは、これからもよろしくお願いいたします。
良いお年をお過ごしください。

文責:渡利夏子

□プロジェクト通信 第 6 号

2006 年 1 月 12 日 9:56

プロジェクト関係者の皆様

あけましておめでとうございます。
2006 年最初のプロジェクト通信 第6号担当の中島です。
今年もどうぞよろしくお願いいたします。

海外研修では、たくさんの方々に申し込みをいただき、ありがとうございました。1 月 18 日にグループメンバーを発表いたしますので、もうしばらくお待ちください。

さて、第6回目の「プロジェクト通信」は以下の内容でお送りします。

目次

<第2回テーマ別研修会の開催について> :1 月 13 日参加締め切り
<授業のヒント> :「学生に効果的な試験勉強をさせるヒント」
<海外研修特集1> :「アクティブラーニングとは」
<FDのリソース> :「アクティブラーニング」
<後記>

今回は新しい試みとして<海外研修特集>があります。
海外研修では、さまざまなイベントが企画されていますがそのいくつかは、日本ではなじみの少ないものです。
<海外研修特集>では、研修内容に関連した情報の中でも、特に事前に知っておくと戸惑いが少なくなったり、より有意義に時間を過ごしていただけるものを選んで提供いたします。

<第2回テーマ別研修会の開催について>

日 時:2006 年 1 月 31 日(火)15:00-17:00

場 所:東北大学川内北キャンパス

マルチメディア教育研究棟 2F M203 教室(CALL 教室)

テーマ:「e-ラーニングの新たな教育実践

ーWebOCMによるe-ラーニングー」

講 師:東北大学大学院国際文化研究科助教授 杉浦 謙介

参加申込みの締切:2006 年 1 月 13 日(金)

研修会参加の申込み先:鎌田

内容等に関するお問合せ:関内

<授業のヒント>:「学生に効果的な試験勉強をさせるヒント」

年が明け、1 月も半ばに入ろうとしております。

授業も終盤に差しかかり、学期末試験と成績をどうしようかとお考えの方もいらっしゃるのではないかと思います。

そこで、1 月の 3 週間はこのテーマでお送りします。

今週は、試験の目的とは何かを改めて考えながら、学生に効果的な試験勉強をさせる方法を紹介したいと思います。

教授法の名著『McKeachie's TEACHING TIPS』では、「学生は授業と同じくらいテストから学ぶ」「評価は学生にとって 1 つの学習経験なのだ」と述べられています。

つまり学期末テストとは、学習の達成度を評価するだけではなく、学生がこれまでの授業内容の要点を総括するとともに、自らの学習課題を知る機会でもあるのです。

確かに、テストの時ほど学生が真剣になって学ぶ時はないといっても過言ではないでしょう。

テストとその準備期間を利用して、授業に対するより一層の理解を深めるように促してはどうでしょうか。

以下、学生に効果的な試験勉強をさせるヒントです。

「そのような事をやってもいいのか」と驚かれる方もいらっしゃると思いますが、これらの方法は授業の要点を明確にすることで、学生の学習を促進するという効果があります。

(1)試験で出題される問題を教える。

例えば、授業のポイントとなる 10 の問題を作成し、学生に「10 題の内 2 題が出題されます」と提示します。

そうすることで、学生は授業のポイントを効果的に復習することができます。

(2)過去の問題を配布する。

過去問を見ることで、学生は当年度の試験勉強のポイントを端的に知ることができます。学生の間では、非公式に先輩からの過去問が出回っている事がありますが、この方法を使う事によって、試験に関する情報の不均衡を防ぐこともできます。

(3)メモ一枚分の持ち込みを許可する。

持込を完全に自由にするよりも、A4 紙 1 枚程度に制限した方が、学生は事前に勉強をしてくるようになります。その紙を作成するプロセスで、学生は授業の要点を自分で整理するからです。

テスト回収後、1 週間以内に採点をして返却をすることで学生の学習効果はさらに上がります。というのも、

学生自身が一生懸命勉強したことに対するフィードバックを、記憶が鮮明なうちにもらうことができるためです。是非、お試しください。

(担当:渡利)

<海外研修特集1>「アクティブラーニングとは」

アクティブラーニングとは、学習者が受身ではなく、自ら主体的に学ぶように、教師がガイドをする授業方法です。

私がアメリカに来て、さまざまなFDワークショップに参加して最も戸惑ったことの一つは、ワークショップそのものに、アクティブラーニングの考え方が浸透していることです。

そこでは、参加者は否応なく、アクティブラーナーとしてさまざまな課題を与えられ、それに主体的に取り組むように求められます。

今回は、海外研修のコースデザインワークショップに皆さまが参加なさるときの心構えとして、「アクティブラーニング」の成立背景と概要をお届けします。

そして、最後におまけとして、アクティブラーナーの心得として役に立ちそうな情報を、私のつたない体験からお伝えします。

成立背景と概要に関しては、今回のFDリソースで紹介している本「Promoting Active Learning」と昨年10月に参加したPODのワークショップ「Getting Faculty to Teach Actively」を参考にしました。

(1) 成立背景と概要:教師中心から学習者中心へ

伝統的な大学の授業の多くは、教師が活動的に話し、書くことで授業内容を発信し、学習者は見て、聞くことでその内容を受け取るという、学習者にとって受身のものでした。ここでは学習者を、いわば「空の容器」と仮定し、そこに「知識を注ぐ」のが教師の役割でした。

ところが、そのような教師が主に活動する授業方法は、教師たち自身が「うまくいってない」と感じ、学習理論の多くの研究結果もそれを支持したことから、より良い方法が模索されてきました。

このような背景から80年代前半に生まれたのが、アクティブラーニングです。

アクティブラーニングは、授業内容を学習者が見て、聞いて、書いて、議論し、応用するように、教師がガイドをする授業方法です。

アクティブラーニングでは、授業での活動の中心は教師ではなく、学習者たちになります。ここでは学習者は「主体性を持ち、自分自身のやり方で学習する」存在とみなされ、「対話や相互コミュニケーションによって、学習者の中での知識構築をガイドする」ことが先生の役割となります。

(2) アクティブラーニング5か条

アクティブラーニングを推進する教師と、実際にラーニングを行う学習者の双方にとって、心に留めておくべき5か条を列举します。これは、学習者のどのような活動が、学習効果の増進をもたらすかをまとめたものです。

- 1) 学習者は、もし内容を聞くだけならば、忘れてしまう。
- 2) 聞いて、見るならば、少し覚える。
- 3) 聞いて、見て、内容を質問/議論すれば、理解し始める。
- 4) 聞いて、見て、議論し、応用すれば、知識と技能を獲得する。
- 5) 誰かに教えれば、内容をマスターする。

(3) アクティブラーナーの心得

アクティブラーニングを多用したワークショップのセッションに参加してみて、思ったことは、

- ・積極的な参加
- ・当意即妙な回答

が、求められる場面が多いということです。

目立つことが苦手で、じっくり考えたい性格の人(私自身を含む)が、これを乗り切るにはどうしたらよいのでしょうか？

それは、「モチベーション」と「予習(準備)」だと思います。

1)モチベーション

セッションに積極的に参加をしないと、積極的に参加した人よりも得られるものは当然少なくなります。せっかく参加するのでしたら、限られた時間の中でできるだけのものを得たいという思いが恥ずかしさを上回れば、自然に積極的に参加できるのではないのでしょうか。

2)予習

質問や課題を出されたときに、その場で考えはじめると、回答案を思いついてまとめている間に、次の課題に進んでしまっているという悔しい思いを何度か経験しました。

そのワークショップで何を扱うのか判っていれば、事前にその内容を調べたり、頭の中で考えておくことで、回答作成の時間を短くすることができます。

今回の海外研修では、言語の壁もあるということで、今後事前にワークショップで扱うピックを皆様にお伝えする予定です。

<FDのリソース> :「アクティブラーニング」

日本ではまだ、アクティブラーニングはあまり知られていないようですが、アメリカでは先進的な教員によって、いくつもの優良なリソースが提供されています。

今回は、そのうちから二つのリソースを紹介します。

・ACTIVE AND COOPERATIVE LEARNING

http://www.ncsu.edu/felder-public/Cooperative_Learning.html

アクティブラーニングについての情報がわかりやすくコンパクトにまとまっています。また、インターネット上の他のアクティブラーニングのコンテンツへのリンクもあります。

・Promoting Active Learning

Chet Meyers, Thomas, B.Jones, Jossey-Bass Publishers,
ISBN 1-55542-524-0

自分の授業に、どうやってアクティブラーニングを取り入れるか、200 ページ弱でまとまっており、アクティブラーニング初心者でも、とても読み易く、興味深いと思えた本です。

<後記>

お忙しい中、最後までお読みくださり、ありがとうございます。

今回はアクティブラーニングを中心に上げました。

プロジェクトメンバーの先生でも、既にアクティブラーニングの考え方を実践されている先生がおられるかと思えます。

例えば、1月31日の第2回テーマ別研修会の、杉浦先生によるWebOCMを使った授業も、テクノロジーを使って、学生の積極的な参加を促すという点で、アクティブラーニングの実践例であると言えるのではないのでしょうか。

「忙しすぎて、じっくり読む時間と余裕がない！」という方のために、プロジェクト通信の各トピックを、順次プロジェクトのウェブサイト(<http://www.istu.jp/iproject/index.htm>)に収録する予定です。

海外研修の出発前にでも、軽く読み直していただけると幸いです。

「プロジェクト通信」の内容についてのご意見・ご提案をいただけると、今後の企画を考える上で非常に参考になります。どうぞ、よろしくお願いいたします。

ご意見・ご感想の連絡先は i-project@he.tohoku.ac.jp です。

このメールアドレスは、中島と渡利に送られます。

海外研修へのお問い合わせも同アドレスにお送りください。

プロジェクト関係者の皆様とも共有したいとお考えでしたら、project-tsushin@ei.tohoku.ac.jp までメールをお送りください。

次号の「プロジェクト通信」は1月19日(木)配信予定です。

それでは、これからもよろしくお願いいたします。

文責:中島 平

□プロジェクト通信 第7号

2006年1月19日 7:38

プロジェクト関係者の皆様

一月の半ばというと、授業は終盤を迎え、さらに、卒論や修論などの学生指導と、大変お忙しい時期をお過ごしのことと思います。

海外組も海外研修の企画、ワークショップ参加、報告書の執筆と、あわただしい毎日を送っております。

そうすると、大抵ストレスがたまってくるものですが、皆様はどのように気分転換をなさいますか？

ちなみに渡利は近くのカフェに行くこと、中島は音楽、散歩、気功をすることによって乗り切ろうとしています。

なかなかストレスと上手につき合うことができません。

そうすると、「ストレスとの付き合い方のヒント」みたいなFDがあっても良いのではないかと、つい考えてしまいます。

さて、第6回目の「プロジェクト通信」は以下の内容でお送りします。前号に引き続き、アクティブラーニングを取り上げた＜海外研修特集＞があります。ワークショップで実際に取り上げられた課題などが紹介されておりますので特に海外研修にご参加予定の方は、目を通していただくと良いかと思います。

目次

＜海外研修参加者の発表について＞：

＜授業のヒント＞：「学生によいレポートを書かせるヒント」

＜海外研修特集1＞：「アクティブラーニングとは2」

＜FDのリソース＞：「レポートの書き方」サイト

＜後記＞

＜海外研修参加者の発表について＞

海外研修では、たくさんの方々に申し込みをいただき、ありがとうございました。以下に、海外研修の参加者リストを発表いたします。参加申込みされた方は全員、希望通りのグループに決定することができました。

海外研修の参加申込者一覧(敬称略)

<第1グループ>(8名):

岡田口ベルト、森山雅幸、関内隆、城茂治、
田中光郎、石澤公明、谷口和也、三石大

<第2グループ>(5名):

戸澤英典、岡田毅、菅井裕行、佐竹正夫
三石大(2週連続)

現在、航空機のチケットの手配やホテルの予約、海外研修の企画の調整等を行っております。
海外研修の諸情報は、順次お知らせしてまいります。確認されたい事項等がありましたら、中島・渡利までお知らせください。

<授業のヒント>:「学生によりレポートを書かせるヒント」

今週は、レポートを課す際のヒントをご紹介します。
よいレポートを書く力は、多くの先生方が学生に身に付けさせたいと考えていらっしゃるようです。実際、学生たちのレポートには論拠のない主張、非論理的な展開、不統一な体裁、引用元がないままの書き写し、等々をよく見かけます。

そのような「レポート」を防ぐために、そして、学生の論文を書く力を育てるために、学期末のレポートを工夫してみませんか。以下、そのヒントをご紹介します。

(1)課題を明確にする。

テーマが漠然としていると、多くの学生は何を書いているのか分からず、結果として論理的とは程遠いレポートとなってしまいます。

例えば、「A について述べよ」ではなく、「A について、その社会的評価にどのようなものがあつたのか。具体的な資料を提示しながら述べよ。」とすることで、学生の取り組むべき点が明確になります。

あるいは、「A について、具体的な課題を設定した上で、論述せよ」と具体的な課題例を提示しながら学生に課すのも一つの方法です。

(2)採点基準を明確にする。

レポートを課す際に枚数だけを指定しているだけでは、学生は指定枚数を埋める事に終始する可能性があります。

採点基準に、レポートの論理性や引用の正確さがある事を示す事で、学生のレポートに対する取り組みが変わってきます。

(3)レポート(論文)の書き方を教える。

- ・論文の書き方を教えるプリントを作成し配付する。

現在では、ウェブ上に数多くの「レポートの書き方」や「論文の書き方」のサイトが存在します。

今週の「FD のリソース」では、そのようなサイトをしています。

- ・モデルとなるレポートを配付する。

－教員や TA が書いたもの

－過去と同様のテーマである場合には、その中の優秀なレポート

- ・論文の書き方についての副読本を指定する

(4)フィードバックをする

レポートを課した場合、問題となるのがフィードバックの方法です。

少人数であれば添削をして、返却する事が可能ですが、数百人分のレポートとなるとフィードバックはお

るか評価さえも困難となります。大人数のクラスの場合、次のような方法を使って学生へのフィードバックを行ってはどうでしょうか。

- ・模範解答を配付する。
- ・学生同士でレポートを読みあう。
- ・レポートの全体の傾向を紹介する。
- ・よく出来たレポートを紹介する。

(担当: 渡利)

<海外研修特集2> : 「アクティブラーニングとは2」

先週は、アクティブラーニングの背景、概要、心得をお送りしました。今週は、アクティブラーニングの技法を簡単に述べ、それが実際のワークショップの中で、どのように用いられるかをご紹介します。また、おまけとして、皆さまがアクティブラーニングの手法を実践する場合のヒントを書いてみました。

(1) アクティブラーニングの技法

主に 4 つの技法に分けることができます。

- 1) 打ち解けた小さなグループを形成する
例: 質問を投げかけ、隣の人同士で考えを話し合わせる
- 2) 学生同士に共同プロジェクトを行わせる
例: あるトピックについて、グループに調査・発表させる
- 3) シミュレーション
例: ロールプレイ。例えば各人に原告と被告の弁護士などの役割を与え、その役割に沿った議論をさせる
- 4) ケーススタディ
例: 実際の医療現場における患者の診察データを学生に渡し、どのように判断、行動するかを問い、議論させる

(2) ワークショップでのアクティブラーニング活用例

先日受講した新米ティーチングアシスタントのためのワークショップで実際に用いられていた例です。皆さまが受講するワークショップでも、類似した課題が提示され、それに取り組むように求められるのではないかと思います。

- 1) 効果的なティーチングとはどのようなものか、考えて紙に書いてみてください。その後、隣の人とそのことについて話し合い、発表してもらいます。
→ 小グループ
- 2) 効果的なティーチングと、そうでないティーチングのビデオを鑑賞した後で、その理由を発表してください。
→ ケーススタディ
- 3) あなたが受け持っている授業で、ある学生が「自分は学習障害だから、普通一時間のテスト時間を一時間半にして欲しい」と訴えてきたとします。
あなたはどのようにしますか？
→ シミュレーション

(3) アクティブラーニングを進めるために

アクティブラーニングを始めようとする場合に、それが今までの教え方と異なるために、さまざまな戸惑いが生じると思います。ここでは、そのような心理的な壁を乗り越えるヒントをご紹介します。

・できることから一歩ずつ始める

例1:授業の最後に、今日の授業で重要だったポイントは何だったかを尋ね、A5 サイズくらいの紙に書いて集める。次の時間のはじめに、結果をフィードバック。

例2:第1回目のプロジェクト通信で取り上げた

「効果的な質問の仕方」も、

<http://www.istu.jp/iproject/class-tips.htm#situmon>

アクティブラーニングの考え方に基づいています。

・自分の得意なやり方を知る

例:私はケーススタディの資料を多く持っていて、学生にチャレンジさせるのが得意だ

・同僚や本・ウェブサイトなどの助けを借りる

例:試してみたい方法を事前に詳しく調べておく

・いくつかの失敗を予期しておく

例:「初めから完璧にはできない。良いところと良くなかったところを記録して、次に活かそう」

(担当:中島)

<FDのリソース>:「レポートの書き方」サイト

今回は、ネット上の「レポートの書き方」のサイトを紹介します。

「レポートの書き方」や「論文の書き方」で Google 検索をすると、大学教員による数多くのサイトが存在することが分かります。

専門によって適当な内容が異なりますので、レポート課題に合ったサイトを探してみてください。

以下、渡利が見つけた、各専門に共通して利用できるサイトです。

1)<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/physics/classes/reporting/wreport1.pdf>

A4 用紙で1~2枚程度のレポートを書く事を想定して作成されている。

具体的な配分が図で分かりやすく書かれているので、大学1年生のようなレポート初心者には分かりやすく良い。

授業内で配る配付資料の良い例。

2)<http://www.max.hi-ho.ne.jp/lylle/technique4.html>

レポートの種別ごとにコンパクトにまとまっている。

A4 用紙の3分の1程度のスペースを使って紹介する事ができる。

3)<http://www.interq.or.jp/world/naoto/report/index.html>

学生が実際に犯しやすい間違いを踏まえながら書いている事と、書き方も学生に読みやすい親切なものになっている点が良い。

アドレスを授業内で紹介し、学生がウェブで見るのに適している。

4)<http://www.wakayama-u.ac.jp/~takehiko/ipii2003/pdf/report.pdf>

「不適切な体裁」についての記述が充実している。

授業内で配る配付資料の良い例。

(担当:渡利)

<後記>

お忙しい中、最後までお読みくださり、ありがとうございます。

「プロジェクト通信」の内容についてのご意見・ご提案をいただけると、今後の企画を考える上で非常に参考になります。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

ご意見・ご感想の連絡先は i-project@he.tohoku.ac.jp です。

このメールアドレスは、中島と渡利に送られます。

海外研修へのお問い合わせも同アドレスにお送りください。

プロジェクト関係者の皆様とも共有したいとお考えでしたら、
project-tsushin@ei.tohoku.ac.jp までメールをお送りください。

次号の「プロジェクト通信」は 1 月 26 日(木)配信予定です。

東北地方はまだまだ大変寒いそうで、どうかお体にはお気をつけください。

中島 平

渡利 夏子

メールアドレス:i-project@he.tohoku.ac.jp

ウェブサイト:<http://www.istu.jp/iproject/index.htm>

文責:渡利夏子

□プロジェクト通信 第 8 号

2006 年 1 月 26 日 7:21

プロジェクト関係者の皆様

こんにちは。プロジェクト通信 第8号担当の中島です。

いよいよ海外研修も、フライトスケジュール、宿泊ホテルが決まり、皆さまをお迎えする準備が整いつつあります。

今回の宿泊ホテルはアクセスが便利なパロアルトの中心街に位置しており、ホテルの 1 階部分には味と価格で評判のイタリアンレストラン「Osteria」があります。

現在、海外研修中の食事内容も検討中ですが、アレルギーなどで、メニューに制限がある方は、お手数をおかけして申し訳ございませんが、中島・渡利(i-project@he.tohoku.ac.jp)まで、お知らせください。

さて、第 8 回目の「プロジェクト通信」は以下の内容でお送りします。今回は<海外研修関連のお知らせ>がありますので、海外研修にご参加予定の方は、忘れずに目を通していただきたいと思います。

目次

<海外研修関連のお知らせ> :フライトスケジュールと宿泊

<ライフデザインのブログ開始のお知らせ>

<授業のヒント> :「レポートの採点方法」

<FDの普及戦略> :「デスクトップFD」

<FDのリソース> :「FDのメーリングリスト」

<後記>

<海外研修関連のお知らせ>

(1)フライトスケジュール

第一グループ

3月 5日 仙台(15:55)ー成田(16:50) NH(全日空)3134 便
成田(19:15)ーサンフランシスコ(11:13) NH7012 便
3月10日 サンフランシスコ(10:50)ー11日 成田(15:05) NH7 便
3月11日 成田(18:00)ー仙台(19:15) NH3235 便

第二グループ

3月12日 仙台(15:55)ー成田(16:50) NH3134 便
成田(19:15)ーサンフランシスコ(11:13) NH7012 便
3月17日 サンフランシスコ(10:50)ー11(18)日 成田(15:05) NH7 便
3月18日 成田(18:00)ー仙台(19:15) NH3235 便

(2)宿泊先ホテル

カーディナル・ホテル

(<http://www.cardinalhotel.com/>)に決定しました。
スタンフォード大学近くで、周りには飲食店も数多くあります。
部屋も実際に見ましたが、広く、綺麗で、バスタブも付いています。
スタンフォード大学関係者の割引と団体割引で、一泊\$115となっております。

(3)参加メンバーの一部変更・追加

- ・第二グループで参加予定の佐竹先生が参加できなくなり、代わりに古川先生が参加なさります。
- ・第一グループの日程の一部に、そのとき、当プロジェクトの「(B)国際交流を活かした先端的教育の開発」のために、スタンフォード大学を同時期に視察される予定の、石井先生、長崎先生、國井先生の三名が、合流することになりました。

海外研修の諸情報は、順次お知らせしてまいります。確認されたい事項等がありましたら、中島・渡利までお知らせください。

<ライフデザインのブログ開始のお知らせ>

当プロジェクトは「ISTU 活用による教育の改善・高度化」と「ライフデザイン支援システムの構築」を二つの柱として活動を行っておりますが、この度、後者の「ライフデザイン」について、スタンフォード大学の事例の報告を、渡利がブログにて始めました。
今後も継続して更新してまいりますので、ご関心がございましたら、ご覧くださいませ。

「アメリカのキャリアデザイン支援調査報告」

<http://blogs.yahoo.co.jp/lifedesign20052006>

<授業のヒント>:「レポートの採点方法」

ようやく後期セメスターが終わろうとしています。
数百人分のレポートをどう評価するのか、という状況に面している方もいらっしゃるのではないのでしょうか。
そこで、今回はレポートの採点の方法について紹介したいと思います。
この方法は中規模～大規模の授業のレポートの採点作業に特に効果を発揮します。

- (1)採点の基準を明確にします。そして、それぞれの基準が点数全体のどの程度の比率を占めるのかについても決めます。

この基準は事前に学生に知らされている必要があります。
模範解答が用意されていると、この作業は容易になります。

- e.g. 質問に適当に答えているか(50%)
- ・論理的に展開されているか(30%)
- ・分量は適切か(20%)

(2) 数十人分を読んで、A(excellent), B(good), C(adequate),
D(poor)等のように仮に採点してみます。その作業の中から、A から D の回答例を選び出します。

(3) A から D の各評価の回答例を前にしながら、残りの採点をします。
この時、TA とともに採点をする、成績の基準が平準化される上、一人当たりの作業量が少なくなります。

(4) レポートに対してコメントを書きます。

レポートの欠点の一つは、学生が「採点基準が怪しい」と考えてしまう点です。それを防ぐために、コメントを書く事をお勧めします。そのコメントを、採点の基準に応じて書くと良いでしょう。

e.g. 「採点結果: B 理由: 質問には適切に答えられているが、論理性が不十分」

スタンフォード大学の CTL のスタッフである Robyn Dunbar 先生は、基準を明確にする事で、テストの採点の時間が削減したそうです。

というのは、レポートの全記述の内、採点基準に該当する箇所のみを見て採点すればいいからです。そして、レポートに対するコメントも採点基準に応じて、事前カスタマイズしておけば楽になります。

ただし、そのためには事前に学生に対して「私は……の 3 点を採点項目とし、その比重は……とする」と採点の基準を伝えておく必要があります。

Dunbar 先生には、3 月に行われる海外研修で授業デザインの講師を務めていただきますので、上記に興味がある方は、是非直接聞いてみてください。

(担当: 渡利)

.....
<FDの普及戦略> : 「デスクトップFD」

日本でFDと聞くと、どこか一ヶ所に集まって長い時間をかけて行いうー大イベントというイメージを持つ方も多いかと思います。

このようなFDは、受けるほうにとっても主催者にとっても、多大な労力がかかるものです。双方にとって、もっとお手軽なFDはないものでしょうか？

ということで、今回は一風変わったFDの手法を紹介いたします。

それは、「メーリングリストを利用したFD」です。

実は、今、皆さまがお読みになっている「プロジェクト通信」もメーリングリストを利用したFDなのですが、アメリカには登録者が 2 万人を超え、さらに成長を続けているFDメーリングリスト「Tomorrow's Professor Mailing List」があります。

アメリカでは、FDの組織を自前で持てない大学もあり、その中には、Tomorrow's Professor メーリングリストを紹介している大学もあるのだそうです。

さて、その人気の秘訣はなんなのでしょうか？

(1) Tomorrow's Professor Mailing List の目的

1. 高等教育のホットなトピックや問題に関する、刺激的かつ実用的な資料・題材の提供

2. アカデミックキャリアをどのように準備し、仕事を見つけ、成功させるかの見識の提供

(2) 歴史

- ・スタンフォード大学の Richard M. Reis 教授が創設・現編集者
- ・1998 年 3 月に登録者約 500 名で創設
- ・はじめの登録者は、Reis 教授の本「Tomorrow's Professor」の読者。本の内容は、読者のアカデミックキャリア成功のための準備を手助けをするというもの
- ・主に口コミで読者を増やす

(3) 読者

- ・登録者は世界 106 ヶ国、600 以上の学術機関に亘る
- ・読者層は学生から教授、理事・経営者まで全領域をカバー、企業や政府の読者もいる。

(4) システム

- ・週に 2 回、年に 100 回、ニューズレターがメールで届く
- ・ニューズレターの内容は、高等教育関連の雑誌・本の引用
- ・内容は出版社から無料で提供され、編集者によって選ばれる
- ・現在コンテンツを提供する出版社は約 50 社
- ・年間運用コストは約 2 万ドル。スタンフォード CTL がスポンサー

(5) 成功の秘訣(読者アンケートより)

- ・ウェブにわざわざ見に行かなくとも、自動で届けられる
- ・個々のレターは短く(1000-1500 単語)、それ自身で完結している
- ・レターは週に 2 回、年に 100 回に限られている
- ・レターは興味深く、実地的なものを含み、刺激的なこともある
- ・フォローアップのためのウェブサイトが紹介され、さらなる情報を得ることができる
- ・メーリングリストのウェブサイトは、カテゴリー分けされ、全ての記事を読むことができる
- ・読者は彼らの同僚の間であまり知られていない情報も得ることができる

さて、いかがでしたでしょうか？

私もメーリングリストのサイトに行き、登録してみましたが、成功の秘訣は結局、「相手(読者)の立場に立つて、相手の必要とするものを与える」ことだと思いました。
これは、アメリカで学んだ、FDの鉄則です。

(担当: 中島)

.....
<FDのリソース> : 「FDのメーリングリスト」

FDの推進には、FDリソースの収集と人脈(ネットワーキング)が特に重要といわれています。

今回は、それぞれについて、アメリカの代表的なメーリングリストを紹介します。

Tomorrow's professor メーリングリスト

- ・高等教育とアカデミックキャリアに関する情報提供。
- ・トップページ

<http://ctl.stanford.edu/Tomprof/index.shtml>

- ・申し込み・解除ページ

<http://ctl.stanford.edu/Tomprof/subscribe.html>

POD メーリングリスト

- ・FD推進者や教員同士のネットワーキング。

・トップページ

http://www.podnetwork.org/publications&resources/mailling_list.htm

・申し込み・解除ページ

<http://listserv.nd.edu/cgi-bin/wa?SUBED1=pod&A=1>

どちらのメーリングリストも、簡単に登録・解除ができます。

(担当:中島)

.....
<後記>

アメリカに来て、もうすぐ4ヶ月。FDというのは、結局教員と学生にHappyになってもらうことを目指す活動なのかなと思い当たりました。

そして、そのような視点に立つと、

1.「あなたの大学での活動をHappyにするのに、立ちはだかっている最大の障害はなんですか？」

2.「その障害を取り除くために、大学の何が変われば良いと思いますか？」

というような質問を全職員・全学生に向けてすることが、FDの出発点なのかなというような考えが浮かびます。

ちなみにその質問に対する、私の個人的な答えは

1.「雑用(自分じゃなくともできる仕事)に取られる時間が多いこと」

2.「雑用が減る。または、雑用を代わりにやってくれるサービスができる」

です。教育改善とは直接関係の無いところが心苦しいですが、長い目でみれば、大学の研究・教育改善に最も役立つような気もするなあ、などと勝手に考えたりしています。

「プロジェクト通信」の内容についてのご意見・ご提案をいただけると、今後の企画を考える上で非常に参考になります。

先週はストレス解消法について、複数の方からご意見・ご提案をいただき、ありがとうございました。特に、山越さんの「規則正しい食事と適度な運動」は中島・渡利、ともに身に沁みました。

また、南国行きも大変魅力的です。菅井先生。

ご意見・ご感想の連絡先は i-project@he.tohoku.ac.jp です。

このメールアドレスは、中島と渡利に送られます。

海外研修へのお問い合わせも同アドレスにお送りください。

プロジェクト関係者の皆様とも共有したいとお考えでしたら、
project-tsushin@ei.tohoku.ac.jp までメールをお送りください。

次号の「プロジェクト通信」は2月2日(木)配信予定です。

今後とも、よろしくお願いいたします。

中島 平

渡利 夏子

メールアドレス:i-project@he.tohoku.ac.jp

ウェブサイト:<http://www.istu.jp/iproject/index.htm>

文責:中島 平

プロジェクト関係者の皆様

こんにちは。プロジェクト通信 第9号担当の渡利です。

先日、スタンフォード大学の学部4年生と話をする機会がありました。

彼曰く「授業の課題をこなすことに忙しい毎日を送っている。」だそうです。それは、学部1年生の時から続いているということです。

「FDの最終的な目的は、教育の改善の結果、学生が学ぶことにある。」という、スタンフォード大学のFDに対する姿勢の一端を見た気がしました。

さて、第9回目の「プロジェクト通信」は以下の内容でお送りします。

<授業のヒント>で紹介する「7つの原則」は学生が充実した学習をするための7つの原則です。

授業を行う上でご参考くださればと思います。

目次

<授業のヒント> :「優れた授業実践のための7つの原則」

<FDの普及戦略> :「CTLの組織」

<FDのリソース> :「7つの原則の関連書籍・ウェブサイト」

<後記>

.....
<授業のヒント> :「優れた授業実践のための7つの原則」

海外研修まであと一ヶ月とちょっとです。そこで、今回から5回にわたって、アメリカの大学で普及している授業実践方法やコースデザイン方法を取り上げます。これらを読むことで海外研修時の違和感や戸惑いを軽減し、研修では、より本質的なものを身につけられますようお願いしております。

さて、今回の「優れた授業実践のための7つの原則」は米国高等教育学会の研究グループを中心に1980年代後半から開発され、4つの小冊子の形で全米に配布されました。

「7つの原則」最大の特徴は、教授法研究の成果によって効果的であると実証された、

『学生を学習に巻き込み参加させること(Involvement)』が、具体的なガイドラインとチェックリストによって、『教員が実際に自分で試せる形』で集約されている点です。これによって、抽象性の高い教授法理論が、具体的な実践手法と結び付けられます。

また、もう一つ特筆すべき点は優れた授業実践の役割は教員だけにあるのではなく、『学生、教員、大学組織』の3者にあると明言し、チェックリストも3者で別々に用意されている点です。

今回は、この7つの原則と、教員向けチェックリストの一例を紹介します。

(1)学生と教員のコンタクトを促す

例1:将来の進路について学生にアドバイスする

例2:自分の考え方や過去の経験を学生に話す

(2)学生間で協力する機会を増やす

例1:学生同士で、自分の興味や過去の体験を話すよう求める

例2:課題をお互いに評価しあう活動を取り入れる

(3) 能動的に学習させる手法を使う

例 1: 授業の中で学生の課題を発表させる

例 2: 具体的で実社会・実生活に結びつく調査・議論・課題を設定する

(4) 素早いフィードバックを与える

例 1: 小テスト・宿題を課す

例 2: テスト・レポートを 1 週間以内に返却する

(5) 学習に費やす時間の大切さを強調する

例 1: 課題にはすぐに取り組むように促す

例 2: 学生に欠席しないことの重要性を説明する

(6) 学生に高い期待を伝える

例 1: 学生に一生懸命勉強して欲しいと言う

例 2: 意欲的な学生向けに発展的内容の文献・課題を用意する

(7) 多様な才能と学習方法を尊重する

例 1: 授業が理解できないときはきちんとするようにすすめる

例 2: 学生が自分の興味・関心に基づいて専攻を決めることを推奨する

さて、いかがでしたでしょうか？チェックリストの完全版は、今回の＜FDのリソース＞で取り上げています。
(チェックリスト日本語版は以下の URL にありました。

<http://www.cue.tokushima-u.ac.jp/FD/FD-Checklist.pdf>)

チェックリスト全部を読み終わった私自身の感想としては、恥ずかしながら、これを全部実践するのは、正直きついな一というものでした。

小冊子の冒頭には、チェックリストの開発目的は、教員評価のためではなく、教員のサポートであることが述べられていて、これらのリストは授業改善に資するための工夫なのだそうです。

ということは、全部の項目を完全にするのではなく、リストを頭に入れながら、自分のできることをやるのが、適切な使い方といえるでしょう。

しかし、どうも、これは日本人の心性なのかもしれませんが、チェックリストを「これが優れた実践です」と見せられて、「よくあてはまる」欄に記入できないと、「これじゃダメなんじゃないか」と思い、及び腰になってしまいがちです。

この「理想状態からの減点主義」を、「ゼロからの加点」に転換することが、日本のFDを成功させるためのキーポイントの一つなのではないかと思いました。

(担当: 中島)

.....
＜FDの普及戦略＞ : 「CTLの組織」

CTL (Center for Teaching and Learning) はスタンフォード大学にある、大学教員とティーチングアシスタントの教育活動の支援を行うセンターです。

今回はCTLの組織を簡単に紹介し、CTLのようなティーチングセンターが、学内で生き残り、発展するための基本戦略を述べます。

(1) CTLの組織

CTLの学内の位置づけは、学士課程教育の特に1、2年生の企画・運営を担当する部局「Vice Provost for Undergraduate Education(VPUE)」の下部組織となっています。また、VPUEの組織は、一つの建物に集められています。

VPUEの下部組織には他に

- ・人文科学入門の担当センター
 - ・1,2年生の教育プログラム担当センター
- があります。

これらにより、VPUEの他組織との連携(例えば相互に学生を紹介しあうなど)が容易になるのだそうです。

CTLは、以下に示すように、12名のスタッフとTAで成り立っています。

ディレクター(1名)

- ーアカデミックスタッフ(3名):[FDのためのメインスタッフ]
 - ・社会科学&テクノロジー担当
 - ・人文科学担当
 - ・自然科学&工学担当
- ーTA(40部局で41名)リエゾン(部局とCTL間の連絡係)
- ーTA(14部局で15名)コンサルタント(ワークショップの手伝いなど)
- ーテクノロジースペシャリスト(1名)
 - ーTA(1名)
- ーオーラルコミュニケーション・スタッフ(3名)
 - ーTA(人数不明)オーラルコミュニケーション・チューター
- ーアドミニストレーション・スタッフ(4名)
 - ーTA(1名)アシスタント
 - ーTA(1名)チューターのコーディネーター

特に驚くのは、学生をたくさん使っていることで、これはスタンフォード大学の他の組織にもよく見られます。なお、学生の中にはCTLのTAを経験して、その後、そのままCTLに就職した人もいます。

(2) ティーチングセンターの生き残りと発展のために

CTLは、特定の部局の下ではなく、執行部直属のセンターとして設立されました。このため、部局の支持を受けるのが難しく、存続と活動拡大のための、様々な苦労と工夫があるそうです。それらのうち、特に重要だと思われる3点を紹介します。

1. Start small, and start with what you can do best.

(小さく、そしてできる最高のものを提供することから始めよ)

特に最初の立ち上げでは失敗は許されないの、少人数、小規模で、自分たちにできる最高のものを提供します。

2. 学生・部局・教員のニーズに応える。

- ー個別対応をすること
 - ・ティーチングコンサルテーション
 - ・授業観察
 - ・学期半ばの授業評価
- ー利用者の都合に配慮した企画・運営をすること
 - ・時期
 - ・時間

- ・場所
- ・内容と構成

3. 人事にエネルギーをかける。

(スタンフォード大の他部局の人事も同様なようです。)

例として、人文科学担当のアカデミックスタッフの場合を示します。

- 受付期間: ポジションが埋まるまで
- 審査期間: 約半年
- 第一次審査(書類) 150 名→20 名程度
- 第二次審査(電話面接) → 3 名程度
- 第三次審査(面接, 2日間)→ 決定

特に、第三次審査では、VPUE のディレクターも審査員に入り、実際の仕事内容(例えばワークショップ)を候補者に実演させたりしたそうです。

いかがでしたでしょうか? ティーチングセンターの生き残りと発展に関しては、CTL の人たちから中島・渡利が直接聞いた情報です。

これらの内容で私にとって特に深かったのは、学生の使い方と人事の慎重さでした。これらは、将来の日本の大学のありかたのヒントとなるのではないのでしょうか。

(担当: 中島)

<FDのリソース> : 「7つの原則の関連書籍・ウェブサイト」

今回は<授業のヒント>で取り上げた「優れた授業実践のための7つの原則」の関連書籍とウェブサイトを紹介します。

(1) ティップス先生からの7つの提案

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/index.html>

「プロジェクト通信」でも何回か紹介している、名古屋大学高等教育研究センターの取り組みの一つ。

日本のための「7つの原則」と言ったところ です。

日本の大学教員に受け入れ易い形で書かれた、優れたリソースです。

(2) 「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」

中井俊樹・中島英博(2005)『名古屋高等教育研究』第5号,
pp.283-299.

(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/journal/no5/17.pdf>)

「7つの原則」の開発成果の紹介と実践手法の分析です。

読み易くまとまっています。

(3) 「優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト」

中島英博・中井俊樹(2005)『大学教育研究ジャーナル』第2号,
pp.71-80.

(<http://www.cue.tokushima-u.ac.jp/FD/FD-Checklist.pdf>)

「7つの原則」と、そのチェックリストを紹介しています。

(4) “Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education”

Chickering, A. and Gamson, Z. (1987). AAHE Bulletin, March 1987,
a publication of the American Association of Higher Education.

「7つの原則」のオリジナルです。

(担当: 中島)

<後記>

「プロジェクト通信」第9号はいかがでしたでしょうか。

先日、中島と渡利とで、このニューズレターを作成するために毎週、どのくらいの時間がかかっているのか計算した所、二人で20時間程度でした。

最も時間のかかる作業は、<授業のヒント>と<FDの普及戦略>の記事を作成する事で、これが全体の8割を占めています。

互いに記事を読み合い、アドバイスをするという作業を数回繰り返して作成しています。

こうして毎週、調べた事を発表しなければならないということは大きなプレッシャーとなっていますが、その一方で非常に良い研究サイクルを生み出すことにもなっています。

その結果生まれた「プロジェクト通信」が皆様にとって少しでもご参考になればと思っております。

「プロジェクト通信」の内容についてのご意見・ご提案をいただけると、今後の企画を考える上で非常に参考になります。

ご意見・ご感想の連絡先は i-project@he.tohoku.ac.jp です。

このメールアドレスは、中島と渡利に送られます。

海外研修へのお問い合わせも同アドレスにお送りください。

プロジェクト関係者の皆様とも共有したいとお考えでしたら、
project-tsushin@ei.tohoku.ac.jp までメールをお送りください。

次号の「プロジェクト通信」は2月9日(木)配信予定です。

今後とも、よろしくお願いいたします。

中島 平

渡利 夏子

メールアドレス:i-project@he.tohoku.ac.jp

ウェブサイト:<http://www.istu.jp/iproject/index.htm>

文責:渡利夏子

□プロジェクト通信 第10号

2006年2月9日 12:01

プロジェクト関係者の皆様

こんにちは。プロジェクト通信 第10号担当の中島です。

3月5日から始まる海外研修まで、いよいよ一ヶ月を切りました。

最近のパオアルトは、良い天気の日が増え始め、近所の木々にも花が咲き、ずいぶん春めいてきました。特に今日はあたたかく、下着と薄手の長袖シャツ一枚で自転車に乗っていても快適なくらいです。おそらく皆さまには、このような気候の中で研修を受けていただけるのではないかと思います。

さて、第10回目の「プロジェクト通信」は、これまでとは少し違った趣向でお届けします。それは、海外研修に関する情報提供に特化しているということです。

特に、<海外研修のお知らせ>では、研修の内容まで踏み込んだ詳細なスケジュールと、研修の中心となる4回のワークショップの説明をしております。研修に参加する方は是非、添付のワードファイルを含めて

ご一読ください。

目次

＜海外研修のお知らせ＞：詳細スケジュール&ワークショップ説明

＜海外研修の事前知識＞：「シラバスとは」

＜授業のヒント＞：「コースデザインの発想転換」

＜FDのリソース＞：「コースデザインの発想転換」

＜後記＞

＜海外研修のお知らせ＞：詳細スケジュール&ワークショップ説明

現在までに決定している海外研修のスケジュールを PDF で添付いたしました。

海外研修では、CTL スタッフと中島・渡利による、4 回のコースデザインワークショップが企画されています。

このワークショップは海外研修の中核となりますので、ここでは、そのワークショップの目的と内容について簡単に説明いたします。

ワークショップに参加するにあたり、事前準備として、皆さまには自分の授業で使っているシラバスを持参していただきます。

4 回のワークショップを通してそのシラバスをリファインし、来年度以降の授業に活かしていただけるように、ワークショップの内容を企画いたしました。

(1) コースデザインワークショップの目的

自分が授業で使っているシラバスを、コースデザインの視点からもう一度捉えなおし、来年度以降の授業改善に役立ててもらおう。

(2) コースデザインワークショップの内容

＜第一回＞ コースデザインの発想転換：

授業目標を学生の学習到達度の視点で設定する

＜第二回＞ アクティブラーニング：

アクティブラーニング手法の導入を検討することで、

15 回の授業内容を捉えなおす

＜第三回＞ テクノロジーの利用：

スタンフォード大学の授業で利用されているテクノロジー

を学びつつ、学生・教員に役立つテクノロジーの導入を検討する

＜第四回＞ フィードバックとアセスメント：

試験や課題と、その学生へのフィードバックと成績評価方法を学び、

シラバスに反映させる

＜海外研修の事前知識＞

これから4 週間に渡って、海外研修の際に役立つと思われる情報をお知らせいたします。今週は、海外研修の「コースデザイン」のワークショップで使われる重要な用語の説明をしようと思います。

それは「シラバス」です。

(1) アメリカにおけるシラバスとは

皆様は「シラバス」と聞いて、どのようなものを頭に浮かべますでしょうか。おそらく、教員が新年度の半年前に提出する、A4の半分から1 枚程度の分量の、授業概要ではないでしょうか。

スタンフォード大学の場合、シラバスとは各教員がその授業の最初の時間に受講生に配布する、A4サイ

ズで2～3枚程度の授業概要を記載したものを指します。

フォーマットは各教員の自由ですが、日本の大学と同様に、授業科目名、担当教員名、講義目的、講義概要、毎回の授業内容、成績評価方法、教科書や参考文献、履修する上での必要な要件等が掲載されている事が多いようです。

アメリカにおけるシラバスは、「教員と学生の契約書」とであると表現されます。つまり、当該授業において教員がすべき事、学生がすべき事が記載され、それを相互に遵守する事が前提となっています。

したがって、特に評価基準については詳細に書かれています。

そして、それは学生の了解なしに変更される事はありません。

(2)シラバスの二つの意義

シラバスを作成する意義は二つあります。

シラバスを作成する意義の一つは、受講する学生に授業の概要を知らせる事です。その事によって、学生は当該授業を選択するかどうかの重要な資料となりますし、授業開始後も自らの学習計画を立てるために役立ちます。それが、契約書の役割も果たしているのがアメリカのシラバスです。

シラバスを作成するもう一つの意義は、教員が事前にコースデザインをすることを促す事です。シラバスを作成するという作業を通して、その授業の具体的な構想を立てることができます。

つまり、シラバスを作成する事が、コースデザインをする事だといえるのです。

よいシラバスとは、これら二つの意義を持ち合わせ、それを効果的に表す事ができているものといえるのではないのでしょうか。

(3)よいシラバスを作成するためには

シラバスを作成することは、研究論文を作成する作業と似ています。

研究目的、研究方法、数章に渡る内容、そして結論を設定するように、授業の目的、授業の方法、授業の内容、授業の結論を考えます。

そして、その結論を定着させるために、また、結論が理解できているかどうかを確認するためにテストを行います。

おそらく、結論を持たないままに研究論文を書き始める方はいらっしゃらないと思いますし、まして、それを投稿される事はないと思います。そして、良い論文は必ず明確な結論を持ちます。

授業を行う場合にも、まず先に、「何を教えるのか」という結論を設定し、それを最も効果的に伝えられる内容と方法を考え出す事が必要です。そのプロセスの事をコースデザインと呼び、シラバスはその成果である授業の要点を、学生に分かりやすく書いたものであるといえます。

そのようなプロセスを経ない授業を受けた後の学生は、例えるならば、要点を得ない論文を読んだ後のような気持ちになります。つまり、「結局何を言いたかったの?」という感想です。

多くの労力をかけた授業ですから、そのような事態は避けなければなりません。

教員、学生ともに多くの時間と労力をかけて授業に取り組むのですから、

「何かを教えられた」

「何かを学んだ」

とお互いが満足できるものであつて欲しいと思いませんか。

コースをデザインして、シラバスを作成する事は、そのような充実した授業作りの一助となります。

(担当 渡利)

<授業のヒント>:「コースデザインの発想転換」

「海外研修の事前知識」では、よいシラバスを作成するためには、(ひいては、よい授業を行うためには)、コースデザインを意識して行うことが必要である事を紹介いたしました。

このコースデザインの方法を習得するためには、多少の労力を必要とします。しかし、一度この方法を習得してしまえば、授業が効果的なものになるだけでなく、授業作りが簡単になります。

つまり、効率的かつ効果的に授業を企画・実施できるようになります。

週1回の90分の授業を15回行ったとしても、22.5時間、つまり1日相当にもなりません。
その一方で、自分が担当する分野の蓄積は爆発的に増えています。
教えるべき事は増えていくばかりで、「何を教えればいいのか」思案に暮れることになりがちです。

そのような状況下において効果的なのが、コースデザインの発想転換です。
英語では、“Designing Courses Backwards”と呼ばれています。
これは、「学術分野の蓄積をいかに教えるのか」から授業を構想するのではなく、「学生は何を学ぶべきなのか」という観点からコースデザインを行うことを指します。

より砕けた言い方をすれば、
「学生に授業の後、1年後、2年後に覚えていて欲しい事、身に付けていて欲しい能力は何か？」
を考える事から始めることです。

以下、“Designing Courses Backwards”の方法を簡単に説明します。
例として、渡利のコースデザイン例を挙げました。

<ステップ1>

授業の前提条件を確認します。

- ・受講生の特徴(受講人数/学年/専攻/・・・)
- ・自分がやりたい事・できる事(研究対象/関心/・・・)
- ・大学全体のカリキュラム(必修・選択/共通・専門/・・・)

<ステップ2>

コースの学習目標を3つから5つ設定。

- e.g.「大学教育カリキュラムの主な成立要件を挙げられる。」
- 「多様な大学教育カリキュラムの違いを分析できる。」
- 「それらを明確に論述できる。」

<ステップ3>

その学習目標を達成するために必要な学生のスキル。

- e.g. 多様な大学教育カリキュラムの知識。

<ステップ4>

教育内容、授業形態、成績評価の方法を考える。

- e.g. 教育内容:日本とアメリカの大学のカリキュラムの比較
- 授業形態:講義とグループ学習。1回は論文の書き方の授業。
- 成績評価の方法:各自の課題レポート(各学生が選んだ大学のカリキュラムと東北大学のカリキュラムを比較した結果を論述)

<ステップ5>

全クラスの内容、教科書、宿題等の決定。

海外研修では、「コースデザイン」のワークショップを全4回でお送りいたします。その中で、今回ご紹介いたしました内容について詳細に知る事ができます。ご期待ください。

(担当 渡利)

<FDのリソース> :「コースデザインの発想転換」

今回は、「授業のヒント」で紹介いたしました「コースデザインの発想転換」に関するリソースを紹介いたします。

海外研修の前に読まれると、ワークショップがより充実したものとなるのではないのでしょうか。

(1) Center for Teaching and Learning ニュースレター

“Speaking of Teaching”

コースデザインの特集がされています。海外研修でのワークショップは基本的に、このニュースレターの内容に沿って進められます。

http://ctl.stanford.edu/Newsletter/designing_courses.pdf

(2) 名古屋大学「ティップス先生」

日本語で簡潔にコースデザインの方法について紹介しています。

お時間のない方はこちらを読まれる事をお勧めいたします。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/basics/course/index.html>

(3) Center for Teaching and Learning 冊子

“Teaching at Stanford”

本格的にコースデザインについて学びたい方にお勧めです。

スタンフォード大学の教職員、TA に配付される、全 84 ページの冊子です。

<http://ctl.stanford.edu/handbook.pdf>

(担当 渡利)

.....
<後記>

「プロジェクト通信」第 10 号はいかがでしたでしょうか。

現在 CTL のダンバーさんと共同で、コースデザインワークショップの企画を進めています。基本的には私たちが受講したワークショップを基に、日本の皆さまに伝わり易いようにアレンジを加えるという作業です。

この作業を通して痛感することは、コースデザインの内容の深さと、それに対する私たちの勉強不足です。例えば「シラバス」ひとつを取り上げてみてもそれは、契約を重要視する社会的背景の中で必然的に生まれたもので、それを日本の社会・大学にそのまま当てはめることはできません。

このような状況の中で、短い海外研修期間内に、はたしてどれだけ皆さまの授業改善に役立てられる研修を実施できるのか、心配になることもあります。ですが、これから残り一ヶ月弱の間に、皆さまにできるだけ満足していただけるものを用意することが、今の私たちの目標です。

「プロジェクト通信」の内容についてのご意見・ご提案をいただくと、今後の企画を考える上で非常に参考になります。

ご意見・ご感想の連絡先は i-project@he.tohoku.ac.jp です。

このメールアドレスは、中島と渡利に送られます。

海外研修へのお問い合わせも同アドレスにお送りください。

プロジェクト関係者の皆様とも共有したいとお考えでしたら、
project-tsushin@ei.tohoku.ac.jp までメールをお送りください。

次号の「プロジェクト通信」は 2 月 17 日(木)配信予定です。
今後とも、よろしくお願いいたします。

中島 平
渡利 夏子

メールアドレス:i-project@he.tohoku.ac.jp
ウェブサイト:http://www.istu.jp/iproject/index.htm

文責:中島 平

□プロジェクト通信 第 11 号

2006 年 2 月 16 日 12:24

プロジェクト関係者の皆様

こんにちは。「プロジェクト通信」第 11 号担当の渡利です。

スタンフォード大学では、桜が咲き始めました。
これほど暖かい 2 月は珍しいという事ですが、仙台の厳しい 2 月を長年経験している私には、不思議な感じがします。

先日、海外研修の最終日に行われる日本人教員との懇談会にご協力いただき、Miyako Inoue (Department of Culture and Social Anthropology)助教授と打ち合わせをしてまいりました。
CTL のサービスが素晴らしさや、テニユア取得以前、以後の教員の変化の話、学士課程の学生に対する研究補助金支給の話など、非常に興味深い話ばかりでした。
海外研修においても彼女から有意義な話が更に聞けるのではないかと思います。ご期待ください。

さて、第 11 回目の「プロジェクト通信」も前号に引き続き海外研修に向けた特別編成でお送りいたします。
海外研修に参加されない方にとっても実のある内容となるよう心がけておりますので、ご一読くださいませ。

目次

- <2 月 28 日 第2回授業相互参観研修のお知らせ>
- <海外研修の事前知識>:「アクティブラーニング」
- <授業のヒント>:「アクティブラーニングの導入」
- <FDのリソース>:「ディスカッションのリード」
- <後記>

<第2回授業相互参観研修のお知らせ>

日 時:2006 年 2 月 28 日(火) 10:30 - 12:00
場 所:東北大学川内北キャンパス 管理棟3F大会議室
研修内容:①第1回アンケート調査に寄せられたご意見
②メーリングリストに寄せられたご意見
③自己点検の事例紹介(三石担当授業科目)
参加申込み期日:2006 年 2 月 17 日(金)

<海外研修の事前知識>:「アクティブラーニング」

4 週間に渡って、海外研修の際に役立つと思われる情報をお知らせしております。
第 2 週目の今回は、「アクティブラーニング」です。
「アクティブラーニング」はこれまで、プロジェクト通信の第 6 号と第 7 号で掲載しましたが、今回のワークショップで重要な鍵となる概念ですので、もう一度復習の意味もこめて、取り上げます。

(1)アクティブラーニングの概要

アクティブラーニングとは、学習者が受身ではなく、自ら主体的に学ぶように、教師がガイドをする授業方法です。

以下は、学習者のどのような活動が、学習効果の増進をもたらすかをまとめたものです。

- 1) 学習者は、もし内容を聞くだけならば、忘れてしまう。
- 2) 聞いて、見るならば、少し覚える。
- 3) 聞いて、見て、内容を質問/議論すれば、理解し始める。
- 4) 聞いて、見て、議論し、応用すれば、知識と技能を獲得する。
- 5) 誰かに教えれば、内容をマスターする。

アクティブラーニングの目的は、上に述べた 5 種類の活動(聞く、見る、議論する、応用する、教える)を、学習者に主体的に行わせることで、学習者を授業に巻き込み、効果的な学習を実現することです。

(2)アクティブラーニングの技法

主に 4 つの技法に分けることができます。コースの目的と内容に照らし合わせて最もふさわしい技法を選択します。

- 1)打ち解けた小さなグループを形成する
例：質問を投げかけ、隣の人同士で考えを話し合わせる
- 2)学生同士に共同プロジェクトを行わせる
例：あるトピックについて、グループに調査・発表させる
- 3)シミュレーション
例：ロールプレイ。例えば各人に原告と被告の弁護士などの役割を与え、その役割に沿った議論をさせる
- 4)ケース・スタディ
例：実際の医療現場における患者の診察データを学生に渡し、どのように判断、行動するかを問い、議論させる

(3)ディスカッションのリード

アクティブラーニングを実施するにあたり、学生に質問を投げかけたりディスカッションをリードしたり、課題を与えたりしますが、それぞれに効果的なやり方が提案されています。効果的な質問の仕方は、以前プロジェクト通信でとりあげました。

(<http://www.istu.jp/iproject/class-tips.htm#situmon>)

今回は効果的なディスカッションのリード方法を簡単に紹介します。

授業内ディスカッションと聞くと、私にも苦い経験があります。
とにかく、議論が盛り上がらない。当てられまいとして、うつむく学生。
静かな教室。気まずい空気。焦る自分…。

このようにならないためにまず重要なことは、ディスカッションの事前準備でしょう。

1. ねらいを説明する。
例：「このディスカッションの目的は…で、コース目標の…に位置づけられる。」
2. 議論する問題は明確に定式化する。
例：「××の原理によれば、この場合……ということになるはずだが、そうならないのはなぜか」
3. 学生が考えるための材料を用意しておく。
例：次の時間でのディスカッションの予告。資料の事前配布など。
4. 事前に頭の中でディスカッションのシミュレーションを行い、ゆるやかなディスカッションの見取り図を描いておく。
例：「この質問を投げかけると、こちらの方向に議論が進みそうなので、このような追加質問をして、議論の焦点を明確化したほうが良さそう。この議論ではこれら 3 種類程度の意見が出されるだろうか？」

効果的にディスカッションを行うことはなかなか難しく、奥深い問題です。しかし、この方法が学生の学習効果に大きな影響を与える事も事実です。今回の＜FD のリソース＞では、ディスカッションのリード法を取り上げていますので、興味をもたれた方は是非ご覧ください。

(担当 中島)

＜授業のヒント＞:「アクティブラーニングの導入」

今学期の授業(コース)も終わり、ほっと一息ですね。
皆さまにとって、今学期の授業はいかがでしたでしょうか？

授業を終えて間もない今、自分のコース全体を振り返ってみることはたとえ、それが 10 分程度の短いものであっても、来年度以降の授業改善への大きな助けになります。

今回は、特に「学生をどれだけ授業に巻き込めたか」の視点から授業を振り返り、学生を授業に巻き込むための「アクティブラーニング」手法の導入を検討してみましょう。

これは、海外研修における第 2 回ワークショップ「アクティブラーニング」の予習にもなっています。というのも、コースデザインを通してシラバスをリファインするという海外研修のワークショップの中で、今回の＜授業のヒント＞は、コース全体を見直し、より学生を巻き込む内容への変更を検討し、シラバスに反映させるという位置づけになっているからです。

以下、アクティブラーニングを自分の授業に導入する場合のポイントを示します。文中で例が示されているのは、中島のコースデザイン例です。

まずは、今学期の授業とあなた自身のこれまでの学習体験を振り返ってみましょう。

(1) 今学期、あなたの授業で学生は何を身につけましたか？

学生からあなたが得た情報、例えば、レポート、試験、授業中の発言などから、類推してみましょう。あなたが授業中に話し、板書している間、学生はどのような活動をしていたでしょうか。一見まじめにノートを取っているように見えて、上の空だったりしませんか？ そのような学生を本当に授業に巻き込むにはどうしたらよいのでしょうか？

(2) あなた自身の学習体験を思い出してみましょう。

あなたが身につけた様々な知識や技能は、あなた自身はどうやって獲得しましたか？ <海外研修の事前知識>の学習効果増進のための 5 か条と照らし合わせながら、思い出してみてください。私自身の経験では、やはり、聞いて、見て、自分で整理しながら書いて、人に話せるくらいになって、ようやく知識や技能が定着したと思えるようになります。

次に、コースデザインの考え方で、アクティブラーニングの導入を検討します。

(3) 学習目標を達成するために必要な学生のスキルを考えます。

例:学習目標の一つが「eメール送信の通信規約をマスターする」の場合、それに必要なスキルは

・端末プログラムを使用し、手動でメールを送信できる。

その下位スキルとして

- ・eメールのシステムに関する基礎知識
 - ・eメール送信の通信規約の知識
 - ・端末プログラムの理解と使用スキル
 - ・コンピュータとインターネットの基本知識と使用スキル
- が挙げられる。

(4)上で考えたスキルのうち、学生を授業に巻き込むために、どこにアクティブラーニングが導入できそうか検討します。

例：手動でのメール送信。

(5)それらのスキル獲得に、どのアクティブラーニング技法が使えるか検討します。学習目標や必要となるスキルが異なれば必然的にそれに必要なアクティブラーニングの技法も異なります。

例えば打ち解けた小さなグループでのディスカッションは、一回の授業中で10分もあれば、取り入れられますし、学生同士による共同プロジェクトでしたら、複数回の授業を必要とするでしょう。

例：手動でのメール送信は、シミュレーション(又は実地訓練)によって実現できる。

必要とする時間は授業一回の半分程度。

(6)シラバスにアクティブラーニングの導入を反映させます。

例：「eメールはどのように相手に届くのか」概要

eメールがコンピュータ間で、どのように転送されるのかを理解し、その通信規約を使用できるようにする。

授業の後半で、実際にテストサーバを使って、自分のメールアドレス、及び教員のメールアドレスに手動でメール送信を行う。

このようにして、私は昨年度から、「eメールはどのように相手に届くのか」を授業で取り上げるときに、シミュレーションの手法を取り入れています。

学期の最後の授業のときに、一番印象に残ったのはどの授業かを自由記述で尋ねるのですが、約3割の学生が、「手動でコンピュータと対話し、メールを送って、届いたメールを自分で確認したことが印象的だった」と述べていました。このように、学生にとってはそのようなアクティブラーニングの技法は効果的であるといえます。

このようなアクティブラーニングの技法が大げさすぎると感じる場合には、より手軽に実施できて効果の高い方法もあります。例えば、授業のはじめにA4の半分程度の紙を渡して、「今日の授業であなたが重要だと思った点を3つ書いて、授業後に提出しなさい」というものです。

アクティブラーニングの技法としては、取り上げられていませんでしたが、このような課題を学生に与えることにより、学生は授業をただ聞くだけではなく、自分自身で理解しようとするでしょう。

さて、いかがでしたでしょうか。

授業が終わったときに学生が満足そうな顔をしてノートを閉じたり、目を輝かせながら質問にきたり、授業中に与えた課題に関して難しい顔をして考え込んでいたり。

お互い、そのような授業をしてみたいと思いませんか？

ここでは、紙面の都合で簡単にしか紹介できませんでしたが、海外研修の各ワークショップでは、より具体的に詳細かつ深い内容を学ぶことができます。海外研修のワークショップに関して、事前にご意見やご質問をいただけますと、それらを反映することで、より充実したワークショップにすることができます。

どうかご協力よろしくお願いいたします。

(担当 中島)

.....
<FDのリソース> :「ディスカッションのリード」

今回は、「海外研修の事前知識」で取り上げました、「ディスカッションのリード」のリソースを2つ紹介します。

(1) 名古屋大学「ティップス先生」の中の「学生を授業に巻き込む」

このウェブページでは、いわば、日本版アクティブラーニングとして、＜質問＞＜ディスカッションのリード＞を中心として取り上げています。

是非ご一読ください。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/basics/discussion/index.html>

プロジェクト通信では、何度も名古屋大学のサイトを取り上げていますが、それは、現在日本語で手に入る優良なFDのリソースが集中しているためです。手軽な「ウェブFD」を行いたい場合、名古屋大学「ティップス先生」を教員に紹介するという方法も選択肢のひとつに加えることができるでしょう。

(2)Center for Teaching and Learning ニューズレター

“Speaking of Teaching”

ディスカッションリーディングの特集です。Letter サイズ 6 ページに学習目標の設定からトラブルシューティングまで、読みやすく丁寧に解説してあります。

http://ctl.stanford.edu/Newsletter/discussion_leading.pdf

(担当 中島)

.....
＜後記＞

「プロジェクト通信」第11号は、先週に引き続き、海外研修の「コースデザイン」ワークショップに向けた内容でお送りいたしました。いかがでしたでしょうか。

先週のシラバスについて取り上げるにあたって、ウェブサイトで「シラバス」と検索してみたところ、ある中学校が「シラバス」を「学習案内」と訳しているのを見つけました。これは言いえて妙だと私は感心したのですが、皆様はどう考えますでしょうか。

今回取り上げたアクティブラーニングも、「学習案内」も学習者を中心にした考え方であるという点でルーツを同じくしているといえます。海外研修では、このような考え方にフォーカスした内容となっております。ご期待くださいませ。

「プロジェクト通信」の内容についてのご意見・ご提案をいただけると、今後の企画を考える上で非常に参考になります。

ご意見・ご感想の連絡先は i-project@he.tohoku.ac.jp です。

このメールアドレスは、中島と渡利に送られます。

海外研修へのお問い合わせも同アドレスにお送りください。

プロジェクト関係者の皆様とも共有したいとお考えでしたら、

i-project-members@he.tohoku.ac.jp までメールをお送りください。

次号の「プロジェクト通信」は2月23日(木)配信予定です。

今後とも、よろしくお願いいたします。

中島 平

渡利 夏子

メールアドレス:i-project@he.tohoku.ac.jp

ウェブサイト:<http://www.istu.jp/iproject/index.htm>

文責:渡利夏子

プロジェクト関係者の皆様

こんにちは。「プロジェクト通信」第 12 号担当の渡利です。

国立大学では、今週末に前期日程の試験が行われますので、皆様の中にはその準備でお忙しい方もいらっしゃるのではないかと思います。入学者選抜といえば、スタンフォード大学において行われた TA オリエンテーションで言われた内容を思い出します。

「スタンフォード大学では、選抜段階での学習到達点ではなく、それまでの成長度で学生を選んでいます。そのような学生は、大学において最も伸びる可能性があるからです。その数、十人に一人です。TA として学生の教育に携わる皆さんには、そのような学生を知的に成長させる使命があります。」

入試方法については、賛否両論あるかと思いますが、入学させた学生を教育する使命を、TA のオリエンテーション時に訴えているという点に興味を持ちました。入試も教育の重要な一環であると考えさせられる一件でした。

さて、第 12 回目の「プロジェクト通信」も前号に引き続き海外研修に向けた特別編成でお送りいたします。今回は、授業におけるテクノロジー利用を特集しております。

目次

- <第2回授業相互参観研修のお知らせ>
- <海外研修の事前知識>:「授業のためのテクノロジー」
- <授業のヒント>:「テクノロジーを効果的に利用するために」
- <FDのリソース>:「授業のためのテクノロジー」
- <後記>

<第2回授業相互参観研修のお知らせ>

日 時:2006 年 2 月 28 日(火) 10:30 - 12:00
 場 所:東北大学川内北キャンパス 管理棟3F大会議室
 研修内容:①第1回アンケート調査に寄せられたご意見
 ②メーリングリストに寄せられたご意見
 ③自己点検の事例紹介(三石担当授業科目)

<海外研修の事前知識>:「授業のためのテクノロジーサポート」

今回は、スタンフォードの教員や学生が利用しているオンラインのテクノロジーを紹介します。海外研修のワークショップでは、これらのテクノロジーのいくつかを実際に見ていただく、あるいは体験していただく予定です。

(1)基本的なテクノロジー

スタンフォード大学では、教員や学生が気軽に利用できる授業のためのテクノロジーとして、
<http://www.stanford.edu/courses/index.html> より、
 以下の 5 種類が提供されています。どれも、ウェブから申し込んですぐに利用することができます。

1.コースウェブサイト

東北大学の ISTU システム(<https://lms.istu.jp/coursenavig/>)のスタンフォード版と言えます。

コースの周知、学生とのオンラインコミュニケーション、資料(課題、シラバス、ビデオ)の共有、出席確認、そして学生の成績評価のサポートを提供しています。

2.授業のためのメーリングリスト

クラスに関係する全ての人に、簡単に連絡することができます。

クラスのメンバーのメールアドレスさえあれば、メーリングリストの作成は非常に簡単です。

3.オンラインディスカッションフォーラム

授業で使える電子掲示板を提供します。授業内での話し合いに加えて、複数の学生とオンラインでコースのトピックについて話し合うことができます。

4.オンラインディスクスペース

オンラインでファイルを置いたり、他の人とのファイルのやりとりができるディスクスペースを標準で200MB 提供します。

5.ハードウェアとソフトウェアの貸与

コンピュータを持っていない学生は、大学の共有コンピュータを利用できます。また、幾種類かのソフトウェアは大学でライセンスを購入しているため、個人で購入する必要はありません。

(2)先進的なテクノロジー

スタンフォードの教員が使っている、比較的新しいテクノロジーを紹介します。

1.Wiki

Wiki とは、複数の利用者が、ウェブブラウザを介して簡単に書き換え可能な Web ページのことです。例えば、学生間による共同プロジェクトの情報交換・情報蓄積の場として利用することができます。インターネット上のホワイトボードに喩えられます。

2.Student Response System

教員が多肢選択の質問を授業中にし、学生にすぐに返答させると、その結果が自動集計されて、グラフでクラスに表示されます。大きな講義型授業の場合でも、教員は学生が重要な概念をどれくらい理解しているのかを、リアルタイムで知ることができます。

3.オンラインフィードバックシステム

Web のフォームを通して、授業後にすぐに学生から、その授業が役に立ったかどうかなどのフィードバックを得ることができます。結果は集計され、見やすく表示されます。

スタンフォード大学の授業のためのテクノロジーを調べていると、授業をよりよくするためのテクノロジーの利用が全学的に推奨されていることがわかります。特に、今回紹介した「(1)基本的なテクノロジー」は、スタンフォード大学の教員なら誰でも、思い立ったときにすぐに使えるように整備されています。

私自身も日本では授業で、ISTU システム、メーリングリストとディスクスペースを利用していましたが、メーリングリストとディスクスペースは大学全体で提供されている設備ではなく個人のコンピュータを使用しました。

このような便利なものが、コンピュータに詳しくない教員でも簡単に利用できるのは、教員にとっても学生にとっても素晴らしいことだと思います。

ここで紹介したテクノロジー、又は授業に使える他のテクノロジーで、もっと詳しく知りたいものがありましたら、ワークショップの内容改善の参考にさせていただきますので、是非お知らせください。

(担当 中島)

.....
<授業のヒント>:「テクノロジーを効果的に利用するために」

皆さまは授業中、あるいは学会発表でパワーポイントを使用されたことがあるかと思います。そこで OHP ではなく、パワーポイントを使用するのは、何故でしょう？

テクノロジーを使用する場合に、ともすれば忘れがちな大原則は、「テクノロジーが学生及び自分にとって“メリットがある”から使用する」ということです。

そこにあるから。皆が使っているから。という理由ではなく、自分の授業の学習目標を学生が達成する助けになるから、又は、授業の準備にかかるトータルコストが下がるからなどの理由で、テクノロジーを利用します。

そして、テクノロジーを使うメリットよりも、デメリットが上回れば、あえてそのテクノロジーの使用をあきらめるということも、頭の片隅に残しておくとも良いかもしれません。

実際、CTL ではワークショップで、パワーポイントではなく OHP を使うこともあります。その理由は、スライドに参加者の意見を書き込みながらワークショップを進めることで、より参加者を巻き込むことと、パワーポイントプレゼンテーションの信頼性を考慮に入れたためであると考えられます。

さて、今回は2つのテクノロジーをスタンフォードの教員がどのように有効に利用しているのかを例を挙げて紹介します。皆さまがテクノロジーを利用するときの一助になれば幸いです。

なお、今回の内容は CTL の 1996 年秋のニュースレターを引用しています。
このニュースレターは<FDのリソース>で紹介しておりますので、興味がありましたらご覧ください。

(1) メーリングリストの利用によりディスカッションをより良くする

メーリングリストを取り入れることにより、授業が変わった例として取り上げるのは、アートの授業“Utopia and Reality in Modern Urban Planning”です。この授業は学部学生のためのセミナー形式の授業で、それぞれの学生が授業のはじめに問いを発することを求められ、その問いからディスカッションを始めていました。

授業の変更点は、メーリングリストを導入し、今までは授業の最初に出させていた学生からの問いを、授業の前にメーリングリストに投稿させ、授業の最初からディスカッションを開始させるようにしたことです。

しばらくすると、メーリングリストに投稿された質問に、学生が授業前にオンラインでコメントをつけ始め、セミナーが始まる時には、すでに議論が始まっている状態になりました。これにより議論は、より洗練されたものとなり、かつて存在していた、問いを投げかけてから答え始めるための空白の時間がなくなりました。

(2) コースのウェブページを作成し、学生に情報を提供する

1996 年秋の時点で、スタンフォードでは 120 以上のコースがウェブページを持っています。それらのページはたいてい、

- ・シラバス
- ・教授と TA の紹介、
- ・学生への課題と、その解決へのガイドライン

を掲載しています。TA は、コースウェブページを変更する権限を与えられ、講義ノート、課題とそのヒントの更新を行います。

他に様々な教員がウェブページに掲載している情報としては、以下のようなものがあります。

- ・“Music in America”の授業で、作曲家名のリンク先を百科事典『online エンサイクロペディア ブリタニカ』の該当する作曲家名にしている
- ・“Psychophysics and Cognitive Psychology for Musicians”の授業で、授業と直接は関係しないものの、より発展的な内容を含むウェブサイトのリンク集を掲載している
- ・前もって、クラスの内容を Web で公開することで、学生がその授業を取るか取らないかの判断材料を提供している
- ・ウェブサイト、授業に関係するイラストや写真を掲載する著作権の問題で掲載できない場合は、リンクを表示する

このような情報提供は、学生の予習を促すだけでなく、授業中の学習効果の増進と、授業外での発展学習を促進する効果があります。

さて、いかがでしたでしょうか？ テクノロジーと言うと、何かありがたく、大げさなものを想像する方もおられるかもしれませんが、ですが、どんなテクノロジーも黒板やホワイトボードと同じで、「授業の道具」に過ぎません。

シラバスの授業目標と照らし合わせ、学生がクラス内外で、より「アクティブ」に学習するのを助けるためにテクノロジーを利用したいものです。

(担当 中島)

<FDのリソース> :「授業のためのテクノロジー」

今回は、<授業のヒント>と関連した「授業のためのテクノロジー」の活用事例のリソースを3つ紹介します。

- (1)Speaking of Teaching Vol. 8, No. 1 –
Technology and Teaching: Using Online Technology to Break Classroom Boundaries
<http://ctl.stanford.edu/Newsletter/technology.pdf>

オンラインテクノロジーの利用事例です。今回の<授業のヒント>のより詳細な情報が知りたい方は是非、このニューズレターをお読みください。96年の秋に発行されているという先進性に驚かされます。

- (2)スタンフォード学部教育プログラム(VPUE)の
「Best Practice」
<http://vpue-webserver.stanford.edu/bestpractices/>

スタンフォードの教員の授業実践が、Q&Aの形でまとめられています。テクノロジーに関するQ&Aも、いくつかあります。

- (3)Speaking of Teaching Vol. 4, No. 3 –
The Meeting of Minds and Machines: Teaching and Multimedia
http://ctl.stanford.edu/Newsletter/minds_and_machines.pdf

映像、音声などのマルチメディア教材をどのように授業に使うかの情報が4ページにまとめられています。

(担当 中島)

<後記>

「プロジェクト通信」第11号は、先週に引き続き、海外研修の「コースデザイン」ワークショップに向けた内容

でお送りいたしましたが、いかがでしたでしょうか。

第 1 グループの海外研修まで、あと 1 週間強となりました。
3 月 7 日からは、ライフデザイングループの海外視察も始まります。
どうか、ご体調にはお気をつけてお過ごしくださいませ。

「プロジェクト通信」の内容についてのご意見・ご提案をいただくと、今後の企画を考える上で非常に参考になります。
ご意見・ご感想の連絡先は i-project@he.tohoku.ac.jp です。
このメールアドレスは、中島と渡利に送られます。
海外研修へのお問い合わせも同アドレスにお送りください。

プロジェクト関係者の皆様とも共有したいとお考えでしたら、
i-project-members@he.tohoku.ac.jp までメールをお送りください。

次号の「プロジェクト通信」は 3 月 2 日(木)配信予定です。
今後ともよろしくお願いいたします。

中島 平
渡利 夏子
メールアドレス:i-project@he.tohoku.ac.jp
ウェブサイト:<http://www.istu.jp/iproject/index.htm>

文責: 渡利夏子

□プロジェクト通信 第 13 号

2006 年 3 月 2 日 9:13

プロジェクト関係者の皆様

こんにちは。「プロジェクト通信」第 13 号担当の中島です。

第一グループのみなさまは、いよいよあと 3 日でお出発ですね。
ここ二日ほどのパロアルトの天気は少し不安定で、突然強い雨が降り出したりもしますが、時おり青空も広がり、日本とはまた違った南国風の景色を楽しむことができます。
天気予報 http://www.wunderground.com/US/CA/Palo_Alto.html によると、この天気は今後も続くようですので、移動の際は折りたたみの傘を携帯されると良いかもしれません。

海外研修に日本から参加なさる先生は、合計 14 名ですが、これに対して、直接協力して下さるスタンフォード大学の先生は、合計 12 名です。この人数と、その比率を考えるたびに、日本の先生方にとっても、スタンフォード大学の先生方にとっても、できる限り最高の出会い・研修の場を提供したいとの思いが強くなります。
どうか、研修に参加する皆さまが、研修後に、「何か素晴らしいものを得た」との思いをもって日本に帰られますように。

さて、第 13 回目の「プロジェクト通信」も前号に引き続き海外研修に向けた特別編成でお送りいたします。
今回は、第 4 回のワークショップ「アセスメントの方法を考える」に対応した内容の特集しております。一度でも目を通していただくと、実際にワークショップに参加するときにより自然に内容をご理解いただけると思います。

目次

- <海外研修の事前知識> : 学習目標に応じた評価をする
- <授業のヒント> : 明日から取り入れられる評価方法
- <FDのリソース> : CTL が推薦する Teaching Methods サイト
- <後記>

<海外研修の事前知識>「学習目標に応じた評価をする」

海外研修で行われるコースデザインのワークショップの最終回のテーマは「アセスメントとフィードバック」です。

そのワークショップの中で、皆様に答えを出していただきたい問いは次のようなものです。

“What kind of assessment strategies can you use to determine the extent to which students have met the goals of your course?”

「学生があなたのコースの学習目標をどの程度達成したかを知るためには、どのような評価の方法が考えられますか。」(日本語訳)

そして、そこで出された答えを、皆様の実際の授業の中で少しでも実現していただければと考えております。

そのためには、しっかりとした学習目標と学習内容・方法を立てる必要がありますが、それは第1回から第3回までのワークショップにおいて行っていただくように企画されております。

この「評価」については、日本では「ブラックボックス」に例えられることもあります。それだけ、基準やプロセスが曖昧なままで看過されているということなのだと思います。

現在では、成績の明確化・厳密化がにわかに求められるようになり、GPA 制度などを導入する大学、成績評価の結果を公表する大学、相対評価を導入した大学もあると聞きました。

しかし、今回のワークショップで皆様に考えていただきたいのは、成績の厳密化の方法でも明確化の方法でもありません。

学生が自らの学習到達度を知り、その後の学習に活かす事ができる評価、そして教員が学生の学習到達度を知り、その後の授業の改善に活かす事ができる評価の方法とはどのようなものなのかという事です。

そのような評価の方法は多く開発されております。その一部を、これまでの<授業のヒント>で紹介いたしましたし、今回の<授業のヒント>と<FDのリソース>においても紹介しております。

しかし、これらの方法が必ずしも皆様の授業に合うとは限りません。

したがって、皆様の学生の学習到達度を知り、学生の学習の促進と皆様の授業改善に役立つ評価方法とは何かについて考えた上で選択的に利用する事が求められます。今回の海外研修では、そのようなプロセスを経た評価方法の導入の検討ができればと考えております。

そして、今回の研修によって、皆さまの授業における「評価」が、教員と学生が共に生き活きと授業に臨むための方法となる事を願っております。

(担当 渡利)

<授業のヒント> : 「明日から取り入れられる評価方法」

今回は、授業の中で使うことができる評価の方法をいくつか紹介したいと思います。アセスメントの方法については、「プロジェクト通信」の第6号～第8号の授業のヒントにおいても取り上げておりますので、ご参照

ください。 <http://istu01.ei.tohoku.ac.jp/iproject/class-tips.htm>

今回は、アセスメントの方法の中でも、授業の中に比較的取り入れやすいものを3つ紹介したいと思います。

(1)ミニットペーパー(Minute Paper)

質問カード、感想カード、リアクション・ペーパーとも呼ばれる類のものです。

A6、B6 サイズの紙に、学生に次のような項目について書かせます。

ー今回の授業の最も重要な点は何だったでしょうか。

ー今回の授業についての意見・質問を書いてください。

ー今回の授業で最も分からなかった点はどこですか。

ミニットペーパーについては、以下のサイトで実践例も見ることができます。

<http://www.flaguide.org/cat/minutepapers/minutepapers1.php>

(2)コンセプトテスト(Concept Test)

コンセプトテストとは、主に大人数の講義形式の授業で使われる方法です。

教員が、ある概念の意味について、複数の解答の選択肢を準備して、学生にその選択肢の中で正しいと思うものに挙手をさせます。

もし、多くの学生が正解を選ぶことができれば、どれが正解なのかを隣近所の学生達と話し合う時間を設けます。

その上で、再度、同じ質問を学生に行います。

この方法は、特に理系の分野の授業において有効です。

また、前号で紹介しました Student Response System を利用すると学生の選択結果がグラフィックで示れるので、より効果的です。

コンセプトテストの実践例は、以下のサイトでご覧になれます。

<http://serc.carleton.edu/introgeo/interactive/conctest.html>

(3)ピアレビュー(Peer Review)

学生が書いたレポートを学生同士で読み合い、意見交換を行うというものです。不適切な評価を行う学生がいるかもしれないので、その点に注意して進める必要がありますが、教員にとっては、時間のかかるフィードバックの作業を学生同士で行ってもらえますし、学生にとっては教員よりも同じ受講生に見られる方が緊張するので、より良いレポートを書いてくる可能性があるというメリットがあります。

詳しくは、以下のサイトをご覧ください。

<http://serc.carleton.edu/introgeo/peerreview/index.html>

海外研修のコースデザインのワークショップでは、上記のような評価方法を皆様のそれぞれの授業の中に導入する事を検討していただく作業がございます。

お時間がございましたら、その他の評価方法についても事前にお調べになってはいかがでしょうか。

(担当 渡利)

<FDのリソース> :CTL が推薦するティーチング方法のサイト

今回は、海外研修のコースデザインのワークショップを担当していただきます CTL のスタッフの Robyn Dunbar 先生のお勧めのサイトを紹介しようと思います。彼女が地学を専門にしているため、主に自然科学系(特に地学)の教員を対象としたサイトではありますが、分野が異なっても充分に参考になるサイトです。

(1)「Starting Point—Teaching Entry Level Geoscience」

<http://serc.carleton.edu/introgeo/instructionalmethod.html#teaching>

The Science Education Resource Center (Carleton College)より

Campus-Based Learning, Cooperative Learning, Gallery Walk, Investigative

Case-Based Learning, Peer Review, Conceptual Models 等、様々な教育方法が紹介されています。

(2)「Class Assessment Techniques」

<http://www.flaguide.org/cat/cat.php>

Field-tested Learning Assessment Guide より

ConcepTests, Concept Mapping, Conceptual Diagnostic Tests, Minute Paper, Multiple Choice Test, Performance Assessment, Scoring Rubrics 等のアセスメントの方法について紹介されています。

(担当 渡利)

.....
<後記>

海外研修のセッションで、皆さまが多く会うことになる、スタンフォード大学の先生が、二人います。

一人は、私たちをのボスである、US-Asia Technology Management Center のディレクターである、リチャード・ダッシャー先生。<http://asia.stanford.edu/contact/dasher.html>

もう一人は CTL のシニア・アソシエイト・ディレクターの、ロビン・ダンバー先生です。

http://ctl.stanford.edu/General/bio_robyn.html

中島・渡利も、海外研修の企画を進めるに当たって、このお二人の先生に、大変深く関わっていただいております。

そして、セミナーやミーティングで、このお二人にお会いしているうちに気づいた二人の共通点があります。それは、物事をより良くしようという強い意志を持って妥協無く仕事へ取り組むだけではなく、何か想定外の事態が起こったとしても、自然体で物事の全体を捉えることにより柔軟に対応できるということです。このような、「強い意志」と「自然体」が共存するような雰囲気は、お二人だけではなく、スタンフォード大学全体に広がっているように思います。

海外研修ではみなさまにも、このような雰囲気を味わっていただけるのではないかと、楽しみにしております。

「プロジェクト通信」の内容についてのご意見・ご提案をいただけると、今後の企画を考える上で非常に参考になります。

ご意見・ご感想の連絡先は i-project@he.tohoku.ac.jp です。

このメールアドレスは、中島と渡利に送られます。

海外研修へのお問い合わせも同アドレスにお送りください。

プロジェクト関係者の皆様とも共有したいとお考えでしたら、

i-project-members@he.tohoku.ac.jp までメールをお送りください。

最後に「プロジェクト通信」一時お休みのお知らせです。

今号配信後、1 ヶ月間は、海外研修等の事情により、「プロジェクト通信」の配信を一時停止したいと思います。再開予定日は 4 月 13 日(木)です。

それでは、海外研修で皆さまにお会いできるのを心待ちにしております。

中島 平

渡利 夏子

メールアドレス:i-project@he.tohoku.ac.jp

ウェブサイト:<http://www.istu.jp/iproject/index.htm>

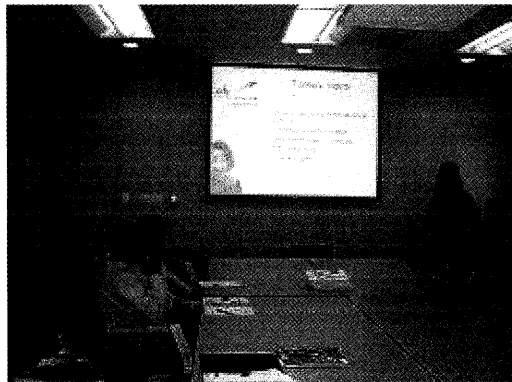
文責:中島 平

アメリカのキャリアデザイン支援調査報告

高等教育開発推進センター助手 渡利 夏子

東北大学「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクトによる、キャリアデザイン調査報告です。

タイトル	日 付
1 月	
「仕事を探す技」セミナー	2006/1/16(月) 午前 10:00
留学生の就職「応募用紙の書き方」	2006/1/16(月) 午前 10:46
インターンシップ101	2006/1/20(金) 午前 4:18
推薦文を書いてもらう	2006/1/21(土) 午前 11:10
留学生の就職活動～基本編～	2006/1/21(土) 午後 0:09
留学生の就職活動～留学生ならではの編～	2006/1/21(土) 午後 0:35
キャリア・カウンセリング調査	2006/1/21(土) 午後 0:35
2月	
キャリア・インターンシップフェア～リベラル・アーツ編～	2006/2/ 5(日) 午前 9:42
キャリア・インターンシップフェア～公務員編～	2006/2/ 5(日) 午前 9:44
キャリア・カンファレンス	2006/2/ 5(日) 午前 9:44
Vaden Health Center @ Stanford University	2006/2/17(金) 午後 3:30
Values Workshop	2006/2/17(金) 午後 3:35
Skills Workshop	2006/2/17(金) 午後 3:37
Career Mastery Series: Helping Master's Students Get Ahead	2006/2/21(火) 午前 5:52



1/13/2006

「仕事を探す技」セミナー “Key Strategies for the Job Search”

時間:15:00~15:45

場所:CDC 2F 会議室

概要:特に仕事探しのオプションや、お助けネットワークの構築の方法、様々なリソースについて紹介する。

参加者:5名(参加応募は11名)

具体的な内容(紹介された順番に表示):

1. 現在の就職状況
 - ・団塊の世代(ベビーブーマー)の大量退職に伴い、就職率は良い
 - ・特に理系の就職は良い
2. 企業の人事の観点からの就職活動
 - ・応募書類は30秒も見てもらえない。
 - ・企業が必要とする人材の「キーワード」が書かれているかを見ている。
3. 仕事探しの「トラの穴」～ネットワークを大切に～
 - ・周りの人に、自分が仕事を探している事を広めると、思わぬところから仕事の話が入ってくる。
 - ・就職直後の学生の半数が「ネットワーク」が大切と答えている。
 - ・社員を公募していなくても、「〇〇の仕事を探している」と伝えておくとそのポストが空いた時には、一番早くに知らせてもらえる事がある。
 - ・「仕事を探している」ではなく、「あなたの会社について知りたい」と伝え、名前を覚えてもらうだけでも、就職の機会は広がる。
 - ・卒業生を全面的に利用する。
4. CDC のリソース
 - ・キャリアフェア(工学部だけのキャリアフェアもある。)
 - ・1月末のキャリアウィークの他に、4月の半ばにも2日間のキャリアフェアがある。
 - ・ウェブサイト
 - ・ニュースレター
 - ・job posting
 - ・キャリア・カウンセリング
 - ・リソース・センター(スタンフォード大学は全米一)
5. 就職活動でやってはならないこと
 - ・Honor Codeに反する事(嘘の履歴を書く。)
6. 「1年生の時から、就職を含めた自分の人生のデザインをしておくこと」



1/13/2006 2:30PM

<留学生の就職「応募用紙の書き方」>

Resume & Cover Letter Essentials for International Students

場所: CDC1 階会議室

概要: 留学生がアメリカで就職するための、留学生ならではの
応募用紙(resume and cover letter) の書き方の講座。

参加者: 40 名 (大学院生: 学士課程学生 = 6:4)

その内、CDC のサービスを以前から利用した事のある学生は半数程度。

具体的な内容:

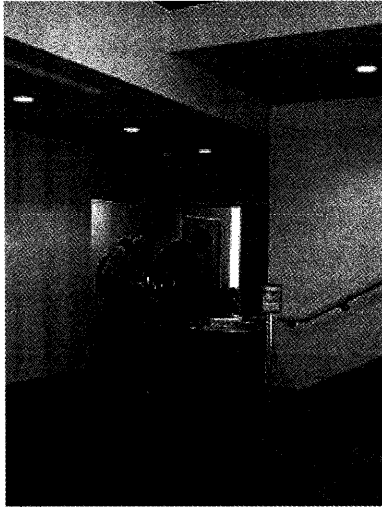
(他のワークショップの関係上、最初の 30 分しか参加できず。)

1. CDC のサービス紹介

- ・CDC のコンサルティング・サービスは、この時期は 2 週間先まで埋っている。
(この時期は、就職活動とインターンシップの準備をする学生が多いため。)

2. 応募用紙の書き方

- ・応募用紙は 30 秒以下しか見てもらえないので、企業の人事担当者が
何を求めているのかについて考え、情報を厳選する必要がある。
- ・応募用紙の具体的な書き方。
- ・応募用紙に書いてあるといい、動詞の紹介。
e.g. explained, managed, achieved, created, focused, conducted
- ・応募用紙に書いてあるといい名詞
e.g. Leadership, Accomplishments, Teamwork Activities, Honors/Awards



1



2

インターンシップ101～Internship Search Strategies 101～

日時:2006 年 1 月 17 日、12:00～13:00

場所: CDC1階会議室

概要:このワークショップに参加する事で、夏の仕事やインターンシップの探すためのリソースやヒントを教えます。

<参加者>

30 人(途中の入退室 ±5 人)

【内訳】1 年生:2 人、2 年生:7 人、3 年生:7 人、修士課程 1 年:2 人

テクノロジー専攻が半数

実際に、レジュメやカバーレターを書いたことがある人:5 人

インターンシップを探し始めている人:11 人

*手を上げたのは一瞬だったので、人数は大体の目安です。

<内容>

1. 参加者のプロフィールをこれでもか、というくらい聞く。その結果は上記の通り。
2. 「インターンシップで何がやりたいのかをはっきりさせる事から始める。」
3. 「雇用者に対して、あなたは何かができるのかを明らかにする。」
4. インターンシップを探す最も効果的な方法
 - ・CDC の各種リソース
 - ・雇用者に直接コンタクトを取る
 - ・様々なウェブサイト
 - ・ネットワーキング、インフォーマルなインタビュー
 - ・スタンフォードのプログラム
 - ・学部の情報
5. CDC のリソース

Cardinal Careers というサイト(cdcsecure.stanford.edu/login)には有益な情報がある。

 - ・620 のインターンシップ先が登録されているデータベースで、

「地域」「職種」「企業名」から検索ができる。

- ・企業の出張リクルーティング
- ・ニューズレター

6. CDC のキャリアフェア

年に3〜4 回大きなキャリアフェアが行われる。

(1 月末に一週間の大きなキャリアフェアがあるから参加するといいい。)

CDC だけではなく、各学部でも学部の特化したキャリアフェアが行われているかもしれない。

(工学部のキャリアフェアは大規模)

7. CDC の図書館

インターンシップに関しての資料を数多く取り揃えている。

8. 他の大学の CDC も利用すべき

スタンフォード大学は、ベイエリア(サンフランシスコ近辺)の情報をたくさん持っているが、他の地域のインターンシップの情報は、その地域にある大学の CDC の方が数多く持っているので、あなたが仕事をしたい地域の大学のキャリアセンターを利用すべし。

直接そのキャリアセンターに電話をしてもいいし、CDC に問い合わせてもいい。

7. 雇用者に直接コンタクトを取る

CDC の「雇用者データベース」には、スタンフォードの学生を雇いたい企業しか登録をしていないので、成功する可能性が高い。

8. インターンシップ・上級編

自分がインターンシップをしたいと思っている企業が、インターンシップを募集していなかった場合でも、「自分はこれだけ貢献できる」と説得できれば成功する場合がある。

ある学生は、希望のコンサルタント会社でそれを成功させた。

10. ネットワーキング

ネットワーキングとは、あなたが働きたいと考えている企業やフィールドで働く人とコンタクトを取り、情報を得る事。(就職活動とは異なる。)

つまり、「あなたの企業について知りたい」から始めること。

スタンフォードの卒業生の 40%が、ネットワーキングから就職活動を始めている。

具体的には、

- ・周りの人全てに「私は仕事を探しています」と宣伝する。
- ・企業家のセミナーに参加する
- ・シャドープログラムがないか探してみる。
- ・インターンシップに参加したことのある学生に話を聞く。
- ・キャリアウィーク(1 月 30 日〜2 月 4 日)に参加する。
- ・スタンフォードの卒業生にコンタクトを取る。
- ・サークルの先輩や、「卒業生会」(Alumni Clubs)とコンタクトを取る。

11. 学部の単位となるインターンシップ

専攻(Media, Finance, Commercial 等)によっては、インターンシップを正規の単位として認めている所がある。

ある企業は、インターンシップによって単位を授与される学生に限定して雇用している。

それは、賃金を支払わなくてもいいから。

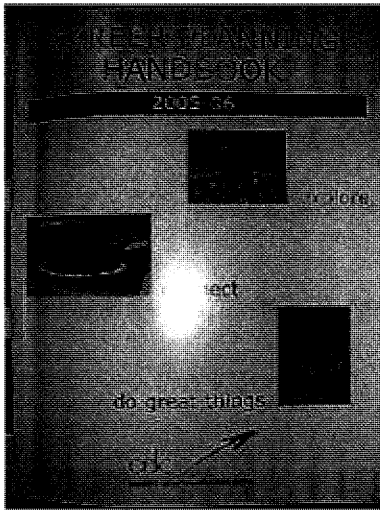
12. その他の CDC のリソース

- ・CDC のキャリア・ハンドブック
- ・キャリア カウンセラー

- ・CDC のワークショップやイベント
e.g. 「レジユメの書き方」「インタビューの方法」「キャリア・アセスメント」

< 渡利ポイント >

- ・実施時間帯を 12 時から 13 時のお昼の時間帯にしている事。
参加者の中には、ご飯を食べながら話を聞いている学生もいた。
- ・大学一年生が参加している事。中には、夏のインターンシップの申し込みを済ませたという人もいた。
- ・いずれの場合にもまず学生に「この方法はやった事がある？」と聞いて経験者がいた場合には、その人にその時の話をさせてから、細かな説明をしていく、という方法を取っている所がよい。
- ・CDC 職員が話している最中でも、学生が手を上げて質問をするのはアメリカの特徴。
- ・個人で来ている学生がほとんどという点も、日本とは異なる。
- ・インターンシップの平均従事日数は、9～11 週間！！
お金のために働く学生は少数で、自分の経験のために働くという。
賃金は、時給制がほとんどで、工学部系だと \$ 20 / 時間もらえるが、大抵は、普通のアルバイトと同じ値段(\$ 12)で、中には、無賃金というものもある。



＜写真：キャリア・プランニング・ハンドブック＞

推薦文を書いてもらう～Soliciting Recommendations & Establishing a Reference File

日時:1/19/2006 15:15～15:45

場所:CDC 1階会議室

参加者:15 人。就職や進学に関して、かなり具体的な作業を説明するセミナーだったので、
上級生らしき人が多かった。4 年生？(未確認)

概要:就職や大学院進学のための推薦文を書いてもらう方法と推薦文のレファレンス・ファイルの
利用の仕方を学ぶ。

内容:

1. 誰に推薦文を書いてもらうか

*平均、3つの推薦文が必要。

—自分の事を良く知ってくれている人

有名な人(Big name)が必ずしも良い推薦者ではない。

—自分が推薦文を送る先の条件に合った人

e.g. 大学院に進学する場合には、その専攻の教員

例えば、自分の取っている授業の TA に推薦文を書いてもらう場合には、
推薦文はその TA に書いてもらった上で、署名を授業担当教員にももらうと良い。

2. 推薦文はいつ書いてもらうのか

最低、締め切りの 3 週間前

* 推薦文が期限内にもらえないのは自分の責任。

3. どのように推薦文をお願いするのか

—メールや電話で依頼するのではなく、直接、会いに行ってお願いをする。

—「あなたは私の応募を後押しするような推薦文を書くことができますか？」と聞いてみる。

positive, specific, supportive な推薦文が書ける人がいい。

—推薦文を書く際に役立つ情報を渡す。

e.g. 応募要項、自分の申請用紙、いつまでに書いて欲しいか等

—推薦文に書いて欲しい内容を5つ程度書いておく。

応募先が推薦文に要求する内容については、自分の方が知っているから。

4. 推薦文を受け取り、応募先に送るまでは自分の責任

推薦文が期限に遅れたとしても、それは自分の責任。

依頼した人に、確認をすること。

5. 推薦文を書いてくれた人に感謝の手紙を送ることを忘れずに。

6. CDC のレファレンス・ファイルを活用する。

(<https://cdc-secure.stanford.edu/reference/RRLogin.jsp>)

<レファレンス・ファイルとは>

(参考ウェブサイト:<https://cdc-secure.stanford.edu/reference/LearnMore.jsp>)

レファレンス・ファイルとは、就職や進学で利用する推薦文や申請用紙、教育履歴書を CDC が管理し、利用者の希望に応じて、就職希望先や進学希望先に送るサービス。

メディカル・スクールに進学を希望する学生は、例年、数十の大学に対して一斉に応募申請用紙を送ることになるが、それを CDC が代わりに行ってくれる。

利用可能なのは、学生と卒業生。学部生は、無制限で利用が可能。

卒業生は、卒業後 5 年以内まで利用が可能。

ただし、学期内に送れる書類の数が 25 に限られ、その数を越えた場合には、一件あたり \$ 5 費用が掛かる。

<渡利ポイント>

・書類の種類が多い。ということで、用語解説。(Career Planning Handbook を参考)

レジュメ(Resume): 就職活動に関連する、連絡先、資格、教育履歴、経験を簡潔にまとめたもの。

1 枚程度にまとめられる。企業の人事は、これを 30 秒以内で読み、候補者を絞る。

そして、これを参考にして面接をする。

カバー・レター(Cover Letter): その名の通り「手紙」の形式をとった応募用紙。

名前、連絡先、志望動機、教育履歴、経験、資格を記載。

教育履歴書(Curriculum Vitae): 学歴(大学から)、大学でのティーチング、研究の経験、管理(administrative)の経験、論文、ティーチングと研究の興味対象、受賞履歴のリスト。

・“Professors have to write hundreds of letters.”と言っていた。

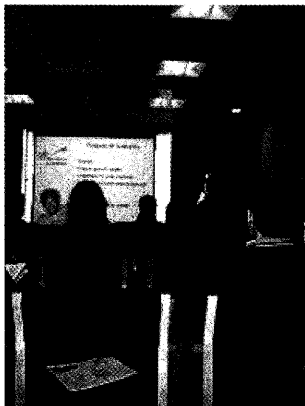
就職にも進学にも必要となれば、多くの学生の推薦文を書く必要があるのだろう。

・TA が学生の推薦文を書いてもいいというのは驚きだった。

・レファレンス・ファイルは学生にとって便利なサービス。もっと詳しく調べることにする。

・CDC が就職だけではなく進学もサポートしているという点。

<参考: 配布資料 “Soliciting Recommendations & Establishing a Reference File”>



<< 留学生の就職活動～Job Search Strategies for International Students～ >>

*長くなるので、

「その1」:基本編

「その2」:留学生ならではの編 に分けて紹介します。

日時: 1/20/2006, 14:30～15:30

場所: CDC 1階会議室

参加者: 20 名 (2:30 の段階では、8 名。ピークが 20 名。)

概要: アメリカでの就職について学ぶ。特に、就職先の絞り方、ネットワーキング、企業に直接
コンタクトを取る方法について教えます。

内容:

1. 「留学生も、基本的な方法は、他の学生と変わらない。」
2. 「自分を知る」から始める。
 - アメリカのジョブ・マーケットは、能力、興味関心と有用性に基づく。
 - 「自分にとって仕事とは?」、「何をしたいのか?」「仕事の環境で自分にとって大切な事」について考える。
 - 同じ方法で就職活動をしている人はいない。
 - “What you are” “What you have”によって、その方法は決まる。
3. どのような仕事があるのかを調べる。
 - CDC のリソースをまず利用すべし。
4. 産業界について調べる
 - トレンド、将来伸びる産業、新しいマーケット、評判、競合企業、地理
5. 企業について調べる
 - 歴史、企業内教育、昇進方法、製品やサービス、財政状況について
 - ウェブサイトや卒業生を通して知る。
6. 自分に合う企業はどこかを考える。(Marketing Yourself)
 - 採用側は、あなたがその企業にとって役に立つかどうかを見ている。
7. 学生はどのように仕事を探すのか。(CDC 調べ)
 - 40%がネットワーキングによって仕事を得ている。
 - CDC Job postings (11%)

- Other Internet Job posting sites (4%)
- Contact Organizations Directly (7%)
- Job Fairs (10%)
- On-campus Recruiting (14%)
- Networking (Alumni, Faculty, Classmates, Family, Friends (40%))
- その他 (14%)

8. 雇用需要の 8 割は公になっていない。

- ポストに空が出た時、まず社員に「適当な人がいないか」を聞いて人を探す場合が 8 割
- 残りの 2 割が就職市場に出る。

9. つまり、ネットワーキングは非常に大事である。

- ネットワーキングとは、「いいお店知らない？」と聞くように、「いい仕事ない？」と周りの人に聞くこと。
- 「私はこういう仕事を探している」とロコミで広げること。

10. 実際にネットワーキングをやってみよう。

- 隣の人とネットワーキングしてみる。(5 分間)

渡利も隣の中国出身の彼に「私は～という仕事を探しているんだけど、何か知ってる？」と聞いてみました。彼は、友人がスタンフォード大学で働いているらしく、「日本語と専門のアドバンテージを活かせる仕事をその友人が知っているかもしれない。」とっていました。ネットワーキングの威力を少し実感。私は、彼が日本で仕事をしたいと考えていたら、適当な人を探してみると言いました。なかなか面白い時間でした。周りの人と仲良くなる事で、セミナーへの集中力が増すような気がしました。

11. ネットワークを築く方法

- サークルやクラスメイト、教員、アドバイザー、家族、コミュニティー
 - スタンフォード・キャリア・ネットワーク (www.stanfordalumni.org/career)
- 卒業生 8000 人が登録し、あなたのコンタクトを待っている。

12. 企業に直接コンタクトを取る。

- 社員募集をしていなくても、コンタクトを取ってみれば仕事が見つかる事がある。
- とりあえず、レジュメとカバーレターを送ってみよう。

13. ジョブ・リストに登録する

14. CDC の就職活動リソース

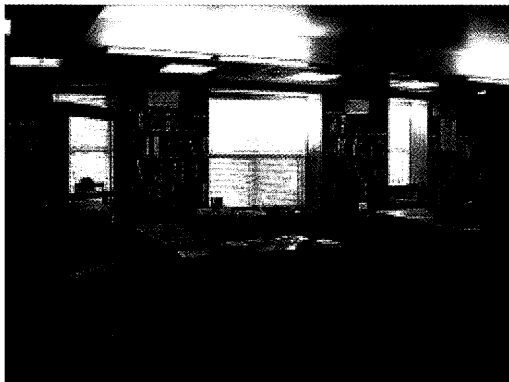
- カウンセリング
- カーディナル・キャリアズ(ウェブサイト: <http://cdc-secure.stanford.edu/login/>)
- 募集情報の掲載、配信
- カーディナル・リクルーティング

キャンパス内での就職面接で、約 250 の企業が毎年参加。

- キャリア・フェア
- キャンパス内での就職説明会(規模によって、25 から 300 の企業が参加)
- キャリア・リソース・センター
- CDC 内にある資料室
- CDC のリンク・データベース(ウェブサイト:<http://cardinalcareers.stanford.edu/links/>)

<参考:Career Development Center/ Stanford University.

"Job Search Strategies for International Students." 配布資料 >



<写真:キャリア・リソース・センター／CDC>

<<留学生の就職活動～Job Search Strategies for International Students～ その1>>

1. 留学生のアドバンテージ

- ー複数の言語が使えること
- ー母国に詳しい事
- ーグローバルな視点

2. 留学生のデスアドバンテージ

- ー英語や文化習慣の違いから起こるコミュニケーションのバリア
- ービザ取得者の差別(企業にとっては、手間と金がかかるから。)
- ーアメリカにおけるネットワークが未発達

3. 就労ビザの取得方法

- ー毎年 4 月に就労ビザ(H-1B)申請の申請が開始
58,200 件の就労ビザが交付される
その内、25,000 は、アメリカの大学を卒業した人のための枠
- ー10 月に企業に交付

<参考:Career Development Center/ Stanford University.

"Job Search Strategies for International Students." 配布資料 >

<<キャリア・カウンセリング調査>>

日時:01/23/06 13:30~14:30

参加者:渡利

キャリア・カウンセラー:クリスティン(女性)

場所:CDC クリスティンのオフィス(個室)

概要:キャリア・カウンセリングがどのように行われているのかを中心に
CDC のサービスやアメリカの就職活動の状況等について話をした。

<キャリア・カウンセリングの3つのステップ>

キャリア・カウンセリングは

- ・自分を知る事
 - ・どのような選択が自分にはありうるのかを知る事
 - ・自分の目標を立て、仕事を探す事
- の3つの事を行うよう促すことを目指している。

キャリア・カウンセリングを利用する学生の多くは、

「4 年生になって、仕事を探さないと行けないのだけど、どうしたらいいのか？」

という土壇場になって、相談に来るそうだ。

そのような事態を防ぐために、1 年生の段階で、CDC の諸サービスを利用するよう、働きかけている。

<15 分コース/45 分コース>

キャリア・カウンセリングは 15 分コースと 45 分コースがある。

学生は、カウンセリングの申し込みをする際に、どちらかを選ぶ事になっている。

15 分コースはレジュメやカバー・レターを添削して欲しい学生が、

45 分コースは進路の相談や、職業の探し方について質問がある学生が主に利用するようだ。

<予約方法>

CDC の受付に電話するか、直接訪れるかして申し込みをする。

現在は利用者が多いため、2 週間先まで予定が埋っている。

2 週間待ちである。

<利用者>

私が話を伺った、キャリア・カウンセラーのクリスティンさんの場合、

秋クォーター(スタンフォード大学は 4 学期制)には、177 人のカウンセリングを行ったそうだ。

その内、5 名が卒業生で、残りが在学生。

1 年生—8 人

2 年生—13 人

3 年生—18 人

4 年生—64 人

修士課程学生—43 人

博士課程学生—17 人

ポスドク—?(人数、見落とし)

日本の場合と比べた時、

- ・利用者が 4 年生に多い事
- ・1 年生からの利用がある事

・修士課程の学生の利用も多い事が特徴として挙げられる。

アメリカの就職活動は、3年生と4年生の間の夏休みを利用してインターンシップを行い、その後、1月くらいから本格的に始まる。

インターンシップの結果、企業に内定をもらう学生も多い。

企業は、ポストが空いたら、そこにふさわしい人を雇用するという方法を取るので、1年以上前から内定を出すということはない。

「会社の業績は変わりうるから、早くに学生に内定を出した場合、それを取り消さざるを得ない事にもなりうるから。」とも言っていた。

専攻別で利用者を見た場合、Humanities & Sciences の専攻の学生が多い。

それに比べて、Engineering の学生の利用者は少ないようだ。

<キャリア・アセスメント>

キャリア・カウンセラーは大学の心理学の修士以上の学位を持っている人がほとんど。

キャリア・アセスメントとは、学生が自分を知る手段として利用されている。

・Strong Interest Inventory(SII) and Cambell Interest and Skill Survey(CISS)

・The Campbell Interest and Skill Survey

・Myers-Briggs Type Indicator (MBTI)

・Skill Scan

・Values Cards

私は、数日後に「MBTI」を受ける予定で、2月7日には「Skill Scan」と「Values Cards」をやります。

ちなみに、MBTIの簡単なテストを行ってみた所、私の性格は「INTJ」と出ました。

女性には極めて稀な性格だということです。

<キャリア・カウンセラー>

キャリア・カウンセラーは大学の心理学の修士以上の学位を持っている人がほとんど。

彼女らの仕事は、心理学のコミュニケーション・スキルを利用して、学生のキャリア・カウンセリングを行っている。

その他、ワークショップ等のイベントも行っている。

先日紹介した、「留学生の就職活動」のワークショップを行ったのもクリスティンである。

彼女の仕事の内、週に15時間前後がカウンセリングにあてられる。

秋学期には、10時間／週。

現在では、20時間／週。

蛇足だが、クリスティンも「INTJ」。性格が合う。

<キャリア・デザインの授業>

「スタンフォード大学では、キャリア・デザインの授業を行っているのか」と聞いた所、「できればいいのだけど、スタンフォード大学の授業は Ph.D.を持ったファカルティのアカデミックな授業しか認められていないので、行うことができない。

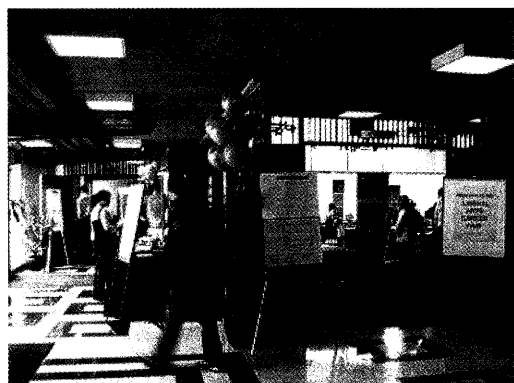
ただ、他大学ではキャリア・デザインの授業が行われている事が多い。」という返事をもらった。さらに、「そのために、学生にキャリア・デザインの事を知ってもらう機会がないので、学生に CDC の事を知ってもらうために、できることは全てやっている。

その甲斐あって、今年の1年生対象の CDC のオープン・ハウスには400人の1年生に集まってもらった。」とのこと。

残念ながら、この CDC のオープン・ハウスの日に、渡利は風邪を引いてしまって参加することができませんでした。ご報告できず、申し訳ありません。



1



2



3



4

まずは写真のみ掲載します。



キャリア・フェアの受付

CDC のスタッフと学生アルバイト数名が受付をしています。CDC の活動に限らず、スタンフォード大学のセンターは全て学生をフル活用しています。それが、少ないスタッフの数であれだけのサービスを行える理由なのではないかと思います。

キャリア・フェアの実施時間帯は、正午から 16 時まで。会場は、Tresidder Oak Lounges といって、東北大学でいえば第一食堂のような大きな食堂のある建物です。

そのため、昼食を食べ終わった学生(1 年生から 4 年生まで)がふらっと立ち寄っているという印象を受けました。もちろん、みんなラフな服装です。

早期のキャリアデザインを促すためには、こうして大学 1 年生もアクセスが可能な雰囲気のカリヤ・フェアを開く事も効果的なのではないかと思いました。



企業紹介ブース

各企業ブースは、会議室にあるようなテーブル一つ分で、一企業につき 1 名から 2 名のリクルーターが参加しています。就職だけではなく、インターンシップを募集している事もあります。公的機関もインターンシップを募集しています。

日本人の感覚からすると、公的機関がキャリアフェアに参加するのは違和感を感じませんか？ 公務員試験がないからでしょうか。

Public Service Career Fair に参加した機関は 計 51
主に、行政機関、慈善団体(非営利機関)、教育機関(多い順)



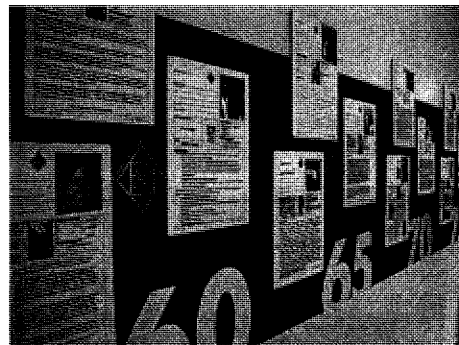
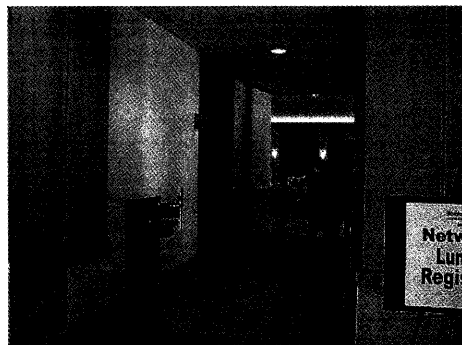
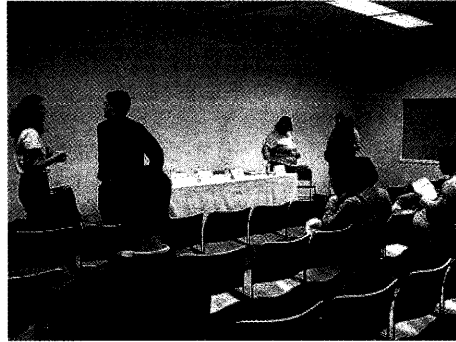
ブースを見る渡利

会場を歩いていると、“Hello” “How are you?”と話しかけられます。お菓子や文房具をくれたりもします。それにつられた訳ではありませんが、どのようなやりとりを学生とするのだろうと興味を持って、各ブースで話を聞いてきました。

面白いのは、役職で募集をしている事です。そして、一括採用をしない。

“We are looking for a director.” (単数形に注目)

一人のディレクターを募集するために、ブースを出している企業もありました。



キャリア・ウィーク スペシャルイベント

<<キャリア・カンファレンス Career Conference>>

日時: 2月4日(土)

場所: McCaw Hall - Francis C. Arrillaga Alumni Center (スタンフォード大学同窓会センター)

写真1にある立派な建物が会場です。外も中も新しく、重厚なつくりの素敵な建物でした。

概要: 様々な分野に勤める卒業生が、自分たちの仕事について在學生に話をするというもの。

①学生課(Dean of Student Affairs)、②CDC、③同窓会の共催です。

スケジュール:

9:00am - 10:00am Alumni and Student Check-in

Continental Breakfast

10:00am - 11:00am Career Field Panels

- Business/ Start-ups/ Entrepreneurship

- Career in Broadcasting, Newspapers, Magazines

- Career in Law

- Career in Fashion

- Careers in Teaching

- How to get the most of your Mentoring Relationship

- International Development Careers

- Sales, Marketing, Real Estate

11:30am - 12:30pm Career Field Panels

- Consulting/Management Leadership Programs

- Beyond classroom teaching: careers in education
- International Business
- The Post Doc Option: Is it for you?
- Environment Careers
- Leadership in Local, State and Federal Government
- Careers in Entertainment

11:30am - 2:30pm Networking Luncheon

卒業生と在学生在が共に昼食を食べて、ネットワークを作る。3時間かけています！！

3:00pm - 4:00pm Career Field Panels

- Health Related Careers/ Health Allied
- Business Finance/ Investment Banking
- Pre-Med "First Year Out"
- Higher Education: Finding Non Academic Jobs
- Women in Leadership
- Social Entrepreneurship
- Careers in Advertising and Public Relations
- From backpack to brief case: Life after Stanford

4:00pm - 5:00pm Keynote Speaker

Reception and Closing Remarks

私が参加したのは、11:30 から 12:30 までに行われた“The Post Doc Option: Is it for you?”と題したパネルです。

以下、そのパネルの概要です。二枚目の写真は、その時の様子(始まる前)です。

参加者: 18 名 (Ph.D.学生 17 名、学士課程 1 年生 1 名)大半が自然科学の学生。

パネリスト: 4 名 (3 名: 自然科学、1 名: 社会科学) 司会 1 名

渡利ポイントは以下の 2 点に焦点を当てたいと思います。

- ☆☆ アメリカのポスドクと日本のポスドクとの違い
- ☆☆ キャリア形成に対する真剣な考え方(キャリア・アップのための転職)

しかし、アメリカの就職形態や雇用形態に詳しくない上、日本においても、社会科学に分野を限ったキャリアのあり方しか知らないのので、興味を持った点のみの列挙で失礼します。
(分かり次第報告していきます。)

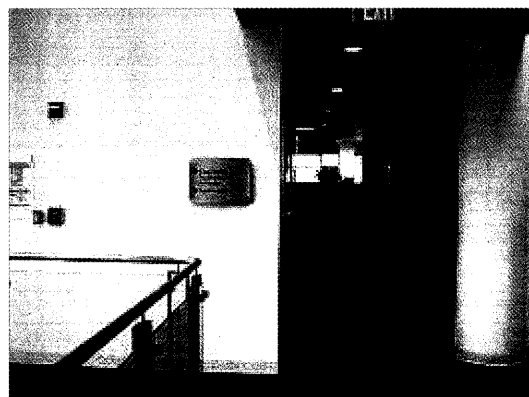
- ・ポスドクに必要な心構えとは？、との問いに対して
「自分が、ポスドクの後、Academia(大学教員)の道に進みたいのか、Industry(産業)に進みたいのかを決めておく事だ。」とパネリストが答えたこと。ポスドクとは、大学教員になりたい学生のためのポストだと考えていたので、意外だった。
- ・ポスドク時の「就職」先について、自分の専門分野とは違う民間企業を選んでいるパネリストがいた事。その人は Applied Science の分野の人だったのだが、ポスドク時は Business を経験。それが、自分のキャリアをより良いものにするのであれば、異分野でも経験すべきという、「キャリア開拓」の精神に驚く。
- ・その後の調査により、このようなポスドクの選択が増えたのは、ここ 5 年の傾向なのだということが判明。ポスドクの学生が増えたため、従来の大学や研究機関だけでは受け入れが難しくなったため、企業において研究をする学生が増えたのだという。
企業でポスドクをするのは、Applied Science の学生で、大学院生の時代から、企業との共同研究に携わっている学生が多いのだという。確かに、企業にとっても、ポスドクの学生にとっても、それは、それほど違和感のない事だろう。産学連携が進む日本においても、同様の傾向は見られるのだろうか。



1



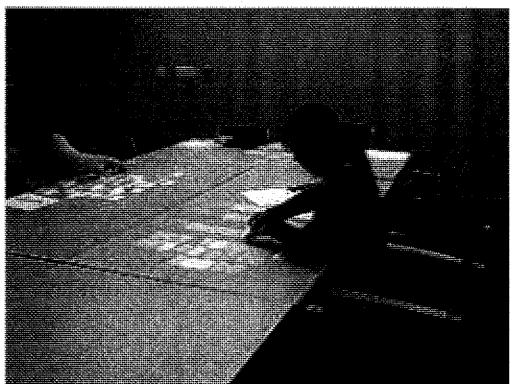
2



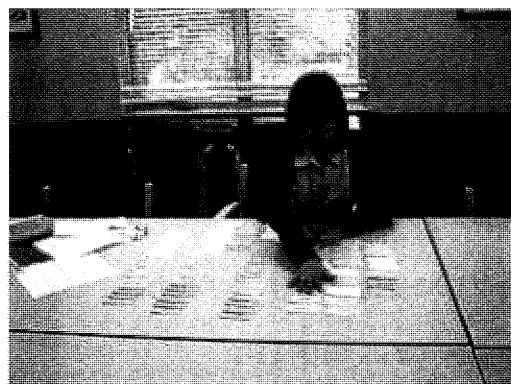
3

今回の海外視察で訪問される予定の、カウンセリング担当の部局の紹介です。
この建物の2階の左側にカウンセリング部局が入っています。
非常にきれいで、開放的な雰囲気を持つ建物です。

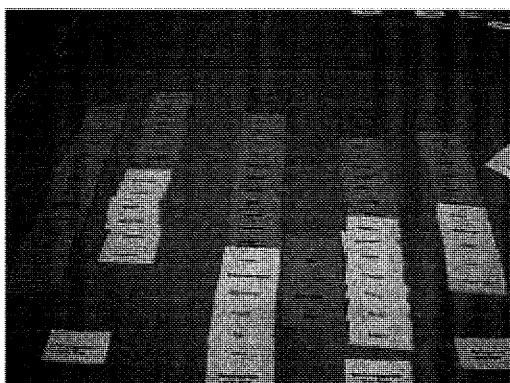
CDCと非常に近い場所にあります。徒歩で数分です。



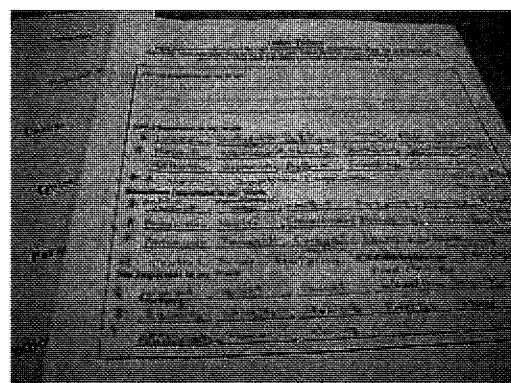
1



2



3



4

Values Workshop

2006 年 2 月 16 日 16:00～17:15

概要: Values Card Set というカードを使って、仕事において自分が重きを置く価値が何なのかを知るワークショップ。

参加者: 3名(博士課程の大学院生)+渡利

* 内訳: 博士課程前期 2 年の女性 2 名

博士課程後期を修了した男性 1 名(子供連れ)

* 価値などの抽象的なテーマを扱ったワークショップやセミナーの参加者のほとんどが大学院生であるという。

CDC スタッフ: 女性(カウンセラー)一名

内容:

(1) Skills Cards の紹介

「あなたは仕事において何が重要だと思いますか？」

それを知るための手助けを、Values Cards はしてくれます。

Values Cards は、Work relationships(赤), Work settings(黄), Work Content(緑) Core Values(青)の四つの領域における価値が書かれたカード(50 枚程度)を、

- ①私の仕事において最重要である
- ②私の仕事において重要である事が多い
- ③私の仕事において時々重要
- ④私の仕事においては重要ではない

の4つに分ける作業を通して、自分が仕事に何を求めているのかが明確に分かるようになるというものです。

(2) Skills Cards での作業

最初の 2 枚の写真は、渡利がカードを分けている様子です。

3 枚目の写真は、カードを4つに分けた結果です。

私は「①私の仕事において最重要である」としたカードが 20 枚程度ありました。その中からトップ10を決めます。

私のトップ10の価値は以下の通りでした。

1. Excitement (Work Settings)
2. Challenge (Work Content)
3. Creativity (Work Content)
4. Autonomy (Work Content)
5. Freedom to shape own work (Work Content)
6. Passion (Core Values)
7. Personal Growth (Core Values)
8. Family (Core Values)
9. Excellence (Work Settings)
10. Learning (Work Content)

印象的だったのが、子どもを連れた男性のトップ2の価値が「家族」と「高収入」であったことです。

CDC のスタッフの方もおっしゃっていましたが、仕事の価値というものは置かれている状況や、それまでの経験によって大きく変化するということです。

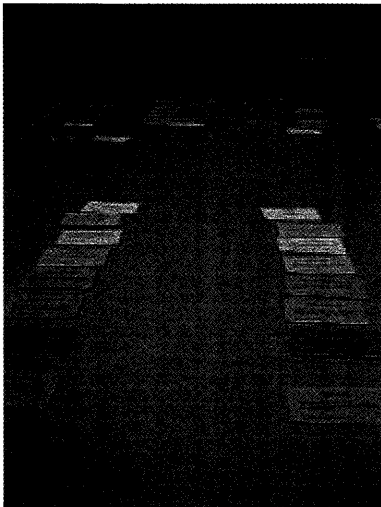
その変化を知る事も楽しいと思いませんか。

(3) Skills Cards のキャリア・デザインへの活かし方

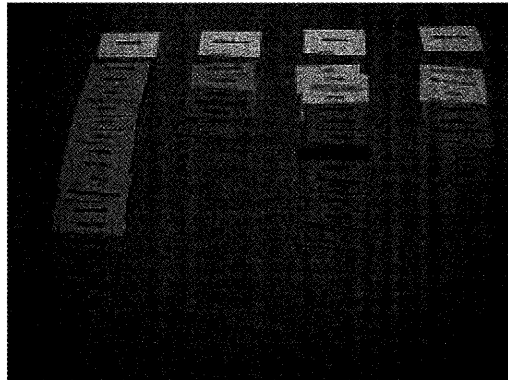
就職先が「Mission Statement」を持ち、それに従って社員を採用しているように、就職活動をする学生も、自分の「Mission Statement」を持ち、それにしたがって、自分の価値に合った仕事を探す事が大事。

Skills Cardによって、自分にとって重要な価値が分かった今、就職先の Mission Statement や仕事内容が、自分が重視する価値と合っているのかを照合してみよう。

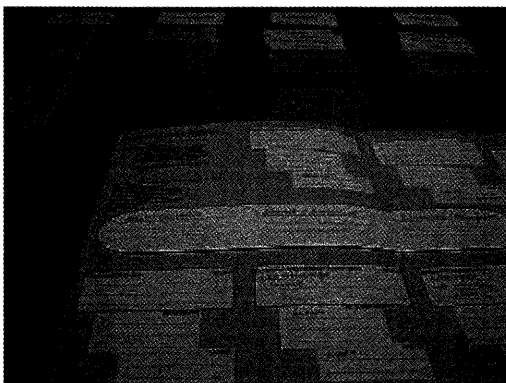
例えば、 1. Excitement 2. Challenge 3. Creativity を重要な価値と考える渡利は、それに合った仕事を見つけるとよい、と考えられます。



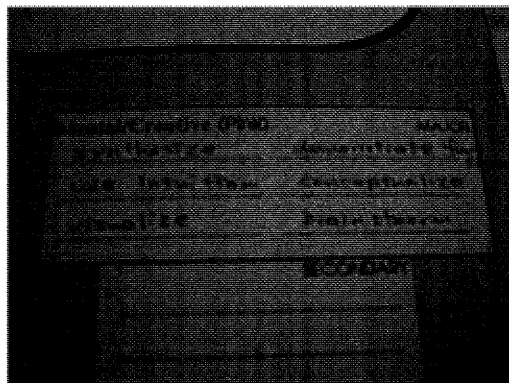
1



2



3



4

2006 年 2 月 16 日 17:15~18:30

まずは写真のみ掲載します。

Career Mastery Series: Helping Master's Students Get Ahead

2006/2/21(火) 午前 5:52

2006 年 2 月 16 日 12 時から実施予定の

Career Mastery Series: Helping Master's Students Get Ahead

でしたが、全 3 回のシリーズの第二回目のセミナーであるにも関わらず実施されませんでした。

CDC のほかのスタッフにも聞いたのですが、その時は彼女たちにも理由は分かりませんでした。不思議です。

午前中の仕事を途中で切り上げて、寒い中、向かった CDC でこのような事が起きて悲しかったです。

しかし、こういう事が起きること自体は、非常に興味深い事なので、それだけでも行った甲斐がありました。

キャンセルの理由が分かり次第、報告をしたいと思います。

東北大学「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト

F D 参加メンバー 研修成果中間報告

研 修 成 果 中 間 報 告

東北大学高等教育開発推進センター

関内 隆

3年計画事業の本プロジェクト初年度を終えるに当たり、ここで、プロジェクトリーダーとしての自己点検と総括を簡潔に行っておきたい。

プロジェクトの目的として、「東北大学における教育の改善と学習支援システムの創出」を掲げ、スタンフォード大学からの支援協力のもとに東北地区の大学教員と連携しつつ新たな教授学習開発機能の充実化を図ることを目指して出発した。プロジェクトは「ISTU活用による教育の改善・高度化」と「ライフデザイン支援システムの構築」の2つの柱を掲げ、事業を遂行した。

(I) 「ISTU活用による教育の改善・高度化」

(A) 授業科目の電子コンテンツ化と授業改善

参加教員の研修期間を平成17年9月から翌年9月までの約1年間として、研修の3フェーズを以下のように掲げた。

(1) 授業内容・方法の自己点検と課題把握 「授業相互参観研修」

(2) 課題の解決と授業改善

「ネットワーク研修」「テーマ別研修」「海外特別研修」

(3) 授業改善例の全学的還元と共有化

これらのうち(1)については、授業撮影と電子コンテンツ化をもとに自己点検を継続的に実践するとともに、他教員の授業内容をウェブ上で参観する「授業相互参観研修」を実施した。但し、自己点検・相互参観システムの完成が遅れたことにより本年度の成果に不十分さが残ったということは否めない。また、相互参観を真に有益なものとするためには、各授業内容の概要やシラバスの掲載が不可欠であるとの解決すべき課題も浮上した。早急にこれらのシステム改善を行い、平成18年度4月期からの新たな授業撮影・自己点検・相互参観において、より有効な授業改善が行われる基盤を構築したいと考える。

次に、(2)については充実した成果があった。

「オンラインのネットワーク研修」では、スタンフォード大学客員研究員の中島平助教授と渡利夏子助手から毎週「プロジェクト通信」が送信され、参加メンバーに大変貴重で有益な情報がもたらされた。しかし受信側からの反応はなお少なく、インタラクティブな情報交換をさらに強化することが今後の課題であろう。これらの実践については、中島平・渡利夏子「メーリングリストを活用した教育改善の支援－5分間ファカルティ・ディベロップメントー」として、東北大学高等教育開発推進センター紀要第1号に

掲載予定である。

「テーマ別研修」では谷口和也助教授と杉浦謙介助教授を講師として、研修を実施した。参加者アンケート結果に現れているようにいずれも好評で、参加者の教育改善に向けた貴重な話題提供となった。なお、ここで取り上げられた eラーニングシステムの WebOCM については、管理運用面で全学的な利用拡大を図るための措置をとることとなった。

スタンフォード大学で3月に実施された「海外特別研修」には、2グループに延べ16名が参加した。教授学習センター（CTL）スタッフによる授業コースデザインのワークショップを中心に、授業見学、日本人研究者との交流なども含めて先進的事例に学ぶ充実した研修を実施した。海外研修という貴重な体験の中で参加教員に有益な成果をもたらしたことは間違いないが、各教員のニーズにどれほどマッチしたかは今後の検証を待たなければならず、次回にはこれらを踏まえた研修企画が必要であると考えている。なお、米国のFD実施状況に関わる調査の成果として、渡利夏子「教員の自発的な教育改善を支援するFDの方法論に関する調査研究—スタンフォード大学 Center for Teaching and Learning の事例を中心に—」が東北大学高等教育開発推進センター紀要第1号に掲載予定である。

なお、上記（3）については、平成18年4月以降の授業撮影等を踏まえて、9月にその成果を確実なものにするよう努めたいと考えている。

（B）国際交流を活かした先端的教育の開発

医学系研究科の石井誠一助教授を中心としたグループがスタンフォード大学研究者と連携しつつ医学教育の高度化に向けた取り組みを開始した。また、経済学研究科の西澤昭夫教授、同研究科の照井伸彦教授が平成18年度の外国研究者招聘の計画準備を着々と進めている。

（Ⅱ）「ライフデザイン支援システムの構築」

（A）ライフデザイン支援システムの設計

学生生活に関わる学生アンケートを実施し、ライフデザイン支援の設計の基礎となる実態調査を行った。国内大学の視察、スタンフォード大学キャリア開発センター（CDC）での海外研修、米国における大学の先進的取り組みの視察を行い、ライフデザイン支援システムを設計するための調査を実施した。

（B）ライフデザイン教育の構築とSD推進

平成18年開講の「キャリア・ライフデザイン教育」授業科目の企画準備を行った。また、職員研修SDとして20数名が参加した国内大学視察研修を実施し、特色ある教育改善に取り組む他大学の事例を参考に、職員の視点から本学における教育・学生支援の改善提言を行う報告会を実施した。

研修成果中間報告

東北大学大学院教育情報学研究部

岩崎 信

はじめに

このプロジェクトの（１）研修に１研修参加者としての立場からと（２）取り組みについていわゆるコアメンバーとして、その立ち上げから関わってきたプロジェクト全体の取り組みについて個人的に触れたいとおもいます。

１ 事前研修（2005年8月2日）

この研修は正式のものではなく、このプロジェクトを開始する前にコアメンバーを中心としての研修の練習を行いました。ただし、内容はしっかりと用意をしました。研修受講者は、大学院教育情報学研究部・教育部のFD研修を兼たものとして、助手を含む教員全員でした。

ここでは、二つの講義がありました。一つは、教育実践における授業改善—研修事後報告—

東北大学教育学研究科の水原先生の全学教育展開科目人文科学社会科学「教育学」（私たちの学校を科学的に分析する）という授業の紹介でした。「教養として、教育学は如何にあるべきか」がこの授業のテーマです。いわゆる教育の非専門家に対しての「教育学」を模索した結果、「教育」とか「学校」を題材に学生にいろいろ考え討論させる、いわゆるアクティブラーニングを多く取り入れた内容になっていました（と解釈しました）。しかも、この授業では、授業設計や実践に自分のところの院生をTA（学生が工夫）、として少なくない数を参加させていることと、彼らに授業司会や運営をさせ感想を貰い、それをすぐ次の授業に活かしていることが新鮮でした。このやり方は、筆者の新しい担当科目「科学と情報」で参考にしました。

二つ目は、岩手県立大学の鈴木克明先生のインストラクショナル・デザインの講義でした。「インストラクショナル・デザイン入門」、「経験則を学問的に裏付ける体系的アプローチ」、「授業設計学（インストラクショナル・デザイン）の援用」、「ARCSモデル」、「ガニエの9教授事象」、「質疑」という構成でした。辛口ながら、理路整然とした説明で、さすがはガニエのお弟子さんのお一人と思いました。詳しくは、ISTUの事前研修コンテンツを閲覧ください。筆者自身はガニエ、ケラーなどの最新の著書でゼミをやっていましたが、本の解釈とは異なり、大いに刺激を受けました。基本的には、筆者が実践しようとしている全学教育新規基幹科目「科学と情報」の授業を、上記の2つの講義を参考に設計した次第です。

テーマ別研修

二つのテーマ別研修（谷口教育学研究科助教授のカリキュラム設計法、杉浦国際文化研究科助教授のドイツ語eラーニング実践）と事前研修（三石教育情報学研究部・教育部助教授のシラバス紹介と分析）は、大変参考になりました。各先生方に敬意を表します。三石助教授のお話は授業全体でのサイクルでの改善の他、実際に意識、無意識的にやっている授業中の様々の改善を入れたダブルループメソッドは良い指摘でした。筆者の場合にはTAを取り入れながら実践したいと思っています。

自己点検・授業相互参観研修

講義ビデオ映像をサーバに載せ、インターネットを通して自分で閲覧する自己点検と許された範囲で他人が閲覧する相互研修は、まだ始まったばかりでなんとも言えませんが、自分の講義といえども長々と閲覧することは、改めて忙しい教員には難事であることがわかりました。まして、他人の授業の閲覧はなおさらです。改善案としては、1～3回に的を絞り短時間に編集して見せることが一つの案では。シラバスや当該授業の背景、状況、狙い、設計意図などを添付してもらうことが必要と考えられます。

スタンフォード大学での海外研修について

Stanford CTL を中心とした研修には私は事情があり、受講しませんでした。ただし、既に、4年前になりますますが別の視察でこの大学を含めて西海岸の数大学の教育事情を訪問調査し、その先進性には大変印象深いものがありました。今回は中島・渡利両現地教員のしっかりした準備と当該大学の各先生の講義や研修資料の良さと熱心さが成功の鍵という印象があります。

配布資料の厚いバインダーが私にも届きました。その中に、Teaching at Stanford: An Introductory Handbook for Faculty, Academic Staff, and Teaching Assistants という本があります。実は、CTL の HP に入ると誰でも入手でき、これまで何度も目を通して、参考にしております。学長の John L. Hennessy 氏は冒頭の挨拶に以下のように述べています。

Since its founding a little more than a century ago, Stanford University has become one of the world's outstanding educational institutions. As your colleague and the president of Stanford, I am confident that you will continue that tradition of excellence. In pursuit of that goal, I encourage you to explore and expand the relationship between your teaching and your research. (中略) Stanford is committed to being a great research and teaching university. We believe it is not only possible but vital that we give teaching as much emphasis and support as we give research. As a Stanford faculty member, academic staff member, or teaching assistant, you are already recognized for your scholarship in your field. We ask that you be a leader in your teaching as well.

このメッセージは、まさに世界の研究中心大学を目指しながら、目下これまでになく教

育に強い力を注ごうとしている東北大学の教員に相応しいものだと思います。また、今回研修で講師をされた、Marincovich 女史 (Associate Vice Provost for Undergraduate Education and Director, CTL) も本で以下のように述べています。 “We at CTL maintain that, contrary to popular belief, teachers are made, not born. (中略) While teaching is certainly an art, it also is a set of skills that can be learned, just as writing or public speaking are abilities that can be developed. This means that accomplished teachers can always improve, and every new teacher has the chance to be great. At the last, this means that by reading about the theories and approaches we discuss in this book, you can learn how to do a very good job in the classroom.”

CTL の資料等で述べていることは特別のことではなく概ねインストラクショナル・デザイン手法と共通しています。ただ、やはり一つの大学の中で長年の実践経験から導かれた、それゆえに、その大学に合った理論、方法、教訓、コツなどの資料やアドバイスは大変意味があると思います。CTL のこうした FD 活動や経験、蓄積のレベルの高さを考慮して、本プロジェクトの中で CTL との連携を皆で提案し、実現できたのは良かったと思います。話は一寸早いですが、このプロジェクト終了後も、継続的な連携プログラムを何らかの形で残せればと思います。東北大学でも、こうした経験を生かして CTL と似たような、しかし東北大学独自で、職員も巻き込んで他大学の先進例となるような FD センターが近い将来できることを希望します。これがコアメンバーとしての正直な感想です。

担当授業のシラバスへの反映

2006年4月から開講する筆者のISTUを活用する新しい基礎教育担当科目「科学と情報」では、これまでのいろいろな研修内容や資料を参考に設計をしております。海外研修資料を参考にし特に改訂をすることはありません。ダブルループ、トリプルループ方式でやっていこうと思っています。

研 修 成 果 中 間 報 告

東北大学大学院教育情報学研究部

三 石 大

1. 2005 年度の取り組みの概要

「国際連携を活かした高等教育システムの開発」における取り組みの中で、2005 年度は情報通信技術の活用と国際連携を活かした授業の高度化に関する活動を実施した。ここでは、高等教育における授業の高度化に向け、(1) 国内での事前研修およびテーマ別研修による、授業高度化のための研修会の開催、(2) 実際に実施した授業のビデオ記録の情報通信技術を利用したオンライン上での自己点検・相互参観、およびこれらの実施結果を踏まえた上で、(3) スタンフォード大学の協力による海外研修を企画し、実施するとともに、三石もこれに参加した。

2. 各研修の実施結果

2005 年度における事前研修およびテーマ別研修、自己点検・相互参観、ならびにスタンフォード大学での海外研修では、東北大学の各部局より多数のご参加を頂いたとともに、東北地域の 3 つの大学からもご参加頂き、それぞれの視点からご意見をいただけるなど、貴重な機会とすることができたと考えられる。以下、各取り組み内容と、その実施結果を示す。

2.1 事前研修およびテーマ別研修

事前研修では、近年の e ラーニングの普及とともに注目されているインストラクショナルデザインの概要、とりわけインストラクショナルデザインで提唱されている系統的な教授設計手法を知ることができ、今後の授業設計、実施、評価における取り組みの参考とすることができた。またテーマ別研修では、本年度は総合的なカリキュラムデザインの必要性、ならびに情報技術を活用した語学研修事例を知ることができた。

しかしながら本年度におけるこれらの研修会は 4 回のみであり、そのため、若干、具体性、多様性に欠く部分があったともいえる。今後、これらの研修内容をもとに、より具体的な手法や、授業内容に応じた授業設計手法を学ぶことができる研修会を企画し、実施することが必要と言える。

2.2 自己点検・相互参観

自己点検・相互参観研修では、自身の授業をビデオ記録し確認するとともに、他教員の授業の参照、ならびに他教員による授業の確認をしていただき、意見交換を行なった。

自身の授業ビデオの確認による自己点検では、実施した事業を後から確認し、その総括

的評価を行なうことで、授業中に気づいていた問題点の新たな視点からの再確認を行なえたとともに、授業実施時には気づくことができない部分の発見を行なえた。相互参観研修では、先ず、他者の授業記録を確認することにより、個々の授業内容に応じた様々な創意工夫、ならびにこれに基づく実施方法を確認することができただけでなく、そのための各教員の熱意をも感じることができたと考えられる。また、相互参観研修における自身の授業の他教員からの確認では、自分だけでは気づくことができなかった問題を確認していただくことができただけでなく、自身が感じていた不具合を他者からも確認していただき、その問題を明確化できた上、これに対する具体的な解決案などをご提案いただくことができ、今後の授業改善に向けた大きな参考とすることができた。

これらの結果をもとに、教員間での意見交換を行なった結果、このように授業を記録し、自己点検・相互参観を行なうことで、今後の授業改善に大いに役立てることができることを確認した。しかしながら、その確認には大きな労力が要されること、特に、ビデオ記録された授業をただ観るだけでは確認すべき項目が漠然としており、授業の実施方法に関する一般的な利点、欠点は確認できるものの、授業内容ならびにその内容に基づく実施方法における利点、欠点を確認することが難しく、効果的ではない部分も多いことが確認された。今後、自己点検・相互参観による授業の改善、高度化のためには、授業記録全体を確認するとともに、確認すべき項目を明確にし、効率的、効果的な確認が可能な手法を検討する必要があるといえる。

2.3 スタンフォード大学での海外研修

本年度は、3月5日から11日、ならびに12日から18日の2グループに別れ、スタンフォード大学を訪問し、海外研修を実施し、三石は両グループに参加した。この海外研修では、主に、CTL(Center for Teaching and Learning) がスタンフォード大学の教員ならびにTA 向けに実施するワークショップをもとに構成したワークショップを受講するとともに、スタンフォード大学で実施する授業の見学、ならびに現地教員との意見交換を行なった。

CTL の協力によるワークショップでは、授業設計、実施、評価手法に関して学ぶとともに、情報技術を活用した教育手法の実例を学ぶことができた。授業設計、実施、評価手法では、授業目標と内容の明確化のための具体的な手法や、学生の積極的な授業参加を促すアクティブラーニングのための手法、また単なる成績評価だけに終わらない、次の教育活動に活かすための学習評価手法を学ぶことができた。また、情報技術の活用に関しては、最先端の情報技術を取り入れた教育環境の紹介と、その活用手法と課題を学ぶことができた。これらの教育手法や教育環境一部は、日本の大学への導入が試み始められているが、その取り組みはまだ始められたばかりであり具体的な手法や効果が明らかにされておらず、このような先進的な取り組みの具体的な手法を知ることができたことは、今後の高等教育の実施方法に大いに参考とすることができるものと考えられる。

スタンフォード大学の授業見学、ならびに現地教員との意見交換では、具体的な授業内

容を拝見させていただくとともに、これらに対する教員の取り組みの生の声を聞かせていただくことができた。ここでは、授業形式や授業への取り組み方法などの日本の大学とアメリカの大学の違いだけでなく、授業に対する学生の姿勢など共通する問題を確認することができた。ただし、今回見学させていただいた授業は講義形式の授業のみであり、理工系における演習や実験などの授業の見学、ならびに教員へのヒアリングを行なえることを希望したい。

3. 今後の取り組みに向けて

本年度は、当プロジェクトの初年度であり、前半は研修内容等の具体的な企画・立案とその体制の準備を行ない、その上で後半より具体的な活動の実施を開始しており、今回の活動計画では、先ず、最初の半年間で自身らの授業を確認し、その後の半年間で、その高度化を行なうことを予定していた。その意味で本年度終了時点では、まさに最初の取り組みの中間地点にあり、これまでの活動を今後活かすことが求められる。

このような観点から本年度の活動を振り返ると、一般に、高等教育機関における教育に関するFDと呼ばれる活動では一大学内での研修会などの活動が多いことに対し、複数の大学の教員が参加し、お互いの授業を確認し、積極的な情報技術の活用を取り入れ、さらには国外の大学の授業を見学し、研修会に参加するなど、これまでにない新しい取り組みを実施しており、その中から得るものも多く、今後の高度化に向けて大いに活用できるものと思われる。

しかしながら、一般に教育内容および手法は、その教育内容、対象に大きく依存し、今回の参加者のニーズも大きく異なることが確認されている。また本プロジェクトではスタンフォード大学の協力により、スタンフォード大学で実施する手法を参考とさせていただいているが、アメリカと日本では、教員、学生ともその背景が異なり、スタンフォードで実施する手法をそのまま日本に導入することは難しく、日本の実際に併せた方法を検討する必要がある。今後、本年度の活動の中で明らかになった点をもとに、日本における高等教育の高度化のための共通事項、ならびに個別の教育内容の高度化におけるニーズを明らかにし、次年度以降の活動内容の更なる検討を行なっていきたい。

研 修 成 果 中 間 報 告

東北大学大学院医学系研究科

石井 誠一

国際連携プロジェクト Stanford 大学訪問報告

日程表

月日	訪問先	担当者	内容	備考
2006 年 3 月 5 日(日)	(仙台発) (Palo Alto 着)	—	(往路)	(移動)
3 月 6 日(月)	Stanford Teaching and Learning Center	Dr. Marincovich	1) Stanford 大学の歴史 2) Undergraduate 教育の特色 3) CTL の案内	第一グルー プといっしょ に行動
3 月 7 日(火)	Stanford Medical FD Center	Dr. Stratos, Dr. Skeff, Dr. Braddock,	1) Medical FD Center が提供 する FD プログラムの紹介 2) Team-Based Learning 3) Stanford Hospital 内部案内	—
3 月 8 日(水)	a) Medical Library b) Medical Media Information Technologies	Dr. Stfinger Dr. Ketchell Dr. Dev	1) Medical Library の業務 2) Information Technology を 駆使した教材の作製 3) 同、授業の運営 4) 教室のアレンジ 5) Simulator, Media を用いた 技能教育	—
3 月 9 日(木)	Carnegie Foundation	Dr. Irby (UCSF, Medical School) Dr. Iiyoshi	1) UCSF Medical School にお ける最近のカリキュラム改革 2) 同、FD プログラム 3) Carnegie 財団の教育研究 内容について	Stanford 大 学 構 内 の Carnegie Foundation を訪問
3 月 10 日(金)	(UCSF)	(Dr. Irby)	前日に変更	日程変更
3 月 11 日(土)	(San Francisco 発)	—	(復路)	(機内泊)
3 月 12 日(日)	(仙台着)	—	—	—

3 月 6 日(月) : Stanford Teaching and Learning Center

この日は、Stanford 大学訪問第1グループと一日行動をともにした。CTL を訪問し自己紹介した後、Dr. Marincovich より Stanford 大学の歴史の概略を伺った。引き続き、最近の Undergraduate Education の変革について説明を受けた。1990 年頃より、新学長の下で Undergraduate Education

の改革が推進されているとのことであった。1 年生、2 年生を著明な教授が直接教育する機会を設けており、これは米国の他の大学には見られない特色である。また、Undergraduate における Research 教育にも力を入れている。教育能力の高い教員に報償を与えたり University Fellow という称号を与えることにより、教育への意欲を高めるようにしている。

日本の医学部は6年間教育で、米国における College と Graduate School の双方の性格を持っているが、教育期間は米国ののべ 8 年間に比べて短い。そのため、Undergraduate の教育目標と Medical School の教育目標がいずれも米国に比べると曖昧であるように思える。

3 月 7 日 (火曜) : Medical FD Center 訪問

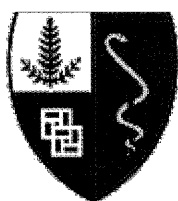
この日は医学部から参加した 3 名(石井、長崎、國島)で、Stanford FD Center for Medical Teachers を訪問した。Director の Dr. Stratos から PPT で Medical FD Center を紹介して頂いた。この Center は FD を企画・運営する指導者の養成を目的として 1986 年に設立されちょうど 20 年を経過している。この間に 6 つのプログラムが提供され合計 129 施設から 288 人が参加している。日本からは過去 5 名が受講した。本年は“Clinical Teaching Curriculum”と“Professionalism in Contemporary Curriculum”の 2 つが用意され、募集数はそれぞれ 6 名である。1 ヶ月間、同一メンバーで FD を行い、最終的には各施設に戻ってから 90-120 分の FD を 8 回シリーズで企画・運営できる能力を身に付けることが課されている。この FD Center の特色は Stanford 学内の staff development よりも educator-education (trainer-training) を目標としていることである。受講者が米国および世界各国の施設に戻って、そこで FD を開くことにより広範な教育改善効果を上げることを目指している。

FD Center の説明の他、Stanford Medical 内科の Dr. Braddock より Multi-media を用いた Team-Based Learning (TBL) について簡単な紹介があった。TBL については翌日、より具体的な説明を受ける機会を得た。また、FD Center の Co-director の Dr. Skiff より、Medical Library が提供している On line material の説明を受けた。

FD Center は当初予想していた「学内スタッフの教育能力開発」が第一の目的ではなく、「FD 指導者の養成」が主な目的であった。10 年、20 年という長い目でより大きな波及効果を見込んだものであり (spreading effects)、長期的構想であることが分かった。同時に、是非、参加してみたいという魅力を感じた。

FD Center 訪問後に、病院スタッフの方に Stanford Hospital 内を案内して頂いた。Stanford Hospital の診療圏(局所的には UCSF と競合しているが、遠方や海外からの受信者も多い)、救急外来受信者数、医学部学生数(毎年 86 名)と教育病院の関係 (Stanford Medical は 450 床と少ないので、関連病院でも臨床実習を行う)、新たに設立した Cancer Center の機能などを紹介して頂いた。

先方が用意してくれた agenda は次ページの通り。



Stanford Faculty Development Center

The Stanford Barn

700 Welch Road, Suite 310B

Palo Alto, CA 94304-1809

Ph: (650) 725-8802 • Fax: (650) 725-1675

Japanese Visitors

Dr. Seiichi Ishii	Center for Medical Education Tohoku University, Graduate School of Medicine
Dr. Nagasaki	Tohoku University, Graduate School of Medicine
Dr. Kunishima	Tohoku University, Graduate School of Medicine

SFDC Staff

Dr. Kelley Skeff	Co-Director, Stanford Faculty Development Center Program Director, Internal Medicine Residency Associate Chair for Educational Programs
Dr. Georgette Stratos	Co-Director, Stanford Faculty Development Center Director, Clinical Teaching Program
Dr. Clarence Braddock	Medical Advisor, Professionalism in Contemporary Practice Program Associate Chief, Division of GIM
Ms. Kambria Hooper	Coordinator, Professionalism in Contemporary Practice Program Evaluation Specialist, Division of General Internal Medicine

Stanford Hospital

Ms. Anne Chamberlain Project Coordinator, Guest Services [650/736-8547 or 650/387-0030]

AGENDA

March 7, 2006 Visit

10:00	Introductions	SFDC Staff -- Suite 310B, 700 Welch Rd
10:15	Orientation to the SFDC/Discussion	SFDC Staff Conference Room 106, 700 Welch Rd
12:00	Lunch	SFDC Staff California Café, Sanford Barn
1:30	Web-based clinical searching	Dr. Skeff Conference Room 106, 700 Welch Rd.
2:00	Free time to visit campus	
3:30	Hospital tour	Ms. Chamberlain Stanford Hospital & Clinics Fountain entrance of main hospital, 300 Pasteur Dr.
4:30	Tour ends	

3月8日(水曜):Medical Library 訪問

この日は医学部の3名で、昨日訪問した Dr. Stratos より紹介を受けていた Stanford Medical Library の Dr. Stringer を訪問した。3日間の医学部訪問の中で、この日に一番、東北大学の医学部教育に応用できそうなアイデアを得た。

Medical Library は知識の運営(Knowledge Management)全般を担当している。4部門に分かれており、それぞれ、Resource Management(古典的な図書館の機能)、Educational Technology, Knowledge Integration, Research and Instruction である。Library Director の Dr. Ketchell のお話では古典的図書館機能は可及的に電子情報化を進めているとのことであった。

今回の訪問では Educational Technology 部門 Director の Dr. Striger に半日に亘って説明を受けた。同部門だけで full-time staff が13人おり、さらに assistant がついて、multi-media を使った教材開発の指導、教室運営方法の指導、on line contents の配信などを担当している。医学部の講義は年間2,000〜3,000時間録画して on line で提供している。実際に授業を受けている学生がカメラを操作して撮影している。講師から特に注文がない場合は、録画したものをそのまま配信する。凝った内容のコンテンツに仕上げたい場合は、専門のスタッフが multi-media studio で機材の操作方法を指導する。

個人的には2年前から multi-media 教室を使っているという Team-Based Learning (TBL) に強い興味を覚えた。本学医学部では Problem-Based Learning を Tutorial 形式で行い、学生の学習意欲を喚起する効果を得ている。しかし、Tutorial 教育では多数の教員が同時に Tutor を担当する必要があり、多大な人的資源を要する。これに対し、グループワークのダイナミクス、学習の双方向性を保ちながら教員の負担を減らすことが可能な方法として TBL が注目されつつある。今回の訪問中に実際に TBL の授業を参観する機会にはなかったが、帰国後、Dr. Braddock に依頼して、5月中旬に授業を視察する承諾を得た。

午後は臨床技能実習専用建てられたという10室の教育棟の外観を眺め、さらに、シミュレーション教材の開発を行っている SUMMIT (Stanford University Medical Media Information Technologies)を訪れ、Director の Dr. Dev から、シミュレーション機材、アニメーションを使った危機管理教育などをご紹介頂いた。

Medical School で教育に関与する部門は FD Center, Library の4部門、SUMMIT のほかに、Office of Medical Education(カリキュラム・デザインと評価を担当)、Skills Laboratory(臨床技能教育担当)がある、とのことであった。

先方の用意してくれた agenda は次ページの通り。

Agenda: Dr. Ishii - Tohoku University Visit

Wednesday March 8th

When: 10:00 am to 10:30am

Where: Lane Medical Library – Jenn Stringer’s Office

Who: Jenn Stringer, Associate Director Education Technology

Topic: Brief Introduction to Education Technology Department

Websites: We encourage you to browse the Education Technology Department
<http://lane.stanford.edu/edtech/index.html>

When: 10:30 am to 11:15 am

Where: Lane Medical Library – Debra Ketchell’s Office

Who: Debra Ketchell, Associate Dean for Knowledge Management & Director, Lane Medical Library and Heidi Heilemann, Associate Director Research & Instruction

Topic: Knowledge Integration

Websites: D. Ketchell profile: <http://lane.stanford.edu/liaisons/ketchell.html>
H. Heilemann profile: <http://lane.stanford.edu/liaisons/heilemann.html>
Lane Medical Library Website: <http://lane.stanford.edu/index.html>

When: 11:30 am to 12:30 am

Where: Lane Medical Library – Education Technology Studio

Who: Brian Tobin, Technology Integration Specialist

Topic: Classroom Technology and Faculty Development

Websites: Classroom Info: http://lane.stanford.edu/edtech/learning_spaces/index.html
Workshops/Training: <http://lane.stanford.edu/edtech/workshops/index.html>
Content Development/support: http://lane.stanford.edu/edtech/curr_support/index.html

Additional: Please see Lane Connexion Newsletter “Spring 05” edition for information on the Ed Tech Studio and the “Fall 05” edition for information on Team Learning classroom.

When: 12:30 pm - 1:30 pm

Where: Lane Medical Library – Education Technology Studio

Who: Michelle Martinez, Online Curriculum Coordinator

Topic: Curriculum Web Portal & other online resources

Websites: Curriculum Web Portal: <http://lane.stanford.edu/edtech/portals/index.html>

When: 1:30 pm to 2:30 pm

Where: LINX – Clark Center Cafeteria

Who: Jenn Stringer

Topic: Lunch

When: 2:30 pm to 3:30 pm

Where: Medical School Office Building – X240

Who: Parvati Dev, PhD - Director, Stanford University Medical Media & Information Technology (SUMMIT)

Topics : 1. **Surgical Simulators**

Surgical simulators have the widely acknowledged benefits of allowing the introduction of anatomic variation, simulation of untoward events, and collection of surgical performance data. Just as with aircraft piloting, medical procedures require repetitive practice for maintaining competence, errors are potentially disastrous, and the ability to train using "what-if" scenarios can be invaluable. (SUMMIT has 3 that may be of interest from the list on the URL attached)
LapSim, LTS2000, Hysteroscopy
<http://havnet.stanford.edu/research/sls.html>

2. Digital Anatomy

The iAnatomy project is an interactive/international/Internet anatomy server that provides images, movies, text, live video, and interactive (Java3D) models for teaching surgeons anatomy of every piece of the human body and every surgical skill ever developed.

<http://ianatomy.stanford.edu/>

3. Media Server

A variety of media content of excellent educational value has been created at Stanford University School of Medicine over the years. Unfortunately much of this invaluable resource is likely to remain unused unless an efficient system of collecting, cataloguing and annotating the images is developed. The Media Server aims to be that system, a project that brings together rich media resources of Stanford faculty for use in local and distance teaching, research, and clinical outcome analysis.

<http://summit.stanford.edu/research/current.html>

4. Virtual 3D World for Emergency Medical Team Training

Six trauma scenarios adapted from scenarios designed for the high- fidelity Human Patient Simulator (HPS) were developed using

Atmosphere software (Adobe Systems, Inc., San Jose, CA) to create the virtual world and Poser (Curious Labs, Santa Cruz, CA) to create the avatars and patient robots. Talker (Digital Space, Australia) is used for live voice communication. Avatars, clothed in scrub garments were customized to portray the actual team members.

<http://summit.stanford.edu/research/current.html>

Websites: Parvati Dev PhD profile: <http://havnet.stanford.edu/people/parvati.html>
SUMMIT site: <http://summit.stanford.edu/>

この日は午後 2 時まで第 1 グループといっしょに行動し、その後、約 4 時間、医学部の 3 名で Stanford 構内に設立された Carnegie Foundation を訪問した。

渡米前に面会の約束を得ていた Dr. Irby を訪問した。Dr. Irby は UCSF Medical School の Office of Medical Education の Director だが、毎週、木・金は Carnegie Foundation に勤務しているとのことである。UCSF において 1998 年から 2001 年にかけて行った新カリキュラムへの移行プロセスとその評価について説明を受けた。

その後、Dr. Irby の紹介で Carnegie Foundation Senior Scholar Director の飯吉先生を訪問した。Instructional Design がご専門で、教育技法の共有に関する on line tool の開発とその反響などについて興味深いお話を伺った。飯吉先生は昨年、京都大学、名古屋大学などで講演を行っていることであった。

3 月 10 日 (金曜): UCSF 訪問

UCSF の Office of Medical Education を訪問予定であったが、先方の都合で中止になった。

研 修 成 果 中 間 報 告

東北大学病院検査部

國島 広之

【要旨】

感染制御学における医学生、専門家、医療従事者、一般社会などに対するより効果的な教授方法の開発について検討した。

自己ならびに第三者評価により、平易な表現と時間配分の重要性を認識することができ、ビデオ撮影が教授改善に役立つことが理解できた。スタンフォード大学 CTL および医学部における海外研修を行い、教育の専門家による幅広い連携により、教官の教授能力の向上ならびに IT の活用がみられた。

今後は感染制御学において、授業目標の更なる明確化および国内外の教育専門家との連携を図り、到達のために事後評価、学生の授業への参加、IT の利用により手法の改善を行い、併せてその効果について検証する。

【背景】

感染制御学は、MRSA や結核、または近年流行が懸念されている新型インフルエンザなどに対する感染対策に関する分野である。これら感染症および感染制御はすべての医療従事者に必須の知識・技能であるものの、従来から我が国においては専門家も少なく、十分な卒前・卒後教育が行なわれていないといわれている。

本プロジェクトに参加することにより、新たな専門家の育成や、学生だけでなく、すべての医療従事者、一般市民を対象とした教授方法について検討し、E-learning コンテンツの作製、感染制御教育の推進を図る。

【授業相互参観研修】

平成 17 年 11 月 19 日に「感染対策の基本ー標準予防策とマスクについてー」について、約 150 人の医療従事者を対象に一時間講義を行い、ビデオ撮影にて自己評価を行なった。今まで自らの講義などについて撮影ならびに評価をすることはなく、初めての経験であった。

感染制御学は、社会的にも関心の高い分野であるものの、学習者は教授に必要な基礎的な微生物学や感染症学についての知識は殆どない。したがって、その教授方法はあくまで平易に行なう必要があることが改めて理解できた。

終了後のアンケート調査では「難しかった」という評価はなかったものの、ビデオによる事後評価の結果、やや過大な学習内容を用意することにより、授業後半は前半部分と比較して、十分に丁寧な説明がされていないことがみられた。

質疑応答においては、複数の質問がみられたものの、講義全体の流れが知識伝達型であったため、活発な討論はみられなかった。講義の対象者が専門家であれば、より授業とともに討論に参加する形式とする必要があると考えられた。

また、授業相互参観研修における他の教授者との討論により、感染制御学においても、シラバスの重要性について検討する必要があると考えられた。

【海外研修】

平成18年3月5日～12日まで、スタンフォード大学における海外研修を行なった。CTL(The Center for Teaching and Learning)および医学部の教育支援機関を訪問した。CTL では、授業の対象者(専門家・非専門家)、到達目標およびその理由の明確化による active learning の重要性について学ぶことができた。医学部でも同様に、FD センターや医学部図書館を始めとするさまざまな部門に多くの教育専門家がおり、医学の急速な進歩に伴う医学教育の膨大化のなかで、教育手法も大きく変化していることを実感した。カーネギー教育振興財団知識メディア研究所やカルフォルニア大学の教育関係者とも訪問し、教育専門家と IT 化による効果的な教授方法の開発について更に認識した。

【考察】

現在、東北大学大学院内科病態学講座 感染制御・検査診断学分野における医学部 4～6 年生に対する講義を行なっており、講座の教育担当主任として、5名の教官の講義内容の調整を行っている。本プロジェクトに参加することにより、平成18年度より、従来不十分であったシラバスにおける到達目標および手法の明確化を行い、ビデオ教材などについても作成した。本プロジェクトについては講座内の教官の理解も大きく得られ、少人数グループである5・6年生においては、討論を主とした形式に変更した。

医療施設における卒後教育は、我が国における新たな教育分野でもあり、また、医療費を原資とすることから、そのアウトカムを示すことも期待されている。本年、我が国の感染制御学の学会である日本環境感染学会シンポジウムにおいて、感染症専門医、薬剤師、微生物検査技師、看護師など、医療従事者の専門性を生かした教育と、得られた効果について報告した。

大学病院は研究・医療だけでなく、本来の大きな目的である教育の充実が求められている。そのためには医学教育への積極的な評価、多くの教育専門家の参加が必要不可欠であると考えられた。また、今後は、我が国にまだ数少ない感染制御学に関する専門家を多く有する東北大学において、学内外の教育専門家と広く連携することにより、本プロジェクト参加によって得られたさまざまな知見を生かし、更なる効果についても検討する。

研修成果中間報告

東北大学病院総合診療部

長崎 裕

スタンフォード視察報告

3／6 全参加者で Center for teaching & Learning (CTL) の Michele Marinovich、Robyn Wright Dunbar より CTL の概要の説明と施設の見学を行った。Teaching Assistant (TA) の活用によるスタッフの補完と TA 経験による教育方法の教育効果が印象深かった。デモンストレーションを見て、実施してみても、後輩や同僚に教えることを通じて自身がより深く学習することを考慮すると、TA 経験による教育技術の習得をもっと積極的に行うべきであると感じた。

また昼食を摂りながら参加者で今後の日程などの確認を行った。

3／7 石井、國島とともに、医学部 Faculty Development Center (FDC) を視察。Kelley Skeff、Georgette Stratos、Clarence Braddock、Kambria Hooper より 1986 年より開始されたスタンフォード大 FDC の 20 年の活動成果として Clinical Teaching に 111 人、Professionalism in Contemporary に 21 人、その他計 288 人が FD プログラムを受講し、日本からは 1995 年に伴、2005 年に野村ら計 4 名が参加していた。これらのプログラムは学外に公開されており、アメリカの医学校からの参加者は全体の 65% であった。研修方式は 6 名の小グループで 2 時間のセミナーが 1/週、3-5 時間のセミナーが 3 回/週、半日のグループワークと全日のグループワークがあり、課題を徹底的に討議し、最終的には各人が 2 時間ずつの FD を実施する。この FD によって実際に 8 回の FD を自分で開催可能となり、研修終了後各人が中心となって FD を展開普及できることを目指すものであり、FD リーダーの養成コースであると理解した。具体的にはセミナーやグループワークの様子をビデオで撮影し、振り返りながら 7 つのポイントすなわち学習環境、セッションのコントロール、目標についてのコミュニケーション、理解や記憶の保持の促進、評価、フィードバック、自己監督型の学習の促進を中心に検討する。議論の中では PDSA サイクルや need、content、method、impact の確認、ACGME の解説や日米の医学教育の管理体制の違いのほか、professionalism という言葉が日本や台湾における「専門性」という事ばかりでなく、患者個人の治療から地域への貢献、リーダーシップ、コメンテーターとしての役割を含むこと、また FD の成果がそれぞれの地域で受講者の行動変容を引き起こすために通じて背景となる文化の違いを配慮しなければならないことが強調された。この講義は双方向的な雰囲気で行われたが、中でも感銘を受けたのは Kelley Skeff らの学習に対する支持的態度（英語圏での留学経験が無くヒアリング等に不安を抱えている私に「君は良く理解しているよ」と

繰り返す、國島の感染コントロール教育の有効性に対するプレゼンテーションへの丁寧な反応、昼食のもてなし、午後の院内ツアーへの連絡・案内) など手間をいとわず対応するその姿勢は教育者のロールモデルとして深い感銘を受けた。我々はまず、学生や患者さんらに対してこのような支持的態度を取るべきであると思い知らされた。言語的にも、非言語的にも実りの多いコミュニケーションができたと感じられた。

3/8 医学部図書館による Stanford Medical の E-Learning 部門訪問

Anne Chamberlain

Debra Ketchell

Jenn Stringer

Lane Library & Knowledge Management Center を訪問した。

コンピューターネットワークの発展で、図書館の電子化が進み、司書の機能も変化している。

知識レベルの教育のセンターとして従来の紙ベースの図書の管理のほか授業のデジタルコンテンツ化やオンライン情報検索をサポートしている。

すべての講義が音声、動画、音声＋動画で配信され、年間2000時間にも及ぶ。学生は自宅からでも、校内でも24時間いつでもアクセスできる。配信された情報を iPod などの携帯音楽プレーヤーで再生し、場所を選ばず学習することができる。ただし、カリキュラムは PBL が多く取り入れられており、そこでは小グループのグループ討議があるため、全く出席しない分けにはいかない。

また実際の講義室を見学した。従来型の階段教室からフレキシブルな椅子・机のレイアウト変更が可能な小グループ討議も全体講義もこなせる講義室、組織標本の実習に配慮された実習室、ノートパソコンを無線 LAN サーバとして各ノートパソコンの画面を監視し必要に応じてメインスクリーンに投影(画面分割して同時には50台監視できる Apple Remote Desktop)、

<http://www.apple.com/jp/remotedesktop/>

クリッカーを用いた双方向授業、タブレットPCによるパワーポイントのペン機能を用いた板書機能など、まさにFDに必要と考えられた施設が備えられていた。実際の講義スケジュールも詰まっており、有効に活用されているようだった。Facultyではなく、StuffやTeaching Assistantを有効に活用している。ただしそれらを活用するためにはそれぞれの教育が必要である。

また Stanford University Medical Media & Information Technology (SUMMIT)の Parvati Dev、Patricia Youngblood、Wm.LeRoy Heinrichs らを訪問し4台の遠隔操作ビデオカメラを用いたモニターシステム、模型型からVR型そしてミニ豚へとシミュレーションの過程を段階的に進めていく腹腔鏡シミュレーターを用いた教育プログラム、チーム医療

のトレーニングためのシミュレーター、3Dのコンピューターゲームの様。キャラクターの操作そのものが難しく、肝心の医療行為が思うように行えるか疑問があった。むしろテキスト中心で静止画が挿入される程度で十分と思われた。

その他、SPを用いた教育のため、外来診療室10室を持つ練習施設があり多数の患者が登録されていた。身体診察、特に産科婦人科、泌尿器などの模擬患者もいた。

PBLのプレゼンテーションに模擬患者を用いるのは、医療面接などを早期から伝えるのに有効と考えられた。

3/9

Miyako Inoue

テニアの取得、基礎概論を教えたがらない

バックグラウンドや興味のないものに導入教育をすることの苦労

私立大学特有の不透明性

教育への本音、やはり研究に重きが置かれる

教育評価は学生のインタビュー、CTLによる講義のビデオ収録と問題点の解析レポート、CTLのワークショップへの参加、

テニア取得前は教育も評価対象なので配慮する。

何か問題があった時の第三者的受け皿があり、そのような組織は必ずしも医師である必要はないことが実感された。我々も医学部全体としてのカリキュラムの調整、教官に対する各講座の教授や学部長などからのmentorship、FDセンターによる教育プログラム、図書館による教材開発支援、学生による評価、教育センターによる授業内容の解析と改善意見、教育センターでの授業改善ワークショップといった、計画・教材作成・評価・改善・支援の体制を作るべきであると考えた。

David M. Irby

よりUniversity of San Francisco School of MedicineにおけるCore curriculumへの授業改革とe-learningの状況について概況を聞いた。

Toru IiyoshiよりFDのための教育方法スキルのネットワーク上の共有のためのコンテンツ制作支援ツールの説明を受けた。

<http://www.carnegiefoundation.org/about/sub.asp?key=10&subkey=269>

マニュアル主義の懸念とその背景にある他者への無関心とヒューマンコミュニケーションスキルの低下について議論した。分量ばかり多いコンテンツは結局読まれることはないため、要点を集約し、容易に教育改善のコンテンツを作成するツールを提供してる様子を見学した。

3/10 UCSF 医学部の見学

相手先の都合により UCSF そのものの見学はキャンセルとなった。しかし昨日合った Irby に医学部の FD に関連した追加の資料を請求し、それを検討することとした。

今後の展望

- ・医学部FD改善のための技術的改善

赤外線式のクリッカー60個とノートPC、プロジェクターを購入し、双方向授業のノウハウを蓄積することとした。まず4月に開催されるPBLチューターのFDで使用する予定である。

またこれまで模造紙で行われていた小グループ討議のプロダクト作成もノートパソコンと Apple Remote Desktop によって全てパソコン上で行うことができ、文字の読みやすさや全体討議への迅速な進行、FD記録集作成の手間の大幅な軽減が期待されるため、是非導入したいと考えている。

- ・医学部FD改善のための質的改善

長崎本人が総合診療部教授、医学部教務委員長の本郷道夫の承認と高等教育センターの関口からの支援を得て、本年9月に約1ヶ月に渡って行われる Professionalism in Contemporary のプログラムに参加するべく FDC と交渉中である。

- ・授業そのものの改善

6年生に対する高次修練「腹部診察」90分x3回、「医療面接実習」120分x2回、5年生に対する「腹部診察」90分x1回、「医療面接実習」120分x1回のシラバスを3月中に改訂して双方向性、アクティブラーニングを強く打ち出したものにする。またこれらをビデオ撮影し、教官の相互振り返りの素材とする。

- ・eラーニングコンテンツの作成

医療面接や医療安全に関する eラーニングコンテンツを学生の協力によるビデオ映像やコンピューターグラフィックスを利用して作成する。

(文中敬称略)

研修成果中間報告

東北大学大学院国際文化研究科

岡田 毅

はじめに

本報告書は平成 17 年秋より標記プロジェクトに参加して、その中間折り返し時期までを経過しての簡単な報告である。報告書に要求される項目、および力点の置き方が不明なために若干焦点の定まらない内容となる懸念なしとしないが、これまでの個人的な総括を試み、プロジェクトメンバの一人として自分自身の今後の指針としたい。

研修参加ものの目的と期待する成果

本プロジェクトには、当初、所謂 (B) タイプの「国際交流を活かした先端的教育の開発」に参加するつもりで問い合わせをした。プロジェクト発足に関して事前の情報を持ち合わせなかったために、米国の大学・研究機関と連携しての開発研究を開始するには半年ないし 1 年の準備期間が必要と考え、平成 18 年の後期からのプロジェクト参加を考えたが、期間の都合上、(A) タイプに参加してはどうかという旨のご提案とご依頼をプロジェクトリーダーから受けた。この際に、担当する授業の改善に力点を置く場合、大きな決断に迫られることとなった。大学院国際文化研究科に所属する報告者の場合、週に担当する合計 6 コマの授業のうち、3 コマが少人数の大学院の授業で、残る 3 コマが最低でも 40 名以上の履修生(全ての学部 1,2 年生)が登録する全学教育の外国語科目・英語(1 年生に開講される「展開英語」、2 年生向けの「実践英語」)である。特に後者は、演習形式の授業で、履修学生の、実用的でかつ近い将来の大学での様々な学術活動に必要な英語力を養成していくのが主眼となった授業である。(A) タイプのプロジェクトは、その性格上、講義形式の学部授業の改善に最も直結しやすいと想定されるために、当然のことながら大学院での担当授業を改善するために本プロジェクトに参加すべきかと考えたが、この中でも、特に「マルチメディア運用論」は、本プロジェクトの (A) タイプでビデオ撮影の後に、電子コンテンツ化するような場合、後述の著作権問題に大いに抵触する恐れがあり、この授業の改善を正面に据えるには抵抗があった。従って、(現在でも) 若干の不安を抱きながらも全学教育の英語の授業を俎上に載せ、自らの授業の改善に繋げるべく (A) タイプに参加したという経緯がある。

また、現在、外国語教育英語教科部会で行っている、平成 18 年度からの教育改善のワーキンググループリーダーを拝命している関係からも、このプロジェクト内容と、Stanford 大学での交流と研修は大変に有意義なものがあり、個人の授業改善のみならず、全学教育の英語教育全体に対して何らかのフィードバックが今後も続けられることを切望している。

自身としては英語教師の教歴が既に四半世紀以上におよび、それなりの経験と教育実績

を持っていると自負しているが、特に本学における全学教育でのように、高い基礎学力を備え、多様な学問的興味を持って様々な学部に所属する学生を対象とする英語教育に要求される実施形態と授業内容、評価等々について一層真摯な姿勢が要求されると自覚している。また、電子コンテンツを存分に駆使しなければならない CALL 関係の授業を多く担当する教員として、著作権や遠隔教育・学習に関わる深い議論に参加し、今後の方向性を見据えていかなければならないと考えているという現状も、本プロジェクトに参加し、それに大いに期待している理由の一つである。

研修会について

事前研修から始まり、これまでに開催された研修会はいずれも周到な準備の下に行われ、大変に有意義なものであった。テーマ別研修会に、本プロジェクト参加教員以外の教員や大学院生も積極的に参加している姿が見受けられ、開かれたプロジェクトとして非常に重要な役割を果たしていると感じられる。

研修会開始に関する通知や出欠席の問い合わせ時期なども適切で、スケジュール的に十分な調整期間が確保されている。ただし、全員の都合に合致する時間帯の設定は困難であり、不可避免的に授業担当時間帯に研修会が設定され、参加できない教員が生じることはやむを得ないと考えられる。

研修会の模様を写真程度の記録に留めるべきではないかと考える。ビデオ撮影の必要性がそれほど感じられないし、研修会参加者の中からの発言者に不要なストレスをかけるように感じられた。

授業相互参観について

授業のビデオ撮影に関しては、業者から丁寧な説明と確認があり、何の問題もなく実施できた。他の教員の授業をオン・デマンドで参観できるというシステムは、なかなかまとまった時間が確保できない学期中であって本当に便利で有難いシステムであったといえる。ただし、授業・講義で用いている Power Point のスライド画面を、ビデオ画面の一部に貼り付けるような体裁の場合、スライドの文字が読み難く不鮮明であったことが反省点ではある。

自らの授業・講義を撮影の後、公開するという作業には、事前・事後に、従来の授業準備に増してかなりの大きな負担が要求されることは否めないが、個々の教員がこの段階で労力と努力を惜しまなければ、相互参観は極めて実施するのが容易になり、その後の自己研修・研鑽や、研修会における議論の格好の題材となることが改めて確認できた。残念なことは、余りにも専門分野・教育分野に多様性があり過ぎたためと、学生が手元に行っている印刷教材等に関する情報が若干不足しているために、授業・講義内容とその実践方式との間の関連性を深く考えようとする際の障害となったこともある。

海外研修について

Stanford 大学の CTL を中心とした組織を訪れての海外研修は、これを可能にした現地駐在の教員の地道な努力が、その成功を促したといえる。「プロジェクト通信」の中で、コンパクトに纏められた海外研修に必要な情報は大変に貴重なものがあり、この事前の準備なしには、海外研修参加者は十分な成果を得られなかったであろうと想像される。

Stanford 大学に関する多くの印象の中で最大のものは、Stanford は世界最高峰の「私立大学」であり、教職員の一人ひとりに至るまでの構成員の中に、学術的向上と、競争力に直結する大学の経営と運営に関する意識が徹底しているという事である。この点が、国立大学である本学とは正面から対応しないが、法人化以降、国立大学教職員にも、これまでとは異なった意識を持つことが求められ手いることは当然であり、今後、Stanford で得られた知見を、個々の授業の改善のみならず、カリキュラム編成や教育体制の改革、大学全体としての教育方針の明確化に繋げていくかは、それぞれの参加者に課された責務であると考えらる。

自分の担当する授業や講義が、そのカバーしている学問分野のみならず、所属する学部や研究科の中でどのような位置づけをなされているのか、また、今後の改善に向けてどの段階での議論を進めなければならないのかという重要な問題を認識した。つまり、単発的な授業改善のためのスキルやノウハウに関する議論は当然大切で、本プロジェクトの研修会や CTL での研修のような形式の議論は有意義である。しかし、そこでの議論は、少し大きな枠組み、つまり学部専門教育や大学院教育の中での議論と関連するはずであり。常にその相互関係を認識した上での研修でなければ、小中学校で行われる学生による教育実習の事後指導におけるスキル中心の改善指導を区別できなくなってしまうという危険性をはらんでいる。大学全体の教育理念という大きく、やや抽象的な意思を学生に直面して具現化しているのが、様々な専門分野に分かれた個々の授業・講義であり、それを担当する教員が、大きな枠組みと、個別現象的な事例とを混同することなく整理しながら、自分の日々行っている授業を改善することによって、それらの中間位置を占めるような、学部や専攻分野における教育目標の明確化と先鋭化に繋がるのではないかと強く感じられた。

浮上した問題点について

担当授業の種類と研修のあり方

講義形式で続行される授業と、演習形式で行われるそれとの間には大きな性格上の相違がある。この事は、当該授業の電子コンテンツ化や相互参観にも大きく関連することであり、今後は、少なくとも講義・演習別のグループ分けをした上での研修が必要ではないかと感じられる。また、200 名以上にもなる大人数の講義や授業と少人数のその区別、さらには全学教育における授業と学部・大学院における専門教育での授業、その必修・選択の別まで細分化した仕分けをする必要性も感じられた。必修の場合と選択の場合とでは、履修学生のモチベーションや期待度に大きな差が生じることは想像に難しくなく、それらの中

で、前述のような教育理念や目標をどのように実践していくかには、共通する課題ばかりが存在するとは考えられない。

授業そのものの運営や学生指導のノウハウのような議論は、本プロジェクトの研修会にはそぐわないと感じられる。初等中等教育の教育現場で実践されている授業を支えるスキルやノウハウについては膨大な実践報告や研究成果が公表されており、これらを網羅的に総括して高等教育における授業改善に結びつけるということは不可能でもあり、有意義なことでもないと考える。授業の工夫は当然なされるべきであり、瑣末でアドホックな議論に陥ってしまうことを本プロジェクトとしては注意しなければならないだろう。大学における、授業の改善が大学の何と結びつくのか、という根本的な問題意識を明確にした授業参観や研修会が今後も望まれる所以である。

シラバスの位置づけ

Stanford 大学の Robyn Danbar 教授との話し合いでも明らかになった重要なポイントは、シラバスを、アメリカという契約社会においても「学生と教員との間での絶対的な契約」とは必ずしも捉えていないということである。それはかなり柔軟で流動的なものであり、個々の教員の授業の進め方についての自己点検的な指針となっていると考えられる。

本プロジェクトでは、シラバスについての議論や性格付けが未だ十分になされておらず、その段階で Stanford において「シラバスの書き方」の研修を受けたことが残念な事項として残る。また、シラバスに成績評価の基準等を厳密に記載することの意義、専門分野や学部・大学院の別による成績評価のあり方という問題を、個々の授業単位ではなく、前述のような、中間的な大きさの枠組みで議論する必要があると思われる。このような議論を、本プロジェクトから提起することができれば、その存在意義はより大きなものとなるだろう。

著作権問題

ISTU を中心として、「大学教育における著作権問題」に関する一体のガイドラインを作成して頂く事が切望される。初等中等教育の現場における著作権問題処理と、大学の授業や講義における同問題の処理とでは、複雑さにおいて格段の差があり、全ての事案をカバーするような理想的なガイドラインが容易に作成できるわけではないが、本プロジェクトの中から、大学の教育ならではの、著作権に関わる諸問題を整理して提起することにより、より具体的で実効性に富んだ指針の策定が可能となるのでないだろうか。

専門分野によって、そこで取り扱うべき素材や教材には大きな多様性があり、例えば、報告者自身がビデオ撮影・電子コンテンツ化の対象として依頼した全学教育における CALL を用いた英語教育の授業において、著作権に関わる問題が噴出したことも事実である。従って、相互参観の素材として提供された当該授業は、問題となりそうな部分が全てカットしてあるために、第三者から見れば脈絡の無い整合性に欠ける授業となっている。完全に利用者限定の相互参観用電子コンテンツと捉えれば、著作権の問題に対しては別の扱い方

も可能ではなかったかと思われる。

結び

以上は、本プロジェクトの中間点における参加者としての簡単な報告である。最後に、各種の研修会や海外研修で得られた知見と同等の成果は、プロジェクト参加者相互間における活発な話し合いと、何よりも年齢や職階級、所属学部や研究科や大学まで超えた幅広い交流という人的資産であることを付け加えなければならない。本プロジェクトにおける今後の活動が、このような「連携」をも糧として、一層充実したものに発展することを期待している。

研修成果中間報告

東北大学大学院国際文化研究科

杉浦 謙介

CALL システムおよび e ラーニングシステムの構築

—「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト中間報告—

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクトのなかで、私は、WebOCM (Web-based Open Courseware Manager) というプラットフォームを用いて、CALL (Computer Assisted Language Learning) システム、および e ラーニングシステムの構築をめざしている。そのシステムの主な特徴はつぎのとおりである。

(1) ひとつの大学内のシステムではなく、国内外の大学間で連携するシステム

WebOCM は、国立七大学外国語教育連絡協議会付属の国立七大学外国語 CU 委員会 (CU = サイバー・ユニバーシティ) が開発・研究してきたプラットフォームである。教育機関ならば無料で使用することができる。2006 年 3 月現在、北海道大学、東北大学、大阪大学、九州大学、埼玉医科大学で稼働している。大学間の連携授業を試行したり、教材や試験問題を共有したりしている。WebOCM を共通プラットフォームにして、国内外の大学間の連携を進めている。

(2) インターネット上のコンテンツと連携するシステム

外国語教育の最良のコンテンツは、インターネット上に存在する。例えば、外国の新聞サイトや放送局サイトは、最新情報をテキストとして、また、音声ファイルやビデオファイルとしてインターネットに公開している。一方、一般教育科目にとっても、インターネット上のコンテンツは、授業の重要な資料となりうる。WebOCM を用いたシステムは、このようなコンテンツと連携する。

(3) 講義ビデオを配信するのではなく、学生に作業させるシステム

ビデオ収録された 90 分の講義を 15 回視聴することは、普通の学生には苦痛である。講義ビデオ配信は、配信者から視聴者への一方向の関係しか有していない。これは、一世代前のテレビ放送に近い。

インターネットの利点のひとつは、双方向性である。WebOCM を用いたシステムでは、学生は、受動的に講義を受けるのではなく、さまざまな作業をひとつずつ完了しながら、自分の意思で授業を進めていく。

(4) 教員と学生との密接なコミュニケーションができるシステム

WebOCM を用いたシステムでは、①掲示板形式のコミュニケーション、②メッセージ形式のコミュニケーション、③メール通知によるコミュニケーションが可能である。これによって、教員と学生は密接なコミュニケーションをとることができる。

(5) 学生の出席・成績管理ができるシステム

出席管理については、次の各レベルで管理できる。①クラスごとの全学生一覧表示（全学生の出席回数・遅刻回数・欠席回数・総出席時間・総自習時間（分）などを表示）、②クラスごとの全開講日一覧表示（各開講日ごとの総出席者数・総欠席者数などを表示）、③各開講日ごとの全学生一覧表示（全学生の当日の出席状況・ログイン時刻・ログアウト時刻（年月日時分秒）などを表示）、④各学生のログイン・ログアウト時刻（年月日時分秒）の詳細を表示、⑤休講日や休日を独自に設定。

成績管理では、つぎの点を管理する。①全学生の総点・受験したテスト数・テスト平均点・出席状況などを表示、②各学生が受験した全テストについて、その受験日時・得点結果・偏差値などを一覧表示、③採点済み答案そのものを表示、④「成績管理画面」に表示する項目、「総点」に算入する項目の比重を選択・変更。

出席管理データと成績管理データについては、教員ばかりではなく、学生も、自分のデータに関してアクセスできる（学生も自分の状況がわかる）。

(6) 辞書を搭載したシステム

2003 年 3 月現在、英和辞典と独和辞典を搭載している。今後、他の言語の辞書、そして、一般教育科目の専門用語事典も搭載していく。

検索方法としては、①キーボード入力（欧文特殊文字対応）による検索、②Web ページ上の単語をクリックすることによる自動検索、③単語の一部分を選択する（左クリックを押しながらカーソルでなぞる）ことによる自動検索がある。

学生が検索した単語は、各学生ごとにデータベース化され、自分の単語帳や語彙テストを作成することができる。語彙テストは、学生間で共有することもできる。

(7) 教材作成が簡単にできるシステム

e ラーニング教材の作成には、一般的に、膨大な時間とコストがかかる。しかし、WebOCM を用いたシステムでは、通常の授業準備と同程度の時間とコストで教材作成ができる。その方法について、2003 年 1 月 31 日の本プロジェクト「テーマ別研修会」でデモンストレーションをおこなった。つぎの URL でも方法の詳細を公開している：

http://www.he.tohoku.ac.jp/~sugiura/elearning_manual/

上のシステムは、本プロジェクトの支援を得て、2006 年 4 月から東北大学高等教育開発推進センターの管理下で本格的に移動する。2006 年 3 月に、つぎの 3 台のサーバーが配備された：

- ① WebOCM システムサーバー：<http://www.webocm1.he.tohoku.ac.jp>
 - ② WebOCM システムバックアップサーバー：<http://www.webocm2.he.tohoku.ac.jp>
 - ③ e ラーニング用 Web サーバー：<http://www.elearning.he.tohoku.ac.jp>
- ③の Web サーバーをポータルサイトとして、そこから WebOCM システムにアクセスするように設定した。Web サーバーもしくは WebOCM システムサーバーがクラッシュしても、10 分以内に別のサーバーが代行する体制も整備した。

研 修 成 果 中 間 報 告

東北大学大学院環境科学研究科

古川 柳蔵

テーマ別研修、海外研修、プロジェクト通信などを通して受講した研修についてご報告したい。筆者は、大学院環境科学研究科高度環境政策・技術マネジメント人材養成ユニットのカリキュラムデザイン、各講義のコースデザイン、e-ラーニングを活用したカリキュラム開発に携わる教員として研修を受講した。

1. テーマ別研修

テーマ別研修の中で、特に「e-ラーニングの新たな教育実践」は、有益であった。このような e-ラーニングに関するテーマ別研修は、私が担当している社会人を主に対象とした修士コース（高度環境政策・技術マネジメント人材養成ユニット）の e-ラーニング教材開発の参考となった。e-ラーニングは、ISTU のシステムだけでなく、他の技術を活用することで様々な授業形態も可能である。授業内容に応じた技術の適用を今後考えていきたい。但し、この人材養成ユニットの教育システムの複雑化は避けなければならない。このような e-ラーニングに関するテーマ研修を継続して期待している。

2. 海外研修

(1) FD の考え方

スタンフォード大学は、各専門分野において世界のトップ5に入る研究者集団とされている。スタンフォード大学の FD とは、このような研究実績、プライドを持つ研究者集団の教員開発をミッションとした組織である。既に、世界の成功者に何を教育するかが議論されている。スタンフォードにおける FD の試みをそのまま東北大学や他大学に適用することは妥当ではないが、FD をどのように位置づけ、どのような教育をして、実際にどのようにスタンフォード大学の教育レベル（特に、学部教育）を維持して、スタンフォードブランドを継続していくのかといった戦略を学ぶことが重要であると思われる。

(2) コースデザイン（授業設計の発想転換、アクティブラーニング、フィードバックとアセスメント、インターネットの活用、優秀教員の授業参観）

スタンフォード大学の CTL（The Center for Teaching and Learning）における海外研修において、コースデザインの基礎的な重要ポイントについて多くのことを学ぶことがで

きた。FD は、大学の教育方法のスタンダードを全教員に適用するためのものではないと思われる。FD はコースデザインの基盤をフレームとして与えるだけであつた。各教員は、それぞれ独自の解釈が許され、自らのコースデザインを向上することができるシステムである。私は、新任教員であるため、特に大きなフレームや考え方から細部のタクティクスにいたるまで学ぶことが多かった。今後のコースデザインを行う基盤として、活用させていただく予定である。

3. プロジェクト通信

定期的にプロジェクトメンバーに配信されるプロジェクト通信は、非常に有益であつた。日本にいながらにして、スタンフォード大学の最先端の情報を知ることができ、教育改善ができる環境を与えてくれる。贅沢な環境であるが、効果的な FD 環境である。可能な限り、同様にプロジェクト通信を配信いただきたい。また、限られた教員に対してだけでなく、希望する教員と新任教員に配信すれば、その効果はさらに期待できると思われる。

以上

研修成果中間報告

岩手医科大学歯学部

田中 光郎

海外研修：

米国の大学の実際の授業は大変刺激になり、また最も印象に残りました。100人ほどの学生が聴講する中テンポ良く授業が展開され、50分が効率的に使われていたように思います。教師はまだ *tenure* を取得していない若手の女性助教授で、授業開始時間5分ほど前に教室に入り、カラー刷りの分厚く、データ満載のハンドアウトを事前に教室の後ろに置いて自由に配布し、その後 TA やこの授業のコーディネーターと推察される熟年の男性教授となにやら打ち合わせのような雑談をしたあと、授業が始まりました。授業内容は地球環境を守るために考慮すべき問題点を様々な観点から指摘し考察するものでしたが、ハンドアウトの内容が半分ぐらいの所で終わってしまい、一つ一つの指摘には興味深いものがありましたが、まとまりという面では構成がいまひとつの感じを受けました。授業の後に学生から拍手が起きましたが、US Asia Technology Management Center の Dasher 氏によれば彼女は言わばゲストスピーカーであったからだろうとの事で、良い授業だから拍手が起こるということではないようでした。授業の後は4~5人の学生が個人的にこの助教授に質問しておりました。そばにいて私の聞いた範囲では Stanford の学生だからというような鋭い質問というより、感想を述べるような内容でしたが、学生の積極性は感じられました。ノートパソコンを使いながら授業を受けている学生も多く見受けられ、ノート代わりにしているのだと思いますが、私の前に座っていた学生は他の科目のレポートを書いている、Stanford でも内職するのだなど面白く見ておりました。ちなみに、出席はとっておりませんでした。教師予備軍としての TA が甲斐甲斐しく働き、授業を補佐している姿は印象的で、大学院を目指す大学生、大学教師をめざす TA, *tenure* をめざす教員、さらなる *promotion* をめざす教員、とどの段階においても目標を定めて全力で進んでいる、またそれがやりやすいシステムが供給されていることにアメリカの原動力を見る思いがしました。学生がどのように席につくかという下世話な興味で授業開始15分ほど前には教室に入りました。日本のように後ろから席が埋まるのではなく、他の人がいない所に座り、徐々にその間が埋まっていくという、日本とは別の不文律に従っているようでした。

テーマ別研修：

コースデザインのワークショップについては、歯科大学へ視察に行ったため、「コースデザインの発想転換」「アクティブラーニング」を聞くことができず残念でしたがテキストや他の先生方のお話からおぼろげながら自分なりの解釈を致しました。

「コースコースデザインの発想転換」では「学生に授業で何を教えるのか」というこれ

までの発想から「授業目標はその授業を修了した時点で、学生がどうあつてほしいかをまず思い描く事から始めるべきものである。」という、学生を主体とした発想にシフトするという当たり前のようで行われていなかった考え方を認識する事が出来、有用でした。

「アクティブラーニング」は初めて聞く言葉でしたが、聞くだけでは知識が定着せず、実際に参加すればより理解が深まり、さらに教えればマスターできるとする考えで、これも当たり前ですがあまり意識していなかったように思います。岩手医大でもここ数年チュートリアル方式での学習を取り入れており、症例を自分たちで分析解釈し、必要な知識を自学自習させようとすることを試みております。

「テクノロジーの利用」は物理学の授業においてリアルタイムで学生の答えが集計できるシステムを利用したビデオが印象に残りました。問題を映写しその答えを7~8個の選択肢から回答させた際に2つの選択肢に意見が分かれ、その後短時間の解説によって2回目の回答では正しい選択が行われた、とするものです。話しが出来すぎの感がありましたが、私の行っている80人を相手の授業では、こうしたテクノロジーは有用で、学生の理解の程度をリアルタイムで把握しながら授業を進められれば教育効果が上がると思いました。ただ経済的な点では、Stanfordのような大学と太刀打ちできるはずもなく、設備を整えようとする事は夢物語かもしれません。

Stanford ではやる気のある教員が、新しい試みの授業を企画提案し、アクセプトされれば大学から費用と場所とスタッフが供給される体制があり、そのために一つの建物があり (Wallenburg hall), 10人ほどのスタッフがいるとのことでその経済的な余裕に驚かされました。

「フィードバックとアセスメント」では"Authentic assessment"とはなにかがテーマであったと思います。いまだにピンと来ませんが、ただ単なる"grading" よりも学生にとってやる気の出る評価にするべきであるということで、「この試験に合格するまでの知識があれば大丈夫だから、私を信じなさい」式の評価法は「ちゃんと教えているのに、なぜできないんだ」というような感覚につながる危険性を秘めているようです。

授業相互参観：

研修日には30分ほどしか出席できませんでしたが、自分の授業のビデオを見ての感想としては、やや単調であり学生が眠くなるのもむべなるかなと感じ、メリハリをつけた授業の工夫が必要と思いました。そのあたりの方法についてもどんな研究があるのか知りたく思いました。

研修成果中間報告

岩手医科大学歯学部
城 茂治

「国際連携プロジェクトに参加して」

【はじめに】

平成18年8月24日付けで、東北大学高等教育開発センターから「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクトへの参加教員募集が本学にも寄せられた。これには、1.「授業科目の電子コンテンツ化と授業改善」について（Aタイプ）、2.「国際交流を活かした先端的教育の開発」について（Bタイプ）の2コースが設定されており、本学歯学部の教育環境、状況を鑑みてAタイプが適切と考え応募した。すなわち、本学歯学部においては教育環境の改善の一つとしてeラーニングの必要性について論議されていたおりであり、歯学部教務委員会を中心に、その方法論について模索していた。その中で現授業の電子コンテンツ化は不可欠であり、本プロジェクトへの参加は岩手医大歯学部にとっても今後の教育改善に有益と判断した。

【研修経過】

Aタイプには、東北大学、宮城教育大、宮城大学、岩手医科大学から15名の教員が参加しており、第2回の事前研修会からの参加となり、以後、次の要領で進められた。

1. 第2回事前研修会 平成17年9月13日開催

本プロジェクトの趣旨と具体的な計画内容等について3名の先生方からプレゼンテーションがあった。

2. 授業の電子コンテンツ化（授業撮影）

授業の撮影は、岩手医科大学歯学部講義室において第4学年における系統講義を4回撮影した（1回につき90分）。

第1回目：10月14日8時50分～10時20分 全身麻酔法Ⅰ（一般目標：全身麻酔法及び吸入麻酔法の概念、適応、方法について理解する） 担当 城 茂治

第2回目：10月21日8時50分～10時20分 全身麻酔法Ⅱ（一般目標：静脈麻酔法、筋弛緩薬、低血圧麻酔法について理解する） 担当 城 茂治

第3回目：10月25日8時50分～10時20分 周術期の患者管理（一般目標：術中、術後の患者管理について理解する） 担当 佐藤雅仁

第4回目：11月4日8時50分～10時20分 神経疾患（一般目標：神経痛など疼痛性神経疾患、神経麻痺について理解する） 担当 城 茂治

第5回目：11月11日8時50分～10時20分 演習（一般目標：これまでの講義で習得困難な知識を確実なものとして深化させ、問題解決能力の基礎を身につける） 担当 城 茂治

各回の授業に先立ちプレテストを実施し、講義内容の事前把握と重要事項の認識を図っている。さらに、授業終了後には、ポストテストを実施し学生の理解度の把握に努めている。授業の撮影には、プレおよびポストテストの時間は含まなかった。

3. 第1回テーマ別研修会 平成17年10月24日(月)開催

「大学教育におけるカリキュラム・デザイン」のテーマで開催され、第1部は東北大学大学院教育学研究科の谷口助教授により、小学校の社会科教育の具体例を通してカリキュラム・デザインの基本的な考え方についてプレゼンテーションがあった。

4. 第1回授業相互参観研修 平成17年12月21日(水)開催

撮影された授業コンテンツのアップが完了したため、授業改善に向けた自己点検と相互参観に関する説明会が行われた。相互参観については、東北大学高等教育開発推進センターのホームページを介してISTU内で閲覧できるようになった。

5. 第2回テーマ別研修会 平成18年1月31日(火)開催

「e-ラーニングの新たな教育実践—WebOCMによるe-ラーニング—」と題して、東北大学大学院国際文化研究科助教授の杉浦謙介先生の講演が公開研修会として行われた。

6. 第2回授業相互参観研修会 平成18年2月28日(火)開催

授業改善に向けた自己点検・相互参観について、各先生から出されたレポートを基に意見交換がなされた。さらに、今後の研修プログラム、海外特別研修についての話し合いが持たれた。

7. 海外特別研修 平成18年3月5日～11日

スタンフォード大学にて特別研修が行われた。

9. プロジェクト通信あるいは参加者のメーリングリストによる教育改善の情報提供

10. 平成17年度研修成果報告会 平成18年3月30日(木)開催予定

【研修成果】

1. 第2回事前研修会

本プロジェクトの目的と内容が明確になった。目的の一つに、ISTU活用による教育の改善・高度化があり、この中に(A)授業科目の電子コンテンツ化と授業改善、(B)国際交流を活かした先端的教育の開発が挙げられていた。(A)については、具体的に(1)授業内容・方法の自己点検と課題把握、(2)課題の解決と授業改善、(3)授業改善例の全学的還元と共有化が挙げられた。授業内容の自己点検と課題把握については、ISTUが活用され、授業の撮影と電子コンテンツ化、相互参観による授業研修が図られることが示された。つぎに、各参加教員での意見交換が行われた。どの大学においても、学生の学習への積極的な参加・自主的な学習意欲の欠如があるとの意見が出され、これらを高揚するための教育戦略の必要性があるとの意見の一致を見た。本学においても同様の傾向があり、学部を問わず教育現状では共通認識があることを確認した。また、Bタイプに参加された東北大学大学院環境科学研究科の佐竹教授から、本プロジェクトへの参加動機、計画、現状を資料を基に概要が説明された。

2. 授業の電子コンテンツ化（授業撮影）による自己評価・点検

〔授業内容・方法等の分析〕

- 1) 授業内容が、多すぎる。
- 2) 話し方が、単調すぎる。
- 3) 一方向の授業である。
- 4) ポイントが不明瞭である。

〔改善への方向性〕

- 1) 授業内容の、事前検討をさらに吟味する必要がある。授業内容が多すぎるため、パワーポイントの列挙事項の棒読みになることが多く、学生の授業で学ぶ内容の深さが不足しているような印象を受ける。
- 2) 語りかけるような話し方に変える。興味を持たせる話し方について検討する。
- 3) 途中、学生に質問、意見を問う方法を取り入れる。
- 4) 授業内容の事前検討をさらに吟味し、重要事項を学生に認識させるための方法を検討する。その一つとして、プレ・ポストテストを実施しているが、比較的效果が上がっているように思われる。強調のない授業であっても、プレポストで重要事項が把握できるようである。その結果、ポストテストの改善率が良い。

〔問題点〕

モデル・コアカリキュラムで教授内容が一応、指定されているが、その内容は具体的でなく、内容を理解させるためには指定内容の周辺も含め、相応の授業内容が必要に思われる。それを、従前より少ない講義枠（従前より30%カット）で行おうとする余り、つつい1回の講義内容が多くなってしまい、教える方も、教わる方も消化不良の状態である。教育内容をさらに吟味し、1コマ（90分）の授業内容に適した講義を実施する必要があるように思われる。

3. 第1回テーマ別研修会

第1部では、小学校の社会科教育を事例に具体的な例を提示しながらの講演が行われた。講演では、Ⅰ. シラバスを作るということは、「目標」と「内容」「授業方法」を有機的に結びつける授業「理論」に基づくデザインである。Ⅱ. 授業は、その「目標」と「評価項目」達成のために、最適の「内容」と「方法」が選択されるように設計されなければならない。Ⅲ. カリキュラム・マネジメントにおいては、授業目標の公共性（大学全体の目標）と学習者の必要や欲求（何を期待して受講するか）を基に授業目標が立てられなければならない。そして教員、学習者、教材を結びつける「理論」により「教育目標」達成に向けてのカリキュラム・デザインをし、これに基づき実践して「授業評価」を行い、それぞれにフィードバックするシステムが構築されなければならない。Ⅳ. 新しい大学教育をどうデザインするには、①「授業目標」「授業評価」「授業方法」の一貫した設計、②「授業目標」「授業項目」の整合性、③部局のカリキュラム原理と照らし合わせた自分の授業全体への位置づけ、③部局のカリキュラム原理の再考がひつようで、電子コンテンツ化は、

それぞれのマネジメントサイクルを容易にするなど、カリキュラム・デザインを考える上での有意義な提示があった。

第二部では、参加各グループの取り組みの紹介と討論会が行われた。

4. 第1回授業相互参観研修：都合により不参加
5. 第2回テーマ別研修会：都合により不参加
6. 第2回授業相互参観研修会：都合により不参加
7. 海外特別研修：都合により不参加
8. プロジェクト通信で多くの教育に関する情報が得られた。

【今後の対応】

平成17年度に行われた研修会を通して得られた授業に関する知識、方法を平成18年度の授業に反映させ、さらに今後の研修を通して、平成19年度からのカリキュラム・デザインへの提案を本学教務委員会に提言していきたいと考えている。残念ながら、本年度はスタンフォードでの特別研修を受けることができなかったが、その情報に関しては、プロジェクト通信を通して提供されており、また参加された先生方の報告を通して本学に還元できるところは積極的に取り入れていきたいと考えている。

研修成果中間報告

宮城大学食産業学部

森山 雅幸

17 年度後期から参加させて戴いているこの研修は、毎回新鮮な内容のものであり、既に担当している授業への活用も試みつつある。

6 ヶ月間のテーマ別研修、授業相互参観研修、海外研修を体験させて戴いた中で特に印象に残っていることは、スタンフォード大学からの貴重なプロジェクト通信と参加者との対話であり、海外研修の成果もこのメーリングによるところが大きいと感じている。

大学での講義体験一年生にとっては、この研修から学んだことの多くが今後のコースデザインに役立つものと考えられる。

■ テーマ別研修

この第 1 回目の研修を受けていた時は、正直カリキュラムデザインの意味を理解しないままに研修を終えていた。特に、カリキュラムマネジメントの部分では、教育目標から授業評価までの関連性が把握できずにいた記憶がある。研修資料を持ち帰り、再度読み直してからやっと研修内容が理解できた。研修前に資料を受け取っても理解できなかったように思われるので、如何に復習することが大切かを再認識させられた。

第 2 回目の e・ラーニングは、小雪降る寒い日だった。マルチメディア教育の教室で行われた研修では、初めて体験する教育方法にはじめのうちたじろいだ。が、しかしやさしく丁寧な講師と隣の紳士に助けられ、e・ラーニングの長所と問題点にも少し触れることができた。

■ 授業相互参観研修

授業撮影が 10 月から始まり、12 月までに 3 回の撮影をしていただいた。自分の授業は、常々見たくないと思っていたものの、だんだんと編集が終わるのが待ちどろしくなっていた。撮影のために特に準備して、演技して、声を高ぶらせないように心がけた。普段の自分の授業姿を見たかったのである。ビデオに映し出された自分の姿と声におかしなテレと恥じらいを感じた。其のうちに、今度はうなづきながら画面を見ていたように思う。アドックスさんは、さすがプロである。下手な授業だが、見れないことはない。

其の反面、他の先生方のプロフェッショナルな授業態度と内容を見て、大変参考になった。映像の中の経験豊富な授業を受けたくもなった。

映像による授業の自己点検は、学生の立場から授業を聞くことが可能となり、学生のためにより良い講義デザインに大変役立つことが理解できた。言葉の一つ一つが大切なメッセージを持っていることや言葉を簡潔明瞭に話すことなど、これからの授業に活かしていきたい。

■ 海外研修

スタンフォード大学での海外研修は、やや肌寒いカリフォルニアの雨期が終わろうとしていた3月5日から11日までの期間行われた。研修は、大学CTLのメンバーによるキャンパス施設案内と教育プログラムについての詳しい説明から始まった。

研修3日目は、ダンバー先生のコースデザインワークショップが始まり、セミナー形式の活発なディスカッションの時間が持たれた。其の中では、授業で何を教えるのか、学生は何を学ぶべきなのかについての説明が詳しく、分かりやすく講義された。シラバスが1993年から2006年の間にどのように開発、デザインされたかについての興味ある説明を聞くことも出来た。また大学の教育方法についての説明の中で、現在は学部学生の教育に重点が置かれている理由を聞き、アメリカにおける大学経営の一端に触れることもできた。

翌日のコースデザインは、特に興味を持っていたアクティブラーニングのセミナーを受講することが出来た。学生をいかにして授業に参加させるかの大事な点やテクニカルなポイントまで詳しく講義を受けた後、こちらからの質問に対しても丁寧な、熱のこもった説明をして戴いた。

最終日は、コースデザインのセミナーがあり、コースデザインのテキストを使いながら一人ひとりに親切に説明していた姿が印象的だった。教育を通して学生たちに伝える事の大切さや何を学生たちに学ばせるかについて何度も繰り返し説明をされていた。教育の意味や役割についてもこのセミナーの中で学ぶことが出来たように感じる。

スタンフォード大学と宮城大学の様々な教育・経済的環境の相違について学ぶことがこの僅かな期間の中でできた。この海外研修に参加させて戴き感じたことは、これから多くの教員や学生たちが、国際交流を通じてより良い教育のための授業方法を学習できるシステム開発の必要性和コミュニケーションの大切さである。

国際連携による高等教育の構築がこれからも東北大学のみならず、国内の多くの大学において実施されることを願っている。そして、教育に携わる人たちの国際的研究がこのようなプロジェクトの中で一つでも多く生まれ、国際的な相互理解に広がっていく事を願う。

最後に、このような貴重な教育的体験学習の場と機会を作って戴いた東北大学高等教育開発推進センターの方々と参加された教員の方々に心より厚く御礼申し上げます。

研修成果中間報告

宮城大学事業構想学部

岡田 ロベルト

平成 17 年度海外研修報告

1. はじめに

研修（第1グループ）は3月6日～9日に行われた。おおよその内容と印象的な内容を以下に記す。

2. 研修

● 3月6日（月） 10:00 ～ 11:30

スタンフォード大学の教育と教員のためのCTLリソース

Michele Marinkovich (Director CTL)

Robyn Dunbar (Senior Associate Director for Science & Engineering, CTL)

Stanford大学は研究重視の大学として世界的に知られている。もう一方、教育にも力をいれており、教員評価では教育も大きなウェイトを占めている。アメリカの大学教員が研究、教育に真剣に取り組んでいる理由として「終身在職権 (tenure)」制度、私立大学では給料への影響などがあげられる。

※ アメリカの大学教員はtenure trackとnon-tenure trackに分かれ、tenure trackの仕事は条件を満たせば「終身在職権 (tenure)」を得ることができる。tenure-track assistant professorから始めて、審査を通ればassociate professor (準教授) そしてもっと出世すればprofessor (教授) となる。

● 3月7日（火） 10:00 ～ 11:30

ワークショップ①： コースデザインの発想転換

Robyn Dunbar

- 受講生を知る
- Learning objective を明確にする。そのために曖昧なことば（学習する、知識を習得する）などではなく、Bloom taxonomy of educational objectivesを参考にしながら具体的に書く

● 3月7日（火） 12:00 ～ 13:30

ワークショップ②： アクティブラーニング

Robyn Dunbar

- 先生から学生への一方通行の講義ではなく、学生を積極的に参加させるactive learningを導入することが必要である
- 学生の積極的参加をうならす工夫は、現状の授業形態に導入できるものから授業形態自身を変える方法までいろいろある
- 質問の仕方を工夫するだけで学習者を積極的に参加させることも可能になる

● 3月8日(水) 10:00 ~ 11:00

授業見学 Course title: Air quality management

Instructor: Lynn Hildemann

- 総合評価(中間テスト+課題+期末テスト)のいろんな重み付けを提供している
- 授業に過去の課題結果をうまく盛り込んでいる

● 3月8日(水) 13:30 ~ 15:00

ワークショップ③: テクノロジーの利用

Jeremy Sabol (Academic Technology Specialist)

- Learning objectiveを実現するために必要であれば技術を導入する

● 3月9日(木) 12:00 ~ 14:00

アメリカと日本の教育における共通課題

Richard Dasher

Miyako Inoue

- スタンフォードの仕組みをそのまま日本の大学で適応してもうまくいくとはかぎらない。日本に合う仕組みを考える必要がある

● 3月9日(木) 14:30 ~ 16:00

ワークショップ④: フィードバックとアセスメント

Robyn Dunbar

- アセスメントは学生からみたらマイナスのイメージをもってしまうが, motivationをあげるアセスメントもあり得る
- アセスメント、フィードバックも学習過程で非常に大切であり、有効に活用しなければならない
- “people can learn more deeply and can retain longer when they have frequent practice and timely feedback”
- Authentic evaluationを導入することで学生の学習レベルを上げることが可能になる

その他

- ・ 先生は tenure 取得するために真剣で, tenure 審査では研究, 教育, 運営が評価される
- ・ best teacher に選ばれれば, 最高で1万ドルの賞金ももらう場合がある
- ・ 1科目は週2から3回, 1コマは45分. 課題の量は非常に多い
例: 週3科目履修の場合, 課題提出のため週60時間程度は必要

3. 終わりに

今回の海外研修に参加して, 様々な観点からコースデザインに対する考え方を整理することが出来た.

- ① シラバス作成に関して, 学習ゴールの明確化
- ② 学習者の積極的参加をうなずく工夫の幅
- ③ 教育現場にITを導入する場合, 本当に必要かどうか検討する必要性
- ④ アセスメントを有効に使用することにより, 学習者の学習レベルを上げることが可能.
- ⑤ タイムリーなフィードバックの必要性

これらの観点を来年度の授業で試し, 学生の motivation を上げ, 学習に対する態度が積極的になった報告をすることにより, このワークショップ参加の有効性検証が期待できる.

研修成果中間報告

宮城教育大学教育学部

石澤 公明

「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクトで企画された研修会に参加して、現在までに得られた成果について報告することにする。

第1回テーマ別研修会「大学教育におけるカリキュラム・デザイン」の谷口先生による講演では、大学の授業での、シラバス作成の意味、そして授業目標と評価との関連、更に大学教育のカリキュラムの中での授業の位置づけなどについて、幾つかの問題点が指摘された。その後、2回の授業相互参観研修では、自分の講義に加え、他のメンバーの講義ビデオも見る事ができた。その結果、さまざまな授業形式があること、そして今まで気付かずにいた自分の講義の改善すべき点を認識することができた。これらの準備を経て、2006年3月5日より11日まで、スタンフォード大学で行なわれた海外研修に参加し、講義に対する基本的考え方と、講義の改善を行なうための具体策を学ぶことができた。この海外研修の成果は大変大きいので、以下詳しく報告することにする。

1) スタンフォード大学の教育に関する説明 (Dr. Michele Marinovich)

スタンフォード大学で実施されている、1、2年生に対する教育改革の柱は、1) Freshman & Sophomore Seminars 2) Sophomore College 3) Undergraduate Research 4) Haas Center for Public service の4つのプログラムにある。その目的は、学生が将来専攻すべき分野を自分で決定する力を養成することにある。人前で自分の意見を主張する力をつけ、自分の考えで行動することに自信を持たせるように、学生を積極的に支援する体制を取っていることが印象的であった。

2) 「コースデザインの発想転換」に関するワークショップ (Dr. Robyn W. Dunbar)

このワークショップでは、授業を組み立てる発想を、何をどのように教えるか(teaching)から、受講生がその授業によって何を身につけられるか (learning)に転換することを教えられた。この転換により、受講生が知識を一方向的に受け入れる passive な姿勢から、知識を active に獲得する姿勢に変換できるのだという。この active learning の手法を取り入れることで、自分の授業を改善する具体的糸口を見出せた事は、大きな成果であった。また、学生に授業の到達目標を具体的に指し示すためにこそシラバスの意味があるという考えは、極めて明快である。

「授業見学」では、Jane Woodward 氏の「Introduction to Earth System」の講義を参観した。これは、多数の講師が担当するコースの中の一つの講義であったが、TA が講義全体で極めて重要な役割を担い、受講生が講義に積極的に参加できるよう手助けをしていることが印象的であった。

3) 授業へのテクノロジーの導入に関するワークショップ (Dr Jeremy Sabol)

授業にテクノロジーを導入するには、その授業の到達目標を明確にして、その利点と欠

点を十分に考える必要があることを学んだ。電子機器を使用した active learning の授業の一例として、PRS (Personal Response System)を利用する方法の紹介があった。

4) スタンフォード大学の現状報告 (Dr. Miyako Inoue, Dr. Richard Dasher)

教員の評価制度を中心に、スタンフォード大学の現状の紹介を受けた。スタンフォード大学での教員の業績評価は、教育と研究の両方を等しく評価することを建前としているが、実際は研究業績が重要視され、この点は日本と余り変わらないことを知った。しかし、建前としてでも大学教員の業績評価に、教育業績が必ず問われることの意味は大きく、また、大学院生にとっても TA で教育実績を積むことが、就職するために重要になっているとのことである。これらの背景があるからこそ、授業で TA に大きな役割を与える必要性があり、またそのことで TA 制度が円滑に運用できるのだと理解できた。

5) 学生評価に関するワークショップ (Dr. Robyn W. Dunbar)

学生の成績を評価することを、受講生の目標達成度を測り、これを講義にフィードバックすることに活用する、“authentic assessment”という評価方法を学んだ。すなわち、学生の成績評価の目的に、当初の授業目標の達成度を測ることを加えている。更に、授業の目標は、その目標に到達することで、将来どのような利益が学生自身にあるのかを具体的に分かるようなものとして、提示することが重要であることも学んだ。

6) 総括

この海外研修で得られた最も大きな成果は、授業の改善に active learning を導入する様々な段階での手法があることを知ったことである。また、自己の授業評価をするために authentic assessment によるフィードバックの重要性を学ぶことができた。しかし、この active learning という手法は、日本の高等学校までの授業では、以前から実践されているものである。日本の大学の講義では、学生は自ら学ぶべきであるとして、一方的に情報を与える passive learning な手法の授業を敢えて行なってきた面もあるのではなかろうか。大学での講義は、教員が選択した教材を用い、独自の授業を展開するところにこそ価値がある。ここで active learning を導入することで、学生の積極的な姿勢を引き出すことができるかどうか、個々の教員の力量が問われているのだと理解される。

スタンフォード大学の大学初等教育は、嘗ての日本の大学の教養部制度を思い出させた。教養部と異なり、この教育に携わる教員組織が限定されず、大学全体で担われている。幸い、日本の多くの大学でも教養部解体後は全学で大学初等教育を担う体制は整えられた。しかし、スタンフォード大学では、建前ではあっても大学教員の教育に対する評価基準があり、CTL という教員に対する支援組織が充実し、さらに大学院生の TA システムが極めて充実している点で、日本の大学と大きく異なっている。この状況を打破するためには、個人による授業改善の努力だけでは明らかに限界がある。そのためには、教員の教育業績評価を謳い、スタンフォード大学の CTL に相当する組織を創設し、大学内での TA 制度の見直しと、大学初等教育のカリキュラム上でのしっかりした位置付けを行なう、新たな変革が求められているものと思われる。

研修成果中間報告

宮城教育大学教育学部

菅井 裕行

1. プロジェクト参加の目的

今回のプロジェクトでは、国際連携による高等教育の開発が目指されている。そこでは、FDのあり方についての検討を、スタンフォード大学との連携によって実施すること、およびプロジェクト参加者各自の授業検討が大きな柱になっている。筆者は大学教員1年目であって、まだ高等教育における授業について十分な経験がない。したがって、筆者の大学における授業技術の習得にとって、今回の取り組みへの参加は極めて有効であり、筆者自身がどのような授業改善を行うことができるかは、そのままこのFD開発についてひとつの資料を提供することになることが予想される。また、筆者自身これまでに特殊教育（特別支援教育）における授業研究に取り組んできたことから、分野や対象は異なっているが、同じ授業研究という枠組みにおける方法論的差異や高等教育における授業研究の特徴などを明らかにできるのではないかと考えた。そのために、1) 自らの授業をビデオ分析することによる授業改善を通じて授業分析がFDにもたらす効果を明らかにすること、2) スタンフォード大学における研修プロジェクトへの参加を通じて、海外の優れた大学のFDへの取り組みの実態を知り、かつ授業改善方法についての新たな知見をえること、3) テーマ別研修において効果的な授業改善法について幅広い情報を得ることを目的として、このプロジェクトに取り組むこととした。

2. 取り組みの実際

ここでは、ビデオ分析による授業改善の取り組みと、スタンフォード大学における研修とを分けて記述する。

2-1. ビデオ分析による授業改善

筆者が担当する授業のうち、特定の授業を取り上げ、これを数回にわたって撮影したビデオ記録および授業記録をもとに、授業分析を行った。分析の対象とした授業題目は「コミュニケーションの理論と実際Ⅱ」で、内容としては障害のある子どもと教育的係わり合いをもつ上であらゆる方法の基礎をなすとされるコミュニケーションについて取り上げ、種々のコミュニケーション障害に関する基礎的な視点を整理し、かつ具体的な方法について知るとともに、自らのコミュニケーションの捉え方について疑似体験を通じて理解することを目的とした授業である。今回の講義は、前期に行った同タイトルの授業に継続して行われるもので、前期ではコミュニケーション障害を関係論からとらえる視点について文献やビデオ資料を通じて理論的に学び、後期は障害のある子どもの中でも特に感覚障害をはじめとする情報情報障害状況について焦点化し、障害の独自性に対する理解と具体的係

わり合いでの方法を学ぶこととした、すなわち、前期はコミュニケーション障害についての全体像を把握するとともに、これを「関係の障害」という観点からとらえることに重点があり、後期はより具体的状況に即した具体的対応方法について基本的なことを学ぶことに重点がある。対象は大学2年生で主として当大学言語障害教育教員養成課程に属している。その中の少なくない数の学生は将来、聾学校教員もしくは通常学校「ことばの教室」をはじめとする特別支援教育の現場で働くことを希望している。したがって、内容的に教育実践に直結する内容を盛り込むことを重視した。今年度の履修希望者が18名で、その中には、現職教員も含まれている。また、聴覚に障害のある学生も参加しており、ノートテイクやパソコン要約筆記、事前資料配付などの配慮も行った。またこの授業は、後期に提供されているが、前期に実施された「コミュニケーションの理論と実際Ⅰ」を履修していることが条件になっている。

ビデオ撮影は4回にわたって行われた。なおビデオに収録したものは、全4回のうち、2回は「感覚重複障害」を扱った概説と疑似体験であり、残り2回は「拡大代替コミュニケーション」を扱ったものから概説を扱った1回および実習的内容を伴った1回であった。授業フォーマットの観点から言えば講義スタイル（伝統的方法）と、体験実習の二つを実施した。印象としては、講義スタイルよりも体験的なもののほうが、授業全体に活気があり、学生も強い印象をもつようであった。けれども、一見静的ではあっても、講義において学生自身が自ら問題発見するということもみられており、これは後述する講義感想メモによって明らかになったが、やはり話題をどのように提示し、かつわかりやすく講述するか、内容と教授法を吟味することが重要であることもわかった。授業分析は、ビデオ映像をグループ内に公開することで、意見をもらうプロンプターの活用を予定していたが、まだこの点については取り組みが進んでいない。現在まだ分析の途中であるが、今後はリフレクションシート（藤沢市教育文化センター）などの活用も考えている。振り返りとしては、名古屋大学版ティーチングチップス

(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/index.html>)を参考にして行っている。これまでのところ、まずコースデザインにおいて到達目標の設定が曖昧で学生に対して明確に提示できていないこと、コース全体の構造化がストーリー性に欠けていて、寄せ集めであることなどがある。授業評価については、毎回小さなコメント用紙を配布し、これに授業内容についての質問や、授業から発想した事柄、あるいは講義に対する感想を記入させ、次の講義においてはかならずそのコメントに言及するとともに、講義の内容の精選や進度の調整に役立ててきたが、これは有効であった。シラバスについては、本学の所定のものがいわゆるコース概要にすぎないので、これも新たに作成する必要があることがわかった。

2-2. スタンフォード大学CTL訪問研修

CTLが実際に実施しているワークショップのエッセンスを取り組んだ研修に参加した。内容は、主にシラバス作成にあたってのコースデザインの考え方や、アクティブラーニング手法の採用など、どちらかというと技術的側面を中心としたワークショップと、スタンフ

オード大のファカルティーとの協議、および実際の授業見学であった。大学で教鞭をとることの経験が少なかった筆者にとっては、これまでに開発されてきた教授法を大学の講義に応用することの効果について、実際のところを確かめてみたかったが、今回はそこまでの情報収集には至らなかった。協議を通じて、講義手法や学生指導における種々の困難が、様々な点で日本の大学と共通している点もあり、またスタンフォード大学という、ある意味で米国のトップクラスの大学であるからこそ出来ること、あるいはそれ故に抱える課題などもあるように思われた。筆者を含め、教授法についてまだ確立したものがない新任者やティーチングアシスタントにとって、CTLの働きはきわめて有効なものであろう。このセンターの働きによって、教授法改善のFDは促進されるが、もう一方で全体のカリキュラムマネジメントをどう進めていくかという問題がある。本学は教員養成大学であり、近年の教育改革と免許制度の改変に応じて、あらたなカリキュラム編成の必要性がいわれているが、こういったより大きな視点の問題解決についても、今後スタンフォード大学を初め米国の大学でどのように取り組まれているか、情報を集めていきたい。

3. 今後の課題

授業分析について、上述のようにさらに進めていく予定である。映像を公開している他の先生方のものについても、できるだけ視聴して参考にしたい。特にプロンプターの活用について今後取り組んでみたいと考えている。

コースデザインについては、スタンフォード大学での研修でもたくさんのヒントを得たので、これらを元に次年度の講義についてデザインを練り、シラバス作成を行う予定である。

また、授業分析の仕方や、実際の効果的な教授法についてもさらに情報を収集したいと考えている。これまでは、テーマ別の研修に参加することができなかったが、これについても次年度は可能な限り参加していきたい。

東北大学「国際連携を活かした高等教育システムの構築」プロジェクト

ライフデザイングループ

研修成果中間報告

《ライフデザイングループ》

吉武清實	高等教育開発推進センター教授
北原良夫	高等教育開発推進センター助教授
池田忠義	高等教育開発推進センター助教授
末松和子	経済学研究科講師
高野 明	高等教育開発推進センター講師
嶺岸幸子	教育・学生支援部学生支援課課長補佐
八木美保子	教育学研究科博士課程前期二年

目 次

I	進路・就職に関するアンケート調査	2
II	国内大学視察報告	11
III	米国の大学の視察報告	17
IV	「ライフ・キャリアデザイン」の授業の試み（計画）	41

I 進路・就職に関するアンケート調査

1 はじめに

東北大学の学部と大学院に在籍する学生を対象にライフデザイン・キャリア教育に関する基礎資料を得ることを目的に、すべての東北大学生を対象に、平成 17 年 11 月にアンケート調査を実施し、23.1%に当たる 4,130 名から回答を得た。

＜単位：人＞

	学部	研究科	合計
文学部・文学研究科	210	81	291
教育学部・教育学研究科	72	39	111
法学部・法学研究科	133	25	158
経済学部・経済学研究科	198	48	246
理学部・理学研究科	295	160	455
医学部・医学系研究科	121	182	303
歯学部・歯学研究科	29	49	78
薬学部・薬学研究科	114	92	206
工学部・工学研究科	759	719	1478
農学部・農学研究科	173	106	279
国際文化研究科		48	48
情報科学研究科		187	187
生命科学研究科		73	73
環境科学研究科		120	120
教育情報学教育部		1	1
不明	51	45	96
合計	2,155	1,975	4,130

2 卒業後の予定について

■希望する進路（学部生対象）

（質問：あなたの卒業後の予定を教えてください）

進学希望者が文系では 22.6%，理系では 70.2%である。

就職希望は，文系で 60.4%，理系で 20.1%である。全体で見ると，1 年次から 3 年次まで就職希望が漸増し，4 年生で減少し，反対に進学希望者が増加する。

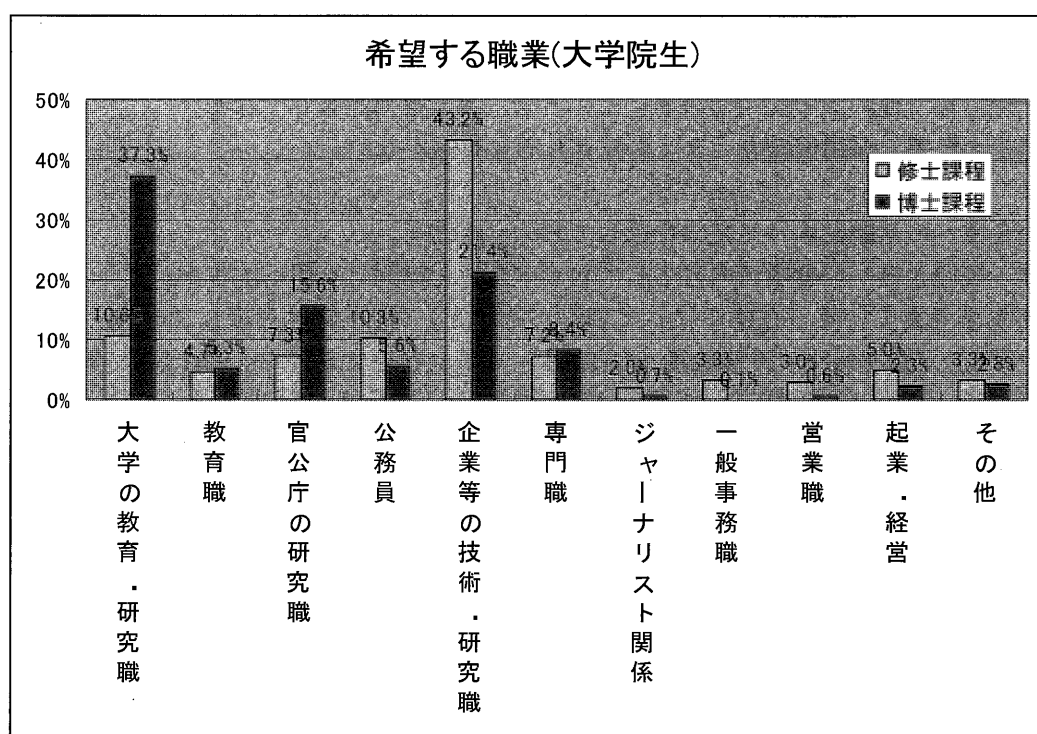
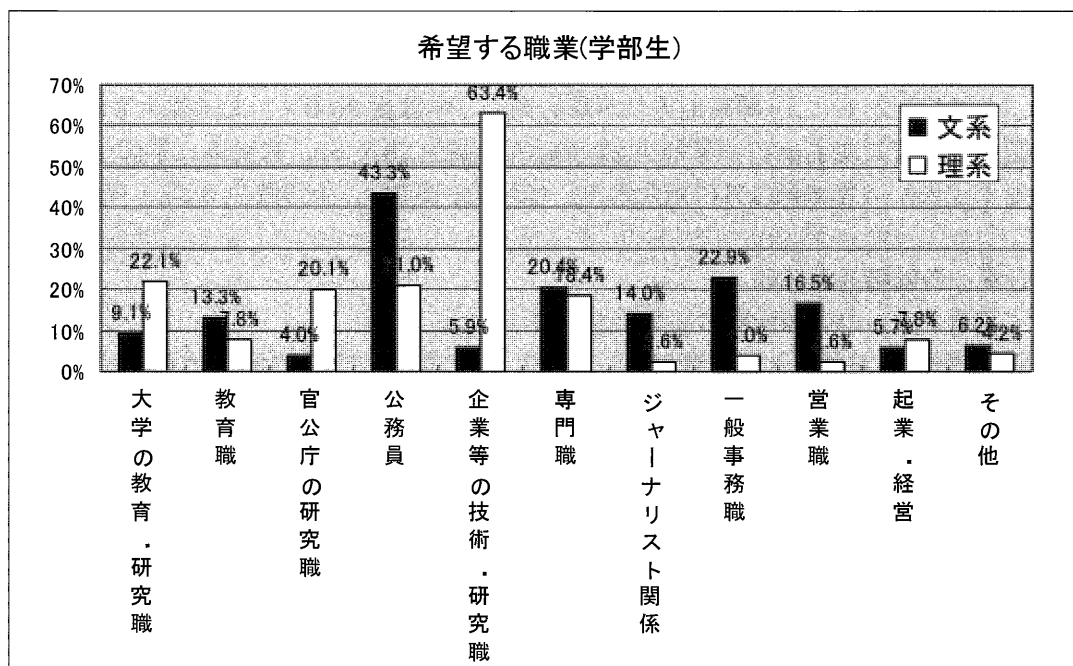
	無回答	進学	就職	その他	未定	複数回答	合計
無回答	23	16	10	0	2	0	51
1 年目	14	192	86	2	64	3	361
2 年目	9	134	76	3	38	1	261
3 年目	21	294	200	6	54	3	578
4 年目	10	492	199	13	39	3	756
5 年目	4	28	32	0	15	0	79
6 年目	1	3	40	2	0	0	46
それ以上	0	4	15	0	4	0	23
合計	82	1,163	658	26	216	10	2,155

■希望する職業

（質問：どのような職業に就きたいと思いますか（複数回答可））

学部生では，文系は「公務員」（43.3%），「一般事務」（22.9%），「専門職」（20.4%）等。理系は，「企業等の技術・研究職」（63.4%），「大学の教育・研究職」（22.1%），「公務員」（21.0%）等。

大学院生では，修士課程は「企業等の技術・研究職」（43.2%），「大学の教育・研究職」（10.6%），「公務員」（10.3%）等。博士課程は「大学の教育・研究職」（37.3%），「企業等の技術・研究職」（21.4%），「官公庁の研究職」（15.6%）等。



■就職する際に重視すること

(質問：就職する際に重視することは何ですか(複数回答可))

学部生では、「収入」(58.4%)、「自分の適性」(56.5%)、「安定性」(51.7%)、「将来性」(38.8%)、「勤務地」(34.8%)、「業種」(33.5%)等。大学院生では、「自分の適性」(52.1%)、「収入」(50.1%)、「将来性」(39.9%)、「安定性」(39.9%)、「専門性」(38.2%)、「業種」(36.5%)等。

■就職について希望する地域

(質問：どの地域に就職を希望していますか)

学部生、大学院生ともに、「関東地方」が最も高く(学部生 30.0%, 大学院生 31.8%), 次いで、「国内ならどこでもよい」(学部生 21.3%, 大学院生 28.2%), 「宮城県」(学部生 20.8%, 大学院生 17.5%), 「宮城県以外の東北地方」(学部生 10.7%, 大学院生 6.2%) 等。

■民間企業への就職活動経験

(質問：民間企業への就職活動の経験がありますか)

「就職活動経験あり」とした者は、4年生以上の学部生で 21.1%, 大学院生で 32.5% であった。

・民間企業への活動に際しての不安や障害

声

「どのような手順で就職活動をすればよいか分からない」

「(就職活動で訪れる) 東京への交通費・滞在費が負担になる」

「大学からのサポートが不十分」

「研究との両立が難しい」

「研究室・教員からの理解がほしい」

「就職先の選択にあたって、大学推薦とかち合うと一般応募を制限される」

「一般応募で他の人の採用が決まっていると、大学推薦が厳しくなる」

「自己 PR 等、採用面接をうまくのりきれるか自信がない」

■民間企業への活動に向けて在学中にしておくべきこと

(質問：民間企業への就職に向けてしておくべきことは何だと思いますか)

学部生が考えている「在学中にしておくべきこと」は、「自己分析」(34.3%), 次いで、「業界研究」(27.8%), 「資格取得」(21.8%), 「インターンシップ」(21.5%) 等。大学院生では、「自己分析」(42.6%), 「業界研究」(37.3%), 「インターンシップ」(17.2%), 「OB・OG 訪問」(14.7%) 等。

■就職に向けた講座・学校の利用

(質問：就職あるいは進路変更に向けて何らかの講座・学校を利用していますか)

	無回答	公務員 試験の ための	教員採 用試験 のための	資格取 得の ための	その他 の	利用して いない	合計
無回答	34			1	1	15	51
1 年目	110		1	9	2	239	361
2 年目	74	4	1	9	2	171	261
3 年目	155	39	7	17	14	346	578
4 年目	211	32	3	14	7	489	756
5 年目	21	4		3		51	79
6 年目	15			3	1	27	46
それ以上	5			1		17	23
合計	625	79	12	57	27	1355	2155

何らかの講座・学校を利用している者の割合は、学部3年生で最も高く 18.2%，大学院生では 8.7%。

■就職資料室の認知度

(質問：川内キャンパスに設置されている全学生が利用できる就職資料室を知っていますか)

「知らない」という回答が、学部生で 61.4%，大学院生で 72.5%。本学では、川内北キャンパスおよび川内南キャンパスに就職資料室が設置されているが、認知度が低く、学生へのより積極的な広報が望まれることが明らかになった。

■キャリア形成に関する授業の受講希望

(質問：キャリア形成（仕事に関わる人生の模索）の講義があつたら受けたいと思いますか)

学部生の 40.7%が受講を希望すると回答した。

■就職支援に関して大学が行っているサービスを知った経緯

(質問：就職支援に関して大学で行っているサービスをどのようにして知りましたか)

学部生では、「掲示を見て」(58.0%)、「友人から」(15.0%)、「ホームページから」(10.9%)等。大学院生では、「掲示を見て」(46.4%)、「友人から」(17.1%)、「ホームページから」(14.0%)等。学生がアクセスしやすいホームページを使った情報提供の充実が望まれる。

3 キャリア支援に関して、大学に望むこと（自由記述）

（質問：就職支援に関して大学に望むことは何ですか）

今回調査で、就職資料室の充実や全学学生が利用できるオンラインでの就職情報検索システムを作してほしいという情報提供の改善要望や、学年に見合ったライフデザインやキャリア教育を求める声、履歴書やエントリーシートの書き方、面接の受け方などスキルに関する支援要望、留学生・社会人学生・博士課程学生への就職支援を望む声、さらにキャリア支援に関する学部間・キャンパス間の不公平への改善要望が寄せられた。

理系大学院生からは、推薦制度の時期・方法・制約についての改善を求める声が多数寄せられた。

（平成 18 年 4 月 1 日より、東北大学はキャリア支援センターを発足させ、これらの声を参考にキャリア支援・教育の体制を充実させていく計画である。）

声

- ・ 就職関連情報：「web での情報提供の充実を」「わかりやすく迅速な就職関連情報の公開、更新を」
- ・ 相談・個別支援、施設・スタッフ配備：「困ったときは助けてほしい」「きめ細やかに個々の学生への対応」「進路相談の機会を設けてほしい」「専門性のある人の常駐を」「一緒に就職活動をしている仲間と交流でき、近寄りやすい雰囲気作りをしてほしい」
- ・ キャリア教育：「1, 2 年生のうちからキャリア形成の講義など、将来について考えるきっかけ作りを」（学部生）「早いうちから将来社会人になることを意識させるようにした方がいいと思う」（院生）
- ・ 推薦制度（理系）：「推薦制度の時期・方法・制約を学生の考えを取り入れて変えてほしい」（理系院生）

4 卒業後どのような人生を歩みたいかのイメージの有無、その内容

（質問：卒業後どのような人生を歩みたいかというイメージがありますか。あると答えた人はよろしければ具体的に記述してください）

<学部生>

学部生では、今回の調査に回答した 2,155 人中 867 人が、卒業後どのような人生を歩みたいかというイメージが「ある」と回答した。自由記述からは、様々な可能性を模索している学生の姿がうかがわれた。具体的な計画には至らずに、「自分にあった」「自分を生かせる」職業に就くこと、「幸せな生活」「普通の生活」を漠然と希望している学生も多い。また、約 4 割の学生が大学で身につけた専門性を生かすことに言及している。余暇の充実、社会・地域貢献に言及する学生もいた。また、終身雇用にこだわらないキャリア設計を考えている学生も約 1 割いた。

声

- ・ 「自分の適性（性格や能力）に合う仕事をしてみたいです。それさえあれば大抵のことには耐えられるので、それ以上のことはあまり考えていません」
- ・ 「卒業したら、できれば早い時期に結婚したい。仕事は大事だが、家族を第一に、そして自分自身が人間的な時間を持てる程度に頑張りたい」
- ・ 「サークル活動をしていて、起業して中小企業の社長になる方が自分には向いているのかと思った。けれど何が時代に求められるのかもわからないし、起業する勇気がない。夢見ていた教職が、教育実習によって頓挫してしまい、正直将来の目標を見失っ

てしまった」

- ・ 「医療に関するものの研究をしたい。自分が大学で学んだものを生かす職に就きたい」
- ・ 「自分のやりたいことをはっきりとさせたうえで、それを大学に残ってやっていくのか、企業に就職して自力でやっていくのかを決め、最終的には社会への恩返しとして自分の出来る限りの貢献をしたい」
- ・ 「民間企業に就職して社会経験を積み、その後 NPO, NGO などの活動を行う」
- ・ 「総合職として就職し、数年間働きながら貯金し、英語圏の大学院に進学。さらに、修士号が必要な職業に再就職する」

<大学院生>

大学院生では、今回の調査に回答した 1,975 人中 1,106 人が「ある」と回答している。自由記述からは、大学院で身につけた専門性を生かして世界的な活躍や社会貢献を志す学生が多いことが明らかになった。一方で専門以外の知識、技術の習得に言及する学生もいた。社会人学生もいるためか、具体的なキャリアチェンジに言及している記述が約 2 割あった。日本で学んだことを自国に生かしたいと考えている留学生も散見された。大学院生でも、ライフデザインに対して漠然としたイメージを抱くにとどまり、具体的な計画には至らない学生も多い。

声

- ・ 「ささやかで平和な暮らしができればそれで良い」
- ・ 「大学で行ってきた勉強や研究に関係がなくとも、自分の興味、関心のあることに関連した職業につき、仕事と同時に家庭をもって子供も欲しい。収入を増やして裕福になるよりも、小さくても温かい家庭が築けたら、それで幸せだと思う」
- ・ 「現職を辞め（区切りの良いところで）、研究を行える職につきたい」
- ・ 「50 才くらいまで医者。50 才～定年女子高教師」
- ・ 「私は中国からの留学生として、卒業してから、日本のいい会社に就職したくて、日本の会社の優れている企業文化や、管理方式などを学んで、中国の会社や、社会に日本のよいところを伝えたい」
- ・ 「専門性のある職業に就き、第一人者として海外で活躍したい」
- ・ 「企業の研究職に就き、地道な努力を続けて社会に貢献する」
- ・ 「工学の専門知識を基礎として起業し、専門家として活躍する」

参考資料

進路状況調 (H16年度卒業 学部)

平成17年4月1日現在

区分 学部	卒業者数		進学者数		臨床研修医 等		就職者数		就職先内訳				その他	
									県内		県外			
文	204	(85)	42	(18)			92	(37)	16	(4)	76	(33)	70	(30)
教	83	(39)	28	(11)			35	(21)	10	(7)	25	(14)	20	(7)
法	198	(54)	47	(11)			50	(17)	3	(1)	47	(16)	101	(26)
経	299	(62)	22	(8)			206	(42)	42	(12)	164	(30)	71	(12)
理	329	(47)	266	(40)			44	(6)	6	(0)	38	(6)	19	(1)
医	113	(19)			112	(18)							1	(1)
歯	52	(13)	24	(6)	20	(5)							8	(2)
薬	86	(24)	72	(22)			10	(0)	2	(0)	8	(0)	4	(2)
工	915	(72)	749	(57)			121	(11)	17	(2)	104	(9)	45	(4)
農	147	(51)	115	(40)			21	(8)	5	(3)	16	(5)	11	(3)
計	2,426	(466)	1,365	(213)	132	(23)	579	(142)	101	(29)	478	(113)	350	(88)

() は女子で内数。その他・・・研究生，科目等履修生，国家公務員試験準備，未就職者等

その他・・・研究生，科目等履修生，国家公務員試験準備，美就職者等

産業別就職者数

平成 17 年 4 月 1 日現在

〔学部〕

学部 区分	文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	医学部	歯学部	薬学部	工学部	農学部	計
ABC 農・林・漁業	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
D 鉱業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E 建設業	0	0	1	0	0	0	0	0	4	0	5
F 製造業	16	3	6	43	4	0	0	0	60	4	136
G 電気・ガス・熱供給・水道業	0	0	2	10	0	0	0	0	3	0	15
H 情報通信業	14	4	0	20	6	0	0	0	14	0	58
I 運輸業	0	0	1	2	2	0	0	0	1	0	6
J 卸売・小売業	6	1	0	8	0	0	0	6	1	0	22
K 金融・保険業	6	2	11	65	5	0	0	0	6	1	96
L 不動産業	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2
M 飲食店・宿泊業	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
N 医療・福祉	2	1	1	0	0	0	0	3	0	1	8
O 教育・学習支援業	10	11	0	13	10	0	0	0	5	3	52
P 複合サービス事業	2	0	0	1	1	0	0	0	2	1	7
Q サービス業	15	3	4	7	3	0	0	1	7	2	42
R 公務	19	10	23	36	10	0	0	0	14	8	120
S その他	1	0	0	0	2	0	0	0	3	1	7
合 計	92	35	50	206	44	0	0	10	121	21	579

〔大学院〕

研究科（大学院） 区分	文学研究科	教育学研究科	法学研究科	経済学研究科	理学研究科	医学系研究科	歯学研究科	薬学研究科	工学研究科	農学研究科	国際文化研究科	情報科学研究科	生命科学研究科	環境科学研究科	教育情報学 教育部	計
ABC 農・林・漁業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D 鉱業	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	3
E 建設業	0	0	0	1	0	0	0	0	34	0	1	0	1	4	0	41
F 製造業	3	0	0	3	67	0	0	36	450	47	1	65	29	54	0	755
G 電気・ガス・熱供給・水道業	0	0	0	1	0	0	0	0	25	0	0	2	1	1	0	30
H 情報通信業	5	1	0	3	14	0	0	0	32	0	4	26	0	1	0	86
I 運輸業	0	0	0	2	1	0	0	0	14	0	0	2	0	0	0	19
J 卸売・小売業	1	0	0	2	0	0	0	5	3	8	0	0	2	0	0	21
K 金融・保険業	0	0	2	1	5	0	0	0	5	2	1	0	0	0	0	16
L 不動産業	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	4
M 飲食店・宿泊業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
N 医療・福祉	0	4	0	0	4	95	25	14	1	5	0	2	1	0	1	152
O 教育・学習支援業	26	8	0	5	13	7	2	1	34	9	13	16	8	0	3	145
P 複合サービス事業	0	2	0	0	8	0	0	0	10	1	0	0	2	1	0	24
Q サービス業	2	2	4	3	60	5	0	5	35	23	5	10	13	3	0	170
R 公務	4	4	9	5	7	0	0	3	30	13	2	6	4	4	0	91
S その他	0	0	0	6	12	0	0	0	8	0	0	3	3	2	0	34
合 計	41	21	15	32	192	107	27	64	685	110	27	132	64	71	4	1,592

Ⅱ 国内大学視察報告

1.訪問期間：平成17年9月26日～9月28日

2.視察先

○広島大学（9月26日）

○立命館大学（9月27日）

○名古屋大学（9月28日）

3.訪問者 吉武清實 高等教育開発推進センター教授

北原良夫 高等教育開発推進センター助教授

嶺岸幸子 教育・学生支援部学生支援課課長補佐

八木美保子 教育学研究科博士課程前期二年

4.報告事項

主な調査項目は、組織名、組織の目標、組織の運営、スペース、スタッフ、年間予算、提供プログラム、学生の活用、利用者数の9項目である。

【広島大学】

■視察組織名：キャリアセンター

■目標：挑戦する意欲を持ち、行動を起こす人材が育つ広島大学

■運営：学生担当副学長に直属。各部局にはそれぞれキャリア支援担当の職員と教員がおり、年2回連絡会を実施。キャリアセンターでは主に学部不問職業を扱っている。

■スペース：学生会館2階。相談室、相談窓口、情報検索コーナー（パソコン12台）、スタッフ室（教員も職員も同じフロアに12名）、求人情報コーナー

■スタッフ：12名

職員…7名（内、非常勤2名）

選任教員…2名（教授1名、助教授1名）

非常勤相談員…3名（週3回午後 各日1名）

※選任教員は相談も担当している。

■年間予算：600万円（人件費含まず）

■提供プログラム：

① キャリア教育に関する授業 2科目実施

・総合科目「職業選択と自己実現A・B」

対象…2年次以降

単位…前後期各2単位

・総合科目「インターンシップとキャリアデザイン」

対象…2年次以降

単位…前後期各2単位

② インターンシップ

大学独自のインターンシップに加え、広島県経営者協会インターンシップを活用

③ アルバイト斡旋

情報の提供と受付を実施。家庭教師については指導講習会を開催している。

④ キャリア・就職ガイダンス

「キャリアセミナー」, 「就職活動基本ガイダンス」, 「公務員ガイダンス」, 「業界セミナー」 (20 社), 「企業セミナー」 (100 社) などに加え, 新入生等オリエンテーションでも実施。

⑤ 進路・就職相談

毎日 13 時から 17 時 (原則要予約)

⑥ 進路・就職情報の提供

媒体…「もみじ (もっとみぢかにじょうほうを)」 (web 上の就職支援システム)

広報誌等

内容…求人情報, 合同セミナースケジュール, OB・OG 情報, 就職ガイダンス開催案内等に関する情報

⑦ 出版物

- ・キャリアガイド
- ・就職の手引き
- ・納得のいく就職活動のために
- ・キャリアセンターニュース

⑧ 周知方法

- ・3 年生, M1 の全学生にメール
- ・各部局に情報を掲示
- ・「もみじ」 (アカウント入力でどこからでも閲覧可能)

⑨ 既卒者へのサービス

サービス提供期間…6 ヶ月, 3 ヶ月, 3 ヶ月の最長 1 年間

サービス内容…「もみじ」の利用, 相談

⑩ 留学生へのサービス

不明

■学生の活用：在学者…なし OB・OG…不明

■2004 年度利用者数：※ () は 2005 年度 8 月まで

<就職に関する相談>

- ①就職活動全般 46 (72), ②公務員/教員試験 50 (42), ③内定関連 26 (52),
④自己理解, 応募書類 47 (71), ⑤面接, 討議, プレゼンテーション 62 (84),
⑥進路, 会社選択 16 (14) 計 246 (335)

<進路/生活相談>

- ①履修関連 1 (2), ②進路選択 7 (14), ③キャリアプラン 2 (4),
④ライフプラン 0 (0), ⑤学生生活 (インターンシップ等) 24 (13) 計 34 (33)

【立命館大学】

■視察組織名：キャリアセンター

■目標：学業・学問へのモチベーションを上げる、また、その活性化を図る／進路の動機付け／モデル提示

■運営：学生担当常務理事つき。部長は任期2年で総長人事，1部2課制（衣笠キャンパスと琵琶湖草津キャンパスに1課ずつ）

■スペース：1フロアに相談窓口，事務室，掲示コーナー，およびインターンシップオフィス。別フロアに掲示コーナーおよびパソコン（50台）設置の情報検索室

■スタッフ：衣笠キャンパスの場合、27名

職員…常勤10名（相談，企業開拓）非常勤15名（事務中心）

選任教員…部長1名，副部長1名

■年間予算：1億円（人件費含まず）

■提供プログラム：

① キャリア教育に関する授業 25科目実施

※ コーディネーターの教員と連携して，数コマを職員が担当

※ 各学部でのカリキュラムにおける位置づけによって履修学生の人数が決まるので各学部のカリキュラム作成時に参加する必要有り

② インターンシップ

インターンシップオフィスで情報提供や斡旋を実施。単位認定型の「全学インターンシップ・プログラム」がある。（インターンシップ教学委員会が受け入れ先と覚書を交わした「協定型インターンシップ」，企業や団体がインターネットなどを通して独自に募集する「インディペンデント型インターンシップ」，京都や滋賀などの大学・短期大学が連携している「大学コンソーシアム京都」で開設されているインターンシップの3種類）

※インターンシップ先はできるだけ多様に。職員側が「学生に就職して欲しい企業」を開拓することもある。

③ アルバイト斡旋

なし

④ キャリア・就職ガイダンス

基本ガイダンス

⑤ 進路・就職相談

予約不要，一日中

⑥ 進路・就職情報の提供

・ホームページ

・掲示

⑦ 出版物

・父兄向け

・企業向け「インターンシップガイド」

- ・学生向け「キャリアサポートガイド」

⑧ 周知方法

- ・メール（担当者のみが学生のアドレスの閲覧とメールの発信が可能）
- ・web
- ・1年生へのコミット…全員集合する機会に呼びかける
- ・構内の掲示

⑨ 既卒者へのサービス

全て無料で継続して実施

⑩ 留学生へのサービス

留学生支援プログラムあり

■学生の活用：「スチューデントネットワーク」（PL，JA，CA）の活用

○在学者…PL（プレイスマントリーダー）とJA（ジュニアアドバイザー）

3回生春に各ゼミやサークルからPL（プレイスマントリーダー）を選出。（ただし学生の自主性にまかされているため、やりたい学生は全員活動可能）各団体の就職活動のリーダーとしてゼミ懇談会，就職合宿，模擬面接会などを企画・実施する。

4回生で進路が決定した学生からJA（ジュニアアドバイザー）を募集。体験報告や就職懇談会などで後輩の就職活動を原則無償で支援してもらう。キャリアセンターの支援プログラムやPLとも連携して活動する。

○OB・OG…CA（キャリアアドバイザー）

※PLの活動スペースは各団体の活動スペースやキャリアセンター。活動費は企画書によってキャリアセンターが支給。キャリアセンター職員も活動を支援する。

■利用者数：不明

■特徴：

1回生から低回生支援プログラムがあり，その後ベーシック就職支援プログラムに加え女子学生支援プログラム，業界別支援プログラム，アドバンスプログラム，留学生支援プログラムなど学生の個性に応じたプログラムを展開している。

学内には公務員講座やインテリアコーディネーター講座などを開講するエクステンションセンター，ボランティア活動を斡旋するボランティアセンター，教員採用試験対策講座を開講している教職支援センターなどが別組織で活動している。キャリアセンターが進路全体の窓口となり，その後各センターへと分化していく。教職支援センターは教学部，エクステンションセンターは教育研究事業部で理事長直轄で収益を追求。

【名古屋大学】

■視察組織名：学務部学生総合支援課就職支援室，学生相談総合センター就職相談部門

■目標：学生のキャリア形成をふくめた将来設計を適切に指導する。

■運営：学生相談総合センターで，勉強方法，対人関係，自分自身，将来のこと等学生生活全般に関わる「学生相談」（臨床心理学の専門家が担当），「メンタルヘルス相談」（精神科医が担当），主に就職活動の具体的な方法に関する「就職相談」（キャリアアカウンセラーが担当）の三領域の相談を横断的に実施している。

■スペース：1 階に学生相談部門，2 階に就職支援室（窓口，情報検索コーナー，就活サポーターの専用スペース，求人情報コーナーおよび相談室 2 室）

■スタッフ：5 名

職員…3 名（室長 1 名，インターンシップ担当 1 名，受付（非常勤）1 名）

専任教員…助手 1 名，特別教授 1 名（週 30 時間 2 年契約）共に相談も担当

■年間予算：不明

■提供プログラム：

① キャリア教育に関する授業 10 科目

・教養科目「キャリア形成論」

対象：2 年生以上、選択科目

単位：前後期各 2 単位

概要：就職相談部門助手及び学生相談部門助教授及び高等教育研究センター助教授が担当

※他にも学部・研究科単位で実施されている（平成 17 年度は 6 学部・研究科で 9 科目実施）

② インターンシップ

・法・教育学部はインターンシップを単位認定（法学部は 2 年生から）

・インターンシップ先は各部局で開拓

・（1997 年より）東海地域インターンシップ推進協議会（日本福祉大学に事務局，企業 94 社が登録しており，web で登録）を活用

・毎年報告書を作成し，学生に働きかける

③ アルバイト斡旋

・家庭教師の斡旋

④ キャリア・就職ガイダンス

・4 年前から 1,2 年生向けの就職ガイダンスを実施

・3,4 年生，大学院生向けの就職ガイダンス

⑤ 進路・就職相談

毎日 10 時から 17 時（水，木曜日は相談員 1 名）

⑥ 進路・就職情報の提供

媒体：「かたくり（かたくりクルート）」（web 上の就職情報システム）

内容：基本情報、求人情報、会社説明会の開催情報等

⑦ 出版物

- ・就職活動の手引

⑧ 周知方法

- ・ホームページ
- ・1年生対象の全学オリエンテーション
- ・各種掲示

⑨ 既卒者へのサービス

不明

⑩ 留学生へのサービス

留学生センターと並行して留学生就職支援プログラムを実施

■学生の活用：

○在学者…就活サポーター：40人（ボランティア）

平成14年度より実施。サポーターをすることによって学生のリーダーシップを育成することを目的としている。就職が決まった学生から参加していくため、引継ぎが不安定であることが課題。3年生の段階からのつながり作りが必要。就活サポーターの育成・フォロー・ケアは就職相談部門の助手が尽力。平成16年度には総長顕彰を受賞。

○学生の就職サークル（Onn）

学生が自発的に活動していたサークルの支援も行っている。南山大学など他大学の学生も参加している。

※Onnと就活サポーターはお互いに交流している

○OB・OG…不明

■利用者数：不明

Ⅲ 米国の大学の視察報告

1. 訪問期間：平成 18 年 3 月 8 日～3 月 24 日

2. 視察先

○スタンフォード大学（3 月 8 日）

○カリフォルニア大学アーヴァイン校（3 月 10 日）

○ミネソタ大学（3 月 13 日）

○シカゴ大学（3 月 15 日）

○イリノイ大学（3 月 16, 17 日）

○インディアナ大学（3 月 21, 22 日）

3. 訪問者 吉武清實 高等教育開発推進センター 教授
北原良夫 高等教育開発推進センター 助教授
末松和子 経済学研究科 講師
高野 明 高等教育開発推進センター 講師
嶺岸幸子 教育・学生支援部学生支援課課長補佐
八木美保子 教育学研究科博士課程前期 2 年

4. 報告事項

本視察では、①組織の構成および目的、②組織の運営、③提供しているサービス、④他機関との連携および人材リソースの活用の 4 つの観点から各大学の組織を調査した。それぞれの調査項目は以下の通りである。

< Organization of the Center >	
1. Function and position of the center within the university	
* organization chart showing the center's relationships with other facilities and offices within the university.	
2. What are expectations of students / parents / the university / alumni / employers for the center?	
3. Differences in expectation between the university administrators and the staff for the center's role at your institution if there is any.	
4. Benefits and the limitations of having separate counseling functions such as a career center and a counseling center within the university.	
5. Efforts made to increase the benefits and to deal with the limitations.	
< Management of the Center >	
1. Numbers of staff, their job titles, positions, and responsibilities at the center.	
2. Staff qualifications.	
3. Staff wage system, how it is managed, and who has authority over personnel issues.	
4. Staff development programs for the center's staff	

5. Annual budget of the center and how it is decided every year.

6. Evaluation (center, programs, and staff). Standardize evaluation, if there is any.

7. Stance for confidentiality and informed consent.

<Services provided by the Center>

1. People you serve and fees if there is any.

2. Way to understand users' needs for services.

3. Descriptions of your career development/education programs.

4. Ways these programs are developed

5. Some of the most popular programs among users and what the center considers important.

6. What kind of counseling needs do your students have?

7. What types of counseling do you offer for these students?

8. To what extent do you value career counseling at CDC?

9. For what reasons do you recommend student to experience internship?

10. How are these internships usually arranged?

11. How are internships integrated into the curriculum?

12. Ways to deal with diverse student population such as minority, low SES, special needs, and international students.

13. Numbers of users (students, parents, staff, alumni, companies).

14. Use of internet and email

15. Challenges in providing services and ways to deal with them

16. Out-reach programs

17. How are these programs arranged?

18. In what ways does the university support these arrangements?

<Collaboration with other facilities>

1. Collaboration with other facilities and organizations within and outside the university.

2. Use of human resources within and outside the university such as student volunteers, alumni and other public/private service providers.

3. Collaboration with other universities for students transferring to/from?

【スタンフォード大学】

■視察組織名：Career Development Center

■組織の構成および目的

学長の直轄組織で、Student Affairs 内に Career Development Center, Medical Services, Register's Office, Residential Education の 4 部門がある。学部生・大学院生・卒業生への生涯にわたるキャリア発達のためのガイダンスとリソースを提供することを目的としている。

■組織の運営

1) スタッフの人数および資格

22 人 (Director 1 人, Assistant D 4 人, カウンセラー(D, AD 含む)11 人, インターン (修士) 2 人, 受付 2 人, ビジネスマネージャー1 人, ネットワーキング 1 人, 司書 1 人), ピアカウンセラー (学部生) 6 人。

修士 (キャリアカウンセリング専攻もしくは、もしくは他の専攻で Credential で) が必要。実務経験があれば尚良い。

2) スタッフの評価と賃金制度

スタッフの評価と管理は Director が行う。給与システムは職員の枠 (ファカルティスタッフより低い)。

3) スタッフ向けの研修

スタッフ向けのワークショップをやっている。スーパービジョンのシステムはなく、必要に応じて個人的に受ける。

4) 予算

1.489 百万ドル (2006 会計)。そのうち、1.341 百万ドルがスタッフの賃金、4230 千ドルの利益。企業へのサービス (Job Fair や Online サービスへの登録料)、卒業生へのサービス、レジュメサービスなどが有料。

5) 組織の評価

ワークショップなどのプログラム評価は毎回アンケートを行っている、その他に、毎年自己評価を行っている。スタッフの評価は Director が実施。

6) 個人情報への考慮、インフォームドコンセント

必ずドア付きの部屋で面接を行っている。データの管理も厳密にしている。

■提供しているサービス

1) サービス提供対象者と料金

学部生、大学院生、卒業生。基本的に無料 (サービスによっては有料)。

2) 利用者のニーズの把握

プログラム毎にアンケート調査を行っている。卒業前後の調査 (28%の回収率)。

3) 提供しているキャリア発達／教育プログラムとその改善方法

カウンセリングサービス（面接回数 3,471 回，ワークショップ 44 回，アウトリーチ 181 回などを含む），企業向けサービス（情報提供，Job Fair への参加など），リファレンス・ファイル・サービス（履歴書（レジュメ）・推薦状の管理など）。

カウンセラーがそれぞれのプログラムを分担して担当し，改善していく。

4) 主な相談内容と相談への対応

「〇〇方面で何かしたいのだけど，具体的に分からない」，「自分の専門で何ができるのか」，「レジュメの書き方，面接の仕方，面接の機会を得る方法が分からない」，「インターンシップをしたいんだけど・・・」，「自分が何をしたいのか分からない」といった内容の相談が多い。

このような相談に対して「自分を知る」，「キャリアを知る」，「行動を起こす」，「自分を知る」・・・の循環をサポートすることで対応している。

5) 当該組織におけるカウンセリングの位置づけ

CDC の中心的なサービスであり，できるだけ多くの学生に受けて欲しいと考えている。

6) インターンシップについて（インターンシップの位置づけ，当該組織での実施方法，カリキュラム内での位置づけなど）

インターンシップにかかわらず，自分の興味のある活動に参加することは，必須ではないが，とても役に立つことである。実際学生の 80% がインターンシップを経験している。

CDC が仲介するもの，部局が仲介するもの，個人で応募するものがある。CDC が仲介するインターンシップは，面接も CDC 内で行う。CDC 内に企業の担当者と学生が面接するスペース（20 室）が用意されている。

単位認定の基準が厳しく，インターンシップ体験が単位として認定されるようにはなっていない。

7) 学生の多様性への対応

留学生や障害者など，担当のカウンセラーが決まっている。

8) 利用者数

面接 3,471 回

9) インターネット，e-mail の利用

メールでの返答 1,667 回（増加傾向）。カウンセラーは 5～10 時間をメールの返答に費やすことが義務。ホームページは情報提供の主要な媒体として活用されている。インターネット担当者を配置している。

10) 課題

スタッフの不足（2～3 人，専門分野に精通したカウンセラーがほしい）。資金も不足。大学トップ・部局に重要性を認知してほしい。

11) アウトリーチプログラム

授業，寮，保護者向けイベント，オープンハウス，学生のクラブなどで，6,100 人を対象に 181 回のアウトリーチ活動。新入生向けオープンハウス。保護者向けのニュースレター。広報活動は積極的。

■他機関との連携，人的リソースの活用

1) 学内外の組織，機関との連携

カウンセリングセンターは別組織で，学生を紹介し合うことがある程度。部局によっては，Academic Adviser とかなり情報交換していて，連絡を密にしている。

2) 人的リソースの活用

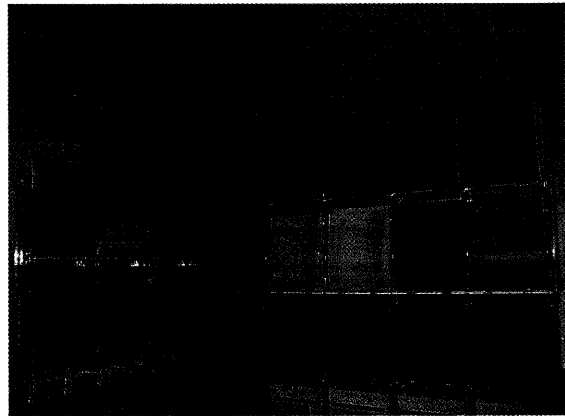
大学外の組織とのつながりはほとんどない。卒業生のデータベース登録は 8,000 人。人材紹介企業とは連携しておらず，むしろ競合関係（例外的に NPO 団体の一つとは協力関係がある）。

3) 他大学との連携

Job Fair 等のイベントが重ならないように，UC バークレーと連絡を取ることがある。



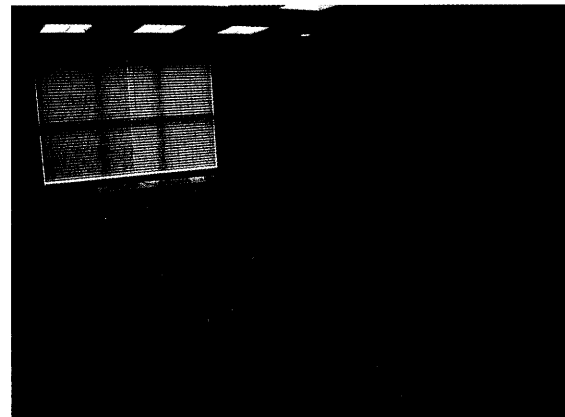
< Career Development Center 外観 >



< 資料コーナー >



< 面接用の部屋 >



< ワークショップなどに用いる部屋 >

【カリフォルニア大学アーヴァイン校】

■視察組織名：Counseling and Health Services

■組織の構成および目的

1) 組織の位置づけと目的

キャリアセンターは、Counseling and Health Services の中にある 5 つの部門の内の一つ。キャリアセンターの役割は 2 つあり、①発達段階に合わせた教育的支援、②実際の「就職活動」(placement) の支援。大学によっては②だけのところもあるが、①が欠かせないと考えている。

2) 当該組織に対する学生、保護者、大学、卒業生、雇用者の期待

大学で学ぶことをキャリアに生かせるように支援するという大学の基本的な考えがあり、それをふまえて、Counseling and Health Services でも具体的な支援を提供している。

3) キャリアセンターとカウンセリングセンターが別々に設置されていることの意義と課題

同じ管轄下にあることで、同じ建物の中で、同じポリシーをもって活動していることのメリットは大きい。

2～3 週間に一度、全部門の Director が集まってセンター内のことだけでなく、大学から受ける影響も含めて継続的に検討を行っている。

■組織の運営

1) スタッフの人数および資格

Director 1 人、カウンセラー 8 人、それ以外のスタッフが 7 人。その他に学部生のピアカウンセラーが 12 人。

カウンセラーは修士号が必要。

2) スタッフの評価と賃金制度

学生の授業料の一部が Counseling and Health Services の予算として割り当てられる。

3) スタッフ向けの研修

学会のワークショップへの参加、旅費は一人あたり年間\$500～600 の支給がある。慰安旅行のような Staff Development Day というものを年に一度行っており、1 年を振り返って成果や課題を話し合っている。

4) 予算

年間\$1,000,000 程度。そのうち 6～7 割が常勤スタッフの人件費。

5) 組織の評価

①必要な予算と事業のバランスがとれているかを、学生の委員会がチェックをしており、その検討結果を Executive Vice Chancellor (VC) に報告し提言する仕組み。個々のプログラムでの学生に対するアンケート。

②Counseling and Health Services の各部門に対する Assistant VC としての評価。

③Counseling and Health Services に対する、VC of Student Affairs による評価。

6) 個人情報への考慮, インフォームドコンセント

カウンセラーによる相談は個室で行っている。また、企業との初回の採用面接も個室(6室)で行っている。

■提供しているサービス

1) サービス提供対象者と料金

推薦状の管理は有料。卒業生へのサービスも低額であるが有料。キャリアフェアの参加企業からは、必要経費程度(\$200~300以下)を徴収。

2) 利用者のニーズの把握

個々のプログラムでのアンケートにより把握している。

3) 提供しているキャリア発達/教育プログラムとその改善方法, 特に重視しているプログラム

個別カウンセリング・10分間面接・キャリアライブラリ・キャリアアセスメント・卒業生とのコネクションデータベース・キャリアと専門職のフェア(全米から各大学院がUCIの学生をリクルートにくるGraduate School Fairも行っている)・キャリアウィーク/ワークショップ等のイベント, インターンシップや就職先のデータベース・インターンシップ紹介・キャンパスでの採用面接・大学院の選択支援等。

プログラムの改善は, スタッフ全員が実施している。

①興味, ②価値観, ③キャリアへの姿勢, ④スキルについて自己理解を促進するために, 発達段階に則したキャリア教育を重視している。

4) インターンシップについて(インターンシップの位置づけ, 当該組織での実施方法, カリキュラム内での位置づけなど)

履歴書上の経歴が増えることが, 採用においては非常に重視されており, 4年間で1~2回, 多い学生は4~5回のインターンシップを経験している。学部生は実務的な仕事体験を行い, 大学院生は学問に関する専門的な経験を積むことが多い。

学部と情報交換しながら, インターネットも活用して実施している。夏のインターンシップのための, キャリアフェアもセンターが行っている。

必要な条件を満たせば, 単位としても認められる。

5) 学生の多様性への対応

学生の65%が有色人種であり, それに対応できるサービスを行っている。また, 障害学生, レズビアンやゲイ等の学生に対するサービスも行っている。

6) インターネット, e-mailの利用

すべてのサービスに関する情報がインターネットで得られるようになっている。

7) アウトリーチプログラム

寮や学部等に出向いて講義を行う。学生は, レポートを提出するなど必要な条件を満たせば, 単位としても認められる。アウトリーチプログラムは, 学部から求められて実施することもある。センターから提案することもある。

このようなアウトリーチ活動に対して, 学部からセンターに謝金が支払われる。

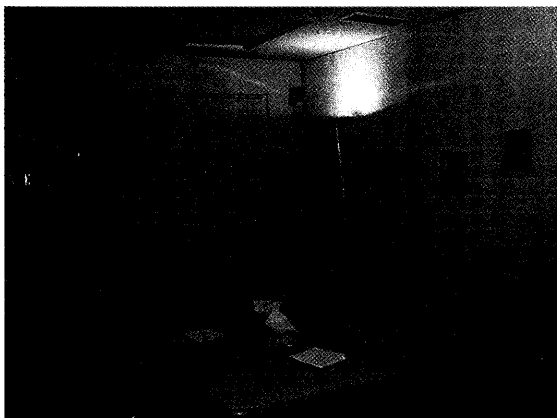
■他機関との連携，人的リソースの活用

1) 学内外の組織，機関との連携

各学部との連携は密接に行われている。キャリアセンターとカウンセリングセンターの部門間の連携・協力も密接である。

2) 人的リソースの活用

ピアカウンセラーには学生をボランティアとして活用している。卒業生は，ワークショップの講師として活用し，リクルーターとして来ている。



<グループカウンセリング用の部屋>



<待合室>



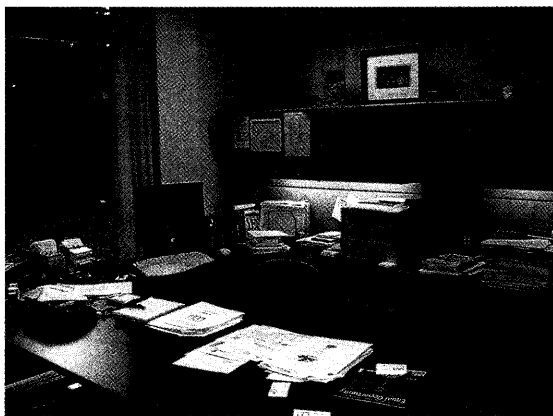
<Career Center 内パソコン>



<Career Center 内資料>



<面接室前>



<職員のオフィス>

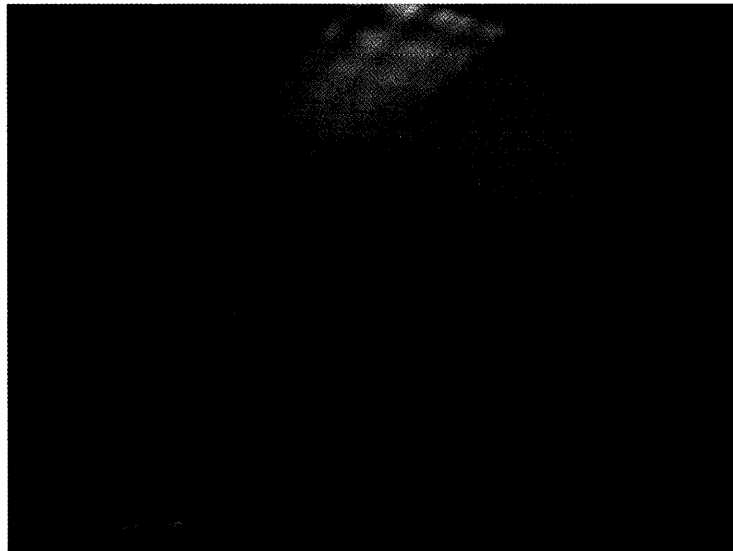
【ミネソタ大学】

■視察組織名：Carlson School of Management Business Career Center
University Counseling and Consulting Services

<Carlson School of Management Business Career Center>

■組織の構成および目的

1) 組織の位置づけと目的



部局毎にキャリアセンターが配置されている。当該組織は、Carlson School of Management Business の学部生・院生・卒業生を対象としている。リベラルアーツを専攻する学生とは違い、明確な目的意識を持つ学生が多いため、1 Discovery 2 Tactics のうち 2 を中心にサービスを行っている。

2) 当該組織に対する学生、保護者、大学、卒業生、雇用者の期待

学生からの評価は非常に高い。リクルーターからの評価も同様に高い。卒業生のカウンセリング利用もあり、毎週 1～2 人程度の面接がある。

■組織の運営

1) スタッフの人数および資格

5 人のキャリアカウンセラー。企業対応スタッフが 5 人。

スタッフに必要な資格は、教育心理学かカウンセリングのバックグラウンドを持っていること、またはビジネス面での経験を持っていること。

2) スタッフ向けの研修

年数回のワークショップへの参加が公費で可能。MBA 等の資格取得の支援にも積極的。

3) 予算

ワークショップなどで約\$12,000。

4) 組織の評価

スコアシステムというものがある。①就職率、②授業・ワークショップに対する学生の評価、③企業開拓、④リクルーターによる評価、⑤卒業前の学生の評価。スタッフは毎年 Director による評価を受ける。

■提供しているサービス

1) サービス提供対象者と料金

学部生・大学院生・卒業生の利用は無料。カウンセリングもレジュメサービスも。保護者のためのワークショップなども開催。企業向けに求人情報掲載サービスを提供。

2) 利用者のニーズの把握

学生に対するアンケートを実施。学生グループとのつながりを積極的に作る。

3) 提供しているキャリア発達／教育プログラムとその改善方法、特に重視しているプログラム

学部生は必修の授業（75分授業 14週間、1単位）を2年生までに受講する。大学院生は単位にならないが、必修。個別のテーマを扱うワークショップが3～4回/月開催される。

キャリアカウンセラーが企画・実施。全労働時間のうち、企画に25%、実施に25%を使っている（残りの50%がカウンセリング）。

以下のプログラムに人気がある。

- ・「ムービーナイト」・・・映画を上映しとにかく学生にセンターのことを知ってもらう企画。
- ・面接練習・・・大学院生1人がコーディネーターとなり、ボランティアで大学院生が学部生の面接を指導（DVDに撮る）。
- ・その他、企業の人に授業に来てもらい質問コーナーを設ける。

4) 主な相談内容と相談への対応

実際的な手続きに関する質問が多いが、カウンセリングのプロセスの中で、本当に自分が何をしたいのか分からないという学生も少なくない。女性や留学生のために、給料の交渉、ネットワークの作り方等を練習するワークショップも。

Discovery と Tactics の両方をカバーすることで対応している。

5) 当該組織におけるカウンセリングの位置づけ

早い時期からキャリアカウンセリングを受けてほしいと考えている。Tactics だけでは片手落ちになる、Discovery の部分にも対応できるように2名のキャリアカウンセラーの増員を要求している。

6) インターンシップについて（インターンシップの位置づけ、当該組織での実施方法、カリキュラム内での位置づけなど）

3年生になってインターンを行うのが当たり前。1・2年生時から開始時期が早まっている。

企業が募集し、それに対して学生が直接応募する。採用面接はセンターで行う。企業側も大きな企業ほど、インターン用のしっかりしたプログラムを持っている。

7) 学生の多様性への対応

留学生や女性のためのワークショップを行っている。大学院生の 40%が留学生。

8) 利用者数

400 人の学生が利用。成績の良い学生が多く利用しており、問題のある学生の利用率が低いのが問題。

9) インターネット, e-mail の利用

CARS というオンラインの就職活動支援システムを立ち上げている (学生のアシスタントを含む 5 人が管理)。E-mail による対応は 5~15 件/日。

10) 課題

人手不足。カウンセリングだけを行うスタッフを 2 名増員してほしい。現在実施している講義は非常勤講師が行っているため、授業内容の統一が難しい。

11) アウトリーチプログラム

学生グループに積極的に関わる。学生が集まる広場でイベントを行う。キャリアカウンセラーが企画・実施している。

■他機関との連携, 人的リソースの活用

1) 学内外の組織, 機関との連携

うつや不安が強い学生をカウンセリングセンターにリファーする。他の学部のキャリアセンターと合同でインターンシップ・キャリアフェアを行う。

2) 人的リソースの活用

大学院生の模擬面接官としての活用 (コーディネーターには授業料の 25%を免除+時給, 他はボランティア)。ピアカウンセラーは今後の課題。

<University Counseling and Consulting Services>

■組織の構成および目的

1) 組織の位置づけと目的

大学全体のキャリア支援を行う。1 Discovery 2 Tactics のうち 1 を中心にサービスを行っている。①進路選択・キャリア教育, ②学習スキル支援, ③個人的問題の支援の 3 領域をカバーしている。

2) 当該組織に対する学生, 保護者, 大学, 卒業生, 雇用者の期待

大学からのプレッシャーは今のところなく, 期待されていると感じている。期待を維持するために執行部の交代の度に働きかけを行う。

3) キャリアセンターとカウンセリングセンターが別々に設置されていることの意義と課題

守秘の問題があるので分けていることは有効。学生が安心して利用できる。

■組織の運営

1) スタッフの人数および資格

フルタイムとして換算すると 20 人（実人数約 30 人）。10 人の Dr 心理。スタッフは博士の資格が必要。ほかに 2 人の PostDoc。2 人の PreDoc インターン。3 人の PhD（コース半分修了者）。4 人の PhD（コース 2 年目）。7 人の院生（学習スキルを教える）。

2) スタッフ向けの研修

当該組織でのインターンシップは APA（American Psychology Association）の認定を受けている。

3) 予算

授業料+州からの収入。テストサービスは有料。キャリアカウンセリングをコミュニティ向けに実施（\$400/4 セッション）。

4) 組織の評価

学生に対する調査。サービスを受けての成果を調査中。

5) 個人情報への考慮、インフォームドコンセント

初回到同意書をとる。情報を開示する場合にも同意書をとる。記録の管理は基本的に集中管理を行う。メールでのカウンセリングは行わない。

■提供しているサービス

1) サービス提供対象者と料金

学生のカウンセリングは無料。回数制限がある。学位取得のために在籍している学生のみ無料。

2) 利用者のニーズの把握

学生に対する調査。

3) 提供しているプログラムとその改善方法、特に重視しているプログラム

①キャリア：何をすべきか分からない学生に対して、Strong MBTI など実施、5～10 回のセッションで専攻を決めていく。

②学習スキル：短い人は 1～2 回、長いと 10～20 回。2 単位のスキルを学ぶクラスもある。

③個人カウンセリング：短期間のもの。13 回で評価。10 回延長可能。もしくは学外へ紹介。平均 4 回。

4) 主な相談内容と相談への対応

①うつ、②不安、③対人関係

個別カウンセリングとグループ（7～10 のグループを開催）を実施。

5) 学生の多様性への対応

グループカウンセリングの実施。

6) 利用者数

2004 年～2005 年は 1,264 人の学生に対して 5,168 回のカウンセリングを実施。（前年に比べて増加している。）

7) インターネット, e-mail の利用

守秘が確保できないため, e-mail によるカウンセリングは行わない。

8) 課題

親の期待を背負った学生への支援。

9) アウトリーチプログラム

部局スタッフへのコンサルテーションが多くなっている。

■他機関との連携, 人的リソースの活用

1) 学内外の組織, 機関との連携

BOYNTON ヘルスセンターと密接にやり取りをしている。精神科医 2 名, サイコロジスト 2 人, インターン 1 人, SWs (social worker), NPs (nurse practitioner)。St. Paul キャンパスのカウンセリングサービスとも一緒に組織。別の 2 キャンパスのセンターとは独立。

2) 人的リソースの活用

7 名の大学院生にスタディスキルの授業と個別指導を担当してもらっている。

【シカゴ大学】

■視察組織名：Student Counseling and Resource Service

■組織の構成および目的

教員は Biology Science に所属。給与は Biology Science から出るが、センターの予算は Student Affairs から。

大学からの評価は高い。

■組織の運営

1) スタッフの人数および資格

学生 1,000 人に付き 1 人。フルタイム換算で 12~13 人の心理。フルタイム換算で 4.5 人の精神科医。LCSW もいる。また、学習支援を Educational Psychology の専門が 1 人。2 人の心理ポスドク、2 人の PreDoc インターン。1 人の SW インターン。スタッフは MD か PhD の資格が必要。

2) スタッフ向けの研修

インターンと Extern 週 1 回の supervision, グループの supervision, 勉強会などを開催。他、「Students aren't happy unless their counselors are happy.」とのポリシーから、スタッフ向けの休憩スペースなども充実。スタッフを大切にし、それが学生に還元されるという意識がある。

3) 予算

要求した分の予算を獲得できている。

4) 組織の評価

組織の評価は受けないが、自分たちで評価を行っている。6 回のセッション毎に progress を評価。

5) 個人情報への考慮、インフォームドコンセント

守秘は厳格。とても大切に守秘が守られるということが揺らぐと学生は来なくなる。学生の情報を出す場合もセンターの書式のみで。

■提供しているサービス

1) サービス提供対象者と料金

学生には無料で回数制限なし。卒業生は 1 回のみ。来談は 2/3 が院生。

2) 提供しているプログラムとその改善方法、特に重視しているプログラム

コンサルテーションとアウトリーチが盛ん。

3) インターネット、e-mail の利用

e-mail による治療は行わない。e-mail による情報提供は行う。

4) 課題

多様性 (Diversity) に対するスタッフ側の体制は整っていない。

5) アウトリーチプログラム

これから充実させようと考えている。インテークなどで情報を集めて、プログラム作りの参考にしている。レイプ被害者のためのグループ、Time Management Group、摂食障害のグループなど。

■他機関との連携，人材リソースの活用

1) 学内外の組織，機関との連携

Study Skill やキャリアとの関係が良い。



<Student Counseling and Resource Service 外観>

【イリノイ大学】

■視察組織名：The Career Center

各部局のキャリア支援組織

Counseling Center

<The Career Center>

■組織の構成および目的

1) 組織の位置づけと目的

9 部局がキャリア支援の組織を有している。このキャリアセンターは、Student Affairs の一部門であり、各部局のキャリア支援組織と連携して、中心的働きを行っている。全学生を対象とするが、主に学部生が利用している。

2) 当該組織に対する学生、保護者、大学、卒業生、雇用者の期待

大学は、専門を決定したり、仕事を見つけることを期待している。

それに対して、センターのスタッフは、仕事を探すためのスキルを身につけたり、キャリア発達の過程を重視した教育的サービスを重視している。

3) キャリアセンターとカウンセリングセンターが別々に設置されていることの意義と課題

(長所) 認定の組織が異なるため、別組織の方が組織運営がシンプル。心理的問題に対するカウンセリングとキャリアカウンセリングの差異。それぞれがそれぞれの役割を果たす。

(短所) 資源が余計に必要なになる。紹介が必要で手間になる。

■組織の運営

1) スタッフの人数および資格

Director 1 人, Associate Director 1 人, Senior Assistant Director 1 人, Assistant Director 6 人, Information Management Specialist (資料・web の管理) 1 人, Support Staff (事務・受付) 5 人, Graduate Assistant (大学院生) 4~5 人, Student Employee (学部生) 6~8 人, Outreach Team (学部生) 25 人。

スタッフは、MA (カウンセリングのコースを取っていることが望ましい)。キャリア発達の理論と知識を有している。キャリア関連の職業経験。

賃金は大学によって決められているが、Director が昇給について提言を行うことがある。

2) スタッフ向けの研修

非常に力を入れている。年間 4~6 回の研究会 (カウンセリングスキル, キャリアの知識とスキル, 多文化への対応能力, 自己革新など)。年度初めに、新スタッフへのオリエンテーション。年間 1~3 回の学会等への出席。Student Affairs や大学が主催している SD への参加。

3) 予算

\$1,027,713 (人件費 \$795,971, それ以外 \$231,742)。推薦状の管理配送サービスによる

収入 \$83,000。寄付\$2,500～4,000。

4) 組織の評価

年次活動報告。場合により四半期報告。進路の決定状況についての各種統計の集約。満足度に関しては、カウンセリング利用者の88%が「他者にも勧める」と回答。レジュメ添削は84%が「役に立った」と回答。卒業時の調査では、68%の学生が利用したと回答。

■提供しているサービス

1) サービス提供対象者と料金

学生。卒業生は来ても拒まないが、積極的に呼びかけてはいない。親へのワークショップも行っている。

2) 利用者のニーズの把握

調査、利用者からの生の声を聞くグループ、カウンセリングでの情報収集、学会からの情報。

3) 提供しているキャリア発達／教育プログラムとその改善方法、特に重視しているプログラム

キャリアカウンセリング、メディカルスクールや大学院へ進学する学生へのアドバイス、キャリアリソースセンター、webによる情報提供、ワークショップ、レジュメ・カバーレターの添削、インターン教育と斡旋、エクスターンシップ（ジョブシャドウ）、模擬面接、職探しのスキル開発、企業・大学院との関係作り。

レジュメとカバーレターの添削（1年次から利用される）が人気がある。

4) 主な相談内容と相談への対応

自分が何をしたらよいか分からない、自分のスキルでやりたいことができるのか分からない、等。

5) 学生の多様性への対応

多様な学生のグループに対するアウトリーチ活動を行っている。多文化支援センター（Cultural Centers）や多文化の学生組織に対するアウトリーチ。

6) 利用者数

カウンセリング:10,478件(対面2,270件、飛び込み相談2,205、レジュメ添削1,499、Email・電話4,504)、プログラム・ワークショップ:361回(参加者15,489人)

7) インターネット、e-mailの利用

オンラインの自己教育システム。インターネット上のリソースへのリンクが充実。レジュメの電子管理。

8) アウトリーチプログラム

学部、学生寮や多文化支援センター（Cultural Centers）、学生組織、学部生向け図書館等へのアウトリーチ。応募し、選拔され、トレーニングされた学生がチームを構成して実施。有償だが、最低賃金。要請を受けて行う場合と、センターから売り込む場合がある。学生がプロジェクトを組む。

■他機関との連携，人的リソースの活用

1) 学内外の組織，機関との連携

各部局のキャリア支援組織。Career Services Council を構成して，ポリシーを協議・発信，キャリアフェアの共同開催・調整。多文化支援センター（Cultural Centers）。同窓会組織との連携。他大学のキャリアセンターとの連携。

2) 人的リソースの活用

アウトリーチの学生は，募集，選抜，トレーニング。大学院生のカウンセラーとしての活用。模擬面接における大学院生の活用。

<各部局のキャリア支援組織>（特徴的な部分のみ）

■組織の構成および目的

部局のキャリア支援組織は，それぞれの専門性に特化した Placement 機能に重点が置かれている。部局によっては，Academic Advising を行っている（大学院に向けた単位取得，キャリアを見据えた単位取得や必要な体験などの助言）。

■提供しているサービス

ワークショップ：企業に来てもらい，レジメ添削や模擬面接，各種アドバイスをしてもらう。企業にとっても早い時期から優秀な学生に目を付けること子ができたり，丁寧に対応することで企業イメージを上げることができ，メリットがある。

ジョブシャドウ：ネットワーキングを得る。スキルを身につける機会。企業側がインターンシップに誘うかを判断する。

■他機関との連携，人的リソースの活用

教員への働きかけ：企業と教員とのネットワーク構築を支援。

卒業生をメンターとして活用している（卒業生自身のためにもなる）。

<Counseling Center>

■組織の構成および目的

■組織の運営

1) スタッフの人数および資格

21 人の臨床スタッフと 3 人のインターン。PhD が必要。

2) スタッフ向けの研修

当該組織での Intern には GSV, SV。

3) 予算

学生からの Health Fee の一部が予算として割り当てられる。州からの予算配当は受けていない。

■提供しているサービス

1) サービス提供対象者と料金

Health Fee を支払っている学生全員が対象。

2) 提供しているプログラムとその改善方法、特に重視しているプログラム

面接(個人・カップル・グループ) 特殊なアセスメント(自殺予防, ADHD/LD, Abuse, 摂食障害, Trauma)

3) インターネット, e-mail の利用

web ページにセルフヘルプの資料を掲載。

4) アウトリーチプログラム

キャンパスにカウンセリングサービスを拡大させる。約 700 のプログラムを実施, 約 1000 人の学生が参加。利用率の低い学生への働きかけ, 他部署との連携, 特定の学生グループに対するトレーニング, 印刷物のような間接的な働きかけ, プログラムとサービスの評価。

■他機関との連携, 人的リソースの活用

1) 学内外の組織, 機関との連携

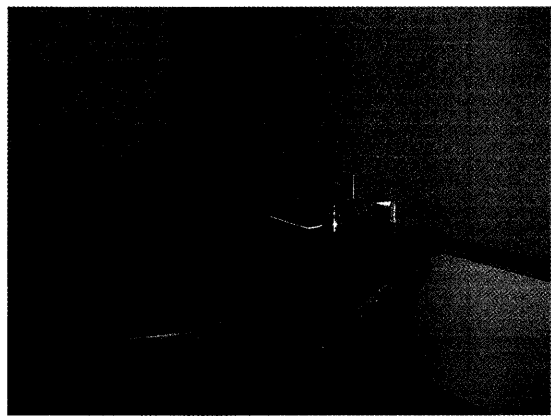
School of Business, Education, Engineering, Graduate, Liberal Arts and Sciences, Law, Veterinary Medicine, Career Center, Disability Resources and Educational Services, Family Housing, Housing Division などと良い関係。

2) 人材リソースの活用

Program on Intergroup Relations, Social Issues Theater (学生グループによる演劇の内容がメンタルな Issue) など。Paraprofessional の活用。



<待合室>



<39 室ある面接室>

【インディアナ大学】

■視察組織名：Career Development Center / Arts & Science Career Services
Counseling and Psychological Services

<Career Development Center / Arts & Science Career Services>

■組織の構成および目的

1) 組織の位置づけと目的

Student Affairs と College of A & S に属している。

全学対象の CDC と College of Arts & Science 附属のキャリアサービスが統合している。
その他にも部局毎にキャリア支援部門があり、それぞれが独立している。

2) 当該組織に対する学生、保護者、大学、卒業生、雇用者の期待

大学は大事だと思っているが、相応の予算配分はない。

3) キャリアセンターとカウンセリングセンターが別々に設置されていることの意義と課題

専門にあったキャリア支援を提供できる。学生のニーズにあったサービスが提供できる。

■組織の運営

1) スタッフの人数および資格

専門家 14 人，サポートスタッフ 4 人。大学院生（アウトリーチやキャリア教育の授業）
5 人。インターン（高等教育専門の修士学生）5 人。学生(事務) 10 人。

MA（州の規定，できればカウンセリングか高等教育専攻）

2) スタッフの評価と賃金制度

大学の規定に準じるが，昇給は Director の裁量もある。

3) スタッフ向けの研修

毎週金曜日に 1 時間の研修。講師を呼ぶなどしている。学会参加については発表する人
には手当を出す。

4) 予算

2/3 が Division of Student Affairs から，残りの 1/3 が College of Arts & Science。全体
で\$1,063,000。

5) 組織の評価

とくに評価は行われないし，求められない。大学からのプレッシャーはない。

■提供しているサービス

1) サービス提供対象者と料金

学生と卒業 1 年までの卒業生。

2) 提供しているキャリア発達／教育プログラムとその改善方法，特に重視しているプログラム

キャリア教育では 2000 人の学生が受講。1～2 年対象は 750 人，3～4 年対象は 1200 人。

受講者に学部から2単位が出る。42科目。教科書を2種類出している。

院生・インターンによる指導によって改善している。

センターが重視しているのは、①キャリアカウンセリング、②キャリア教育、③キャリアフェアなどのイベント。

3) 主な相談内容と相談への対応

13～16時が Drop-in（予約無しでの面談）。2人のカウンセラーが待機。

4) 当該組織におけるカウンセリングの位置づけ

5) インターンシップについて（インターンシップの位置づけ、当該組織での実施方法、カリキュラム内での位置づけなど）

オンラインシステムを利用して情報収集を行う。学部が単位を出す。単位を出さない場合もあり、その場合はセンターが単位を出している。

6) 学生の多様性への対応

多文化支援センター（Cultural Centers）、留学生、障害者、GLBT、女性などへアウトリーチ。

7) インターネット、e-mail の利用

求人情報、インターン募集情報の受付と学生への情報提供を行っている。

8) 課題

予算の不足。毎回予算の増額を要求しているが、実現していない。

9) アウトリーチプログラム

各種支援組織へのアウトリーチの他、部局、学生寮、同窓会、スポーツ選手の組織、親の組織、キャリアに関連する学生の組織などに出向いている。

■他機関との連携、人的リソースの活用

1) 学内外の組織、機関との連携

多数の組織との連携。その他、カウンセリングセンターへの学生の紹介。同窓会組織のCDC 設立の補助。

2) 人的リソースの活用

ピアカウンセリングは行っていないが、今後やりたいと思っている。キャリアフェアでは学生のボランティアを活用している。



＜キャリア・ライブラリ＞



＜面接室＞

< Counseling and Psychological Services >

■組織の構成および目的

1) 組織の位置づけと目的

Health Center 内の組織。Health Center は Dean of Student (vice president) の元にある。

2) 当該組織に対する学生、保護者、大学、卒業生、雇用者の期待

大学は非常に重視している。自殺予防と抑うつへの取り組みを行ったところ、大変好評だった。

■組織の運営

1) スタッフの人数および資格

心理 6 人, SW2 人, 精神科医 2 人, Sexual Assault2 人, インターン 3 人, Dr 在籍の研修生 3 人。

PhD, HSPP (Health Service Provider in Psychology), SW は LCSW。

2) スタッフの評価と賃金制度

予算の中から Director の裁量を加味して決定。

3) スタッフ向けの研修

インターンに関しては, 2.5 時間の個人 SV, 1 時間のグループ SV, 0.5 時間のグループリーダーとしての SV, その他にアウトリーチの研修。インターンの評価は年 3 回。ライセンス更新のために, 2 年で 40 時間の研修を受ける。

4) 組織の評価

年 3 回(各 1 週間)のクライアントによるサービスについての評価, 40~50%の回収率。クライアントによる毎回の成果評価。スタッフの評価は月 1 回 Director との面談。

5) 個人情報への考慮, インフォームドコンセント

非常に厳格。記録管理は集中管理。

■提供しているサービス

1) サービス提供対象者と料金

学生のみ。

2) 提供しているプログラムとその改善方法, 特に重視しているプログラム

18~26 時間の個人面接。いくつかのグループ。アウトリーチはやりたい人がやる。

Walk-in は週半日。3~5 人はインテーク面接を行う。

Dissertation の支援グループなど, グループカウンセリングは多くの利用者がある。600~700 人の利用。現在 12 のグループを実施中。

3) 主な相談内容と相談への対応

Walk-in と個別とグループ。予約は 2 週間待ち。

4) 利用者数

年間 3,000 人, 15,500 回の利用がある。利用者の 5~6%が留学生。グループの利用者

は40%増。

5) インターネット, e-mail の利用

インターネットによる治療は行わない。パンフレットなどの教育的なリソースはすべて掲載している。

6) 課題

Staff 中の Diversity。黒人と中南米系のスタッフがいらない。部屋が少ない。

7) アウトリーチプログラム

沢山やっている。全国うつの日にイベントを行ったり。その他, 不安, 摂食障害, アルコール依存などのトピックでアウトリーチ。TA のオリエンテーションで話をする。自殺予防。対象としては, ファカルティ, 多文化支援センター, 学生寮等へ。アウトリーチのコーディネーターを中心に実施。インターンも行う。

■他機関との連携, 人材リソースの活用

1) 学内外の組織, 機関との連携

アウトリーチプログラムで様々な機関と連携している。

2) 人材リソースの活用

学生は守秘の問題があるので使っていない。

5. 米国視察のまとめ

1) キャリア支援の姿勢

キャリア支援は、入学から卒業後までの発達援助と placement 援助〔進路・就職探しのプロセス〕として行うという姿勢。

2) サービス内容

キャリア支援組織のサービス内容は、キャリアカウンセリング、キャリア教育、web も使った情報提供、キャリア・フェア、インターンシップ、企業向けサービスなど(図参照)。

3) 学生の活用

積極的に学生を活用したサービスを提供しようとする傾向がどの大学にも共通して見られた。内容によってであるが学生の活動を単位として認定する大学もある。内面に関わらない、表層的相談、たとえばレジュメ(履歴書)のかき方の相談などでは大学院生をカウンセラー(カウンセラー・オン・コール)として活用している大学もある。

4) 設置組織(部局と全学との関係)

支援組織は、部局組織と全学組織(全学のキャリアセンター、キャリア発達センターなど)が組み合わせられており、その組み合わせ方に大学ごとの個性がある。

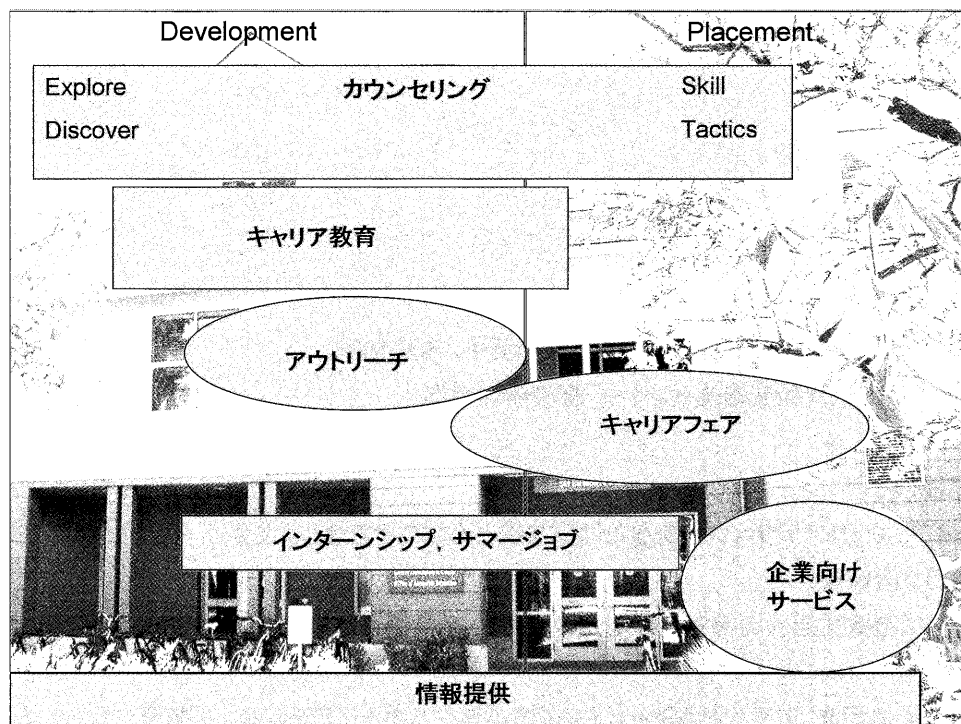
5) 援助の視点

部局組織は placement 援助に、より力点を置き、全学組織は発達援助(カウンセリングと教育)に力をおいている。

6) 企業向けサービス

企業向けの事業や学生が企業とつながるインターフェースの場の提供。

7) キャリアカウンセラーは修士資格、カウンセリングセンターの心理職カウンセラーはPhD 資格とされている。



IV ライフデザインの授業の試み（計画）

ライフデザイン班では、平成17年度の国内と米国の大学の視察を参考にしつつ、平成18年度に全学の1, 2年次を対象に「ライフ・キャリアデザイン」という授業（全学教育「展開科目」）を開設することとした。そのシラバスを次に示す。

展開科目

ライフ・キャリアデザイン

火5

(2単位).

対象学部:全

担当教員:吉武清實, 北原良夫, 高野 明, 渡利夏子, 末松和子

所属部局等:高等教育開発推進センター, 経済学研究科

開講セメスター:2, 4

1. 授業題目:

「ライフ・キャリアデザインーあなたは卒業後どんな生き方をしますか?ー」

2. 授業の目的と概要:

学生期は職業生活への移行期にあたる。今日、産業構造や雇用形態がめまぐるしく変化するなかで、卒

業後の自らの将来・人生をどう設計していくのかライフ・キャリアデザインが重要になってくる。講師陣の多

様なライフ・キャリア形成過程とそこでの模索に触れて、将来の職業生活への意識形成とライフ・キャリア

デザインのためのヒントを得る。

3. 学習の到達目標:

将来の職業生活への意識を高め、ライフ・キャリアデザインへの展望を得る

4. 授業の内容・方法と進度予定:

- ・現代社会はこんな社会ー日本の雇用システムや労働環境ー
- ・「遊学のススメ」
- ・「学生生活から国家公務員の仕事へ」
- ・「ベンチャーへの挑戦」
- ・「脱公務員への転身」
- ・「企業を辞めて生き直す」
- ・討論:どうしてその進路に決めたのか
- ・「キャリアカウンセラーからのメッセージ」
- ・「この進路で行こうと決めるまで」
- ・討論:家庭と仕事
- ・東北大学におけるキャリア支援の実際

5. 成績評価方法:出席と毎回のレポートにより評価する

6. 教科書および参考書：教科書にかわる講義資料を配布、随時参考書を紹介する。